
アサルトアームズ！

逆叫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アサルトアームズ！

【Nコード】

N5852F

【作者名】

逆叫

【あらすじ】

平凡な高校生だった佐貫遼太は、ある日突然「恒久の義手」の持ち主だと宣告され、その平凡な日常を破壊されて在らぬものを退治する部活に強制的に入れられてしまう……！

プロローグ(前書き)

今回は、学園ファンタジー(?)ということ、製作を開始しました。プロットも曖昧ですし、ちょっと前途多難ですが、完結まで行き着けるよう、どうか応援よろしくおねがいします！

プロローグ

それは突然訪れた。

さぬきりょうた

佐貫遼太はいつも通り、学校から家への帰路を歩いていた。鞆を肩からぶら下げて学ランに灰色ベースの毛糸マフラー、手袋と防寒対策はバツチシである。そんな姿で彼は一人、寒々しい葉の無い木が植えられている歩道を、踏みしめるように歩いていた。

やがて前から、黒く無骨なコートを着た少女が歩いてきた。その華奢な少女とはそぐわないような、黒いコートを見て、遼太は首を傾げたが、声を掛けるでもなく隣を通り過ぎようとした。

だが。

「捕まえた……！」

彼女から見て左脇を通り抜けた刹那、右腕に衝撃が走った。痛みとは何かが違う、電撃的な衝動。それから断続的にその衝撃が起きた辺りで、痙攣がおき始めた。

突然の出来事に、遼太は驚き呆然とした。そして、すぐに我に戻ると、その違和感が生じている右手を見下ろした。が。

そこに、右腕は存在しなかった。どくどくと無情にも鮮血がその切り口からあふれ出ている。

遼太は嘔吐を覚えた。それでも何とか理性を保ちつつ、元凶と思われるその少女の行方を追わんと後ろを振り向いた。少女はしてやったりといった表情で、遼太の右腕を掲げて人気の無い歩道を走っていた。

だが、そんなの流暢に追っついていられるほど、遼太は屈強ではなかった。すぐに嘔吐と眩暈に負けてその場に蹲る。心臓が躍る音がイヤにはつきりと聞こえる。

「……………！」

出血量も眩暈も、遼太が人生で一度も体験したことのないような酷さであったが、何故かその元凶となるべき痛みが全く感じられない

かった。神経ごと削ぎ取られてしまったのだろうか。

だが、そんなことを考えていても、状況が快方に向かうわけでもなく、頭に掛かる霞みは濃さを増すだけである。

そんなとき、足跡が聞こえてきた。遼太は助けを乞うように顔を上げた。

そこには、ついしがた遼太の腕を奪った少女が佇んでいた。その表情には、なんとも言えぬ翳りが潜んでいるようだ。

「……あなた、もしかして>レッドくじゃないの？」
「れ……れっど……？」

鼠を捻り潰した時のような声で、遼太が応える。痛みは無いのだが、確実に下がっている自分の体温に死への恐怖を覚え、その不安が遼太の心の余裕を塗り潰しているのだ。

少女は困惑した表情を浮かべ、その手に握られている遼太の腕を見た。学ランの右腕部分がまだ纏わりついている。

少女は懐から、鋭いナイフの様な物を取り出すと、その学ランとその下のYシャツを削ぎ落とした。露になる遼太の肌色の右腕。

だが、そこに妙な光が浮かんでいた。白みを佩びた紫色の球体に見える。

「……何がどうなってるの？」

少女が呟く。だが、それを言いたいのには遼太だって同じ、というか、少しばかり説明してくれても、いや、それより先に僕を助けてくれ、と遼太は目まぐるしい思考を巡らせる。

「……ど、どうにかしてくれ……」

「え、あ、ごめんなさい」

少女はそう言うと、遼太の額を突いた。瞬く間に、遼太の意識が遠のいていく。

彼女は意識を失った遼太を一瞥すると、溜息をついた。

それからコートのポケットに手を伸ばし、携帯を取り、操作する。「もしもし……うん、見つけた。でも違う、ただの人間だった……

うん、とりあえず、治療をしてあげるけど……その前にちよつと気

になることがあって……今からそっちに行くから。うん。じゃあね」
彼女は携帯を切ると、またコートのポケットにしまい、そして気を失っている遼太を見ると、少し遠い目になった。

「……………」

宴の準備（前書き）

どうもです。第二話も読んでくださって光栄です。

比較的急ぎで仕上げたものなので、大分劣化している部分もあります。

誤字脱字があったり、不適切な表現があったら、報告してくれるとありがたいです……orz

宴の準備

「!？」

遼太は唐突に目が醒めて、ガバッと左腕と右腕を使って上体を起こした。そして、周囲に視線を配る。

そこは学校の使われていない教室、という表現がピッタリな、暗くて湿っぽい部屋だった。遼太は、硬くて白いシーツが無造作に敷かれているベッドに寝ていたようだ。その位置から、その部屋の中央辺りに集会机というか、そんな大きな机が置いてあり、隅には意味ありげにダンボール箱が積まれていたりする。

遼太は混乱した。何故、僕はこんな所に居る？ 昨日は、少し帰りが遅くなつて、一人で帰っていたら、突然襲われて……、

「襲われたんだっけ……襲ったんだっけ……？」

後者は遼太の性格からしてありえないが、少しばかり記憶が歪んでいるようだ。詳細を思い出せない。何か重大な、何か、何か起きたような気がするのだが。

そんな時、ガラリ、と扉が開くような硬質な音がして、誰かが入ってきた。

「あ、起きた？」

遼太と同じ学校の制服を着た少女だった。滑らかな流れるような長黒髪に、気圧しが得意そうであるが純粹さを含んだ瞳に、見栄を張ったような童顔。同じクラスに居たら、否応無しに意識してしまいたいような少女である。そして、その手にはコンビニのビニール袋。

「……？」

そんな少女を見て、遼太は首を傾げる。どこかで逢ったような気がする……。

「大丈夫？ 道でいきなり倒れるもんだから……びっくりしちゃって。とりあえず、家に運んできたんだけど」

思い出した。昨日どっかの道ですれ違った少女だ。あれから、記

憶がはつきりとしめない。気づかないうちに、変な病気にかかっているのかもしれない。こんな事は初めてだ。

「倒れた……のか。それはどうもありがとう」

とりあえず、礼を言っておく。

すると、その少女は驚いたように目を丸くすると、さっと遼太からその表情が見えない位置に視線を逸らした。

「そ……そんな大したことじゃ……」

「ん？」

「わ、わたし北馬凛ほくま凛って言うの。うん、あなたは？」

「え……？ 佐貫遼太」

「サヌキさんね。うん。ありがとう」

凛は取り繕うようにというか、無理に圧すように会話を断ち切ると、足早に遼太の傍に歩いていくと、ビニール袋を開いた。ばらばらとばら撒かれるその中身。湿布、栄養剤、消毒液、ナイフ、注射器、精神安定剤……。

「ちょ、え……何か物騒なもの入ってない？」

慌てて遼太が突っ込みを入れると、凛は訝しげな表情を見せた。

「え……あ、そうか」

すぐに納得がいった表情になると、ぱたぱたと隅に重ねてあるダンボールに駆けていくと、その一つを開いた。そしてその中のものを取り出す。白い布に包まれていて、細長い棒状で途中で少しだけ折れている。

凛はそれを持って、再び遼太の傍らまでやってきた。

「うんと……、ちょっとショッキングかもしれないけど、ちゃんと理解してね」

「？」

凛はすうつとその腕を伸ばすと、遼太の右腕を突付いた

「えっ!？」

それと同時に遼太の体は半分の支えを失って、ずどんとベッドに滑り落ちた。

「それはちょっと貸し出してただけ。あなたの本当の腕はこつち」
凜は当たり前前の様に言つて、その手に握られているものにかかっている白い布を取った。それを見て、遼太は瞠目した。

それは、既視感のある人間の右腕だった。肘辺りに白みを帯びた紫に光る球体が宿つていて、もはや現実のものとは思えない、非常識な気配を漂わせている。

「本当の腕っていうのもどうかと思うけどね。これは義手みたい」「ぎ、義手？」

シヨッキングと自称しておきながら、平然と凜は言った。遼太はその態度にも戦慄を覚える。

「ちよつと話すと長くなるから、今は何もいえないけど、まあ生まれつきあなたの右腕は真正正銘のあなたの右腕では無かつたってことかな。いわゆる、五体不満足って人？」

凜は懇々と説明しながら、何かの準備を始める。

遼太の着ているYシャツを脱がせて右腕が根こそぎ奪われている部分を露出させて、その辺りに消毒液のオキシドール（凜はあくまで普通の女子高生である）を塗りつける。そして、ナイフで何かを削ぎ始める。

「な、何してるんの……」

感覚神経が狂っているのか、全く痛みを感じない。だが、自分の体に妙なことをし始めた凜にそう訊くのは人間として当然である。

「義手の接合。わたしが切っちゃったからね……」

「切っちゃったって……こんなグロい光景見せるんなら、僕が目覚ます前にやっておいてくれても良かったんじゃないのか？」

「そのつもりだったけど、わたしがこれに必要な道具仕入れに行つてたらあなたが起きちゃったの。大丈夫、そんなに痛くないから」
痛みは超越しているから、そんな心配は無用だ。

やがて、凜は義手を持ち、座り込んで遼太と同じ目の高さになった。遂に義手の接合が始まるらしい。

凜は義手の接合部と、遼太の右腕の関節を合わせると、ぐいと押

し込んだ。遼太の右肩に、なんともいえない衝撃が走る。

「はい、終わり」

凜はそれだけの作業をすると、それだけ言っただけで立ち上がった。もつと大掛かりなことを想像していた遼太は、意表をつかれて呆然とする。

「へ……？もう終わり？」

「え？うん。動かせるでしょ？」

遼太は試しに右腕を動かしてみる。確かに動く。左手と全く変わらない感覚で動く。

「こ、こんな簡単なのか……？」

「常識で考えないでね。本当の義手とか義足とかはそんな容易に動くはずが無いからね」

ということとは、既に遼太は非常識な存在らしい。さりげなくそういう肩書きを与えられたことに、遼太はショックを受ける。

だが、そんな当然の様に彼女は語るが、遼太には不明な点がたくさんある。

「こ、これは何なんだ？ 何で君は僕のこれを切り取ったんだ？」

既に仕事を終えた、といった感じでパイプ椅子を引き摺ってきてくつろぎ始めようとした凜にそう問い掛けた。いきなり話し掛けられた凜は、少し驚いた様子で遼太をみると、瞳をくるっと回した。

「今はちよつと説明がしにくいの。後でまた説明するから……」

「後でっつていつ？」

「後で……夜かな？」

「夜？」

「そ、夜。こつちにもちよつとばかり都合があるの」

「都合ねえ……」

遼太がそう言っただけで黙ると、今度は凜が話し掛けてきた。疑問形ではないが。

「それさ、どう触ってもどう見ても、人間の腕に見えるよね？」

「見える。というか、僕の腕だろう？」

「だから、正真正銘ってわけじゃないの。それよくできた機械だもの」

「機械？」

遼太は反射的に自分の右腕を見下ろした。不気味な紫と白の混合光は既に消えている。だが、それを差し引いても、これが機械とは到底思えない。感触から体温、使い心地まですべてにおいて、何億もの細胞が集まって出来た腕にしか感じられない。

「そう、だから非常識なんだよね」

「全く……非常識だ」

遼太は溜息をついた。どうせなら、これも夢であって欲しい。というか、夢である要素が多すぎる。さっさと醒めて欲しいところだった。

「それで……僕はいつ此処から出れるんだ？」

「ん？寝てていいよ」

「寝てるといわれてもね……」

そんなすぐに寝られる体質が羨ましいというものだ。たったさっき、自分の出生に関する驚愕に値する秘密を暴露されたというのに、その不安を抱きかかえながらすぐに夢に戯れる行為ができるというものか。

そう言つと、凜はなるほどといった表情で頷くと、立ち上がって遼太の方に寄ってきた。

「うーん、確かにそうかもね。そんじゃ寝かせてあげる」

「はあ、そりやどうも……って寝かせる！？」

遼太はぞつとしたような声を上げた。すると、凜が不機嫌そうに眉を吊り上げる。

「ええ、駄目なの？」

「……いや、どういふ風にやるのかなあ〜って……方法を教えてくれれば……」

「単純に、こうやって……」

凜は人差し指を突き出すと、ちよいと遼太の額を突付いた。刹那、

活力が見えないなにかに吸収されるかのようになくなっていき、瞼が急激に重くなる。視界がぼやけて、体中の筋肉に力が込められなくなり、音も無くベッドに体が沈んだ。

遼太が寝付いた直後、再びドアが開かれた。別にそのあけた人物が合鍵を持っていたわけでもなく、ただ単に鍵が掛かっていなかっただけである。不用心である。

「あ、竹中君。やっときた」

「悪い悪い。電車がパンクしちまってな……」

そんな軽いジョークを飛ばしてはいつてきたのは、たけなかしよつこ竹中祥吾という青年。百九十行くか行かないかというかなりの長身に、狭い路地なら彼一人で横幅埋まってしまうほどの屈強な体の持ち主。きりつと結ばれた口に、線の鋭い眉毛。その厳しい容貌から、ヤクザの御曹司じゃないかと思われるが、一応普通の、凜と同年の高校生である。

「んで、その『義手』の持ち主は誰なんだ」

祥吾はどてんと机の上に持参してきた鞆を置くと、暇そうな凜にそう訊ねた。

「ん、その人」

ピシッと形のよい人差し指で、健康極まりない仰向けポジションで穏やかな寝息を立てている遼太を指差す。その右腕は曝け出されたまま。

「こっから見える方が義手の腕」

「へえ……こりゃ分からんな」

祥吾は興味深そうにそう言って、その腕に触れようとして……寸前で止める。そして、くいつと、凜の方を振り返る。

「大丈夫か？」

「爆発したり、変なタマゴを産み付けられたりはしないと思うよ」

「そうじゃなくて、起こさないかって訊いてんだ。変なトラウマ呼び覚まさせるんじゃないねえ」

「ふふ。『氣絶』させたから大丈夫」

「……その表現止めようぜ。後、あんまり多用するのもどうかと思うぞ」

祥吾は半眼でそんな凜を見やりながら、遼太のその『義手』に触れてみた。体温が感じられて、肘辺りを触ったのに関わらず血の流れを感じる事ができるほど、生命力に溢れている。筋力も大分あるらしく、祥吾に負けず劣らずであった。

「ふうん……確かにこれはなあ……、けどなあ、何の確認もせず腕を切り取るなんて、こいつが常人だったらどうするつもりだったんだよ？」

祥吾が呆れたように言うと、凜はバツが悪そうな表情を作って制服のスカートの裾をぐっと握り、顔を下に傾け、その傾度のまま上目遣いで祥吾を見た。

「……少佐に頼んで記憶改ざんしてもらおう」

「……お前なあ……」

「……ごめんなさい……」

どうしてこうも僻みっぽいのか。祥吾は後頭部を搔いた。

「でもこれが本物なのかはわからないだろう？一応、すぐくつついたんなら、その類のものだろうが、それだけなら職人が普通に作れるだろう？目印であるその紫も消えちまったわけだからなあ……」

「分かってる。だから今夜使ってみるの」

「使っちゃ……違ったらどうすんだよ」

「……ドンマイってことで？」

祥吾は大きな溜息をついた。

「俺達を守ってやるんだろ？」

奇獣の宴（前書き）

どうも、過激な表現に挑戦し始めました、霞式屍兎です。

今回から本題に入るということで、残虐表現が含まれ始めるので、苦手な方は注意を……、とりあえず、バイオハザードかサイレントヒルを普通にプレイされる方なら大丈夫かと思われます。

ちなみに、脈略なしに視点が入れ替わるのは仕様です。だからちょっと読みにくい点が生じるかもしれませんが……。

今作もテスト勉強の合間を縫って、その上後半は夜中に仕上げたものなので、誤字脱字不適切な表現、及び理解しにくい表現があるかと思いません、特に戦闘シーンなので；

もし発見されましたら、「駄目だなー」なんて苦笑いしつつ報告してくれるとなー、と思います……。

奇獣の宴

「……………!?!」

遼太は唐突に覚醒し、いつしかと同じようにガバツと上体をバネにあてられたかのように起こして 誰かの額に思いっきりその額をゴツンツとぶつけた。

「いったあつ!」「いったあ……………!」

それぞれ額をおさえて、蹲り悶え始める。祥吾はそんな遼太と凜を半眼で見やって溜息をつく。

「そこまで心配する要素じゃないだろうが……………全く」

「む……………そんなんわたしの勝手でしょ」

凜は遼太よりも早く立ち直って、脛を地面にあてるようにして座上目目で祥吾を潤んだ瞳で見上げる。それが彼女なりの睥睨である。二人は今、黒いコートを着ていた。闇に溶ける、そのコートは二人が同志であることを示している。

「……………あれ……………ここは……………?」

遼太もようやく自分の置かれた状況に気づいたようで、疑問符を傾けながら周囲を見渡している。

既に日は落ち、夜になっている。そんな視界の効かない中、確認できるのは地面が多少湿っていることと、周辺がとても広い土地になっているということだけ。

「涼属高校、お前の通ってる学校だ」

祥吾がその疑問に答えた。遼太は、そこで初めて祥吾の存在に気づいたようで、祥吾の方を向いて、一瞬後驚愕に満ちた顔になる。それを見た凜は面白げな笑みを浮かべた。

「この人は竹中祥吾君。あなたと同じ高校一年生かな。ちなみにわたしも」

「い、一年ツ!?!」

遼太は驚愕の意を具現化させた。それを見た祥吾はげんなりとす

る。無理も無い。百八十五オーバーの大男である。時折、プロレスラー云々のスカウトが来るくらいである。自慢にはなる体型であるが、一応彼は彼でコンプレックスとしているようだ。

「まあそういうことだ……もしかしたら、このまま同業者になるかもしれないねえから、覚悟はしておけよ」

「か、覚悟……？」

「んもう。脅しちゃ駄目だって……」

凜はそれから、その涼属高校の校庭を見回した。

東京ドーム二個分の広さを持つ、という点が自慢なこの校庭は、その肩書きどおりかなりの広さがある。照明も完備されていて、私立にしては大分豪華な環境である。だが、その分校庭はこれしかないのだが。

凜達が居るのは、その校庭の隅、樹齢百年を迎えるマツの木の下である。無論無許可なので、照明はついていない。学校敷地外にある街灯の光が気休め程度に照らしているだけである。

遼太は戸惑いを隠そうともせず、不安げにきよろきよろと周囲を見回している。それも無理は無い。今日学校帰りに凜に右腕をもがれてから半日以上眠っていて、更に終着点が夜の学校というのだから、混乱するのは当然である。

「な、え？なんで此处に居んの？これから何を……」

「その『義手』が本物かどうか調べるためにここにきたの」

「え……？」

遼太はその要領を得ない回答に、一層疑問を深める。

「ぎ、義手……？」

「……そら見る。あんまり乱用するもんだから、記憶が飛び飛びになっちまったじゃねえか」

「……だって暇だって言うから……」

混乱が一層増した遼太を見た祥吾が、そう凜を窘めると、凜はいじけたように下を向いてしまった。ちなみに遼太は暇だとは言っていない。

祥吾は未だに尻をついたままの遼太に視線を向けると、語りかけるように言った。

「いいか、お前のその右腕はお前のではない。よく作られた機械じかけの義手だ。それは分かるか？」

「……………ああ」

遼太は記憶を掘り下げないようにじいっと考え込んで、やがて合点がいったのか頷いた。

「だが、精巧すぎて……………というか、それもあるが、実を言うとそう言うタイプの『義手』なら、上手い奴ならすぐ作れちまうんだが、お前のはその量産品とはまた違った『亜種』である可能性があるってんで、その検証にここに来たわけだ。分かるか？」

「……………微妙」

「簡単に言っちゃうと、本物か偽者が確かめに着たってこと」

凜がそう付け加えると、遼太は納得がいったように顔を引き締めた。だが、疑問がまた発見されたのか、すぐに怪訝そうな顔に戻る。

「んでも何で学校に……………」

「それはすぐ分かる。だが、俺達の口から言うのは無理だ。禁則事項云々が絡んでくるから……………」

「はあ……………」

祥吾は顔を微塵にも変化させず、そう言うので、遼太は引き下がらざるを得なかった。

やがて、寡黙の時間が訪れたので、遼太は自分の右腕を見下ろしてみた。どう考えても自分の、生まれたときから備わっていた右腕としか思えない。触ればきちんとその感触が伝わってくるし、抓れば痛みも感じる。指や肘も滑らかに動く。手首付近を触れば脈も感じることができる。

だが、凜や祥吾は冗談でそんなことを言っているわけでもなさそうだ。だとしたら、この義手は人間の技術の範疇を大きく逸脱した、革新的な技術を詰め込んだものである。そして、それを抱えて常用していることに気づかず、遼太は日常を過ごしていたことになる。

だが、これが量産されている、というのに引つ掛かりを感じてならない。それはこの世界に、遼太と同じようにこの義手を気づかずに常用している人間が、多数存在しているということなのだろうか。だとしたら、誰がそんなにその義手を作っているのだろうか。何故、人々に流用させる必要があるのだろうか。

そして、この自分が装着しているこの『義手』 『亜種の義手』とは一体何なのだろうか。

凜や祥吾が言うには、遅かれ早かれ分かるとのこと。一体、どんな方法を取るのだろうか。第三者を待っているのだろうか。何か特殊な出来事でも起こるのだろうか。異界への扉が現れる、とかそういうファンタジーのようなことが起きるのだろうか。

遼太はそこまで考えて、思考の逆流を抑えた。これではきりが無い。そのことに関することを考えると、緊張が昂ぶってくる。このまま、得体の知れない何かに押しつぶされてしまいそうだったから改めてみると、この周囲は恐ろしいほど静まり返っている。車のエンジン音はおろか、動物等の鳴き声も聞こえない。

いや、この静けさは異常だ。

「……………」

悪寒が背筋を走りぬけた。『何か』良くないことが起きるような気がしてならない。

じり、と凜が身動きした。祥吾が彼女を見やる。それから物憂げな表情を見せて頷いた。

その数瞬後、静けさの中に轟音が飛び込んだ。草木を揺るがし、地面に罅を入れ、鼓膜をつんざき、悲鳴を上げたくなるほど禍々しい、何かの咆哮とも取れる轟音。遼太は知らぬ間に耳を両手で塞いでいた。

「やっぱり来た……………」

「良かったなっ！ これでお前も俺達と『同じ』だ」
同じ？

疑問を問い掛ける暇も無く、凜と祥吾は駆け出した。轟音は数秒

前よりは大分小さくなっている。

遼太は耳を塞いでいる手を退かせて、その轟音がした辺りを見つめた。

そこには、空間をそのままカッターナイフか何かで切裂いたかのような切れ目が出来ていた。そこから、狭い隙間にその体をねじ込むようにして、『何か』が這いずり出ようとしている。

「そこから動いちや駄目だからねっ！」

そんな凜の声が聞こえてくる。

「動いちや駄目って……ええっ!？」

そう言う彼女は、その空間の裂け目に向かって走っていつている。無論、遼太はそこから動く気は無い。だが……

(『同じ』って何だよ……)

コンクリートの固まりが落ちたような、凄まじい音がした。遼太は混乱しつつも、その方向に視線を向けると、そこには信じられないものがあった。

まず、遼太はそれを初めて見た。

丸い、みかん箱大の大きさの頭部に、禍々しく尖った顎、そして、その頭部の側部に二つと中央に一つある、赤い目。絶え間なくぎよるぎよると蠢いている。そしてその頭部に、少し太めだが柔軟性がある長い首が繋がっており、その先に胴体と思しき管の集合体があった。そこから、鋭い鉤爪を備えた四肢が伸びている。そして、その全身は動物の皮を剥いだ時露出される筋肉の色と酷似していた。

精神衛生上、良くない生物が今、遼太の目の前に居る。エイリアンと揶揄されてもおかしくない、グロテスクな容貌を持つ、手足が無闇に長くなったトカゲの様な生物が……。

凜は『それ』を一瞥すると、黒コートのポケットから、ナイフを取り出した。コンバットナイフよりも小さいが、ダガーよりは大きめのナイフである。

そして、それで試し振りをするかの様に空を一薙ぎする。

ヒュンツと、空気を引き裂く音がした刹那、そのナイフが膨張し、

巨大化し始めた。そして、瞬く間に銀色の刃を持つ大剣になる。

凜はそれを見て不敵に微笑むと、その大剣を両手で握りなおしてその『何か』に突っ込んでいく。

『それ』は自分の命を狙わんとする、凜の存在に気づくと、それを叩き潰そうと右前足を振りかざす。凜は大剣を持ち上げて自分の顔を隠すように、その一閃を防いだ。ガギインと、鈍い金属音が鳴り響く。『それ』は反動で体を反らした。凜は間髪入れずに地面を蹴り、その懐に潜り込むと、その管の集合体である胴体の腹部に当たる部分に斬撃を加える。腹部はぱっくりと割れて、黄と赤の入り混じった体液が噴出した。『それ』が身悶えするように、鋭い咆哮を上げる。

それと同時に、『それ』の頭部に鈍い衝撃が走り、大きくその巨体が揺らいだかと思うと、そのまま広大な校庭の地面に崩れ落ちた。その傍に何かに着地する。祥吾だ。

「ふう……ありがとう」

凜は大剣を小脇に抱え、額の汗を黒コートの袖で拭いながら、そう言った。腹を引き裂いた数瞬間後に、祥吾が三つの目玉が躍る頭部に飛び蹴りを喰らわせたのだ。

「……まだだな」

だが、祥吾は油断無くその倒れた巨体に目をやる。先ほど凜に裂かれた腹部からは、でろんと赤黒い臓器のようなものがはみでて、うっかり触ると焼け爛れそうな赤黒い液体がどくどくと溢れ出している。

「……なんかいつものよりモタフだね」

「……よっぽどあれがお宝なのかもな」

やれやれといった感じで、凜が大剣を持ち直す。両手で持ってやとこさ運べるだけのサイズである。それを木刀と同等の扱いをするのだから、疲れるのが当たり前なのである。

そんな剣術を旨とする戦い方をする凜に対して、祥吾はその体、体術を旨とした戦い方をする。それ故、その体にかかる負担は凜よ

りは軽い。

『それ』は這いつくばるように屹立すると、腹が割れているにも関わらず、凄まじい咆哮を上げた。その影響で、遠くはなれた校舎の外装がばらばらと剥がれ落ちた。

「あゝあ……………」

それを見て、凜は落胆の声を上げる。

「……………面倒くさいなあ……………」

凜はそう呟くと、一步前に踏み出す。飛び石を踏むように、タツとステップを踏むように、『それ』に近づいていく。

それを見た祥吾は凜とは反対方向、遼太の元へと走っていく。『あれ』は『いつもの』とは違う。凜の一撃を喰らっても尚、抗う態度を見せる『ああいうの』と戦闘するに当たって、第三者が半径一キロ以内に居るのは非常に危険なのである。

だから、『確定』したものの何の効力を齎さない遼太はやはり第三者扱いである。とあれば、避難させるのは定石。それならば、動きの遅い凜よりも、装備の無い祥吾が避難を促すのは当然なのである。

「おい、少しマズイ。逃げるぞ」

祥吾は遼太のもとに着くなり、必要最低限の情報を遼太に与えて、逃走を促す。

「え……………でも……………」

「大丈夫だ、あいつなら、一人で。下手な心配すると、お前だけここで浄化されることになるぞ」

「じよ、浄化!?!」

祥吾のいささか乱暴で過激で誇張された表現にビビったのか、遼太は大人しく祥吾に従うようになった。

「本当にコイツなんか……………」

と、祥吾は聞こえないように呟くのであった。

右からの打撃を片手で持った大剣によって弾くと、それに費やし

た労力の代償を払うのを避けるべく、打撃を受け流した方向に跳び、剣の柄を両手で握りなおしつつ、『それ』の真横に回りこむ。斬撃。ロープが千切れるような音がして、『それ』の右後ろ足がその体から乖離された。それを見て、凜は安堵の溜息をつく。足を一本失えば、大抵の動物は平衡感覚を失って崩れ落ちる。あとは崩れ落ちたところを狙って、首を断ち切れれば……。

だが、そんな期待は風の前の塵の如く飛び去る。

万力で卵が潰されたような音がしたと同時に、『それ』の胴体を構成していた管が一部から分裂し、それがまた足となった。足の代理が幾らでもあるのだ。

それを見た凜は瞠目せざるを得ない。　こんな『奴』は初めてだ。

その一瞬の間について、凜の頸を斬首せんと『それ』が首を伸ばしてきた。その死神の様な獰猛な顎を限界まで開いて。

咄嗟に凜は大剣を振り上げた。それは丁度、その顎に向かって大剣の刃を突き出すような形になる。

だが『それ』の顎の勢いは全く衰えず、そのまま大剣の剣刃をがっちりと捉えた。そして、そのまま全体重をかけて圧してくる。

凜はそこで初めて戦慄を覚えた。目と鼻と先には、限界まで見開かれた三つの赤い目と、人体など三秒もせずにもじん切りになってしまうであろう禍々しいほど鋭い顎が迫ってきている。

無論、凜にここで死ぬ気など更々ない。寧ろ、ようやく骨のある刺客と出会えて、喜んでいようである。

凜は自分の体重と大剣の重さ全てをその顎掛けた。『それ』の目玉が動揺したようにギョロギョロと目まぐるしく回転し始める。いい気味だ。

やがて、凜は大剣に更なる力を加える。『それ』の顎がぎちぎちと限界に近いことを告げる。

その細胞が裂ける音を聞いた凜は……黒いコートに隠された脚を思いきり振り上げた。その学校指定のローファーは、そのまま『そ

れ』の喉もとに突き刺さる。『それ』は、大剣の刃を擦るようにして、首を跳ね上げた。

凜はその隙に横に跳び、警戒も障壁も何も無くなったその首元に大剣を叩きつける。カッツと、金属を叩いたような音がすると、僅かに大剣の刃が『それ』の頸に食い込み、血飛沫を上げる。

異常すぎる硬度を持つていることに凜は素直に驚嘆の表情を漏らしたが、物怖じせず刃が刺さったまま、皮を剥くように胴体に向けてその刃をスライドさせる。凜が大剣を地面に叩きつけると、はらりと鉄の布の様に硬い皮と、数本の管が同時に地面に落ちた。『それ』は短い咆哮をあげる。

凜はそれを悲鳴と受け取り、トドメを刺すべく、その大剣を大きく垂直に振り上げた。そして、それを振り下ろそうとした瞬間、最初に切裂いた腹部から何かが飛び出した。赤い薄く楕円形をしたそれは、獲物を捕らえる槍の如く恐ろしい速度で凜に向かっていく……が、凜はギリギリで反応して、振り下ろしたその大剣でその舌のようなものを薙いだ。ゴム風船が裂けるような音がして、その舌の先端が切断される。

だが、『それ』にとって、内部に備え付けられた不意打ち用の臓器はどうでも良かったようだ。その隙に体勢を立て直すと　その左前足の中ほどを凜の脇腹に叩きつけた。

「ッ……！」

声も無く凜は吹き飛ばされ、夜の校庭を転がる。全ては想定外の範疇を大きく超えた出来事だった。所以、受身もままならず幼子の様に吹き飛ばされる羽目となる。更に、その突き飛ばされた拍子に大剣を取り落としてしまった。今は、『それ』のすぐ傍に転がっている。

更なる追撃を覚悟していた凜は、転がりつつも体勢を上手く立て直すことに成功した。そして、『それ』の現状を確認すべく、その辺りの方向に視線を巡らせたが……、一向にやってくる様子が見られない。それ以前に、気配が感じられなくなった。あの様子からす

れば、致命傷を与えていないはずなのだが。

凜は周囲を油断無く見渡した。大体二十メートルほど吹き飛ばされただろうが、それでも大した距離は稼がれていないはずだ。

「……あ……」

凜は唐突に何かに気づくと、慌ててコートのポケットから携帯を取り出した。さっきの衝撃でも壊れなかったらしい。ディスプレイは正常に明るく光っている。

素早く操作を行うと、それを耳に押し付ける。非常に切羽詰った感じだ。

「もしもし……、竹中君……？　　ごめん、そっち行っちゃった

……」

「ハアツ！？　マジかよ……」

祥吾は携帯を握り締めて、そう唸った。隣では遼太が不安げにそんな祥吾を見上げている。

祥吾は、やがて携帯を切ると、遼太に向き直った。夜目でもわかる、大分まだ混乱が残っているようだ。

「……お前はやっこさんにとって、とんでもない存在らしいな」
「こんなパツとしない奴がなあ。」

紫白（しはく）の光（前書き）

ええ……今回はちよいと無理に押し込んだ感じになってしまいました。

重要な部分の描写が苦手です……orz

一応馬鹿であろうが、稚拙であろうが大事な部分に変わりは無いので、読み込んでくだされば、と思います。

ええ、相変わらず進歩しない身でありますので、誤字脱字不適切な表現が多々あると思われませんが、どうか苦笑いか大爆笑でスルーしてくれれば……と。

紫白（しはく）の光

「というわけで、予想外の猛抵抗を喰らったあいつは、そのまま『変なの』を逃がしてしまった、というわけだ」

「え……え、ええ……！？　んで、それが僕を狙ってるって？」

「そういうことだ。飲み込みが早いな」

「え、え、え、ちょ、冗談じゃないッ！　どうして僕がそんな……」

祥吾は口の中で悪態をついた。やはり諭すには大分時間が掛かりそうだ。全く、あいつも余計なことしれくた……。

二人が走っているのは、深夜で人氣が全く無い農園地帯である。

この時期に働かせると、土地が痩せるということで、今は使われては居ない。臨時の戦闘場所としては優秀である。

殺し損ねてそこに居ないということは、遅かれ早かれ追いつかれることは間違いない。人間の虐殺を目的としているなら、とつくに凜を殺しているはずだ。だがそうしないということは、あくまで目的は遼太にあるということ。そして、凜がてこずるだけの強敵を送り込んできたということは、遼太のこの義手は相当の能力を秘めているということである。

どの道、戦うことは免れない。それも、遼太を守りつつである。不可能ではないが、かなり困難であろうと思われる。

祥吾は乾いた口腔を舐めて湿らせ、ふいに足を止めた。遼太も釣られて止まる。

「……来たぞ」

「え……？」

祥吾が呟いたのを聞いて、遼太は空へと視線を配らせる。だが、電線がかすかに見えるだけで、異物の気配も見られない。周囲を模索してみるも、ただの静かな畑が広がっているだけである。

遼太が真偽を問おうと口を開きかけた刹那、祥吾が遼太の腕を掴むと、思い切り放り投げた。

「えっ!？」

しかし、さつきから「え？」しか言っていない遼太である。彼は綺麗な放物線を描いて、夜の畑へとヘッドスライディングする。ぽふんという感覚の後、土が顔に容赦なく降り注ぎ、目を白黒させる。土を払い落としつつ、遼太が振り向くと 先ほど遼太が居た辺りの地面が裂けて、触手の様な物が覗いていた。否、触手ではなく、「何か」の頭部だ。先に頭と思しき球体がついている。

祥吾は遼太が無事なのを確認すると、その頭部に向けて走り出す。「それ」は祥吾に気づいたのか、その赤い目をこちらに向けた。一つ左側の目が潰れている。凜だけではこれが限界だったらしい。

祥吾は「それ」の胴体が完全に露出する前に、素早く「それ」との距離を詰めると、その頭部に鋭い回し蹴りを仕掛ける。見事にローファアの踵は「それ」の頭部についている中央の目に激突、アイロンの起動音の様な音を上げて、その目が閉じられた。残るは右側の目だけ……。

だが、相手もそう甘くは無い。すぐに反撃だと言わんばかりに、祥吾の死角から前足が鞭の様に撓る。祥吾は間一髪で反応し、その前足を素手で受け止める。洗剤で濡らしたようなぬるりとした感触が、掌を伝う。だが、こんな気色悪い経験など、武器を持たない祥吾にとつては日常茶飯事である。気にせず、親指に力を込める。ギチギチ……と、脊髄を捻ったような音が鳴り、数瞬後に前足は途中でぽつきりと切断されてしまった。切断面から赤黒い液体が噴出する。

祥吾は、その折った前足の先端部分をその手に握ったまま、一歩あとずさる。そして、信じられない話だが、その前足を地面から這いずり出るのに苦心している「それ」に投擲した。「それ」は当然のことながらそれをもう片方の前足で弾き飛ばす。祥吾の剛肩によつて放たれたそれは、決して気休めではないのだ。

無論、そんなことを予想していた祥吾は、軽しく地面を一蹴し、跳躍する。そして、投擲された前足を弾いたことよつて生じた隙

をついて、『それ』の頭部に重々しい跳び蹴りを喰らわせた。『それ』が咆哮を上げる。

祥吾が上手く着地すると、すぐにその衝撃から立ち直った『それ』が胴体を構成する管の一本を乖離させて、それを触手の様に伸ばしてきた。祥吾が反応する間もなく、それは祥吾の足首にからみつく。すぐさま祥吾は転倒し、ずると『それ』に引き寄せられていく。「……クソッ！ だから俺はタイムマンは苦手なんだよ……！」

祥吾は悪態をつき、思い切り触手が絡まった足首を振り上げる。蜜柑の木の枝が折れるような音がして、祥吾の足首を支配していた触手が根っこから千切れた。その恐ろしい筋力を以つてすれば、これくらいのは朝飯前なのである。が。

『それ』の同時攻撃はどこまでも意表を衝いてくる。祥吾が立ち直る間も与えずに、前足での斬撃を加えてきた。祥吾はそれを確認すると一瞬瞠目し、素早く左足で地面を蹴ると、転がった。

だが、それでも『それ』にとつては十分すぎた。その前足は、祥吾の脇腹を抉りとり、そのままその下の地面に突き刺さる。「ぐっ……！」

脇腹に途方の無い焼けるような痛みを感じ、祥吾はうめいた。

そんな祥吾を嘲笑うかのように、『それ』は前足で打撃を加える。祥吾は吹っ飛び、近くの畑に前のめりに倒れ、そのまま動かなくなつてしまった。

「へ……？」

遼太はそれを見て、そんな間抜けな声をあげた。祥吾はたつた今、あの怪物に倒されて、凜は今この場に居ない。

今、ここに居るのは自分だけ。そして、祥吾たちの話によれば、『奴』の標的は自分……。

「ひっ……」

恐怖が胃の底からせりあがってきた。負の感情が具現化して、背筋を駆け抜ける。

『それ』が遼太の方を向いた。一つしか残っていないその赤い目

で、遼太を直視してくる。その焦点の合わさっていない瞳。遼太はどうすることもできず、ただそこに呆然として佇むのみ。

『それ』はやけに緩慢な動きで、地面から這いずりだすと、改めて遼太の方を向き直る。そして……舌なめずりでもするかのように、腹部のぱっくりと開いた場所から舌のような臓器を覗かせた。

(どどど、どうしろってんだよ……これ……)

『それ』はそんな遼太の反応を嘲笑うかのように、凜が削り取った頸の傷口から、イカの足の様な無数の触手をびちゃびちゃと召還させる。免疫の無い常人なら、そのまま失神してしまうレベルの不気味さである。

遼太はそれを見て、真っ白になった。無論、遼太も免疫の無い常人に含まれているのであるから。

『それ』はその触手を用いて、遼太の自由を拘束しにかかる。脇に触手を絡ませ、ぐるぐる巻きにして、こちらに手繰り寄せる。遼太はもはや恐怖で悲鳴を上げるのもままならないようだ。

『それ』は勝機に確信を持ち、その顎で遼太の右腕に噛み付いた！

遼太は、迸る激痛に顔を歪めたが、襲ってきたのは痛みだけではなかった。

熱。気が狂いそうな程の熱さが、腕を這いずりあがってくるように伝わってくる。それは顎が深く食い込むにつれて、あからさまに加速してきている。

痛みとその熱さで三度目に意識が削ぎ取られそうになった頃弾けた。熱は紫色の閃光となって具現化し、遼太と『それ』の間で煌いた。ふいに体の拘束が解かれ、畑の湿った土に落とされる。

埃にやられた喉を堰で保護しつつ、顔を上げると、まだ『それ』はそこに佇んでいた。様子を見ているのかその頭部は、小刻みに揺れている。てつきりそのまま浄化できていたのかと思っていた遼太は、改めて戦慄を覚える。

だが、すぐにその戦慄は疑問符へと変わる。そして、その疑問の

予先である、右腕に目をやると 義手が光っていた。あの時見たような、白みを帯びた紫色の光……。

再び熱気が右腕を支配する。呼吸するのが困難なその熱に、遼太はどうすることもなく、ただ悶えるのみ。

やがて、その熱さが限界を迎えるとき その辺り一帯に閃光が迸った。『それ』は慄くように、その巨体を竦ませる。

そして、その声がなり響いた。

「起動完了。以後常時流用体勢を保つ」

機械の様な無感情な声。だが、機械にしては声紋に特徴がある。

遼太はその声の持ち主を捜し出さんと、周囲を見渡すものの、遼太と『それ』以外周辺に確認できない。では誰が

「主。^{マスター}指示を」

声がまた響き、遼太は飛び上がって驚いた。今度は、首を回す速度を速めて周囲を見渡す。が、相変わらず人つ子一人居ない、目の前の不純な生物が居なければ閑静な農業地帯である。

『それ』が威嚇するようにか、それとも自分の存在を忘れられま
いと思っただか、甲高い咆哮を上げた。

もはや遼太の精神力は限界だった。学校帰りにいきなり腕をもぎ取られ、気がつけば見知らぬ場所に拉致、監禁されて本当は腕は素のものではなく、義手だったと聞かされ事情を聞く間もなく意識を削ぎ取られ、最終的に辿り付いたここでは、グロテスク極まりない不純生物が動き回り、守つてやると言っていた人物たちがいとも簡単に倒されてしまい、挙句妙な声に苛まれている 全くをもつて支離滅裂な展開。こんな経緯をリアルに体験し、平静を保つていられる方がおかしいのだ。

遼太の理性は糸が切れたかのようにあつという間に勢力をなくし、パニック状態に陥った。

「ど、どーでもいいから、誰でもいいから……助けてくれッ！」

遼太の悲痛な叫びは夜空に流れ、誰に届くことも無く哀れに四散に意味の無い空気の波となって消えた。が、かといって誰にも届か

なかったというわけでもなかったようだ。

「了解」

刹那、右腕が唸りを上げた。不吉な音ではなく、機械のモーター音のような。

「状況を把握。最善の方法として、主の中枢神経を暫時拝借する。許可を」

遼太は驚いて、右腕を見下ろした。いつもの腕に、紫じみた球体が嵌めこまれ光っており、手首肘諸々の関節部から蒸気が噴出している。

パニックを通り越して狂って精神が崩壊してしまいそうな様だったが、何故か遼太は安心感を覚えた。そして、返事をしてやる。

「た、頼む……」

「了解。承認取得。感覚神経及び交感神経を除いた全ての神経の暫時支配に移る」

その機械音声が届いた刹那、体が自由に動かなくなった。まるで、誰かの体に眼球だけはめ込まれたような感覚だ。その上自分の意志とは関係なく体が反応し動く。

「支配完了。戦闘を開始する」

口が勝手に動いてそう言った。声は遼太のものと全く同じだが、質が全く違う。腹の奥底の憎悪を源流としているような暗さが含まれている。

先に攻撃を仕掛けたのは、意外にも「それ」の方だった。痺れを切らしたのか、既に生え変わっている前足と合わせて、両前足を交差させて斬りつけてきた。それを見た「遼太」は無造作に土を蹴り後ろへ跳びそれを躲す。「それ」の前足は空を斬り、畑の土を抉り、刺さった。

「遼太」はそれを見て、即座に反応し右腕から何かを飛ばした。光の筋が実体化し、ひも状になったようなそれ。その根源は、「遼太」の右手の中にある。は、神々しい光を帯びて「それ」の前足へ真っ直ぐ飛んでいくと、左前足に絡まった。そして、「遼太」

はそれを確認すると、右腕を振り上げた。

すると、ゴキブリの足を千切ったかのように、いとも簡単に左前足がもげた。累計で三回目である。「それ」は体勢を崩したものの、大して動揺もせず再生を始めようとした。
が。

『遼太』は千切ったその反動を遠心力に変えて一回転すると、その左前足で同じく右前足も根元から切断した。トマトを叩き潰したような音が鳴り、赤黒い液体が切断面から吹きだす。「それ」は前のめりに倒れ、悲鳴の咆哮を上げた。

『遼太』はその顛末を一瞥し、右腕から伸びている光の帯を収納した。伸ばしたメジャーを回収するような、金属がこすれあう独特の音が響く。

無論、「それ」もただで負けるわけではない。後ろ足だけになって尚、前足を再生させんと胴体の管を分解し始める。更にその作業を行いつつ、大きく裂けた腹部から例の臓器を射出する。ついしがた凜に先端を切裂かれていたが、傷口の癒着が尋常ではないペースで進み、既に傷口は塞がっている。恐ろしい生命力である。

『遼太』はいち早くその臓器の襲撃を察知し、右腕を変形させる。ガチャガチャと凝縮しては膨張してを繰り返し、最終的に筒状で、先端の十センチほどを更に細くしたような形に変形した。そして、その先をその臓器に向けて 撃った。その先端から、紫を帯びた光線が発射された。その光線は真っ直ぐに臓器の中、臓器はそのまま本体とは隔離され、瞬時に黒い塊と化した。貫通はしなかったようで、まだ「それ」の本体は無事である。

今度は『遼太』が仕掛ける番になった。再びその腕を変形させる。凝縮。拡散したとき、その腕は紫の妖気を帯びた剣に変形していた。凜の大剣を縮小したような形である。が、雰囲気は全く違う。

『遼太』は地面を蹴ると、人間離れした跳躍力で「それ」との間隔を一気に詰めると、その右腕を横に思いっきり薙いだ。それはそのまま「それ」の頭部に命中し、直撃を喰らった頭部はビンタを喰

らったかのように、大きく揺れた。

だが、その威力の甚大さに比べると、『遼太』のなぎ払いは序撃に過ぎない。すぐさまに第二撃がその剥き出しになった首に向けられる。その動きに機敏に反応した『それ』の首に自生していた触手がうなり、『遼太』に向かつて総突進をし掛けた。

『遼太』は興味無さそうにそれを一瞥する。単純な問題だ。攻撃の矛先を変えればいい。

右腕が閃いたと思うと、『遼太』に狙いを定めていた触手がばらばらと地面に落ちた。『遼太』はそれに構わず突撃を続ける。三撃目をその首に振り下ろすために。

だが、そのころには『それ』の前足は再生を終えていた。よろよろと立ち上がると、『遼太』の位置を確認し、今度は前足で防御の体勢に入った。だが、またも斬撃が入ると、その前足は重力の虜となり、あっけなく地面に落下した。

前足を切り落とすと、一旦『遼太』は地面に足をついた。靴の裏が畑の土を踏みつける。そして、瞬時に目標を補足すると、その足を軸に回転し跳んだ。『それ』の頭部に向かつて。

『遼太』は跳躍し、風を頬に感じつつ右腕を後方に引いた。突きの体勢である。

そして、そのまま 無防備な『それ』の最後の目玉にその剣を突き刺した。乳白色の眼漿を撒き散らしながら、『それ』は大きく首を振った。ぼたぼたとその眼漿は地面に垂れ落ちる。

『遼太』は目玉が効力を失った眼窩から素早く右腕を引き抜くと、悶え苦しむ『それ』の顎を蹴り再び距離を開ける。そして、再び右腕を変形させ始めた。

凝縮。そして、再び膨張すると、先ほどの舌のような臓器を撃退させた銃身の様な形になる。そして、その先端を光を失って混乱する『それ』に向けて 撃った。

先ほどとは少し違う、青白い光を帯びた光線が、『それ』を真っ直ぐに射貫き、浄化させる。金属が塩酸に入れられて熔けるような

音がし、『それ』の輪郭が曖昧になっていき　消えた。

『遼太』が銃身を変形させて、普段の腕の『形』に戻したとき、その農園地帯はまたいつもと同じ閑散とした風景に戻っていた。

「任務完了。中枢神経支配権を主に還元させる」

そこで、漸く戒めが解けたかのように、体の自由が戻ってきた。

それと同時に、途方も無いほどの疲労も襲ってくる。遼太はうなだれ、その場にへたり込んでしまった。疲労もあるが、それ以前に自分のしていたあの行為の感覚が自分の中で渦巻いていたからであり、また一層混乱を深める結果となったのだ。

「ご苦労。久しぶりの戦闘だった故、負担を過剰に掛ける結果となったことを詫びる」

そんな中、右腕がそう言った。さっきよりもより鮮明な、男の声である。

「な、なんだったんだ……今は……」

遼太が呆然として、そう呟くように義手に訊ねる。

「私の活動思考基盤と主の中枢神経を繋ぎ、暫定的に主の体を私の物とした」

「……ごめん、もっと砕いて説明してくれないか？」

「我が主の体を操作した」

「へえ……」

幾分砕きすぎのような気がしたが、今までの行為と現象を考えれば、当たり前かもしれない。

「今の現象を我は『一体化』と呼ぶ」

「なんとまあ……単純な……ねえ……」

そこでようやく遼太は右腕を見下ろす余裕ができた。何気なく右腕を見下ろし　絶句した。

遼太の右腕の外見は、正真正銘の義手になってしまっていた。遼太は瞠目して、同様の色を浮かべる。

「我が覚醒した証。弊害は存在しない」

「え……ええ……そんな事言っただって……」

そこで遼太ははつと気づいた。自分の腕と何気なく会話している。この非常識な現象をあたりまえの様に享受してしまっている。もう自分は戻れない位置に居るのかも知れない。

何もかもが唐突すぎた。自分はただ、帰宅していただけなのだ。その途中でこんな妙な境遇に誘われてしまった。しかも夢ではないときている。逆にここまでリアルな夢だったら、喪失感を覚えるだろう。

「どうした」

「……いや、別に……」

義手が再び話し掛けてきた。意外と饒舌な奴なのかもしれない。

「お………おい……大丈夫か……？」

そんな時、かすれて今にも消えてしまいそうな声が聞こえてきた。遼太が視線を上げると、そこには脇腹を手で抑えてこちらに歩み寄ってくる祥吾の姿があった。その指の隙間からはおびただしい量の血が流れている。

「え、ちよ、大丈夫か、なんて訊ける立場じゃないじゃんっ！」

遼太は再び驚いた顔で立ち上がると、そんな祥吾の下へと走っていく。そんな遼太を見て、祥吾もまた驚いたような表情を見せた。それはそうだ。自分よりも弱い、何もできない一般人がびんぴんしているのだ。

「……あいつは？」

祥吾は怪訝そうな顔を作って訊いた。

「……倒したよ」

遼太はしれつとして言う。

「そうか……本物だったか……お前がな……」

そう言っただけで祥吾は再び畑の土の中に崩れ落ちた。そして、血の池を作っていく。遼太はそれを見て、改めて危機感を感じ始めた。

「あっ……えっ、うわ、どうしよう……」

「困りか」

そこで義手が話し掛けてきた。遼太はそんな頼れそうに頼れなさ

そんな右腕を見下ろし、駄目もとで事情を話してみる。

「こ、この人、見ての通り怪我してるんだけど、どうにかできない？」

「治療なら容易。二十秒戴く」

遼太はぼかんとした表情で右腕を見下ろした。

疑問召集

凜が最初に見た光景は、本当に何も無い、いつもと同じ閑静な過疎農業地帯であった。地面に鋭い亀裂が入ってるものの、その亀裂を作ったモノの姿は見られない。

「……また後で直すのかあ……」

凜はそうぼやきつつ、捻挫してしまった左足首を庇いつつなるべく早足で、そこに居ると思われる男二人を探した。平坦な地平が続くここら一辺で、大男を探すのは訳も無いはずだ。立っていれば、の話だが。

畑の中ほどまできたものの、祥吾と遼太の姿が見えない。あの『異物』が住んでいる世界に、人間を拉致するようなことは決してしない、と心得ているが、全く無いというわけではない。今までそういうケースが無かっただけで、論理的には解明されていないのだ。

「……っ、どこだろ……」

不安が募る中、凜は夜の冷たい空気が頬を引っ搔いてくるのを無視して、周囲に視線を配る。

「あつ、居た。おい！こっち！」

そのとき、遠くから声が掛かった。遼太の声だ。

凜は表情を安堵一色に染めて、そちらを振り向く。そして、ギョっとした。

遼太の肌蹴て露出した右腕が、黒一色に染まっている。もしや、ここに『あれ』が居ないのは、遼太の右腕の持つ力を全て吸収し、依存がなくなったのもう帰ってしまったのではないか。そんな憶測が凜の脳内を行き交う。

「ちよと……その右腕どうしたの!？」

凜は左足首が悲鳴を上げるのにも構わず、全速力で遼太の下へ走っていった。

「み、右腕っ?」

凜はそんな遼太にも構わず、その右手をぎゅっと握り締めた。そこから伝わってきたのは、無機質で冷淡な金属独特の冷たさ。ではなく、普通の人間の手の温もりだった。

「え……あれ……え？」

凜は呆然として、遼太の右腕を見下ろした。そこにあるのは、遠くから見たとおり、黒い手。

凜が見下ろした視線を上げて、遼太を見ると、遼太は困ったような顔をしていた。凜は知る余地もないが、幾分か照れが含まれている。凜のその秀麗な顔立ちは、可憐な部類に入することは必須であるゆえんである。

「え……え？え？ど、どうしたのこれ？」

凜は混乱を湛えた瞳で遼太を見て、訊ねた。

「え……、ど、どうしたって訊かれても……」

とはいえ、遼太も事情を全て知っているわけでもないの、当然のように返答に窮す。

そんな二人の間に立ち入ったのは、この場に居る異次元の知的生命体。

「友人が待機している。三十秒以内の到着を推奨する」

「え……？誰……？」

本人としては、気を利かせたつもりなのだろうが、凜の混乱を一層深めてしまったようだ。凜は警戒を表し、周囲に油断無く気を配り始めた。

「そ、そっだ、祥吾が待つてるんだ。早く行こう」

「ええ、ちよつと……！」

遼太はもうこのままでは埒があかないと判断したか、慌てて凜の腕を取って駆け出した。凜は戸惑いながらも素直についてくる。

祥吾はそこから二十メートルほど離れた場所に位置する、納屋の壁にもたれていた。左手で脇腹を抑えており、その脇腹と左手は真っ赤に染まっている。

「た、竹中君大丈夫！？」

暗闇でも分かるその様態に、凜は驚愕の念を露にして祥吾に駆け寄る。そんな凜に祥吾は凜に苦笑いをしてみせた。

「ああ……あの鎌がそういう性質なのか、傷はもう塞がってる。暫く休めばすぐ歩けるだろうさ」

「……良かった」

凜はそう呟くと、改めて遼太の方に向き直った。

「ねえ、何が起こったの？」

「起こってた……って……最初から……？」

遼太はちらりと祥吾の方を見た。祥吾は最初からだ、と言うように顎を振り上げる。

遼太は嘆息して、それから記憶を手繰るようにして、ついしがたここで起こったことを話し始めた。

「我が存ずる事は皆無。吐露は不可能」

遼太が家に帰って、何度問いただしてみても、義手はそれしか言わなかった。三十二回目に訊いてもまたこの回答だったので、この義手はたったさつき誕生したばかりなのだろう、と遼太は勝手に納得しておいた。知らないことを教えるといわれて答えられる者などこの世に存在してはいけないのだ。

こんな真夜中に帰ってきた従兄を、従妹の空は当然の如く訝ったが、部活の勧誘に引っ掛かって、仕方なく付き合っていたところ、気がついたらこんな時間になっていて、この右腕はそのときに怪我してしまったものだ、と誤魔化しておいた。微妙に都合の良いいいわけだったが、空は一応納得していた。

遼太に両親はいない。詳細は聞いていないが、恐らく事故だったのだろうと遼太は思っている。そういう因果から、遼太はこの叔父の家に従妹の空と住んでいるのだ。ちなみに、空の母は空が幼い頃に病気で亡くなっており、叔父は現在海外に単身赴任している。ヨーロッパの中枢回りだったと思うが、遼太も詳細は知らない。

空は遼太と同じ年の高校一年生。都合二人暮しとなっているが、

その家事のほとんどを空が受け持っている。遼太が不器用ゆえんの宿命である。遼太がすることと云ったら、空曰く『死なない程度に生きる』とのこと。遼太は知らないが、遼太は空にとって生きがいらしい。どちらかというところ、介護の練習のような感じなのだろうが。遼太はベッドの上に転がった。無機質な天井が遼太を凝視している。

そして、右腕を掲げるようにして眺める。容貌はすっかり高性能な義手になってしまった。だが、慄くほど思い通りに動かし、きちんと神経が通っているのか感触や痛みなどもきちんと感知する。そして 人語を喋る。意思があるといった方が正しいか。

状況説明を終えた後、凜は後の始末はこつちでしておくから、先に帰っていて良い、と言った。あの後どんな処理を行ったか知らないが、あの壊れた校舎や亀裂の入った地面はどうなるのだろうか。

しかし困ったことになった、と遼太は脳に考えるべき議案を提出する。議題は無論、この義手のこと。別に使用に難が無ければ死ぬまで右腕がこれでも構わないのだが、そういうわけにもいかない。外見に難がある。まさか前日まで普通の腕で、次の日にいきなり義手になるなんてこと有り得ないだろう。訝る人間は必ず現れ、平穩を望む遼太を窮地へと追い込んでいくことだろう。まあ、今日の出来事も十分に非日常ではあったが。

とりあえず、今考えるべきは、この義手をどう隠蔽するか。である。

「長袖の衣服及び手袋の着用を推奨」

と、そこでいきなりそんな声がかかる。この部屋には遼太しかない、となれば、声の主はただ一人である。

遼太は驚いて半身を起こし、悠然と構える義手を見た。

「な、なんで僕の考えてくることが分かったんだよ……」

「我と主は神経回路で接続されているゆえん。思考感情疑問を共有することが可能」

「の割には、お前の考えてる事が僕にはわからないんだけど」

「我にその様な高性能な器官は存在しないゆえん、情報の伝達は常に一方通行と化す」

「……そうかい」

遼太にとってこの義手が持つ戦闘能力の方が高等だと思われるが、義手にとっては人間の脳の方が高等の器官らしい。確かにこの義手は人間の脳に何らかの媒体を介して憑代としているようなので、領けないことも無い。

「しかるに、我の存在を極端に隠蔽する必要は皆無。自由に晒して良しとす」

「ん……あつそう……ならそんな深く考えなくてもいいか」

遼太はそう嘆息して、ベッドに再び倒れ込んだ。義手に体に乗っ取られて、大分消耗したらしい、このまま瞼を閉じればすぐに眠りにつけそうである。

「スタンバイ」

そんな無機質な声がどこからか聞こえた瞬間、遼太の意識は遠のいた。

「あれ……」

遼太は自分が通っている高校の校舎を呆然となつて見上げた。そこにはきちんといつも通りの校舎が佇んでいる。確か昨日あの『変な奴』に壊されたはずじゃあ

「我の存在を享受した以上、その程度の非常識は通らない」

袖と手袋によって完全に隠された義手が、そんな遼太の心境を読んだか、気休めにもならない解釈を入れる。それを聞いて遼太は怪訝な顔を一瞬したが、それもそうかと頷き、校舎に入ってしまった。

「おい、佐貫。今日こそ寄ってけよ」

放課後。わらわらと生徒が各々の目的地へ向かうべく散っていく最中、遼太は廊下でそんな風に声を掛けられた。その声の方を向くと、乗馬部の安藤が見飽きたニヤケ面を浮かべていた。遼太はそれ

をみて、内心で落胆の息をつく。マズったな……。

「どこに？」

時間稼ぎにもならない愚問と痛感しつつ、遼太はできる限り真っ直ぐに安藤を見据えて言った。警戒の色を見せたのにも関わらず、安藤は相変わらずのニヤケ面を微塵にも変化させずに二の句を接ぐ。「決まってるだろっ、乗馬部だよ」

遼太は溜息をついた。恐らくこの言葉を聞いたのは十回目ほどだろうか。

安藤はセリフから分かるとおり乗馬部の部員である。が、その乗馬部は去年できたばかりの新設部。しかも、現在にいたつても馬が一頭も居ないという、名前負け極まりない部活なのである。

そんな部活誰も入りたがるわけが無い。というわけで、今年の新入部員も安藤だけらしい。随分の変わり者である。

しかも、この安藤という奴は曲者であり、部活に入っていない生徒を言葉巧み（と本人は自負している）に勧誘し、無理に仮入部させているのだ。しかも、そのまま口車に乗せられて、入ってしまった生徒もいると聞いた。

そして、遼太はきっぱりと断れるタイプではないのは、外見からしても確定事項である。しかも部活に入っていない。正に格好の力モである。

「えとさ……僕興味ないから……」

「なあに言ってるんだよ。お前が競馬好きなのは分かってるんだよ。お前の大好きなシヨウゾンに毎日会えるんだぞ？」

遼太は決して競馬が好きではないし、シヨウゾンとかいう馬だけが寄生体だかなんだか知らない生物と毎日会いたいとは思わないし、そもそもそんなもの知らない。

「で、でも、本当に、無理だから……」

「大丈夫大丈夫、上手く乗れなくても。むしろ乗れた方がおかしいだろ？　うちは初心者大歓迎なのさ」

安藤の推しはあくまで強固である。ぐいぐいと理不尽不条理根柢

が無いことをずっこんばっこんと言ってくる。

「なあ、頼むよ。お前と俺の仲だろう？」

最終的には懇願の体勢に入る。

目に涙を浮かばせるといふ、渾身の演技。遼太はマジ泣きだと思ひ込んでしまふ。そして、渋々了承をしようと、その口を開きかけた、その時。

肩を叩かれた。遼太は開きかけた口をさっと閉じ、天の助けといわんばかりに振り向いた。

「あれ、お取り込み中だった？」

北馬凜だった。この学校の制服に、昨日と同じ黒いコートを前を留めずに上から着込んでいる。ただ、昨日とは違い、髪型はポニーテールになっているが。

「な、何か用……？」

安藤の方に掌を突き出し、『ちよつと待ってくれ』と牽制し、こちらのほうに視線を向ける。

「ん、いや、あの暇じゃなければ後で良いんだけど……」

「んえ？」

無論、暇だ。帰ったってすることはない。英語か何かの予習復習か何かをやつて、居間でぼけえつとテレビを見て、定刻になったら寝るといふ、単調で暇な生活を送っている遼太である。それが示唆するように、趣味らしき趣味も興味のある事柄も皆無に等しかつたため、高校に入ってもなお帰宅部という、入部が義務付けられていゝ授業が終わつたら即帰還という立場にならざるを得なかつたわけである。

さて、遼太はその暇という性質ゆえん、双方から挟まれることとなつた。一瞬にして一時的な多忙状態になつてしまつた。

遼太はちらりと安藤を見た。無益な玩具を高値で買うように媚びるインチキセールスマンの様なニヤケ面である。そして、再び凜に視線を戻すと、安藤を1とすると、35くらいの比較的真面目な顔をしていた。

遼太の判断は一瞬。

「あ、安藤、悪い、それはまた後でにしてくれないか？用があったんだ」

途端に、安藤は仏頂面になった。それは藻で滑って大物を取り逃した釣り人の様なものであった。

「んで……何？」

安藤がすたころと行ってしまったのを見届けてから、凜に視線を戻した。

「え、べ、別に用があるなら強制ってわけじゃないから別にいいんだけど……」

少しばかりムキになったような口調になる。

「いや、それはあいつを引き離すための言い訳だったから、特に用はないよ」

「え……あ、うん。ごめんね」

凜はそれを聞いて、少し視線を逸らしてそう答えた。

「そんで……何？」

「うん。ちょっと話というか、お知らせというか、……とにかくついてきて」

それらしき言葉を羅列し、やがて言葉に詰まると、凜はぐいと遼太の右腕をとって、走り出した。必然的に、遼太もそれを追う、とつか連れて行かれるような形になる。

階段をいくつか下り、昇降口に至りそのまま靴を履きかえて外に飛び出すと、校門とは正反対の方向へ駆け出し、校庭を突っ切ると（ここでもあの亀裂は見当たらない）、第二校舎の裏側へ辿り付いた。

そこには、木造の校舎があった。壁には蔦が壁の色が見えないほど這っており、入り口と思しきスライド式の扉についている窓は見事に四散している。割れているのはそこだけではなく、普通の教室の窓も碎け散っていた。

そう、そこは立ち入り禁止になっている旧校舎である。

「元々小学校だったんだって。それが廃校になったとき、この高校が買い取って、そのままその校舎は残してあるんだって」

凜は立て付けの悪い引き戸をガコガコ言わせながら開くと、遼太に入るように促した。

電気は通っているらしく、ほのかに光る蛍光灯によって、昇降口は転ばない程度に明るくなっていた。

「土足でいいよ。どうせわたし達しか来ないし」

わたし『達』というのが気になったが、遼太は助けてもらった恩に殉じて気にしないことにした。

ギイギイなる階段を上っていくと、染みで純黄色になってしまった壁が見えてくる。そして、何ともいえない匂いもしてくる。

遼太は戸惑いながらも、凜のあとをついていく。このままここで自殺に見せかけて殺され様としても、きっとこの義手が助けてくれる、と信じて。

「愚案」

そして、突っ込まれる。その『救世主』の義手に。遼太は無理に苦笑いをした。

やがて、凜は一つの扉の前で止まった。その扉には、「中世武器研究会」と書かれている。

「ここね。覚えてね」

「え？」

どうして、と遼太が問う前に凜はさっさと扉を開けて、中に入っ

て行ってしまった。遼太も慌ててそのあとを追う。

そこには、いつかみた光景が。

「あれ？ここって……」

遼太は凜を見る。

「君の家……？」

理不尽な人たち

「あれ……あの時わたし家って言ったっけ？ここ」

凜が首を傾げた。遼太は首をかくかくと振って、賛意を示す。

「そっか……まあいいや。ここも家みたいなものだしね」

凜はそう呟くと、中央にどんと置いてある机に歩み寄っていき、パイプ椅子の一つをひいて、遼太に奨めてきた。遼太は素直に受け取ると、腰をかける。これも大分老朽化しているようだ。

「コーヒー飲む？ 結構いいメーカーがあるんだけど……」

「あ、大丈夫」

それでも凜はそのまま歩きだして、遼太の視界から消えた。

とりあえず、帰ってくるまで話は聞けそうにないので、最低限の情報は集めておこうと周囲を見渡した。ダンボール箱。そして、遼太が寝ていたと思われる白いベッド。改めてみると、大分黄ばんでいるようだ。「中世武器研究会」と称していたが、どうも研究といたった重重しくロマンを感じさせる活動をしている気配がない。ただの空き部屋に名前をつけただけの様に見える。武器のレプリカや模造品は勿論のこと、レポートや資料でさえ見当たらない。遼太はひどく陰気臭いところに迷い込んでしまったようだ。

「お待たせ」

やがて凜が戻ってきた。その手には二つのコーヒーカップ。どちらからも新鮮な湯気が立っている。

凜はその一つを案の定、遼太の目の前に置いた。そして、自分も適当なパイプ椅子をひいて座り、目の前にカップを置いた。

「あ、ありがとう」

欲しいとは言っていないが、一応貰ったので礼を言っておく。

「や、ん、ついでだから。ついで」

すると、凜は慌てたように視線を逸らして言った。

「ん、ど、どうも」

そんな凜の様子を訝りながらも、カップをとると、口に持っていた。そして、その茶色い液体を口に含もうとした、その瞬間。

「こんにちは」

扉が開いて、長身の女子生徒が入ってきた。落ち着いた顔立ちに、活発に揺れる髪。すましていれば、どこかのお姉さまといった印象である。制服を一切崩さずに纏っているのに、寧ろこの方が様になっっていた。制服の名札は二年生であることを示している。遼太から見れば、上級生である。

「あ、少佐。こんにちは」

凜はそんな彼女を見て、片手を挙げて軽く挨拶をした。遼太はどつすればいいか一瞬悩んだ後、軽く会釈をしておいた。

そんな彼を見て、少佐と呼ばれた少女は目を細めて微笑んだ。初めてのこと挑戦し、失敗した年の離れた弟を見るような暖かい微笑み。

「あら、あなたが新入部員？」

「へ？」

遼太は凜を見た。そんなこと微塵にも予想していなかったので、驚いたらしい。

「まだ説明してないんです。皆揃ってから説明した方が早いかなと思っただし、わたしだけじゃそんな手続きできないし……」

凜が慌てたように補足すると、少佐は不敵に微笑んだ。

「ふふ、そういうこと。それじゃあもう少し待ちましょうか」

少佐はそう言うと、パイプ椅子を引いてすっと座った。

「つて、え、え？入部って何？そんなの聞いてな」

「あらん。まだそのことも教えてあげてなかったの？」

遼太の困惑の矢に少佐がすぐさま反応し、凜の方を見た。当事者に仕立て上げられてしまった凜は、きよとんとした表情で、遼太に向けてそっけなく言い放つ。

「え……入部できないの？」

「いやいやいや、そういうわけじゃなくて……」

「それじゃいいじゃん」

「……いや、そういうわけでもなくて……」

「ははん。あなたは説明を聞いてから入部の是非を決めるってことねん」

「そ、そうです」

少佐の推測に遼太が頷く。すると、凜は機嫌を損ねたか、むつとりと口を結んだ。

「ん、それじゃあ先に言ってくれば良かったじゃん」

「え……あ……ご、ごめん」

明らかに理不尽な言い分であるが、ここで食い下がることができない遼太である。

少佐はその光景を見てから（顛末を見届けてから）、面白げに舌で唇を舐めると、口を開いた。

「一応自己紹介はしとくわねん。私は二年の高砂^{たかすなごえ}佐慧。既知だと思うけど、皆には少佐って呼ばれてるの。あなたも呼んでもいいわよん」

「え、あ、それは、ど、どうも……」

初対面の人間に極端に弱い遼太は、おずおずと下品に返事を返す。外見の割には、口調がラフなので、そのギャップが余計に遼太のその弱点を際立たせているようだ。情けない。

「あ、僕は佐貫遼太って言います」

「さぬき？なんだかうどんみたいな名前ねん」

「……はあ……」

固有名詞に妙な文句をつけられて、かといって変更することもままならないので、どうすることもできずにただ頷くしかすべが無い。佐慧はそれだけで遼太との会話を終えると、くるりと凜の方を向いた。

「祥ちゃんは？」

「病院。昨日ドジっちゃったんです」

「へえ……じゃあ大分大きかったのねん。エサも獲物も」

「獲物もかなり大きかったですけど、エサの大逆襲がありましたよ」
「あらあら、それは物騒ねん」

のほほんと会話を続ける二人。一応、遼太はその応酬の当事者なのだが、入り込む隙が無い。元来遼太は話に滑り込むのが得意ではないのだ。

「となると、あとは部長さんだけねん」
「ですね」

佐慧と凜がそう頷きあうのを見て、遼太は内心意外の意を込めた感嘆を漏らす。こういう厳粛（ガッツとも言う）な雰囲気からみて、もうちよつと部員数が多いと思っただが、意外とそうでもないらしい。「この生徒じゃないのに、よく部長やってられますよね」

凜が残ったコーヒを飲み干してから言ったのを聞いて、遼太は目を丸くした。

「へ？　ここつて正式な部活なんですか？」

「あら失礼ねん。非公式の部活は執行部にすぐ潰されちゃうから、こうして部室が与えられてる部活研究会同好会は全部公式なのよん？」

「そ、そうなんですか……」

「そんなに執行部が厳しいのに、どうしてこの部の部長様は無事なんでしょうかね」

凜が分からないというように、肩を少し竦めた。遼太は彼女が言った言葉に、不純が生じているように思えたが、誰も咎めない（といても、ここに居るのは三人だけだから無理も無い）ので、看過することにした。

「ところで佐貫君？」

「は、はいっ」

唐突に佐慧に話し掛けられて、ぼけつとしていた遼太は上ずった声で反応した。

「あなたはこの部活に入りたいと思う？　そういう説明とかそういう抜きで」

「え……………」

遼太は佐慧に直視されて、全身の血液が逆流したかのように動けなくなり、体が火照ってくるのを感じた。この現象の原因の全てが、遼太の人見知りだというわけではないということは神のみぞ知る。

「……………即答はしま……………せん」

「あらん。拒絶してもいいのよん？」

「そ、そんな……………」

その時、扉がとんでもない勢いで開いた。蝶番が悲鳴をあげ、扉が空気を引き裂き反る様に弧を描き、そのまま壁とドッキング。爆音を上げて、両者はびったりとくっついた。

遼太は驚愕を通り越して呆然としたのち、その扉に虐待を加えた人物がいるべき場所、との入り口に目をやった。そして、尚驚愕を深める。

「待たせた」

はつきり通る男の声。その声の伝達媒体となる口は、見事に黒いプラスチックの板によって隠されていた。頭には黒のフルフェイスヘルメット。体には昨晚凜達が着ていたのと同じ黒コート。そして、そのコートのしたにもコートらしきものが見える。ズボンも無論黒である。靴は高級そうな艶を見せる革の黒靴。手には大きなアタッシュケース。そして、手袋。無論、両方とも黒色。よく分からないが、街中に居たら『馬鹿』を通り越して『変質者』になりかねない、そんな人物である。

「ぶ、部長様っ！」

遼太は椅子ごとひっくり返りそうになった。そんな素っ頓狂な声を挙げたのは凜だった。おもむろに椅子から立ち上がると、矢の様な速さでそんな変態臭い彼の下へと飛んでいくと、すぐさま跪く。

「お待ちしておりました」

遼太は呆然として、そんな凜を見ている。さつきから、呆然とする要素が多すぎだ。

「む、凜か。今日は土産があるぞ」

流石にこの言動はどうかと思ったのか、佐慧が注釈を入れた。だが、彼女は気休め程度にしかならないと自覚はしていたようだ。

「何を言うか！今の世の中そんな古代の常識は通用しないのだ！男が男を愛して愛でて何が悪い！私は決めたぞ！貴君はたった今からこの部員だ！さあ、さつさとここに必要事項を記入して生徒会に提出するのだ！式はその後で考えよう！」

「え、え、え！ちょっと待ってください！」

部長はどこから取り出したのか入部用紙を取り出し、遼太の前に叩きつける。遼太の意思は全く考慮されていない。それどころか、この部長、最後の方にとんでもないことを口走っている。

「どうした、さあ早く書け！」

ぐいっとその黒い手袋に包まれた左人差し指で鼻を押された。遼太はなすがままに転がっている鉛筆を取り、半ば気圧されるようにすらすらと必要事項を記入していく。

というのは、客観的な観測からの行動である。

実際のところ、遼太にそんな意思は全く無く、右腕が勝手に動いているのだ。

「ちょ……」

「そうだ、これでいいだろう。では少佐、これを提出してきてくれ」「了解」

佐慧はその紙を受け取ると、パイプ椅子を蹴って部長が開けっ放しにした扉から出て行ってしまった。

だが遼太にそんなことを確認している暇は無かった。ただ呆然として、右腕を見下ろしている。

「主がこの集団に加わることは必須。以上の判断から以上の行動を執行」

「必須……って？」

「勘」

遼太は神に媚びるような視線を天井に向けた。無情な茶色をした木の天上がすぐ上にあるだけだったが。

「ただいま戻りましたー」

と、遼太が杞憂に浸っている間もなく、すぐに佐慧が帰ってきた。律儀に開け放たれた扉を閉めている。それを見て、部長は再び遼太に指先を向けた。

「よし、これからは常に一身体！これから頑張っていくぞ同志！」
「は、はあ……」

もはや従うほかあるまい、と遼太は諦め、素直に頷いておく。そんな遼太を見て、佐慧はニコニコするだけ。

「よし、それでは式を何時にするか」

「いつ！？ 式！？」

「早めにあさつてが良いか？」

「む、む、無理です！第一まだ年齢が……」

「何を言うか！愛は法律という脆い壁さえも破壊する力を持つのだぞ！？」

「そこまで発展するような愛を育んだ記憶はありません！というか、会ってまだ十分も経ってないじゃないですか！」

「そうか、まだ私の魅力に気づかないか。そうか、なら、やるか？」

「なななな、何をですか！」

そんなしような言葉のやりとりを、佐慧はニコニコ微笑みながら、眺めている。

「ふふん……凜ちゃんと同じで可愛いわねん……」

やがて、遼太と部長の応酬は終焉を迎える。

「わ、分かりました……そ、それで勘弁してください……」

「うむ、では貴君が卒業するまでの後二年間、私に忠誠を誓うな？」

「誓います誓います、誓います……」

「よし、物分りの良い奴だ」

そんな彼らを見て、佐慧は感嘆の息をついた。

「これで三人目……本当に部長さん巧いんだから」

部長と会って十分。遼太は既に『宣誓書』なるものに、サインを書き羽目となった。凜の二の舞になってしまうのか、と遼太は戦慄

を覚えざるを得なかったが、とりあえず妙な真似をされるよりは数倍マシなので、二年間我慢することにしたのだった。

「よし……これで貴君は六代目一般研究員の称号を得たわけだな」
その宣誓書を胸ポケットに仕舞いながら、部長は満足げに頷く。
遼太からしてみれば、その生けるヘルメットはただの『変なもの』
にしか見えない。なんで自分はこんなのに宣誓してしまったのだろ
うか……そんな悔恨が恨めしく脳内をループする。

「あらん？ そういえば凜ちゃんが居ないわねん」

そこで、佐慧が顎に人差し指をあてて、きよるきよると室内を見
渡した。それに釣られて、遼太もその狭いとも広いともいえない部
室内を見回してみたが、確かに凜の姿は無かった。

「どこに行ったのかしらねん……」

と、佐慧が呟いた刹那、部室の扉がゆっくりと軋みをあげて開い
た。

遼太は無意識にそちらに目をやり 瞳目した。

そこには、恥ずかしそうに目を俯かせたメイド服姿の凜が居た。
黒い生地にフリルだのリボンだのが適所に鏤められて、その上に白
いエプロンが覆い被さっており、下半身にはポリウレームのあるスカ
ートが鎮座している。制服的な実用性ではなく、コスプレシヨップ
で売っていきそうな見栄を重視した服であった。

それは遼太が瞳目するに足りるほど可愛らしかった。遼太は
自分の動悸が早まるのを抑えることが出来ない。

「主」

そんな時に、朴念仁な義手が語りかけてきた。遼太は視線を逃が
すように、そんな義手に目をやる。

「主が懐いた感情……『萌』とは何を定義している？」

遼太は椅子ごとひっくり返った。

宇宙概念

「さて……と。御託が済んだところで本題に入るとするか」

早くも従者と化した凜に対する初命令ということで、注いできてもらったコーヒーをスプーンでかき回しながら、部長がやれやれどっこいしょといった感じでパイプ椅子に腰掛けた。そして、申し訳なさげに凜がその傍らに立つ。

今までのアレらは全て御託だったのか、と遼太は両掌と脛を地面につけたい気分になる。しかも、遼太を部活に勧誘（拉致）するのが本題ではないらしい。もはや戻れないところまで来てしまったらしい……と、何度思ったか分からぬ言葉を再三反芻させ、戦慄する。佐慧の表情も緩やかなままだが、先ほどと比べれば大分引き締まっている。凜は恥ずかしそうな顔をしつつ、内心では嬉しがっているのを隠せていない。

部長はそのフルフェイスを遼太に向けると、今度は右腕をしながらせてビシッと人差し指で遼太の右腕を指した。

「まずはその義手とやらを見せてもらおうか」

「は、はあ……」

他人に晒しても構わないと言っていたから、特に差し支えは無いだろうと、遼太はおずおずと頷きつつ、右腕の裾をまくろうと左腕を動かした。

だが、そこでかかる部長の淡白な声。

「おっと、仮にでも貴君は新入部員だ。いきなりの重労働は酷というものだ。凜君、頼んだ」

「え……は、はい」

どう考えても重労働ではないし、そこまで言うなら自分がやれば、と突っ込みはできるものの、どうやらこの部長、メイドと化した凜をやたら遣いたがっているようだ。新しい消しゴムを買った子供の思考とよく似ている。

凜は遼太のもとまで歩いていくと、義手を晒さんとしてその袖に手を伸ばした。

「あ、だ、大丈夫だって……」

だが遼太はそのまま従っていたら大事な何か欠落しそうなので、慌てて自分も左腕の動作を再開させる。

が、凜はそんな遼太の左手首をパシッと掴んだ。

「……………？」

遼太は再三呆然として、凜を見上げた。

「へ、平気だから……ね？」

凜は羞恥に伴った赤い顔をしているわけでもなく、意外といつもとと同じ表情で、遼太にそう言った。そして、遼太の右腕の袖を剥がしにかかった。間近に凜の顔が迫り、遼太は思わず視線を逸らす。新品の服なのか、仄かな香りが鼻腔をくすぐる。

「よし、凜君ご苦労」

遼太の義手が完全にその姿を露見させると、部長は満足げにそう言った。健気に作業に徹する凜をどうという視線で見ているかは定かではないが、世間が認める視線で見えていなかったのは事実である。

「さて、名前を聞かせてもらおう」

部長は姿勢を一切変えずに、義手を凝視し、言った。遼太は義手がどんな反応をするか、冷や冷やししながら黒い我が腕を眺めている。やがて、何かの起動音の様な音がしたのち、声が聞こえてきた。

「発声許可が必要」

「……………ほう。これは精密にできているな。佐貫君、彼の発言許可を与える」

「え……………？ ……はあ……………」

遼太は妙な突っ掛かりを覚えたが、確定できなかったものでとりあえず追求はせずに義手に語りかけることにした。

「きよ、許可を……………与える？」

「了解」

義手が自立した。遼太の神経が一時的に切断されたのか、右腕の

感覚が無くなった。

「私の固有名詞の存在は否定されている。呼称は『R039』と銘される記憶在り。主に『恒久の義手』と称されていた」

部長はそれを聞くと、バットと立ち上がり、再び遼太の鼻面を左人差し指で指した。どうやら、人を指で指す癖があるらしい。

「やはりな！貴君は尊大な人間だということが、今この場で証明された」

「え、えーと……それは、どういう意味で……？」

遼太がおずおずと訊ねると、部長はすくとパイプ椅子に腰を戻した。そして、酷く真面目な声で接いだ。

「話せば長くなる。この集まりがある意味や、それに関連して世界の存在についても説明せねばならん。それを全て享受することができるか？」

いきなり畏まった口調になった部長に慄きつつも、遼太は首を縦に振った。すると、部長はヘルメットを僅かに下に傾けた。

「そんな野暮な論理を聞きたくないとならば、飛ばせばいい。それだけだ」

「？」

「なんでもない。あちらの話だ」

「は、はあ……」

「さて、貴君は宇宙の外に言ったことはあるか？」

「宇宙の外？」

「うむ。今も飽きずに膨張を続ける我々の祖となる空間の外部だ。言ったことはあるか？」

「あ、あるわけないじゃないですか」

遼太が当然の様にそう言ったのを聞いて、部長は面白そうに持っていたスプーンを指の上で回転させた後、コーヒーに突っ込むと、そのカップを傍に佇む凜に渡した。凜はそれを見て、疑問符を浮かべたが、すぐに慌ててそのカップを受け取った。ヘルメットが邪魔で飲めないから、片付ける、ということなのだろうか。

遼太がそんな風に考えていたが、部長はすぐに何もなかったかのように遼太の方に向き直った。

「確かに我々の意識が存続するうち、と限定してしまえば、基本的に宇宙の外に飛び出すのは論理的に不可能だ。だが、そんな意識が削ぎ取られてしまった場合　一番身近なのは睡眠中だが、その時意識は何処に飛ぶ？　よく夢の中だのと揶揄されるが、それは違う。現実逃避もいいところだ」

「……はあ……」

いまいち言いたいことが汲み取れないので、相槌も適当についてしまう。そんな遼太を見て、部長は首を傾げた。

「答えは至極単純だ。意識がないのだから、『無い』のだよ。意識が自分の物ではなくなる。それはどういうことか……私はこう推察する。宇宙の外に行っているとな」

「はあ……とつても……夢がありますね……」

「分かるか。それなら夢の中の自分が思い通りに動かないのも納得がいくであろう。その意識は己のものではないのだからな」

「……なるほど……」

「だが、違う。宇宙は宇宙で独立していて、外などない。宇宙は宇宙でそれ以外の何物でもないのだ」

「……はあ……」

「つまり、どういうことか分かるか？」

「……全く」

部長は深々と息をついた。溜息に聞こえるが、これはただの息継ぎである。

「貴君は昨日の晩、『在らぬもの』を見たはずだ。奴らは様々な形容をしているが、大抵はああいったグロテスクな容貌をしている奴が多い。その次が二足歩行だ。我々は通常奴らのことを>レッド<と呼んでいる。『赤い眼』が奴らが共通して持っているものだからだ。凜君は君の右腕を>レッド<と勘違いして襲ったらしいが」

凜は顔を赤らめつつ拗ねたように視線を逸らした。彼女は大分あ

のことを気にしているようだ。

「まあ、それは追々説明するとする。さて、その>レッド<とやらが、何処から発生し、何処に居住しているのか　奴らを見た瞬間、私は確信したのだよ。宇宙はもう一つある、とな」

「……へ？」

「我々が持つ能力は全て、宇宙の因果法則を悠に捻じ曲げるものだ。私のものは勿論、少佐や凜君、祥吾や貴君のもの、全てだ。凜君を例にあげると、肉眼で元素を見ることなど序の口、そのまま元素の構成を反応無しで行い、拳句の果てには原子をまた別の原子に変えるという恐ろしい能力を持った、居てはならない存在なのだ。見たと思うが、彼女の持つ剣が巨大化したのは、酸素原子を組替え鉄原子とし、それを反応無しに剣と融合させたからだ　それに君は見ただろう。その義手の能力を。強大な力を持つものに対抗するには、とにかく等しいだけの力が必要だ。それと同じで、在らぬものに対抗するのにも、在らぬもので対抗するしかないのだ。我々はその『在らぬもの』を与えられ、『在らぬもの』を討伐する存在。均衡を保つために創造されたのだ。この部活はそういった人間たちの集まり。分かったな？」

「……………」

途中から何を言っているのかさっぱり分からなくなっていたため、反応に困った遼太は、部屋の隅に居る佐慧に視線を向けた。佐慧はすぐに遼太の視線に気づくと、ひっくり返った亀を見るように微笑んだ。

「要約すると、『この部活は特殊な能力を持った人間たちの集い』ってことねん」

「……まあ、そういうことだ。だが、その『在らぬもの』と定義づけられるのは、我々が存在する宇宙を基盤としての考え方だ。ここ>レッド<の疑問の回収ができる。奴らはこの宇宙に存在するものではない。宇宙ではない、宇宙の外側から着た生命体だということだ」

「え……？ でも宇宙の外など無いって……」

「ここまでスケールの大きい話になると、外側内側のボーダーラインはただの呼び名になってしまうのだよ。宇宙は独立していて、それが一つの単位だ。我々は宇宙の特殊な条例によって、この宇宙から出ることは出来ない。地球上を地平に沿って走りつづけるのと同じように、永遠に同じ場所を回りつづけるだけだ。それは分かるだろう。それなら、我々に外側は存在しない。外から南京錠の掛かった体育倉庫に閉じ込められているようなものなのだ」

「でも、その喩えを流用するのであれば、外からの新人は可能。ということねん」

そこで佐慧が、口を挟んだ。その言葉に、部長は頷く。

「外から南京錠を外すことは動作なくできることだからな。だから、外からの新参は介入できる。よって、我々にとって宇宙に外側など存在しないが、外に居るものにとっては宇宙の外側、というわけだ」

「え……？ じゃあ、結果的に外はあるってことですか……？」

「これは難しい話なのだよ。この話題を学会に提出したら、学者が何百年議論するか分かったものではない、そんな話なのだ。まあ、それは外からの訪問者が居るといふ仮定の話……なのだが……>レツド<は察する通り、宇宙の外側からの来訪者だ」

「……………」

「ええと……要するに、>レツド<は宇宙人から見た、異界人っていうわけねん」

目を点にして、思考を巡らせる遼太に、佐慧が優しく補足を加える。遼太が納得したのを見て、部長は問い掛けるように言った。

「外から南京錠の掛かった体育倉庫といったが、もし新参者がその南京錠を外して宇宙に新入してきたとしよう。そしたら、その南京錠はどうなる？」

「え……でて来れないのであれば、普通に開けっ放しじゃ……」

「それが今、我々がここに存在する理由なのだ。外から何物かが宇宙へ侵入した。それによって、外の『在らぬもの』が流れ込んでき

た。それだけの話だ。だが、体育倉庫の喩えだけでは説明のつかない点もあるのだ。宇宙とその外とは、一つパイプで繋がっていてどこか一つに港のようなところがある訳ではない。宇宙と外は常に密着しているのだ。かといつても、全ての場所に密着しているというわけにも行かず、勿論一部が扉のように外と一方通行だが繋がっている。そして、その扉がこの涼属高校の校庭に存在するのだ」

「ええと……こればかりは三次元を使つての説明は難しいわねん。とりあえず、その体育倉庫に入った瞬間に、時限操作でワープさせられちゃつて思えば良いかしらん」

「とやまあ、これでこの部活の存在意義とその活動内容に関して概ね理解できただろうか」

部長はそこで、コーヒーマシンのカップを机に置いた。中身は空になっている。

「……粗方は……」

遼太はコーヒーマシンの消失を訝りながら、曖昧に頷いた。とりあえず、人間の理解の域を越える存在を享受せよ、ということなのであろう。それならとづくに覚悟はできているので、今更である。

「そこで、この義手が介入してくる。そして、更にややこしいことになってくるのであろうが……私は説明に飽きたから、後は任せる」

「え……私ですか？」

と、いきなりそこで部長が役を放棄したので、佐慧が驚いたようにそう反応した。だが、部長はそんな佐慧を見て、ヘルメットを否定の意を込めて揺らした。そして、緩慢な動きで人差し指を伸ばした。遼太の義手に向けて。

「039さんに、だ」

「……承知」

驚く遼太をよそに、義手が応えた。

「我の存在は、そなたらの比喻する閉鎖空間を閉鎖状態に陥らせる鍵に値する。宇宙を巡視す門番と謂えど差し支えない」

「うーん……つまり、体育倉庫の南京錠を開くことができる唯一の

鍵がこの《義手》さんってことねん」

相変わらず佐慧は翻訳係である。よくそんな簡単に理解できると遼太は感心する。

「我が媒体とす、空間の狭間の閉塞の解禁は人間の単位で二億年遡行した時空で屹立。私の核はその反動で宇宙を彷徨、結果今に至る」

「二億年前に、その鍵が外されて宇宙が解禁されたんだけど、この義手さんはその影響で宇宙に流れ出ちゃったんだって。そして、その流れに従って、気がついたら今こうして私達とお話をしている、というわけねん」

「ふむ……」

部長は体を反らしパイプ椅子を軋ませた。

「では、宇宙空間に放りだされた後の記憶は今まで飛んでいるということか。その義手なら知っていると思っただが……これは大分厄介そうだな」

「……何がですか？」

部長が重重しく呟くのを見て、遼太は思わず訊ねていた。そんな遼太を部長は一瞥する。

「……貴君は昨日『在らぬもの』襲われた。それは理解できるな？ 遼太は頷く。

「しかし、何故奴らは貴君を狙ったと思う？ 鍵を取り戻そうとしてか？ 貴君も察する通り、『在らぬもの』はその名の通り、宇宙では非常識の存在所以、宇宙を乗っ取ることが可能なのだ。だが、奴らはそれをしない。それだけの知能が発達していない、という説明もできるが、それならば宇宙への鍵を開けることなど不可能なのだよ。だとしたら、何ゆえか？ 答えは簡単だ。

『在らぬもの』には意思が存在する。そして、『在らぬもの』には組織が存在する。さすれば、全ての事柄について説明が容易にく。昨日の件も、凜君や祥吾が弱かったといわけではない。我々が甘くみていたのだ。そうだと貴君も思うであろう？ いつも我々が駆逐しているのは、もう一回り小さく弱く脆い奴らだったのだが……

…君を捕らえるために、格段に大きく強くタフな輩を寄越してきた。この結果から、私は宇宙外には、『在らぬもの』の組織があると確信したのだ！」

「ええと、標的によって、送り込む刺客の格を変えた、ということから、部長さんは組織と知的生命体の存在を確信したのねん」

眠ってしまいそうなほど滑らかな髪を揺らし、佐慧が恒例の様に翻訳する。

「そして、そんな強大な刺客を送り込んできたということは 0
39氏はよほどの重要人物なのであるうか？」

「 不明。記憶無し」

義手が無愛想に答えた。確かに、昨晚寝る前もそんなことを言っていたような気がする。

「ふむ……だがまあ、いずれ答えは出るであろう」

部長はそう呟いてから、もう終りという意味なのか、立ち上がるうと手を机につけた。

「ちょ、ちよつと待つてくださいっ」

遼太は咄嗟に、そんな部長を呼び止めた。ほとんど脊髓反射といつてもいい。気がついたら、遼太の方が先に立ち上がり、部長の風変わりな容貌を凝視していた。

「何かね。サインなら後でマネージャーを通じて」

「なんでこの義手がエサになると知ってたんですか？」

義手は自分がどのような存在なのかを知らない。そして、部長は義手に対する寛大な拉致体制が『在らぬもの』の組織の中に敷かれているのは確かだが、その理由は分からない、といった。

ならば、どうしてこの義手が『亜種』であるのであれば、大きな獲物が食いついてくると予測できたのだろうか。

「ふん……？何のことだ……？」

しかし、部長の反応は予想外のものだった。隠す様子も無く、露骨に疑問視を浮かべる。

「え……だって……」

「あの、それはわたしが『これ』から聞いたんだですけど……」
予想外の反応に遼太がおどおどしていると、今まで話を聞いているだけだった凜が口を開いた。遼太は少し抵抗を覚えながらも、凜の方を向くと、『これ』と称されたそれが手に握られていた。

凜の片腕。あの大剣へと変貌を遂げた、黒いナイフが。

「ふむ。だそうだ。それならばいいではないか。疑問は解決だ。良かったな。では私は帰る。後の処理は任せた。今日は十時半からだ」それを聞くや否や、部長は蚊一匹入り込ませる余地を与えずに投げやりな言葉を羅列し、そさくさと立ち上がると、さっさと扉へ向かい始めた。

そして、そのままドアノブに手を伸ばしかけ 振り返った。

「039氏よ」

「何用」

「記号で呼ぶのは面倒だから、『コウちゃん』と呼んでも良いか？」

「愚案」

「分かった。明日からそうさせてもらう。では、諸君、さらばだ」
佐慧は面白そうに目を細めた。

宇宙概念（後書き）

はい、シリアスな癖して、意味のワカラン造語も含まれるような言葉の羅列が延々と続きました。お疲れ様です。どちらかというと、後書きのほうがいいかな、というわけで、こちらに書かせていただきますねん。

ここは設定の説明ではありますが、メモをとりきれなかったので突発的な思いつきで説明した節がほとんどです。そのため、部長の言っていることが支離滅裂になっていますが、彼の性格として考えていたできれば本望でございます。

まあ、戦闘だけを楽しみたいという方は、中で部長が言った通りに飛ばしてくださいって結構ですので……はい。ほとんど関与しませんからね。終盤でするかもしれませんが、プロット上ではその様な記述は一切ございません。

ええ、長くなりましたが、今回は例のアレは省略します。

ただ、感想はいただけると本当に嬉しいです。今回の様に加速します。二日で書き上げるなんて、どうしちゃったんでしょうかね……宇宙の神秘です。

というわけで、次回もお楽しみに……

先客万来

「ただいま」

すっかり馴染んでしまったステンレス製のドアを開け、住み慣れた我が家の匂いを嗅ぎながら遼太は帰宅した。

結局のところ、ただ単に連行され、その先で要領の得ない話を聞かされて、自分もその良く分からない眷族の仲間だ、ということを知り、部長が言いたかったこともよく分からないし、本質的な問題がまだしこりとなって残っていた。

この義手を持った僕はどうすれば？ という、素朴であるが、人生を大きく揺るがしかねない疑問。もしかしたら、本当に平穩な日常は帰ってこないかもしれない。そうになると、途端に悔やみが胸の中で彷徨してくるのだ。

遼太は溜息をついて、玄関先に座り込むと、靴を丁寧に脱ぎにかかると、昨日の戦闘で大分泥まみれになってしまっていた。>レッド<とかいう奴の体液が付着していなかったのは、幸運といえよう。そういえば、>レッド<に関する詳細も教えてもらっていない。あの部長、名前も聞いていないし、信用できるのだろうか。少なくとも多少でいいから人の話を聞ける人間であって欲しいものである。

「りょーくん、お帰り〜」

遼太が振り返ると、従妹の空が台所から顔を出していた。制服を着替えるのが億劫だったのか、制服の上からエプロンを掛けて手にはお玉という、何とも王道まっしぐらな姿である。遼太はそんなことを望んだりもしないが。

遼太は靴を脱ぎ終えて立ち上がると、空がツインテールに結われた髪を揺らしながら、歩み寄ってきた。モデルだったという母親の特徴を引き継いだ、清楚な顔立ちにそのぐうを言わせぬ微笑、正に美少女そのものである。よくこのことを知っている友人に溜息をつかれる。

「今日は遅かったねえ。何かあったの？」

空は遼太の鞆を回収しながら、そう訊ねてきた。別に亭主関白を気取っている訳ではなく、勝手にしてくるだけであるのは理解してもらいたい。

「いや、その、部活があつて……」

「部活？ 遂に入ったの！？ 何部？」

遼太のうじうじした返答を聞くや否や、空は宝くじに当選したかのように目を光らせて、詰め寄ってきた。それはもう、鼻が接触しそうなほど。

「え、や、あ、えと……」

遼太は失言を悔やみながら、どう誤魔化すか素早く思考を巡らせる。直球に『中世武器研究会に入った』なんて言つても、その後が困る。公に提出すべき、活動内容が見当たらないからである。まさか、中世の武器を担いで存在しない物を狩る部活だ、なんていえるはずも無いし、言つたとしてもすぐに精神科に連れていかれそうである。

とはいえ、蒔いてしまった種はどうであれ成長してしまうのである。どうとあれ、何かしら部活名を挙げなければ……

その時。

「天文研究会」

口が勝手に動いた。いや、正確に言うと喉が勝手に振動した、といつた方がいい。腹話術の様に、遼太の意思とは関係なく、声が発せられたのだ。

「主に宇宙、惑星、小惑星、彗星、恒星とかその辺の観察をして、色々研究する会 に入ったんだ」

ふいに勝手に発せられた声が区切れたので、慌てて補整を加えた。「へえ……りょーくんそういうのに興味あつたっけ？」

空は何の屈託もなく納得したようで、意外そうに顔を緩めるとそう言つて来た。

「う、うん……誘われて、面白そうだなあ……って」

遼太は安堵しながら、そう答えた。実のところ、涼属高校に天文研究会など存在しないのだが、空とは高校が違うから分かるまい。調べるほど暇でもないだろう。

空は、涼属高校からそう遠くない　といっても、二十キロ程度離れている、眞夏高校に通っている。遼太の学力を遥かに凌駕する、進学校である。つくづく、遼太はこの従妹と自分が親族だということとを疑ってしまう。

「まあ、りょーくんがそういう趣味を持ってくれて良かった。休日も家に籠りっぱなしだもんね」

空は納得の笑みを全力で浮かべた。さりげなく、キツイことを言っているが、自覚は無いのであろう。殊更その辺が遼太にとって痛いところだ。

遼太は嘆息し、台所へ戻る空の背中を見やり、自分の部屋に戻るうとして　足を止めた。そして、顔を空の背中に戻して、口を開いた。

「そうだ、それ関係で今日の十時に出かけるから」

「ふえ？　そうなの？」

空が驚いたように振り向いた。遼太にもその気持ちはなんとなくわかる。

「うん……そういうことだから」

一応、嘘はついていない、と開き直りながら、遼太は自分の部屋に向かった。

「十時半集合って言ったって、どこに集合なんだよ……」

遼太は腕時計でしきりに時間を確認しながら、闇に染まった夜道を奔走していた。いつもの通学路も光をなくしてしまえば、大分見違える。下手すると道に迷いそうである。

先ほどの天文学云々の話は全て義手のでっち上げであった。危機（大袈裟すぎる）を察した義手が、一時的に遼太の器官を乗っ取ったとか何とか。結果からみれば、遼太は救われたのであるが、な

んとなく肉親を騙したようで後味が悪い。いつか洗いざらい話をする時が来るだろう。別にこの義手は存在を晒されても構わないといっていた。

「謁見を許可するのは私の存在に限定される。彼らの存在を晒すに至れば、我とて責任を被れしは不可能」

遼太の心中を見透かして、義手がそんなことを言ってきたが、遼太に理解できる範疇を超えている。今までよく頷いてこれた、と感心するばかりである。翻訳者の存在が影響しているのだろうか。

とりあえず、発生源である学校に赴く事にした。居なかつたら居なかつたでその時考えればいい。心の中では十中八九学校だと思っているが。

やがて、遼太は高校が見える辺りまでやってきた。夜中に聳え立つ校舎。あの時見たままである。遼太は知らぬ間に慄きを覚える。

あの時は校舎が壊れていた筈なのだが……。

校門前まで行くと、広大な校庭の中ほどに人影が見えた。焚き火でも焚いているのか、その辺りが黄色く輝いている。

遼太は校門を乗り越えると、その集りに走っていった。考えが間違っていないかつたことに安堵しながら。

そこには三人の人影が佇んでいた。祥吾が居ないことを考えれば、凜と佐慧と部長で辻褄が合う。

遼太は声が届き且つ自分の姿を確認できると思われる位置まで行き、声を掛けようとして 違和感を覚えた。

そこに居る全員違いが見られないのだ。服装、身長、拳動……。

遼太は慌てて走る足を止めた。地面と靴底の摩擦によって、耳障りな音が響く。

その音に反応したのか、三人のうちの一人が振り返った。頭に灰色のヘルメット（フルフェイスでない）をかぶり、作業服のようなものを着ている、壮年の男である。だが、目が光っていた。赤色にマズい。これはマジでマズイ……！

遼太は自らの六感を信じ、咄嗟に慣性に従って滑っていた靴を無

理に反転させて踵を返すと、一瞬迷ってから校舎の方へ駆け出した。以前のあの見るからに分かる怪物は、あたりまえの様に校外へ進出していた。怪物にしる怪物でないにしる、外に進出するのは免れない。

一応の可能性として、彼らはただの人間であつたのかもしれない。目が赤く光っていたのは錯覚だったのかもしれない。振り返つたのだって、人間として当たり前前の行動である。遼太が背を向けたのは全くの勘だったのだ。

だが、どことないこの違和感は確実に彼らが人間でないことを示唆していた。この空気　昨日、あの怪物が現れたのと同じ空気が。銃声が鳴った。遼太からそうはなれない地面がパンっという鋭い音と共に砂を撒き散らした。

「マ、マジかよ……ッ」

銃を携帯しているらしい。この時点で既におかしい。日本で一般人は銃を持っているはずが無いし、万が一持っていたとしても、否応無しに人に向けて発砲する筈が無い。

かといって、それでも普通の人間であるという可能性は完全に否定できない。したがって、このまま義手を発動させることも危険だ。とりあえず、遼太は開いているかどうか分からないが、校舎に避難することに決めた。いや、開いてなくとも窓から飛び込んでやる。そうでなければ

銃声が鳴る頻度が格段に上がった。恐らくあの二人も加勢したのである。足元の砂が悲鳴を上げて、砂が舞い上がる。

足元を狙っているということは、その対象の動きを封じ込めようとしているのだろうか。もしこのまま足に命中し脚が使い物にならなくなり、捕えた後はどうするのだろうか。

そんな風に思ったとき、義手が唸った。

「私の確保」

「あ、そうか……」

どういふ因果かは知らないが、>レッド<と呼ばれる生物達は、

『鍵』であるこの義手を狙っているとのことだった。凜から詳細は聞けなかったが。あのナイフもどきもこの義手と同じように人語を話すのだろうか？

だとしたら、あの男達は>レッド<なのだろうか。だとしたら、今すぐここで義手を発動させて。

「主」

「う、うん？」

ピュンツと足元が弾ける。この弾幕の中、悠長に話などしている暇など無いはずなのだが、この義手にはあの弾が絶対に遼太に当たらないと思っているのだろうか。それとも、当たっても即治療するから平気だ、とも思っているのか。遼太も自分でよく当たっていないものだと思っている。

「『発動』とは何を定義している」

「へ？ や、あれ……なんていつたっけ……『^{トランス}一体化』だっけ。あれのこと」

「『^{トランス}一体化』の発動は主に多大な負担を掛けるゆえん、濫用は不可。七百二十三時間の休養猶予が必要。経過まで許容不能」

「な、ななひやく……？ ……痛ッ！」

余りピンとこない数字を挙げられて、遼太が戸惑った刹那、足に焼けるような痛みがはしった。遂に命中したらしい。そのまま夜の校庭に倒れこんだ。冷たい砂が頬を撫でる。

「ぐっ……」

唐突な痛み之苦悶しつつ、遼太は後ろを振り返った。三人の人影がこちらに向かって駆けてくるのが暗いなか見える。焚き火の様な光は消えていた。

遼太が絶望という字を思い浮かべた刹那、義手が唸りを挙げた。

「状況理解。我の定義する『発動』を推奨する」

その無機質な声には、焦燥が入り混じっているのがひしと感じられた。

「あ、ああ……、た、助かるなら頼む……」

「了解。発動後、主のマニユアル操作となる」
そう義手が応えた刹那、足の痛みが消え、体が軽くなったような感覚に襲われた。

突然の現象に遼太は目を白黒させつつも、痛みを消えたのをいいことに急いで立ち上がった。そして、背後の三人組の姿を確認すると、駆け出した。

「あ、あれ……？」

と、思ったのだが、妙に景色が流れるのが速い。足を撃たれる前とは格段に違うのが明瞭である。みるみるうちに、校舎が近づいてきたかと思ったら……気がつけば、すぐそこに校舎の窓があった。

そして、すぐに止まることもできず、そのまま窓に突っ込んだ。耳障りな甲高い音がすぐ近くで聞こえて、すぐに硬質な廊下に倒れこんだ。それでも尚、衝撃を殺しきれずに何回か回転する。

「身体能力の限界を凌駕させた。主の身体能力は常人を逸脱している」

どつりで、と遼太は思った。逸脱、という言葉の前に大きく、という修飾語が必要だと思うが。

膝について振り返ると、床には無残に破壊されたガラスの破片が散らばっており、窓枠は虚しく月明りを差し込ませているだけである。

遼太は立ち上がると、三人組が追ってこないか、確認した。居た。拳銃を片手に、えっちらおっちらこっちに走ってきている。

このまま交戦できるのではないか、と遼太は思ったが、その前に合流が先決だろう、という意見に押しつぶされて、そのまま部屋に向かうことにして、廊下を駆け出した。

「あらん……？」

佐慧は割れた窓を見つけると、訝しげに覗きこんだ。外側から割ったようで、ガラスの破片が廊下に飛び散っている。誰かがここから中に飛び込んだのであろうか。

佐慧は持参してきた懐中電灯を取り出すと、その周囲を照らした。砂が荒れている。そして、その校庭を構成する砂の上に、赤い斑点が浮き出ている。血痕だ。

「……………」
佐慧は何かを考えるように、その血痕を見つめていたが、やがて窓の枠に手をかけると、そこから両脚を滑り込ませ、鮮やかに校舎に侵入した。血痕はその先にも続いている。

懐中電灯で、その血痕を照らしそれを辿っていく。歩を進めるに連れ、その血痕の残っている間隔が長くなっていく。校舎を架ける廊下を渡りきった時には、血痕の間隔が二十メートルほどになり、ついには消え失せていた。

佐慧は腕時計を見た。アナログの針時計は、十時二十分を示していた。集合時間十分前である。

佐慧の今の服装は、『中世武器研究会』オリジナルである黒いコートを着た上から羽織っている。その黒コートの内側に、シヨルダーバックを掛けている。一応、活動するときの正装である。この黒コートには衝撃を最小限に留める効果があるのだ。

校舎を移り、廊下を見渡すしてみるものの、血痕の続きは見られず、ただ夜の静寂に満ちた幻想的な廊下があるだけである。常人ならば、恐怖を醸す光景かもしれないが、生憎と佐慧は慣れているので、特にこれといった感情は持たない。

教室を一つ一つ覗き込んでいくも、木と鉄で作られた机が安寧に羅列されているだけで、特に異変は見られない。

全ての教室を見回り終えたが、特に何も無かった。いつもと変わらぬ風景である。

佐慧は肩を竦めると、集合場所である校庭に向かおうとしてふいと目のある場所に留めた。

男子トイレ、女子トイレの扉が悄然として並んでいる。その男子トイレの開き戸。ドアノブがおかしかった。どうおかしいか、具体的に言えば、ひん曲がっている、へこんでる、変形している。な

どの様態として表記されるべきなのであるが……違和感が無い。そう、普通にこのノブを掴んだら、こなってしまった、というような。

佐慧は疑問に思ったと思ったら、すぐに行動に移した。

躊躇せずにそのノブを掴むと、ぐいと捻る。そのまま体重を乗せるようにして押し開いた。生まれて初めて男子トイレに入った瞬間である。

夜のトイレ 特に異性のトイレだけあって、殊更不気味である。白い便器が立ち並び、窓に近い位置に個室便所の衝立がある。

そんな異様な光景に慄きつつ、佐慧は懐中電灯を繰り、トイレ内を探索する。トイレトペーパーの一片が落ちていたり、小便器の上部に備え付けられている水を流すスイッチの様な物の蓋が外されていたり、と首を傾げるような要素が散乱している。

だが、ざつと見たところ変なのはそれだけで、特に違和感も見られなく、最後に個室を回ってみることにした。

個室を見ながら、佐慧が中学生の時、トイレに何が残っていた云々で騒いでいたのを思い出した。どうしてこうもあの年代は、小火に石油を注いで火を拡散させるのが好きなのであるか。佐慧には理解しがたかった。

そんなくだらないことを考えていたら、とうとう最後の個室に辿り付いた。これで何も無かったら、ただの見間違いということになる。

佐慧は自分の性分に苦笑いを浮かべつつ、最後の個室の扉を開いて

「きゃっ！」

尻餅をついた。そして、佐慧の上半身があった辺りに白い閃光が迸り、天井をドーム状に抉る。

佐慧は突然の出来事と尻餅の痛さに目を潤わせつつ、何が起こったのか突き止めようと、その個室に目をやって、殊更驚愕を深めた。そこには、右腕を佐慧に突きつけた遼太の姿があった。

「さ、佐貫君……！」

佐慧が声を挙げると、遼太はハツとしたような顔になって、右腕を下げた。佐慧の見間違えでなければ、その腕はなにやら銃身の様になっていたような気がしたが。

佐慧は立ち上がり、遼太を真っ直ぐに見やった。暗がりによく分からぬが、酷く驚いているようだ。

「え、えと、ここで」

何をしてるの？ と訊ねようとしたが、途中で口が動かなくなつた。別に怪しげな思念が働いたわけでもなく、ただ単に遼太が口を塞いだのだ。それもひどく慌てて。

「っ！？」

いつのまにか佐慧の後ろに回り込んで口を抑えた遼太は、小声で囁いてきた。

「し、静かにしてください……あいつらが着ちやいますから……」

あいつら？

佐慧が問うよりも早く、廊下からどたと誰かが走ってくるような音が聞こえてきた。佐慧の口を抑えている遼太の手が強張つた。

遼太はやがて観念したように手を離れた。佐慧は戸惑いつつも、遼太を見て訊ねる。

「ど、どうしたのん……？」

すると、遼太はおずおずと頭を掻いた。

「えと……すみません、待ち合わせ場所ってどこですか？」

先客万来（後書き）

どども、更新間隔がやむを得ずに伸びてしまいました、霞式でございます。

今回は戦闘二回目、というわけで、人間さんのご登場です。イメージとしては、バ オ4のガ ド的なあれかなあゝと思われませう。戦闘員ですかね。そっくりそのままって訳じゃないですが。

この戦闘シーンは、長く続いてこれを入れて三話、くらいですかねえ。悪いと次で終りかもしれませんが。

ええ、ここで恒例のあれですが、今回はすこーしばかり急ぎだったので、推敲が走行中の車のボンネットで焼いた餅の様に適当だったので、誤字脱字誤表現が存在するかと思われませう。万が一存在してしまったら……… お願いします。

逃走と困惑の二重線（前書き）

せ、セーフ！

逃走と困惑の二重線

「ま、待ち合わせ場所は言っただけ？」

「聞いてません」

「もう……部長さんもそっかしいんだから……」

佐慧は不満そうに呟きつつ、コートについた埃を払った。さつき転んだ拍子に付着したものである。清潔であるはずのトイレに埃があるとは異常な筈だが、二人ともそんな些事を気にしているほど悠長でなかった。

よく分からないが、現れても決して歓迎できないような客がこちらに向かっている様であるから。

「え〜っと……、とりあえず、今はあいつらから逃げる必要があるみたいなんで、逃げましょう。話はそれからお願いします」

「う、うん……それでも私は構わないけど……？」

「了解しました。それじゃあさつさと逃げましょう」

物事がいささか急に流れているが故、流石の佐慧でも状況を全て把握するのは困難らしい。あからさまな困惑を見せる佐慧を尻目に（焦っている証拠である）、遼太は窓の鍵を外し前回に開けた。外の更に冷たい風が凍える肌を撫でるように流れ込んでくる。

一階であるから、そこまで苦労を要することもない。遼太は棧に片手をつき脚を持ち上げひらりと窓枠を乗り越える。

「い、急いでください、あいつら銃を持っていますから」

「じゅ、銃って……ピストルのこと？」

佐慧もその後ろを次いで窓を乗り越えた。遼太はそれを見て頷く。「平たく言ってしまうえばそうです……さつき脚を撃たれたから、先輩も気をつけてくださいね」

と、言った瞬間にトイレのドアが勢いよく開いた。その開き様といえ、例の部長の登場シーンよりも過激といっても過言ではない。

開いたというよりも、空けた、といった方がいい。

遼太が慌てて手を伸ばし佐慧の腕を掴むと、そのまま抱き寄せるようにぐいと引つ張った。佐慧は不意をつかれたか、驚愕の表情を見せつつも素直に遼太の腕の中にすばん収まる。

「きゃ……ちよつと……」

佐慧が突然の出来事に目を白黒させたが、その刹那、佐慧が居た辺りにドアが吹っ飛んできた。それも丁寧な角を先端にして、人を易々と殺めることが出来そうな程の速度で。

飛んできたドアはそのまま地面を抉り、側転よろしく縦に転がった後、その先にある旧校舎の壁に刺さって止まった。その刺さったときの壁の悲鳴は、あらゆるヒステリーの金切り声にも劣らないとも言える。

「あ、あまり、仕事を増やさないでよねん……」

佐慧は盛大に木の壁が吹っ飛ぶ音を聞き、その光景をリアルに思い浮かべて背中に悪寒を覚えつつそう遼太の胸に向かって呟いた。背丈は同じくらいなのだが、佐慧が前のめりになって飛び込んでいくような形になっているので、否応無しに抱きかかえられている形になっているのだ。

「あ、……す、すみません……」

遼太は無感情にその光景を眺めていたが、やがて自分が先輩を抱いているのに気づくと、慌てて身を遠ざける。ほぼ脊髄反射で。

「あら、残念」

佐慧は満更でも無さそうに呟いた。

だが安穩な時間は五秒と持ちそうにない。どかどかと下品なタイルの悲鳴が近づいてくる。

遼太はそれを聞くや否や佐慧の腕を取って走り出した。佐慧は完璧に不意を衝かれ、よろめきつつもなんとか遼太についていく。タイルの足音が硬い土のものに変わった。

「と、とりあえず、皆と合流するのが先決だと僕は思っんですね」

走りつつ佐慧の様子を窺うように、遼太がちらりと視線をやりながら後ろの佐慧に訊ねる。

「え……え、ええ……そ、そうねん……ひい」

『発動中』の遼太の全力疾走に、運動能力は一般人である佐慧は必死についていきながら（というか、引つ張られる力に負けけて転ばないように）、半ば悲鳴を上げるようにそう応える。

遼太もここは佐慧にペースを合わせてやりたいところなのだが、どうにも相手が許してくれないのだ。あの旧校舎に綺麗に刺さったドアを見る限り、接近戦は分が悪いにも程があるし、遠距離ともなると拳銃を所持しているという抜かりの無さ。予備弾が大量にあるのか、もしくは無限に生み出す能力でも持っているのか、豪胆に連射してくるのだから堪ったものではない。結論から言えば、ここはいくら辛酸であろうと、逃げなければただでは済まされまい、ということである。

銃声が鳴り始めた。閑静を貫く夜の学校に、乾いた破裂音が短く、断続的に鳴り響き、その音の音源が生み出したエネルギーによって放たれた弾丸が空を引き裂き、その牙を奔走する遼太と佐慧の背中に向ける。

もはや、ここは羞恥やら社会的名誉云々に構ってはいられない。真剣に命の危機に晒されているというのに、ここでやらなければ、それ以上に恥ずかしく、一生償いきれない悔恨を懐くことになるのは目に見えている。

遼太はそう心に捺印し　振り向いた。半ば引き摺られるようにして、佐慧が泣きそうな形相でついてきている。

「せ、先輩、大丈夫ですか？」

「……はひ………ちよ………」

帰ってくるのは壊れたペットを模したロボットの断末魔の様な声。「はい、駄目そうですね……。それじゃ……失礼します………」

遼太は深呼吸をしてから　佐慧の腕をぐいと引つ張った。

「へ………？」

佐慧の体は遼太の手を軸にして華麗に夜の空に弧を描き、そのまま遼太の腕の中へ飛び込んでいった。ぽふんと、遼太の腕に軽い衝

撃が落ちる。

左腕は膝の裏側、右腕は肩の後ろをそれぞれ支えている。いわゆる、お姫様抱っこの完成である。

佐慧の心配をしなくて良くなった今、遼太はいかりを失った船の様に無謀な行動に踏み切った。

一步を踏み切り体勢を刹那だけ低くする。そして、そのままバネの様に脚に走行に必要なほどの力を加えた。途端に景色が流れ、冷たく乾燥した突風が頬を撫で、重力からの束縛から開放されたかのように体が軽くなる。

遼太が跳躍したのだ。さながらヒロインを攫った悪役の様に。月に翳を落とすその姿は、悪とも正とも取れる、神々しく何にも表現できぬスペクタクル

と、客観的に見れば壮大で秀麗な光景ではあるが、主観的に見ればそれはただの恐怖ではない。再び重力に捕らわれたとき、内臓を掌握され弄ばれるような不快感、喉が浮くような感覚に自分の心臓が悲鳴を上げるのを佐慧は克明に感じた。

だが悲鳴は上げない。背中に当てられている手の温もりを信頼しているから。

遼太の靴底が唸りをあげた。そして、そのままコンクリートの地へと靴底が叩きつけられる。佐慧は凄まじい衝撃を想定していたが、思ったよりもその衝撃は椅子ごと転倒した程度のもだった。ただ、反動で遼太と一瞬だけ顔の距離が零に限り無く近くなったのは、これはまた違った衝撃。

「だ、大丈夫ですか？」

そのまま佐慧を腕から降ろし、遼太が額の汗を袖で拭いながら訊ねた。佐慧は初めて干したばかりの布団の良い匂いが、実はダニやノミなどの死骸の臭いだと聞かされた様に、ぽかんと虚空を眺めていたが、やがて遼太の方に向き直った。

「す、スゴイ……」

そんな言葉と共に。

「へ……?」

「あ、貴方凄いいじゃない! 凄く面白かったわよ!」

佐慧はぐいと立ち上がると、茫然とする遼太の手を自らの両手で抱擁すると、胸の位置まで持ち上げた。しかも握られた手が左手

真正正銘自分の手ということに気づくと、遼太はもうどうしようも無いほどの動悸に襲われた。

「は、はあ……それは……どうも……」

「ま、また、いつか、またやってね!」

「……き、機会があれば……」

目を燦然と輝かせ、意外にも強い握力で圧迫し、子供の様に詰め寄ってくる佐慧に遼太は動揺して視線を泳がせる。こう、人がふとした拍子から何かのスイッチ(ネジ)が入って(抜けて)、別人になっってしまうことを直面してみると、遼太の気持ちは分からなくも無いものである。

と、そこで佐慧はようやく自分の立場を思い出したかのように目を元の爛々とした色に戻すと、慌てて遼太の左手を握り締めていた両手を引っ込めた。

「あ、ご、ごめんなさいねん……私、こういうのが好きで……ついねん?」

「はあ……」

こういうの、とは今の乱れから察するに、絶叫系のアトラクションのことを指すのだろうか。どの道、この清楚で穏やかな雰囲気を醸し出す人物にそぐわない趣味であることに違いは無い。本当に人とは外見で決めるつけるのには難がある動物である。

「んーと……ここはどこ?」

佐慧は崩れかけた場を持ち直そうとしてか、わざとらしく周囲をきよるきよると見渡してそう言った。

白いコンクリートの地面。そして、いつもよりも高い景色。そして、その景色の手前には、巧い具合に闇に溶けている青色のフェンス。

ここは第二校舎の屋上である。その地面に大きく『H』と書かれているのは、先代のいたずらである。ヘリポートのつもりだろうか。この学校が未知のウイルスに犯された後閉鎖され、そこでの生き残りを救うくらいにしか用途はなさそうだ。

「屋上……まあ、確かによく考えればそうねん……」

「……いくらあいつらでも、今してみたに跳んでくるわけにも行かないでしょうから、素直に階段で登ってくるようになります。そこで、ここまで来たと確認したら、また跳んで校庭に行けばいいんじゃないかと思ってここに来たんですが……それで時間を稼げますし……」

佐慧は遼太を見た。遼太は視線に気づかず、屋上への唯一の入り口である扉に目をやっている。

「ねえ……ちよつと展開が急すぎて、訊き損ねたんだけど……さっきの……なんだったのん？」

佐慧がそう訊くと、遼太はそこで視線に気づいたらしい。それから淡々と話を始める。

「え……。んと……あの旧校舎を抉ったのは、人間の姿を模したクリーチャーっぽいです」

「クリーチャー……？ まあ、確かにそっちの方がピンとき易いかもねん」

「超人的な力を持つてるみたいで……勝手に行動したらマズイかなあっと思つて、こうして逃げてたわけなんですが……」

佐慧は裾をまくって腕時計を見た。十時二十八分。たつた今、集合時間になるうとしている。凜が既に来ているくらいであろうか。

「んー、やっぱり釘を刺しておいた方が良かったかしらん……？」

「……できれば、情報量を増やして欲しいですね……隠語が多くて……」

「……んー、そういうことは後で考えた方が良さそうみたいねん……」

佐慧が屋上の出入り口である扉を見た。どたばたと下品な足音が

断続的に聞こえてくる。

「それじゃあ、行きましようか」

そう言って遼太が手を伸ばす。それを見て、佐慧は面白そうに目を歪めた。

「ふふ……ホントにここに集まる人たちって面白い人が多いのねん」

凜は腕時計を見た。十時二十五分。それから寒そうに首をすくめた。この時期の真夜中の寒さは殺人級である。

「うう……さむ……」

涼属高校の校庭のど真ん中。凜は一人そこで侘しく他の部員達が来るのを待っている。この部活オリジナルの黒コートを制服の上から羽織っている。一応、涼属高校の冬服は厚ぼったいことで有名なのだが、それでも防げぬ寒さである……。というのは、凜の感覚であって、本来ならば快適なのだが、察しの通りこの方、極度の寒がりなのである。風が吹く度首をすぼめ（戦闘に入ることを考慮し、マフラーはしてきていない）、手袋の上から手を擦り合わせて、少しでも体を動かそうと地団駄を踏む。三日間風呂に入れず、うじうじしている潔癖症の人にも見えなくも無い。

「んん……つくしよん！」

誰も居ない校庭で盛大なくしゃみをかます。周囲に隔たりがないので、山彦することなくそのくしゃみは空気に溶け込み消えていく。その余韻が尚寒さを際立たせるようだ。

「んんうう……いつもなら佐慧さんが居てくれる筈なのに……」

尊敬している彼女に対して、凜は独り言等の時には下の名前で彼女を呼ぶ。少佐、とは部長が勝手に当て字で作っただけの仇名で、今はすっかり定着している。砂と佐で少佐、である。

それはさておき、佐慧が未だに来ていないのは、少しおかしい。いつもなら十五分前にはここで待っている筈なのだが。ただ、彼女も人間であるから、多少の誤差は生まれるだろうと凜は思っている。待っているのだが……、しかも、部長が来ないのは常としても、

遼太が来ないのも変だ。あの性格からして、人を待たせるようなこととはしないと思うのだが。

突風ではない、中途半端な強さのくせに無闇に冷たいという、ひねくれた風が頬を掠るように撫でていき、凜の鳥肌が総立ちになる。下手したら風邪をひきそうである。

「……………どうしたんだろ……………」

二十九分。そこと知れぬ不安がむくむくと胸の中で発生し始める。待ち合わせ時間に待ち人が来ないと、何かあったのだろうか、と思うのが人の性質である。その人物が遅刻常習犯であるのであれば、話は別だが。

その時、何か大きな空気の変動を感じた。変動　動き、というか、変化。しつくりくる言葉が見当たらない。空気の質が変わったというか。

と、思った刹那、近くでズシャッと砂場にラジコンカーが飛び込んだ様な音がした。その大きさに思わず凜は飛び上がる。

だが、そこは手練れた凜である。すぐさま寒さの枷から解放され懐に手を入れると、ナイフを取り出した。自由自在に形大きさを変えられる、『無機生命体』。

それを刀大の大きさに膨らませると、相手の喉元に突きつけるような態勢を取り、柄を握り締めた。ほとんど当てにならない月明りであっても妖艶に光り、酷薄に彎曲するそれは、その道の巨匠が泣いて喜び、戦国大名が国ごと交換を要求しそうな程の刀であった。迂闊に触れば、指なんて普通に落ちてしまっただろう。そんな禍々しい刀の刃先を　その落下と思われる出来事によって生じた砂埃に向けている。

やがて、砂は重力に従うようになり、砂埃が鎮まってきた。

凜はそこに映る人影を注意深く凝視して　と思った刹那、刀はすぐにナイフ大の大きさに戻りポケットに収まっていた。

「お、遅いっ！」

砂埃を斬るように現れたのは、佐慧を抱きかかえた遼太だった。

凜に背中を見せたまま、佐慧を腕から下ろしている。背中を見せているのは、なるべくこの姿が注視されないように　という考慮である。無用な誤解は招かんとすることに間違いは無い。

「ご、ごめん、ちよつと面倒が起きたもんで……」

遼太は迅速に佐慧を降ろした後、ぱつと振り向きそう詫びた。

「め、面倒つて……？」

と、凜が訊いた瞬間　校舎の方から破裂音が聞こえた。銃声ではなく、窓ガラスの割れる音。

「ドア壊したり窓割ったりあんまし学習しない人達ねん……戦略だけみれば秀逸なのにねん」

「しょ、少佐つ、い、いつのまに……」

ぬつと姿を現した佐慧に、凜が素直に驚愕の意を表す。

「……二手に分かれてくるとはねん……」

対する佐慧は凜の反応をそっけなく流し、音の方向を見やる。割れた窓から這いずるように、人影が出てこようとしている。足を窓の棧に載せて、飛び越えるというのではなく、頭から突っ込むように這いずり出しているのだ。

「……部長じゃないですよね？」

それを遠いながら確認した凜は、半ば茫然としてそう訊ねた。それを聞いて、佐慧は目を彎曲させた。

「ふふ……もつと厄介な人達ねん」

部長以上に厄介な人間。遼太はそのスケールの大きさに戦慄を覚えた。そんな人間がいて、世界の均衡が取れるのだろうか。

佐慧は遼太の方を向いた。

「それで……どうするの？　戦う？　逃げる？」

「え、え、僕が決めるんですか？」

「だって、今のところ貴方が一番強そうなもの」

凜は目を丸くして、遼太を見た。遼太は驚いたような、困ったような、二重の感情で顔を塗り潰している。

佐慧はそんな遼太を見て、珍しく溜息をついた。

「ほら……早くしないと来ちゃっわよん？」

『それ』は恐ろしいほどの鈍足で、彼らとの距離を刻々と詰めていた。

逃走と困惑の二重線（後書き）

……少しふざけました。スミマセンorz

行き当たりばったで書いている訳ではない物の、なんかそれらしい展開になってますねん……修行不足です。

さて、今回は焦らしますが、次からは戦闘に入る筈。恐らく、後二、三話続くと思われれます。まだ全員集まってませんからね；

さて、今回は目標提出日の五分前に提出なので、超急ぎの投稿です。というわけで、誤字脱字誤表現が点在すると思われれますが……皆まで言わせないで下さいねん

感想はいつでも大歓迎です。次の回が恐ろしいことになるのを見た方は、是非是非感想をお願いします！。

サイレント・リボルバー

「……やっちゃおうか」

刹那、凜は懐からナイフを抜いた。瞬く間にそれは生物の成長を早回して見ているかのように巨大化し、細身で長く、禍々しく彎曲した刀へと変貌を遂げる。

「あれ……昨日と形が違う……」

それを見て、遼太が呟いた。ただ、距離が近かったので当たり前の様に凜の耳にも入る。

「うん。自由に変えられるからね」

そう言っ指を軸にしてくるくる回してみせる。パフォーマンスなのだが、迂闊に近寄れば腕切断が冗談ではなくなりそうだ。遼太は感嘆だけしておいてやる。

そんなことしている間に、遼太は遠くに居る一人が銃を懐から抜いたのを確認した。

「……銃を出しましたよ」

「随分と物騒ねん……後で護身用につくくらい頂戴しちゃうかしらん」

そう言つと佐慧は、こそこそと遼太の背後へと回り込んだ。

透かしを喰らったような表情が顕著になっていたのか、佐慧はくすりと笑った。

「あ、ごめんね。私、皆と違って戦闘はできないの」

「あ……そうなんですか」

それでもわざわざここに赴いているということは、結構重要な役割でも担っているのだろうか。それも、戦闘以外の要素で。

破裂音が響いた。撃つたらしい。一瞬経つても砂が立たない。痺れを切らしたか、動きと限定せずに、命を狙ってきているようだ。

「意外とコントロールがいいから気をつけてっ！」

遼太はそう叫びつつ、地を蹴った。唐突な前進に伴って、引き裂

かれた冷たい空気が頬を薙ぐ。

走行状態を維持したまま、右腕を変形させる。凝縮、膨張。

右腕が意思によって変えられるようになった今、この義手が変形できる物体のレパートリーの多さに驚嘆した。そして、今変形させたのはそのうちの一つ、槍。

棒の先端が尖っているというシンプルな形ではあるが、その先端は極端に細くなっており、矛盾の盾をも貫いてしまいそうな程である。長さは腕がそのまま成っただけであるから、さして長くはない。無闇に長くても、使いづらいだけ。使い慣れているこの長さが一番適当だ。

五秒ほどで『それ』との距離を大きく縮めるが、その銃身は一向に遼太の方へ向こうとしない。執拗に凜を狙っている。

かといって、決してこちらにそのバレルが向かないとも限らないので、遼太はなるべく視界に入らぬよう、且つ音も立てぬように大きく『それ』の後ろに回りこむ。

そして、脳天を一貫。

肉片やら骨の欠片やら脳漿やらを盛大に撒き散らし、『それ』はあっさりと事切れた。腕はだらんと垂らされて、銃は音もなく校庭に落とされ、マガジンが飛び出る。生暖かい感触を伝える右腕を引き抜くと、抗う様子も見せずに屍と化したそれは地面に突っ伏した後頭部に穴を開け、それは本当に動かなくなった。

あんまり呆気なかったもので、もしや本当は人間だったのではないかと、遼太は底知れぬ罪悪感に不安を覚え始めた。徐々にどす黒い液体が、その頭部を濡らし始めている。

「後ろっ！」

ふいに凜の絶叫が聞こえた。

遼太は咄嗟に我に帰り、後ろを振り返る。そこには無感情な銃口があった。無慈悲に詰められた弾丸の先端が遼太を見つめている。いくら身体能力が高かるうが、決してスーパーマンではないので、物理的要因によっての身体への損傷は決して避けられない。万事休

す。眉間に当てられた銃口は、持ち主の意思が介入しなければ、退かせることは出来ない。

ならば、自分から動いてしまえばいいと。そんな屁理屈があるだろうか。いや、自分から、とは正しくない。自分が、動いてしまえば……誰かに突き飛ばされる様に。

不意に義手が重くなった。それはもう、慣性を無視させるほど、急に、とてつもなく。

当然のことながら、遼太はそのまま腕にかかった重力に負けて崩れ落ち。その眉間の十センチ上を銃弾が擦過した。髪が焦げたか、焦げ臭い臭いが鼻を衝く。

途端に義手が軽くなった。軽くなった、というよりは、もとの重さに戻った、といった方が語弊は生じないだろうか。

尻餅をついた状態から、右腕で思い切り前方にある膝を突いた。骨を直に砕く感覚に襲われ、その後先端が空に触れる。太腿を抜けたようだ。『それ』の苦しげな呻きが聞こえる。

遼太は血肉が顔に掛かるのにも構わず、刺さった右腕を思い切り横に振った。遠心力で足から棘が抜けた『それ』の体は大砲で撃ちだされたかのように飛び、首から着地し骨の折れる嫌な音を残して静かになった。

遼太は尻餅をついたまま慄然としてそれを眺めていたが、足音が聞こえたので顔を上げると、凜がすぐそこまで刀を担いできていた。
「大丈夫!？」

「あ、うん……何とか」

「今回は相手が一体じゃないから気をつけないとねん」
いつのまにか佐慧もそこに居る。遼太は頷いた後、立ち上がった。
「どうする? 部長が来るまで待つ?」

凜が腕時計を見ながらそう訊ねてきた。二十二時三十五分。遼太はその名を聞き、あの意味不明な容姿を思い浮かべてげんなりとする。あの人も何かしらで戦闘に参加してくれると良いのであるが。

「……部長っていつもどの位に来てるの?」

まれてその足を止める。その数瞬後に金属と金属が触れ合った様な、甲高い音が響いた。

「駄目っ……………」

振り返ると、凜が切羽詰った表情をして、両手で遼太の腕を掴んでいた。あの刀は、と遼太はゾクリとしたものの、足元に刀が床に落ちているのを確認して安堵する。さっきの金属音は刀を落とした音らしい。

「…………私が見に行くから、佐貫君はここで少佐の傍に居て」

「え…………でも……………」

「いいから。私は大丈夫」

「う…………うん……………」

大丈夫とか言う人に限って、大丈夫でない状態で帰ってくるのが常と遼太は思うのだが、こんな真剣に、しかも腕を拘束されたまま言われたのを断るほど遼太は凶太い神経を持ち合わせていなかった。ので、渋々ながら頷いた。

それを聞いた凜は安心したよう表情を作ると、足元の刀を拾い、軽く手を振ると廊下の奥へと走っていった。

「皆で行く、という選択肢はダメなんですかね？」

遼太はそんな凜の背中を見やりながら、佐慧に訊ねてみた。それでも返事がなかなか来ないので、佐慧の方を見てみると、来ない手紙を待つ人が郵便受けを見るような儂げな目で割れていない窓から外を見ていた。その神秘的な光景に、遼太は見入りそうになっただが、すぐに我に帰るともう一度問い掛ける。

「先輩？」

「え？あ、ご、ごめんなさい。どうしたの？」

すると、佐慧ははっとしたように目を見開いたのち、取り繕うように遼太に視線を向けてきた。

「い、いえ…………あの……………」

「大丈夫よん。凜ちゃんは一対一でそう簡単にやられたりはしないから」

「……ですよね」

根本的にはずれているものの、遼太の不安を鎮めてくれるような回答をいただけたので、遼太は少しばかり安堵する。この人が信頼するのであれば、大丈夫であろう、と。

「……どうかしました？」

気がつくくと、佐慧がじつと遼太の顔を見つめていた。自分の姿が映りこみそうな程、澄んだ瞳で捉えられて、遼太はたじろぎつつ訊ねる。

すると佐慧は視線を全く逸らそうともせずに行った。

「私はここではただの一般人って言ったけど、それじゃあ何でここに居るんだ？って思ったでしよう？」

「え、いえ、そ、そんなことは」

「別に隠さなくてもいいのよ。むしろ、正直に言ってくれないと、そっちの方が傷ついちゃうわよん？」

「……いえ、本当に思ってます」

きつと何かしらの形で貢献するのだと思っていた。少なくとも、あんな光景を呑気に見ていられるのは一般人ではないと遼太は思う。

「……本当に？」

「はい」

「ふふ、ありがと」

佐慧は安心したのか、溜飲が下りた清々しい表情になった。遼太はひたすらきよとんととして、その真意を探ろうとするばかりである。そんな遼太の表情を面白がるように、佐慧はくすりと笑った。

「……だとしたら、あの子の言いたいことも分かってあげてね？」

「え？」

そして遼太は何か、直感的な何かに誘われるように、窓の外に視線を向けた。

そこには、首を折って昇天した筈の『それ』の姿があった。首は異様な方向に折れ、それでも尚赤い目には生気が灯っておらず、足を引き摺るようにしてこちらに近づいてきている。

そして、『それ』はそのまま頭から突っ込むように遼太達の目の前の窓ガラスを割って廊下に飛び込んできた。ガラスが悲鳴をあげて砕け散る。遼太は反射的に佐慧の腕を取って、身を引いた。背中が壁に当たる。

廊下の窓側と教室側、距離にして三メートル程。

『それ』は目の前でよろよろと立ち上がると、敵戒態勢を敷いている遼太を知ってか知らずか、腰から拳銃を引き抜くと、躊躇いも無く引き金を引いた。

緩慢に思える動作であったが、遼太でも反応できぬ程即座に行われた動作であり、至近距離という状況もあって、遼太は咄嗟に身をよじったものの、弾丸は右肩を擦過した。直撃しなかったのはほとんど奇跡といっても差し支えない。ついさつき感じたのと同じ、神経を直接焼いたような激痛が迸り、血が吹き出る。遼太の右肩を抉り取った弾丸はそのまま教室と廊下を隔てる壁にめり込んだ。

遼太はよじった体勢を右肩を抑えつつ直して、『それ』の姿を再び視界に入れるものの、二発目が銃口から放たれた。今度は右脇腹辺りに同じような痛みが走る。

これではいけない。遼太の六感が直に語りかけてくる。このままでは蜂の巣にされてしまう。右腕はとくに通常の腕に戻っている。今更変格させる暇などない。いくら身体能力が桁違いになつていようと、体の硬さなど変えようも無いので、心臓を打ち抜かれれば全てが終りである。ましてや、常人のままである佐慧については、弾が何処かしらに当たるだけでもそれは甚大である。

三発目が来る寸前、遼太は『それ』の持っている銃を注視した。銃口は真っ直ぐこちらを向いている。そのままトリガーを引けば、間違いなく吐き出された弾は遼太に当たるだろう。

もう何かを言っている暇など無い。即行動しなければ、射殺される。

反射で左脚が弾いた。その反動で体が右方向、佐慧と反対の方向へ移動する。それに伴い、銃口も『それ』から見て左方向に動いて

銃声。廊下に鮮血が迸った。

ギチ。

特殊な樹脂が内部に縫いこまれているコートは、動作ごとにいちいち互いに擦り合い、独特の不快感を発する。もう何年もその音を聞いているので、今更どうといったことはないのだが。

あの隻腕の少年。我々にとっての救世主となるのか、それとも悪魔となるのか。全ては彼次第なのだ。

今日はいつもとは違う。程度も質も濃度も普段とは段違いになるであろう。その分、体に掛かる重さも普段とは格段に違う。だが目的のためなら、この程度、何ら障害にもならない。普段よりつけるアクセサリーを増やしたのと同じようなものだ。

視線を上げると、黒く曇った校舎が見える。

自然と口端が釣り上がってくる。今日は申し分ないほど楽しませてもらうでしょう。

サイレント・リポルバー（後書き）

日が追うに連れて、更新間隔が長くなっていきますね。できれば、間隔が一年になる前にはじめはつきたいものです。

このシーンでのプロットの指示が、「適当に終わらせる」とかいう曖昧且つ投げやりで大雑把な指示だったので、ちよいとばかりしグダグダな上に、普段よりも短くなってしまいました。んー、もっと計画的にやらんと……。

それでも感想は年中無休で欲している野郎です。

それでは、今週中にもう一度拝めることができたら、と思います。それではっ。

透明の隔たり

液体が床に叩きつけられた音を聞いた。

冷たさはない。痛みは肩と脇腹に走る痛みだけ。意識が遠のくこともなければ、妙に気だるくなつたわけでもない。

生きていることを実感しながら、目を恐る恐る開くと、『それがだらんとした両手の片方に銃をぶら下げて佇んでいた。ただ、首が無かった。血の噴水を首があるはずの場所から作り出し、『それは崩れ落ちるでもなく、ただ佇んでいるだけ。』

死んでいるのか生きているのか分からない『それ』の先の廊下に拳銃を構えた凜が居た。その銃口からは硝煙が立ち昇っており、そのグリップを握り締めている凜の手はぶるぶると震えて、顔は泣き出す寸前のものになっていた。刀は足元に転がっている。血がついているあたり、向こうからやってくるはずのそれは倒すことができたらしい。

やがて、首の無くなった『それ』は膝をついて、どたつと倒れこんだ。見る間に血の池を作り上げていく。

「……………あ」

ようやくそこでそんな間抜けた声が出た。それを見て、凜が溜息をつく。

「……………もう。少佐を守るために置いていったのに、逆に襲われてどうすんの」

「う、ごめん……………」

「まあ仕方ないわねん。今回佐貫くんは初遭遇だもの」

佐慧は至って呑気にそんな事を言う。

「……………もう、怪我してるじゃん」

凜は銃を捨てて、遼太の下へと駆け寄った。そして、銃創を確認し始める。

「肩とお腹だけ？」

「あと脚も……」

おずおずと答える。至近距離に凜が近づいてきているから、無駄に緊張しているのだ。

「脚？ よくここまで走ってこれたね」

「え、いや、掠っただけだから……」

血はとつくと止まっている。義手が手を回して痛覚が遮断されているのか、痛みも感じない。

「少佐、佐貫君の分のこのコート無いんですか？」

凜は既に血が止まって赤黒くなった銃創を痛々しげに眺めてから、佐慧の方を向いて訊ねた。佐慧は返事を返す前に物憂げな顔を見せた。

「これは私が持ってきたものじゃないから……部長さんが今日あたり持つてくるようなこと言ってたけど？」

「んー、またこういうところである人が出てくるんだ……でも部長様、なんか美味しいところ持つて生きたがりな人ですから、大丈夫でしょうか」

「さあ……？」

二人がそう話している間、遼太は右腕を変形させておいた。また不意打ちを仕掛けてきてもおかしくないのだ。この変形時間が当面のところの欠点なので、今のうちにやっておくに限る。

凝縮。炸裂。右腕は銃身へと変貌を遂げた。

「ちよ、ちよっと！ そ、そんなことしてき、傷は大丈夫なの？」

丁度終えたところで、凜が慌てた声を浴びせてきた。遼太は慄きながらも、手を振って健全を示す。

「だ、大丈夫だよ、これくらい……」

「無茶しないでよつ。あなた、普通の人ならとつとくに動けないくらいに傷受けてるんだよ？ 銃弾もまだ体に残ってるんだから、変に動いたりして」

「心配には及ばぬ」

ふいに右腕が声をあげた。遼太と凜、両者とも驚いて腕を見下ろ

す。

すると、右腕が唸りを上げた。パソコンの冷却ファンの稼働音の様な、機械的な音。一体このエネルギーはどこから来ているのだろうか、もしかして、体から吸い取って　？　と、遼太はそんなことを心配してしまう。

やがて、指先　銃口にあたる部分から、何かが三つほどぼろぼろとこぼれ落ちた。よく見てみると、赤く濡れた銃弾であった。

「体内の異物の除去は以下に行う。体内は極正常」

思わず凜と顔を見合わせてしまう。非常識にはもう慣れた、と思っていたが、まだまだ常識の裏をかくような出来事が頻発しそうだ。

「……もう何があっても驚いちゃいけないって肝に銘じてきたけど……こんなにリアルに直面させられたのは初めてかな」

「……どうなるんだろ、僕の体」

遼太が呟いたこの言葉、あながち看過するほど小さな意味を秘めたものではなかった。このまま、遼太の体を蝕んでいき、終いには支配してしまう　そんな事があってしまうのではないかと。

「七億三千万時間以上の時を必要とする。時間的に不可能。上、我に意思は毛頭無い」

「……信じるよ」

信頼できるかどうかはわからないが、数字が膨大すぎたので、信じておくことにした。

凜は遼太の独り言もどきに首を傾げたが、すぐに居住まいを正して言った。

「銃弾は無くなったとしても、まだ傷は癒えてないんだから、無理はしないだね」

「う、うん」

ぐいと詰め寄られて、遼太はがくがくと首を縦に振った。外見とは違っておしとやかな子だな、と思っただけだったが、実はそうでもなかったらしい。本当に人とは一朝一夕での判断し難い動物である。

「……また来たみたいよん？」

そこで寡黙を守ってきた佐慧が口を開いた。確かに、どこからか、下品な足音が聞こえる。

「……あいつら、不死身？」

遼太はようやくその疑問を思い出し、訊ねてみた。それに対して、凜は渋い顔をする。

「うーん……死ぬことには死ぬんだけど……」

「とりあえず、一杯来られたら困る、ってことは言えるわねん」

佐慧も人差し指を頬に当てて唸る。いまいちつかみ所の無い返事に、遼太はいまいち溜飲が下りない思いである。

「それじゃあ、そろそろここからも退いた方が良さそうねん……」

やがて、佐慧がきよろきよろと廊下を見渡しながら呟いた。遼太はその後を継ぐように言う。

「どつちから逃げたほうが良いと思います？」

窓と廊下とある。凜が拳銃を持ってきた辺り、どちらにも『あれ』の死骸がある筈だ。

「班員に意見を求めるとは、結構知的な班長さんねん」

「か、勝手に班長にしないでください」

「どうしましょう、凜ちゃん？」

「わ、私ですか……？」

いきなり会話の矛先が凜に向いて、凜は困惑した表情を露にした。それをみて遼太は、顔に出やすいのか、なんて思っていたりする。

「やっぱりあつちだと思えます」

凜がそう言って指差したのは、廊下側である。

「時間的にもあまり経ってませんし、腕を片方削いできましたから」

「それなら安心ねん。凜ちゃんの猟奇的な部分が役に立ったわね」

「べ、別にそんな趣味ありませんっ！」

からかわれ易いのか、と遼太は思っていたりする。遼太も負けず劣らずなのであるが、それは無自覚なのでそれを咎めるのは酷というものである。

佐慧は少し笑って目尻を擦りながら、遼太の方を向いて言った。
「ということよ、班長さん。早めに移動しましょう?」

「は、はい」

どっちが班長だか。

確かに『それ』の死骸 屍には、片腕が無く、ただ血溜りがあるだけだった。廊下に湖の様に黒い斑点を作り上げている。腕はその近くに転がっている。

「獲物から拾得物を得るのは戦争の常……って部長が言ってたもんですから」

凜が拳銃をくるくると弄びながら言った。佐慧は感心したように顎に指を当てる。

「へえ……よくまあ、あの距離から頭に当てられたものねん」

「いえ、あれは偶然です」

「えっ……それじゃあ、下手すればあの時……」

遼太は位置関係の上で、二発の弾丸を喰らうことになっていたのでは。

「え、ん……まあ、いいじゃん。助かったんだし……、こんな日常茶飯事だよ?」

「……そういう問題なのかな……」

と、遼太が呟いた瞬間、壁が吹っ飛ぶような轟音がした。先ほど遼太達がいたあたりである。その音の大きさに知らずのうちに背中が粟立つ。

「ここは危険ね……今日も予想以上に強そうねん……」

佐慧が眉を顰めて呟く。

「そ、それじゃあ早く行きましょう!」

「二階っ!」

一年二人は各々叫んでから、近くの階段を登り始めた。佐慧も慌ててその後を追う。

遼太が踊り場についたところで振り返ると、片腕の無くなった『

それ』がゆっくりと起き上がっているのが見えた。両腕があるかのように、すらりと立ち上がる。そして　赤い目が遼太を捉えた。その禍々しさに遼太は慄く。

「安心してっ、目からレーザーは出ないから」

そんな遼太の腕を凜が引っ張りつつそう言った。遼太は慌てて踵を弾いて階段を駆け上がる。二階にたどり着いたところで、重い足音が一階から聞こえてきた。断続的なその間隔は先ほどよりも格段に短くなっている。まごまごしていたら、すぐさま追いつかれてしまうだろう。

更にその足音の上に、重戦車がエンジン全開で走ってきているような轟音が重なった。その轟音はすぐさま遼太達の足元まで及んでくる。

それ聞いた凜は獲物を貪っている狼を見た仔猫の様な顔をした。

「うええ……今日はあんなさんが三人もいるの……」

「……これからは毎日来るでしょうね」

「な、何が来るんですかっ?」

この轟音からして、ドングリを抱えたりスが来るわけではあるまい。遼太は堪らず訊ねてみた。凜はそれを聞いて渋い顔をした。

「……厭な奴」

「……逃げようか」

凜が渋い顔をするのは、大概本当に厄介な問題と直面したときだ。

凜だけで全てを判断しているわけではないが、ここは逃げるのが定石、というか逃げている最中だ。混乱する。

三人は曲がる方向を決めると、即走り出した。なんだかホラー映画の主人公になった気分だ。　いや、ホラーじゃなくて妖怪モノか。いや、どうでもいい。

遼太は後方を力を抑えて走り、殿を取る。　　というのは、表向きの理由で、単に遠慮しているだけである。遼太が本気を出して走ると、二人を路頭に迷わせることになりかねない。

「し、死角が多い分、こ、校舎の中は危険……だと思っただけど……」

…」
既に息を切らし始めている佐慧が、繋がらない息でなんとか話し掛けてきた。

「そうですね……でもここ二階ですよ？」

「に、二階なら佐貫君のアクロバットで脱出できるんじゃない？」

わ、私と凜ちゃんを抱えて」

「え、わ、私もですかっ？」

凜が驚いたような声をあげた。

「……い、一応貴女も普通の人間と一緒にでしょ？　そ、それなら…

…」

「うう……に、二階ならいけますよっ！」

「そう？　け、怪我はしないですよ？」

「　はい」

話がついたらしい。両者頷きあう。

「それじゃ……佐貫君お願いっ！」

「え？　うわあっ！」

佐慧はふいに踵を返して後ろを向くと、遼太にタツクル　否、

抱きついてきた。

衝撃を最低限にまで押し殺し、佐慧を抱き上げる。大分軽い。

「私が先に行くからっ、後から絶対ついてきてよっ！」

凜が前方を走りながら言った。轟音は相変わらず後方で轟いている。

目指すは廊下の突き当たりの窓。遼太の肩ほどの高さがある。窓は無論　閉まっている。先ほど飛び込んでみて実感したが、窓ガラスは相当硬い。

凜は刀を抜いた。基本的に、変形させたらこの状態のままである。下手にナイフに戻したりでもしたら、遼太の二の舞になる可能性があるのを知っているからだ。

そのまま、窓をそれで一閃する。綺麗にスパッと斬れるのかと思ったら、派手に甲高い音を立てて砕け散った。

そして、凜は走っているときの速度を維持したまま、窓の棧に手をつくくと、ひらりと跳び越えた。凜の体が空中へと消える。

遼太も佐慧を抱きかけたまま、その後を継ごうと脚を曲げる。そして、そのまま弾性で飛んでいこうとして、その寸前で力を加える向きを百八十度変えた。遼太の体が後方へと飛ぶ。

「え、ちよ……」

佐慧が目を丸くして、遼太の顔を見た。必死の形相。なかなか開かない踏み切りに歯軋りするドライバーの様な。

鼓膜が引きちぎれそうな程の轟音が至近距離で起こった。窓のすぐ前の床が土煙とともに消えた。

「引き返します……」

遼太が震える声で言った。佐慧もそれは頷ける。よくぞ反応できたと褒めるべきだ。

巨大な鎌が廊下から生えていた。凜の刀とその艶は負けず劣らずであり、刃は恐ろしいほどに彎曲し無骨な黒色を月光に晒している。それが二本一対でそこにある。それも、生命体によって意思を牛耳られているのか、動いている。

遼太はそれを見るや否や、踵を返して駆け出した。後ろで鎌を床に叩きつけたような音が聞こえた。校舎が揺れる。

「なんですか……あれは……」

「……『あれ』が死ぬとああなる、ていうと、一番わかり易いかしらん……？」

と、そこで廊下の窓ガラスが割れて、人型の『それ』が頭から突っ込んできた。緩慢な動きで立ち上がろうとしている。

遼太はそれをよけようとせずに、そのまま走る脚をそのまま慣性に従わせて、頭を蹴り飛ばした。血液、眼球、頭蓋骨、脳髄、脳漿諸々が飛び散り、『それ』は絶命した。

「も、もつと穏やかに倒してくれる？」

「ちよつとでも隙を見せると喰われますよ？」

遼太は目を眇めていった。それは、そのまま校庭側に備え付けら

れた窓から抜け出せない理由にもなる。

すぐ後ろを『それ』が追いかけてきている。蛇の様な体 直径が三メートルはあろうかというその筒状の体をくねらせ、中枢があると思われる先端に二つの鎌が備え付けられ、その二つ鎌の根元の中央に口と一つの赤い目玉がある。

紛れもない、>レッド<である。

その肢体の無い体にも関わらず、移動速度は異常に早い。廊下の壁を擦り、抉り、壊しながら刻々と良太との距離を詰める。鎌を定期的に振り回すことも忘れない。

「ど、どうするの？前から来てるわよん……？」

「やむを得ません……第二に向かいます」

第二校舎は今いる第一校舎の裏側に位置しているため、校庭から必然的に離れることになる。だが、この袋のネズミ状態であるがゆえん、そんなこと悠長に言ってられない。

先ほどはあえなく通過した空中廊下が見えてくる。その先には、もう一匹の『それ』の姿がある。

「……やっぱり、空中廊下の窓から抜け出しますね」

「大丈夫なの？」

「完全には曲がらずに、廊下の右側の窓から飛び出せば、最低限の隙で脱出できると思います」

そう言って、遼太は態勢を低くした。空中廊下はすぐそこまで来ている。『それ』の鎌も。

結局のところ、賭けには違いない。どっちが速いか、である。

勝負はすぐに訪れた。

関節をよじり空中廊下に入った。すぐに遼太は精一杯態勢を低くし、脚を曲げる。そして、廊下を蹴る。窓ガラスはすぐそこにある。無情に閉まって透明の隔たりを作っている無機物が、すぐそこに。

抜けた、と思った刹那、窓ガラスは黒い何かで覆われた。遼太は驚愕の表情を見せて、首を振ると 赤い目玉があった。

透明の隔たり（後書き）

キーボード新調したのは良いんですが、まだ慣れないので苦心します。

それに関連してか、結構グダグダですね……。随分とまあ……。というわけで、キーボードの所為にするのもなんなんですけど、少なからず誤字等が存在するかと思われます。その点は……仕様だと思ってくれば……

無論、感想は常時待ってますので、どうかよろしくおねがいます。

充填から斬撃へ

自らその鋭利な鎌に突進していき、そのまま哀れにも肉片となりかけた瞬間、爆音が廊下に轟いた。正確さを追求するのであれば、廊下が爆発した。

鎌は驚愕したのか、それとも爆発を防御するためか、さっと引っ込んで、窓ガラスが遼太の視界に露見した。

窓ガラスが割れて、遼太の体は宙に投げ出される。遼太は無事脱出できたことに安堵すると、空気をクッションにしているかのよう
に、軽やかに中庭に着地した。

「……ふう」

佐慧を降ろしながら、溜息。三十秒前が三十分前に感じるほど、先ほどの出来事は濃度が濃かった。

「大丈夫？」

佐慧の方も大分緊張していたようで、よろよると立ち上がりながら遼太を見る。遼太は荒れた息を整えながら、返事をした。

「は、はい、なんとか」

「ふう……でもゆつくりは出来なさそうよん……」

バゴンツ、と物騒な音がした。

遼太は顔をしかめて、空中廊下を振り返ると 空中廊下の壁から鎌が突出していた。兎の巣穴に突っ込まれて必死に兎を探している狩人の手の様に、鎌を振り回し空中廊下を瓦解させている。

遼太は何も言わずに、佐慧の腕を取って地を蹴った。無論、廊下とは反対方向にである。

その一瞬後、空中廊下が四散した。破壊、爆発、落下。木っ端微塵に。

「はははは、早くっ、ほほ、北馬と合流しましょうっ！」

そのテロの様な光景に、遼太が狼狽した表情を見せた。この分だと校舎が消滅するんじゃないか、とでも思ったのだろうか。

だが、佐慧も凜と早急に合流するのはやぶさかではない。ここま
で敵の数が多いと、力を分散させるのは愚の骨頂である。この現状
では。

そのまま第一校舎を回りこんで、校庭へと辿りつく。空中廊下の
瓦解によって、相当の衝撃を受けたのか、『それ』達は追いかけて
こなかった。

「や、いた……おい！」

その中央に、校舎を見て愕然としている凜が佇んでいた。声に反
応したのか、すうっと顔を遼太のほうを向いた。そして、破顔一笑、
顔を安堵の色で一杯にした。

「ど、どうして追いかけてこなかったの!？」

だが、第一声がそれ。随分と手厳しい。彼女らしいわねん、と佐
慧は頬を緩ませる。

遼太はそのほほんとしてもてられなく、必死にぺこぺこし始める。

「ご、ごめん、ちょっと邪魔が入ったから……」

「んもう………んん………も、もう次ははぐれないですよ」

そして、率直に謝意を見せ付けられると、何も言えなくなってし
まう。その憤怒の矛先をどこに向ければ分からなくなって困惑して
いるのを、無理に隠している表情もなんと可愛らしい。佐慧は今
度はにつこりと微笑む。いつもこうならいいのにねん。

「あんまりゆっくりもしてられないわよん……、ところで部長さん
が来てる筈だけど……?」

佐慧はついと凜から視線を逸らすと、校舎を見て、そう言った。

大分どたばたしている。早急に手を打たないと、本当に校舎が浄化
しかねさそうだ。

それを聞いて、凜は首を傾げた。

「さあ……?」

「……あつ」

遼太が声を漏らした。刹那、轟音が炸裂し、第一校舎の向かって
左端の一階部分が爆ぜた。

「……部長さんね」

「間違いないですね……」

凜は漸く来た待ち人を受け入れるような声で、佐慧は呆れたような声で言った。遼太は話が見えず狼狽えて、更に校舎が破壊されているのに、呑気に会話をしているらられる彼女達を怪訝に思う。

「何か一人でやってるみたい。早く援護してあげましょう?」

佐慧はそう言いつつ、遼太の方を向いた。視線をあてられた遼太は反射でがくがくと頷く。

「それじゃあ、佐貫君は足速いから、先行ってあげて。私たちはあとで追いつくから」

「わ、分かりました」

結局疑問を晴らさぬまま、遼太はその場を駆け出した。腕は佐慧を抱きかかえた際にデフォルトの形に戻っていたので、走りながら変形させる。凝縮、炸裂。先ほどと同じ、銃身の形である。

今回は、丁寧に昇降口から侵入する。できるのであれば、支援は後方から下ほうがいいだろう、という遼太の勝手な推測からである。下駄箱が立ち並ぶ合間を土足で駆けて、左右に伸びる廊下を見渡す。左方向の廊下が黒く潰されているだけで、異物の姿は見えない。

移動しながら、戦闘しているのだろうか。

足音がした。右方向からだ。左方向に体ごと向けていたので、振り向くようにして、そちらを見ると「それ」がいた。

凜が倒した筈の、片手がもげている人型。残っている片手はてぶらだ。

とりあえず、武器を持っていないことに安堵するのもつかの間、『それ』の様子があからさまにおかしいことに気がついた。変。歩き方がぎこちない。素人の人形遣いが操っているようだ。

ふいに、その動きが止まり、直立不動の体勢になった。

そして 首が吹っ飛んだ。内側からの何かの圧迫に負けたように、真上に吹っ飛び天井に頭頂部をうちつけ、肉片と化す。

そして、主亡き首の断面からは、二本の鎌が這いずり出てきて、

躍っていた。

そして、服を引き裂く様に皮が弾けて、先ほどに見た『あの』巨体へと変貌を遂げた。二本の鎌に、一つの赤い目玉、蛇のような肢体の無い体。

なるほど……、こいつらは、人型からの派生 進化形態だったのか。

疑問の一つが解消される。だが、そんなことは後でゆっくり吟味できるもの、今はこれをどうにかしなければ……。

鎌が躍った。横薙ぎで遼太の首を狙ってくる。発動こそは機敏であつたが、振りは緩慢なのでバックステップで難なく躲した。宙を切裂いた鎌はそのまま廊下の壁を破壊する。

自分では始めて使う、銃身の形をした右腕に力を集中させた。徐々に熱くなっていくのが分かる。

チャージ式か……。

充填される前に、もう片方の鎌が縦に空を薙ぎ、降りかかってきた。横に跳ねて躲す。が、間髪を入れずに先ほど空を切った鎌が横から払ってくる。

遼太の判断は一瞬。一瞬でも足りない方だ。それだけ、『こいつ』の行動は機敏で迅速だ。緩慢に見えたのは、陽動だったのか。

跳んで躲した。佐慧が居ないので、普段よりも心置きなく跳ぶことができた。

そのまま、天井に手をついて、『それ』の背中に飛び乗る。『それは狼狽したように、体をよじらせた。廊下の横幅のほとんどを、その巨体で占めているので、身動きすることに廊下の壁が軋みを上げる。

踏み心地は最悪だ。ゼリーの様に柔らかいのに足が沈まず、その上ぬるぬるしている。気色が悪い。

だが、意外とこの位置は良好のようだ。まさか自分の背中に鎌をつきたてるわけにもいかないの、『それ』はひたすら身悶えするのみ。結果、安定しない足場が更に揺れるので、危なっかしい。

これはさつさと終わらせてしまつに限る。

チャージ充填完了した銃口をその異質の背中に向ける。そして、架空のトリガーを引いた。

閃光が炸裂した。『それ』の正気とは思えぬ咆哮が廊下に交錯する。肉片が飛び散り体液が蒸発し内臓が浄化され、閃光は全反射するように『それ』の体を蝕んでいく。

全てが済んだとき、廊下に横たわるのは黒く原型を残さない『それ』の体がそこにあった。その体の爆心となった辺りには、ぼつかりと丸い穴が空き、穿たれた廊下が見える。どうにもやりすぎたらしい。

溜息をついて、廊下を改めて見渡すと、廊下は惨禍の産物と化していた。特に、『それ』の屍の付近が甚だしく破壊されている。教室と廊下を区分する隔たりはもちろんのこと、外と内を区分する壁も木っ端微塵。夜の風が虚しく遼太の背中を粟立てる。

居心地の悪さを感じたので、その空いた壁から外に出た。壁に沿うように配置された花壇も丁寧に破壊されている。その花壇の柔らかな土の上に佇む。

校庭に、凜と佐慧の姿は見られなかった。何かが転がったような跡が校庭に残されており、三階部分に穴が空いていた。『あれ』が飛び出してきたのだろうか。そしてやむを得ずに、移動？

無事ならいいんだけど、と遼太は心の中で呟いた。

その瞬間、遼太の頭上二メートル程、二階が炸裂した。遼太の目の前に、鉄筋だのコンクリートだのが四散し落下、散乱する。

遼太はその鼓膜を大きく穿ちかねない音に目を瞑り、耳を塞いだ。だが、右腕は無機質な銃口だったので、爆音は在りのままの波状で遼太の耳に流れ込んできた。その大きさに、遼太は目を白黒させる。と、ふいに何かが落ちてきて、すぐ横の花壇の土に、刺さった。

遼太は耳鳴りに苦悶しながらも、視線を落として、その落下物を確認した。

筒。木製の筒だ。途中で突起物があつて、先端はラツパ状になつ

ている。

遼太がそれを見て、眉をしかめていると、すぐ横で今度は結構な重量があると思われる落下物の音が聞こえた。

「遅かったではないか。どこで道草を喰っていた？」

夜の景色と同化する、漆黒のフルフェイスヘルメット。それに追隨するかのように黒いコート、黒い手袋、黒いズボン。そして、流暢な流れるような黒い声。

本名は聞かされていない。『中世武器研究会』部長。

落下及び着地時の衝撃を最小限に抑えた状態。膝をついた状態からのろのろと立ち上がって、フルフェイスを遼太へと向ける。

「お陰で施設の大幅な損傷を促す結果となってしまった。この落とし前、どうつけてくれよう？」

「え……遅れてきたのは部長じゃないですか……」

あまりにも理不尽な謂れ様なので、遼太はおずおずと反論する。

その態度がこの人物の活力の糧だとも知らずに。

「人間の思考とは常に主観に縛られるのが常なのだよ。遅れてきた君たちのことを免じて、私は君たちを探し回っていたのだ。この尊大な優しさを遅刻と称して蔑ろにするなど愚の骨頂」

「……その言葉そっくりそのまま返せるんですけど……」

この部長はこの状況でもこれなのか……、遼太はげんなりする。

そんな遼太の呟きを知ってか知らずか、部長は鼻を鳴らして腕を組み、校庭をきよろきよろと見回す。

「ふむ……戒めの通り、退いたか。賢明だな」

「……？」

「そつだ、貴様にこれを渡しておかねば」

意味不明なことをぼやきつつ、部長はコートに手を突っ込むと、丁寧に畳まれたコートを取り出した。ユニホームともいえる、黒いコート。凜によれば、防護服になるのだとか。

「あ、ありがとうございます……」

遼太は頭を下げて、そのコートを受け取る。意外に重い。内側に

何か縫いこんであるようだ。黒いのは、擬態を促すものなのか、趣味なのか。見栄えを迫及するのであれば、是非とも前者であつて欲しいものである。

「さつさと着たまえ。招かれざる客がすぐに降つて来るぞっ」
「ちよ、ちよつと待つてください……」

とは言つものの、内側にゴム樹脂の様な物が縫いこまれているために、非常に着にくい。袖が妙な形になってめくれる。

なんとか着終えると、非常に防寒具としての性能が卓越しているのか、暖かいを飛躍して暑くなつてきた。

「なんだ貴様。この非常時に制服を着て来てきたのか」
部長がそんな遼太を見て言った。

「え……一応、校内ですし……」
「規律をとつたか。なるほど。自分に自信があるのか」

「い、いえ……そういうわけでも」
「度し難いな」

なんだか話が噛合つてないような気がする。遼太はげんなりとして、肩を落とした、その瞬間。

もう聞き飽きた轟音。二階から壁を突き破つて『それ』が飛び出してきた。本能と感覚の衝動に突き動かされて何も考えずに飛び出してきたのか、そのまま校庭に激しく全身を打ちつけた。

無論、そんな衝撃で『それ』が死ぬとは到底思えない。

校庭を二、三転すると、『それ』の体は停止した。間髪入れずに、鎌が暴れ出す。

遼太はそれを見て、右腕に力を溜め始めた。初めてこの能力を使ったとき、この体を牛耳つていたものは遼太の精神ではなかったが、確かこんな煩わしい充填は必要無かつたように思えるが……。

起動音に気づいたのか、部長は右腕を一瞥すると、鼻をならした。「貴様も遠距離か。非効率的だな。遠くからバックアップするから、貴様は近距離で戦つて来い」

唐突なその根も葉もない指令に、遼太は目を丸くして、部長の

つペリとしたヘルメットを見た。その無機質な表情には、感情の欠片も伺えない。

「一つの事柄が、ほとんどの能力に精通して作業するよりも、それぞれが特出した能力を持つ事柄が、合同で作業する方が効率が良いのだ。これが社会性というものだ。その人間の唯一ともいえる高尚な文化を自ら捨ててどうする」

「……？ 社会性……ええ？」

前半部はどうにか理解できたが、後半部分は言っていることが良く分からない。僕がいつ社会性を捨てて独立するような発言をした？

「それにだ。そんな我武者羅な能力に頼っているのは、成長できないぞ。毎回首尾よく浄化できるとは限らないからな。今日みたいな雑魚では練習をすべきだと私は思う」

「は、はあ……」

あれで雑魚。一体、彼らの目にしてきた怪物はどれほど凄まじかったのだろうか。でも、佐慧や凜は顔をしかめていたような気がするが。

だが、これほどに悠長な会話をしているのは、奇跡とでもいい。『それ』はすぐに態勢を整え終え、迎撃の体勢に入っている。

遼太にこの部長の意見を覆すすが無いのは既知の事実である。

ゆえん、ここは遼太が動かないと始まらない。

「弱点は目玉だ。存分にやってくるがいい」

土を蹴ると同時に、右腕を変形させる。凝縮、膨張。昨日利用した、剣へと変貌を遂げた。凜の刀とは比べ物にはならないが、人間の創造物の中ではそこそこの威力はあると思われる。あとは、遼太の腕次第だ。

もちろん、生まれてこの方こんな武器はもちろんのこと、玩具の武器でさえ触れていなかったものだから、高等な技術を持っているとは決していえない。

だが、ここで退くわけにはいかない。

部長の監視下であるか

ら。

槍だつて使えた。大丈夫だ。己にそう言い聞かせて、脚を加速させる。

『それ』の回転距離は結構なものになった。遼太が『それ』に辿り付いたところには、『それ』の戦闘態勢はとつくに整っていた。

赤い眼球が蠢き、遼太を捉えた。

挨拶も前ぶれも何もなしに、鎌が閃いた。おぞましいスピードと重さで空気が引き裂かれる。

そんなもの、弾ける気がしない。無理せずに遼太は後ろに跳んで躲す。

だが、『それ』に関節など存在しないらしい。あからさまに不自然な体勢のまま、もう片方の鎌を振り下ろしてきた。遼太は慌てて左に転がって躲す。鎌が刺さり、校庭が派手に抉れた。

第三撃が来る前に、遼太は後方に跳んで距離を確保した。

鎌が柔軟な分、接近戦は分が悪い。あの二連攻撃がほぼ無限といつてもいいほどに繰り返されるのだ。またさっきのように、背中に乗ればいいのだが……。

その時、何かが聞こえたような気がした。人がニヤける時の、口端が吊り上がったときの様な……形容しがたい音。無論、気のせいであつたのだが……。

何かが飛んできた。何か。何と説明しにくい、丸っこくも見えれば、円錐のようにも見える。それが、真っ直ぐにこちらに飛来してきて、『それ』の体に命中した。

炎が炸裂した。四散した熱気が遼太を襲う。咄嗟に、腕で顔を隠したが隙間からじりじりと熱気が迫ってきた。

少し距離を取った分、遼太の被害は皆無に等しかったが、直撃した『それ』はどうも芳しくないようだ。中央辺りに大きな穴を穿つて、身悶えしている。あれだけの爆発で、あの程度の損傷で済んだのであれば、大したものである。

が、遼太としては、木っ端微塵が理想だつたのだが。

遼太は息を一つ吐いて、地面を再び、今度は前進するように蹴った。

そして 『それ』の目玉を剣先で一突きした。寸分の狂いも無く、赤みを一層際立たせる瞳の中央に。

だが、ずぶりと食い込む感覚がしたのは刹那。すぐに剣の進行は止まった。硬すぎるのだ。目玉が。

遼太は失態を痛感した。突くのであれば、槍の方が良かったのに、すぐに『それ』は体をくねらせた。目から力任せに遼太の右腕を引き抜くと、鎌を振るった。遼太は反射で右脚を弾かせ、なんとか躲した。体勢に無理があつたので、そのまま地面に倒れこむ。

その直後、『それ』の追撃があるかと思われたのだが、そのまま鎌で地面を掘り始めた。そして、そのまま地の底へと逃げていつてしまった。

「……へ、逃げた……？」

穴も丁寧に塞がれている。器用な奴だ、と遼太は息を吐いた。

充填から斬撃へ（後書き）

もう年末ですねー。今回が今年最後のUPとなります。

そろそろこの物語を執筆し始めてから、一ヶ月でしょうか。まだまだ浅いですね。というか、全く進展しませんね……次は加速させます。

完結はどうでしょうかね。一応、ネタが尽きるまでは続けたいと思っておりますが、それでも二十五……くらいでしょうか。

とりあえずのところ、結末は考えてあるので、そこまできついで要望があれば、続行させたいと思っております。

はい、では来年もよろしくおねがいしますっ！

呐喊と慟哭

「愚かな」

部長と校庭で合流し、開口一番にそう言った。遼太は責を感じて縮こまる。

「 すいません」

「 いや、貴様のことではない。奴だ」

部長はそう言うと、『奴』が逃げていった穴の跡を見た。素人が作った落とし穴の様な違和感があるだけで、穴はもう塞がっている。「腹を穿たれ目を抉られ、存命危機的状况に置かれたのにも関わらず、傷に石垣の塩を塗りこむような行為に走るとは、度し難いな」

「 ……石垣の塩、ですか？」

「 博多の塩でも構わん」

部長は大儀そうに遼太に伝えると、木製と思しき筒を校庭に落とす。乾いた音になる。

「 なんなんですか？ それ」

遼太はそれを見て、訊ねた。さっきも真横にこれと似たものが落ちてきたような気がする。

「 これか。対戦車砲なる役割をそのまま名とした人間お手製の武器だ。一般人が分かり易いように言うのであれば、ロケットランチャーとでも言うのである」

「 ……はあ」

「 人間が互いに牙を剥きあつのを止めた今、この発射口を向ける先があやふやになってしまったから、私がありがたく使わせて貰っているのだ」

「 ……でも、犯罪ですよな？」

「 異物に刃を向けるのが犯罪なのであれば、貴様も立派な犯罪者だ」
そういえば、昼、部長と話していたときの二人称は貴君であったのに、今では貴様になっている。

「もういいです」

となると、今は緊迫した状況なのかもしれない。凜が漏らしていたが、『あれ』は全部で三匹……先ほど遼太が一匹浄化させたから、あとは今逃げた物も含めて二匹。一匹は半死とはいえ、凶器を振るうだけの余力はある。まだまだ十分に危惧すべきなのである。

「あ、じゃああの時の爆発って、部長がやってくれたものなんですか？」

そんな思考を巡らせていたら、ふと瓦解した空中廊下のことを思い出し、そう訊ねてみた。どうも先ほど目の前で見た爆発と、空中廊下からの窓から飛び出すとき、『あれ』の体を呐喊した爆発はよく似ている。別に、爆発の種類などに知悉しているわけではないので違うかも知れないが、直感ではほぼ同じであった。

「ふん。あれはこちらからの宣戦布告としての祝砲だったのだから、手違いでぶち当てたらしい」

「あ、ありがとうございます」

祝砲、という表現には突っ掛かりを覚えてならないが、結果的に救われたことには変わりないので、礼を言うておく。

「善意無しの行為に一々畏まられても困る。忘れるがいい」

宣戦布告と称して校舎を射撃するような狼藉に善意が込められていたら、それはそれで異常だ。遼太は穿たれた校舎の二階部分を見やっつて、げんなりとした。

「奴らの習性として、我々がこの学校の敷地内に居る限り、この学校外への進出はしないようだ。きちんと窓を割って棧を跳び越えるという知能を持ち合わせていないあいっらにとって、受付であるこの地から飛び出すというのは、裸でアマゾン川に飛び込むのと同等の危険が伴うのだよ」

そこまで言っつて、部長はコートを翻して遼太と同じく校舎を見据えた。修復するよりは、建て替えた方が早そうで経済的なほどにまで損害を受けた校舎が、余力を尽くして佇んでいるようである。

「あの校舎が在る限りはな」

「え……？」

遼太は驚いて部長を見た。だが、部長はそんな遼太に目もくれずに校舎に向けて、歩き出した。

「世界は人間が考えている概念以上にややこしい。平行世界が存在していると考えerる者も居れば、宇宙が幾つも存在すると考える者も居る。神が統べていると考える者も居る。だが、それは真実が見えないが故に現れる想像であり、希望でもある。人間の数だけ、世界概念は存在する。だが、人間が想像の基盤とするのは、人間の常識だ。ある程度常識から逸脱していると思っいても、常識に縛られることは免れない。それが人間の哀しい性質だ。思考の基はいつだって常識にある。ゆえん、人間が真実をその目で見るまで、人間は想像を膨らませつづける」

ぼやくように、諭すように、抑揚の無い部長の声がその後を追う遼太の耳だけに届く。

そんな演説を聞きながら、校舎の脇、中庭に入る道に入った。中庭に到着すると、倒壊した空中廊下の残骸が虚しく地面に散っていた。

「だが、想像とは虚構のもの。具現化させることはできても、することは無い。具現化する、とは人間が想像に基づいて創造するのは違うのだ。だが、想像と希望は別だ。希望は想像と違って分類できない。ただ、想像と違って無限に続くわけでもない。具現化した時点で、希望は現実となる。希望は幸福を求める上で発生する産物だ。幸福と想像はリンクしない。だが、常識は幸福と想像とリンクしている」

だんだん何を言っているのか分からなくなってきた。

「前に述べたように、常識とは人間の深層意識が構築する基盤だ。常識があるから人間は至福のために幸福を求める。常識があるから人間は解放を求めて想像を膨らませる。常識が無ければ、両者とも存在できない。だが、その常識を省いて、幸福と想像を直結できたとしたら、どうなる？」

ふいに部長が立ち止まり、振り返りヘルメットを遼太に向けた。その動作に気圧されて、遼太も立ち止まる。そして。

「想像が具現化する……ですよねん？」

「うわあああつっ！」

遼太の背後でいきなりそんな声がして、遼太は大声をあげて全身を粟立てて飛び上がった挙句、足をもつらせて尻餅をついてしまった。

「そ、そんなに驚かなくても……」

「せ、先輩……」

果たして遼太の後ろには、佐慧が立っていた。まるで背後霊の様な登場の仕方だったので、遼太の驚き様も無理は無い。いや、それでも度を越しているか。

「少佐、いつから聞いていた？」

部長は億劫そうに振り向いて、佐慧に顔を向けた。億劫というよりも、過剰な反応を見せる遼太に憤慨しているのかも知れないが。

「常識を省いて……くらいでしょうか？」

佐慧が指を顎にあてて答える。

「…… たった今ではないか。凜君はどうした」

「私を残して、一人戦闘に入りました」

「ふむ。いわゆる、『ここは私に任せて、貴方は先に逃げてツ』的なアレか」

「 そういう表現の仕方もありますね」

「なるほどな……」

部長はヘルメットの先端を空に向けて唸った。夜空の光を独占している月が躍っている。

やがて、遼太の方に向き直って言った。

「貴様は凜君のもとへ赴いてやれ。話はその後だ」

「え……？」

未だ尻餅をついたままの遼太は、茫然と間抜けた声を返す。

「今……からですか？」

「明日行っても私は構わん」

「い、行かせてもらいます」

遼太は頷くと、立ち上がり、そして、佐慧を見て言った。

「何処でやってますか？」

「今も動かずやってれば、テニスコート周辺よん」

「ありがとうございます」

そう言つて、遼太は地面を蹴った。

テニスコートは、第三校舎と旧校舎の中ほどに位置している。義務として渋々作られたような感じだ。部員の確保もままならないので、趣味として兼け持ちする生徒が多いらしい。顧問もあからさまに文化系の教師という点も重なって、涼属高校のテニス部はさして強くない。

万一の為に、遼太は右腕を予め銃身にしておき、チャージを始めた。さっきの感覚から、別に最大まで充填する必要は無いらしい。だが、もちろん限界まで溜めておけば、それなりの応酬が得られることは言うまでも無い。

八割ほど溜まったあたりで、テニスコートが見えてきた。三面だけあるコートを、フェンスがぐるりと囲んでいる。そして、そのフェンスの一部が見事に損壊していた。内から質量のあるものが猪突猛進してきたような穴が開いている。犯人なんて考えずとも答えはでる。

だが、生憎と犯人もそれを追う狩人の姿も見られなかった。コンクリートを固めて作つてあるテニスコートは、土のみの校庭と比べれば穴を掘つた後の跡は目立つだろうが、そんな痕跡も見あたらない。

とりあえず、遼太はコートへ入つてみることにした。

特に変わったところは見られない。鎌を振るつた傷跡も、『あれ』が這った跡も見られない。いくら暗いとはいえ、あの鎌で地面を抉れば見落とす筈は無いのだが……。

遼太がコートの中ほどに立ち、周囲を見渡していたその時。

地面が隆起し、割れて、その割れ目から、『それ』が鎌で地面を刺し、それを支えとして地面から這いずり出てきた。

傷が無い。恐らく、凜が交戦していたと思われる『もの』だ。

となると、凜はひたすら防御に徹していたことになる。そして、ここに凜が居ないということは……。

既に右腕は満タンだ。撃って当たれば浄化できる。『これ』を殺せばあとは半死状態の『それ』のみが残る。

遼太は右腕を上げた。その先端を『それ』の目玉へとむける。『それ』は威嚇のつもりか挑発のつもりか、目玉で遼太を捕捉しつつ、やたらと咆哮している。

逃げる気がないのであれば、さっさと終わらせてしまおう。

右腕から力を抜いた。エネルギーが腕の中で逆流し決壊し漏洩しその流れが主流となつて一本の線を紡ぎ、一直線に『それ』の目玉へと向かっていく。校舎が紫白に染められ、月が赤く塗り潰され、あたりにこれ以上も無いほどに閃光が蔓延り、その光源のエネルギー光線が赤い眼球に触れると思った。

その時。

『それ』の目の前の地面が再び裏側から突貫され、もう一匹の『それ』が踊り出てきた。這いずりであるようにではなく、飛び出てきたのだ。

点を結ぶ線分上に、新たな点が現れる。すると、どうなる。

簡単な話だ。新たな点は、基の点から一番近い距離にある。

つまるどころ、遼太と部長で痛めつけた『それ』は、最後の力を振り絞って唯一壮健を保持している『それ』の盾になることを決めた。

いや、意思の有無はこの際どうでもいい。

結果、その光線は『それ』の腹に直撃し、『それ』はあっさりと蒸発して消えてしまった。だが、光線は決して貫通はしなかった。

遼太が驚愕し、硬直した一瞬を健全な『それ』が看過することは無かった。

燻る煙の向こうから、『それ』が鎌を振り上げ突進してきた。その巨体からは想像できぬほどの機敏な動きに、遼太の脚は咄嗟に動けない。

赤い目玉が彎曲したように見えた。動けぬ獲物を前に舌なめずりする狩人の様に、心底から喜びを込めて笑むように……。

遼太は目を瞑った。いつの間にか死と直面している。というか、死という概念にすっかりと足首をつかまれている。だが、戦慄は無い。恐怖も無い。畏怖も虞も不安も焦燥も何も無い。かといって、喜び等といったポジティブな感情もない。

賭博。結局のところ、この部活動に運という要素は必要不可欠なのだ。何回目だろうか、自分の命を担保にするのは。今回の倍率は高い。勝った暁の報酬は、何も無いに等しい。存命権だろうか。ただ、負けると死という返すに返せない負債を抱えることになる。

目を開いた。

ゼロコンマの世界での大きな障壁となる空気を持ち上げるように、右腕を突進してくる『それ』の目玉にではなく、校舎側のフェンスに向けて、余力を尽くして力を放った。

充填無しエネルギーなど高が知れている。せいぜい、水を沸騰させる程度だろう。

だが、そんな細かいエネルギーでも、損傷したものにぶつけられれば、被ったものの損害はただでは済まない。

フェンスが音を立てて『燃えた』。穿たれた穴を中心として、瞬時に燃焼し尽くされて、即座に消し炭と化す。こうして、フェンスには即興の空間が出来上がった。

その数瞬後、何か巨大な無機物が、空を裂く音が聞こえてきた。

否 その音は『それ』が突進し始めたときから聞こえていたのだ。巨大な 巨人の剣と比喻されても、本当だと愚直に信じてしま

いそうな程に、三十メートルは優に超しているであろう巨大な剣が刃を地面に向けて、倒れてきていた。

そして、フェンスの空間に差し込まれるように落ちて、『それ』の体に激突し、その重みと刃の鋭利さで『それ』の身体を二つに割く。体が唐突に乖離されたが故、体液が水風船を割ったかのように噴出し、テニスコートを黒く染めた。

鎌は生命力を無くし、振り下ろされることはなくなったものの、二分された体のうちの前の部分は勢いを殺せずに遼太にそのまま突っ込んできた。赤く何も見ていない眼球が。

目玉に抱きつかれるように衝突され、そのままフェンスまで吹っ飛ばされる。酷い圧迫感と、フェンスに体がめり込む痛みが目眩んだものの、その鎌でみじん切りにされることは無かった。

「うあッ！」

ただ、体液の臭いなのか、強烈な刺激臭が遼太の鼻腔を激しく突いた。目もやたらと沁みる。その上、感触が最悪の目玉が懐に収まっている。助かったのはいいが、状況が悲惨すぎた。これなら、スITCHの入っていない大型冷蔵庫で腐った肉と同居する方がマシだ。遼太は目玉を蹴ると、おぼつかない足取りでテニスコートからだと、膝について胃の中のを吐いた。内容物の排出に伴って、胃酸も共にせりあがってきて喉を焼く。喉にひりひりとした独特な不快感が押し寄せてくるが、大方スツキリとした。

だが、それは気分だけだ。刺激に苛まれている目からは、どぼどぼと涙が溢れて来ている。体は突然の圧迫によりがくがくと痙攣している部分がある。喉が痛い上に、零しきれていない胃酸が口から漏れて、口がきけるとは思えない。体に及んでいる影響が消え去るのには、もう暫く時間が必要だ。

よろよろと立ち上がった、再び揺れる足取りで校舎の壁まで向かうと、背中を丸め手についてげほげほと堰き込む。病魔と闘う

人たちは、こんな辛い発作に毎日苛まれているのだろうか。遼太は涙で渗む視界で地面を捉えつつ、そんなことを考える。他人事

じゃないな。

そんな今は亡き『あれ』の遺産に苦しめられている遼太の背中に、
何かがぽんと載せられた。

「大丈夫？」

凜だ。辛苦に身を呈している遼太の背中をさすっている。

先ほど遼太を危機から救った巨大な剣は、凜のものである。不意
打ちを予測していた凜は、保険として剣を刺し向かせておいたのだ
が、その危惧は見事に的中し、『それ』のカウンターが入ろうとし
ていた。巨大剣は上手く『それ』の行く手を阻むことに成功したと
思ったのだが、ここに誤算があった。

フェンスだ。ボールが飛び出さないようにするために設置された
このフェンスのため、微妙なズレが生じて、『それ』に王手を取ら
せてしまう。

だが、危ういところでフェンスは消え失せた。そして、剣はその
まま『それ』の身体を引き裂いた。

という顛末である。これは、遼太が落着いた後に聞いた話で
あるのだが。

遼太は悪臭に苦悶しつつ、顔を上げてぼやける視界で凜の顔を確
認した。委細は良く分からないが、不安が表情に表れているのはな
んとなく分かる。

「うえ……だ、大丈夫……」

とはいうものの、涙は止まらない。嘔吐が再び目を覚ました。涙
に伴い鼻水も逆流してくる始末。全然大丈夫に見えない。格好つか
ないな、と遼太は心の中で苦笑した。

「……うん、大丈夫、だから……」

だが、話し掛ける凜の口調は泣き喚く子供を諭すような調子だっ
た。背中のもりも安堵を拡張させるような、優しさが感じられる。
遼太は何かおかしい、と思って堰を漏らしつつ、背中を真っ直ぐ
に伸ばして、凜を見た。だが、すぐに視界は涙で満たされて、やむ
をえず手で拭うために下を向く。更に、嘔吐が追撃だと言わんばか

りにせりあがってきた。

その旨を伝える合図として掌を突き出すと、そのままぐるりと振り向いて、再び吐いた。本当に臭い。死んで尚、自分を殺めた者を苦しめるとは、その執念は人間に匹敵する。その点は賞賛すべきなのだろうか。遼太は袖で口元を拭いながら、そう思った。

大分落着いたので、凜を安心させようと、振り向こうと膝立ちをした。だが、それは何かに憚られる。

「大丈夫……」

凜が後ろから静かに抱き付いてきていた。遼太の思考が一瞬どこかに吹き飛ぶ。

「あ……」

振り返ってその事実を確認した遼太が発したのは、そんな間の抜けた声。

二人はびつたりとくっつきあつたまま、動かない。遼太は動くに動けないだけなのだ。

そして 遼太はあることに思い至って、恐る恐る言った。

「……臭くない？」

「うっえええ……何この臭い……」

途端に凜の鼻声が聞こえてきた。遼太が『それ』の突進を喰らう光景は、彼女からは死角になっていたのだ。抱きつかれたコートは、『それ』の体臭と体液でべとべとになっている。直接よりはまだマシなほうだが、それでも大変な臭さであるはずだ。

その後、二人は涙腺の暴走が収まるまで、ずっと二人夜の学校で泣きはらしていた。 子供の様に。

呐喊と慟哭（後書き）

うー、真冬の深夜の気温は恐ろしく低くて、恐ろしく鋭利に肌をついてきます……初詣に行った人は、ご注意を……って、もう三日か。早いものです。明日から本腰を入れなければ……。

さて、人間編お終いです。いかがでしたでしょうか？

あー……、うーんと、一応、人間が原型なので、うーん、そういうことにしてくれると、ありがたい……結局化け物でしたけどね；当初二、三話で終わらせると報告してありましたが、結局四、五話分に膨れ上がってしまいました。プロットの短い指示がこんなにも！

というわけで、完結は半年先かもしれませんが、それでも、懲りずに怠慢なこの作者に付き合ってくれる方が居ることを信じて……

t o b e c o n t i n u e d

今日の解散通告

午後十一時二十二分、>レッド<の駆逐は完了した。残ったのは空中廊下だった瓦礫の山と、校舎に抉られた穴と、各所に穿たれた爪痕である。

それと、大量の排斥物と涙。

凜への影響は、遼太のコートを通してのものだったので、そこまで深刻にはならず、今では収まっているものの、直に喰らった遼太に関しては、明瞭な視界を手に入れるのにまだ時間が必要のようだ。部長は未だぼろぼろと涙を流す遼太を一瞥し、溜息をついた。

「やれやれ……いい加減泣き止め。男だろう」

「こ、これは不可抗力です……あんな臭いなんて聞いてませんよ……」

「教えてないからな。まあ、いい経験になっただろう」

自分から振ったのに、酷い鼻声で応える遼太には全く興味を示さず、部長はついと視線を校舎に向ける。凜はまだ余蘊な涙が残る目をぐしぐしと擦りながら、そんな部長を眺めていた。

被害の方は、第一校舎は半壊もとい四分の三以上が壊れており、空中廊下は全壊、第二校舎は窓ガラスが割れた程度である。それとテニスコートフェンスの消滅と、校庭とコートにある地面の掘られた跡。どれも特撮レベルの損害である。

「全く、少佐が居なければ、私は何回自己破産したことが」

部長はその惨禍を聞いた途端に、大義そうに肩を竦めた。自己破産で済むのであれば、警察は要らないんじゃないかと凜は思う。器物破損にも度が行き過ぎている。

>レッド<が破壊したものに關しての責任は、基本的に唯一それと対峙できる『中世武器研究会』が負うことになっているらしい。傍若無人な部長にしては、珍しい正論である。

随ってこれらの被害の責任は、『中世武器研究会』が背負うこと

になるのだが　常識的に考えて、高校の非公式ともいえる一部活
が、これだけの代償を払える訳が無いのだ。

それなのに、この部長はことあるごとに、無駄に被害を拡大させ
そんな無茶な真似をする。とはいえ、凜もそれなりにやむを得ず
することもあるのだが、それを最終的に決行させるだけの支えは、
この目の前に居る凜の他、唯一の女子部員である佐慧である。

凜も遼太の腕を謝って刈り取った際、彼女の力を借りていた。意
識を削ぎ取るそれは凜がナイフからの精神磁場によって、意思的に
睡眠を促したものであるから、佐慧のものとは異なるが、仮の右腕
を作り上げたのは彼女の能力によるものだ。彼女の思想を受容でき
る無機物があれば、一回につきケースまでこのような汎用が出来
るのだ。

そして、その無機物とは、このナイフであった。

部長はやれやれと首を振ると、佐慧の顔を見た。

「では少佐、今晚は少しばかり広範囲だが、頼んだ」

「はい」

佐慧はおっとりと応えると、目を閉じた。

幸いにもこのコートの遮断性は、通常のそれを遥かに凌駕してい
るらしい。

もしやコートを抜けて、制服までもがこの悪臭に蝕まれているの
ではないかと冷やりとしたが、全くをもって無事だったので安心し
た。

悪臭コートは、部長が洗ってきてやると言ってきたので、手渡し
である。元々遼太のものではなかったので、拒否することはできな
かった。まあ、家に持ち帰ったところで、空の涙目を見るだけにな
るだろうが。市販の洗剤で完全に払拭できるわけが無い。

「さて　諸君、さっさと帰っていいぞ」

大分目が落着いてきた矢先、部長からそんな言葉が掛かった。

「え……校舎はこのままで良いんですか？」

「校舎だと？ グレードアップでもさせるつもりか？」

遼太が困惑して、そう言うのと部長はしれっとしていい返してきた。「ぐ、グレードアップとかそれ以前に、あのまま壊したまんまで良いんですか？」

「何だ、貴様。校舎を背中に向けてるのか、つまらんな」「え……？」

部長の言う通り、遼太は校舎を背中にしていた。

何かに弾かれるように、遼太が振り向くとそこにはいつもと変わらぬ……とはいっても、夜の学校は少しばかり雰囲気が違うが、校舎がそこに佇んでいた。

部長が抉った大きな穴も見えなければ、大破した窓ガラスもきちんと元通りにそこに嵌っていた。

全ては完璧に修復されて、『何事も無かったかのよう』に、涼属高校の校舎があった。

「驚くのも無理は無い。私も最初は疑った。少佐のような、反則的な存在があるとはな」

部長は愕然としている遼太の反応を面白そうに眺めて言った。

「障壁となる常識を駆除し、想像と希望を結び付けて具現化させる能力があるとはな」

「もつと端的にいえませんか？」

そこで当人である佐慧がいつもと同じ調子で言った。部長を睨むでもなく、静かな微笑　公園で遊ぶ子供を眺める保育士のような表情である。

すると部長は少し考える仕草をすると、いい答えが思いついたようにヘルメットを揺らすと遼太を見た。

「要するに、願望を実現してしまうのだ。即席で、な」

「……そういうと、語弊が生じます……まるで私が魔女っ子みたいじゃないですか」

「確かに、魔女っ子と言えど、万能ではない。欠点は存在する」

佐慧の意見を聞こうともせず　だが、ちよつとした揚げ足だけ

はとつて、遼太に腕を突き出す。

「仮にでも少佐は人間だ。常識の排除によって想像を具現化するといえど、多少の常識の判別は存在するのだ。人間が一朝一夕で病を克服することはありえない。動物の食物連鎖が一晩で逆転することはない。双方どちらも実現してしまえば、来月あたりに地球は植物だけの星になっている可能性も否定できないのだ。そして、健気にも少佐にはこのような常識が根付いて引っこ抜けないう状態にあるがゆえん、少佐が影響を及ぼすことができるのは、無機物の存在についてだけだ」

「反応に困って、遼太が視線を佐慧の方に逃がすように向けると、佐慧は柔和な笑みを浮かべて、口を開いた。

「だから、私が介入できるのは、こういう建造物とか、そういう多くの人が当たり前と認識しているものの保持くらいなの。平たく言っちゃえば、ねん？」

「そういうことだ」
「はあ……」

部長は腕を引っ込めて、遼太は肩を落としながら、相槌を打った。すると、昨晩半壊した校舎が修復されていたのもやはり、佐慧のしたことだったのか。遼太は今更ながら、納得する。

「それと、奴らをこの学校に押し留めているのも、少佐だ。少佐の在らぬ能力は、範囲を限定すればその範囲内での特殊なルールを定めることができるのだ」

部長はコートの中で何かをガシャガシャと整理しながら、再び説明に入り始めた。

「この高校の敷地内では、校舎が存在する限り、『人間』の許容範囲を逸脱する有機物の校外の進出は一級罪とする。この様な、いわゆる条例のようなものだ」

「……一級罪？」

「設定主は少佐だ。基を決めたのは私なのだがな、いわゆる死

罪だ。存在を消滅させられる」

存在の消滅。その言葉に、遼太の背筋が粟立った。

「こういう理不尽な条例にはな、それなりの制約が居るのだ。この場合は、校舎の存在が条件だな。校舎が全壊すれば、奴らは校外への進出が可能になる。それが、我々の敗北だ」

「え……でも……、昨日は外出てましたよね？」

昨日の畑での惨事を思い出し、遼太が自信無さそうに言った。

「昨日は少佐が居なかったからだ。主である少佐が居なければ、その条例は判子のない誓約書と同じだ」

主。その言葉に、右腕が反応した様に感じたが、どうも遼太の思い過ごしだったようだ。

そこで、遼太はようやく右腕の『発動』状態のままだということを感じ出した。

「そういうことだ。分からなくてもいいが、一応頭に入れて置け。」

これは部則だ。それではさらばだ、諸君」

部長は役目を終えたつもりなのか、それだけ言うときささと帰って行ってしまった。全身黒ずくめの背中が闇に溶けて、瞬きをするとうすぐ消えてしまいそうで、妙に寒々しかった。

遼太はとりあえずこの体が妙に軽い状態を解除しようと、右腕を叩いたりどこかそれらしい部分を指でなぞったりしてみたが、何も起こる気配が見られなかった。ちなみに、銃身だったそれは、既にデフォルトの腕に戻っている。

「何してるのん？」

すると、佐慧が気になったのか、横から覗き込んできた。

「あ、いえ……どうにも……」

「腕がおかしい？」

「そういうわけでも……」

「そう？」

しどろもどろに伝える遼太であったが、佐慧は納得したのか遼太から身を引いた。

「それじゃあ、私もこの辺で。じゃあね」

「あ、はい……」

それから手を振って、帰宅の旨を告げると、ほわんと振り返って校門へと向かっていった。

その後姿を見やりながら、遼太は肩を落とす。なんだかんだで、無事に終わった、という実感が今ごろ湧いてきたのだ。

それから、腕に視線を落とした。流石にこのままというわけにもいくまい。この義手には色々世話になった節がある。ずっと解放状態では、流石に疲弊するだろう。

そう遼太が考えた矢先、腕が浮いたような感覚に襲われた。音も無ければ、予兆のようなものも無く、ただ自然現象の様に。

その数瞬後、体が一気に重くなった。正確には、元に戻っただけなのだが、人間の環境に適應するために発達してきた慣れという習性が、裏目に出てこのように感じてしまうのだ。

「完了する際は、解除コードを要する」

それから、懐かしくも感じる義手の無機質な声が聞こえて、遼太は安堵した後、疑問をおぼえて反芻した。

「解除コード？」

「肯定。設定の旨の報告を怠った。謝罪と同時に、解除コードの設定を要請する」

「か、解除コード………ねえ………」

セキュリティのようなものだろうが、あまり必要ないのではないかと遼太は思う。だが、そんなことを分かっているのであるが、義手は淡々と続ける。

「主マスターのみの解除と限定するため、録音されたそれを如実に制定する。録音の秒読みを開始」

「ちよ、ちよつと待って！」

そんな唐突に言われても、困るというものだ。優柔不断な遼太がそんなさっさと決められる筈も無い。

「五、四、三」

「まままま、待ってっ!」

「不可」

自らの腕にまで冷たくあしらわれている。遼太は軽い眩暈を覚え始めた。

「二、一」

そして、冷酷にそのカウントの終了が宣告される。
「零」

結局、適当に思ったことを叫ぼうと思った、その寸前で。

「帰ろ」

後ろから、声が掛かった。

「録音成功」

遼太は義手の成功の言葉を聞き流し、振り向くと 控えめに手を伸ばした凜が立っていた。

「な、何……?」

「な、何って……帰らないのって……」

ふいに声を掛けられた驚愕と、秒読みからの焦燥から生じた遼太の表情に臆したのか、凜は控えめに小さな声で言った。なんとなく、自分の間の悪さを実感しているのだろうか。

「あ……」

遼太はそれには応えずに、腕を見下ろした。義手は、相変わらず無感情に、応答する。

「以後の解除コードは、この肉声の主がコードを入力することと設定する」

「……と、いうことは……」

「……え?」

遼太が視線を上げると、再び困惑を凜の顔がある。自分がまだ何をしているのか、全く分かっていない顔だった。

「うーんと……それは、私が『部活』が終了するたびに、佐貫君を誘わなくちゃいけないってこと?」

「んー、そういうことも……」

とりあえず、今あるところから話すと、色々面倒な点も発生してくると思ったので、最初の『発動』のあたりから話しておいた。

「……嫌なら別にそれはそれで良いんだけど……」

眉を吊り上げて、不機嫌そうな面持を作る凜を見て、遼太は引き腰気味に、そう言った。すると、凜は目を見開いた後、慌てたように言い繕った。

「べ、別に嫌なんてことないからっ。で、でも……一つ、頼みたいことがあるんだけど……」

急に声を小さくした凜に、遼太は疑問符を浮かべる。

「何？」

「……あのことは忘れてよね……」

「あのこと？」

「そう……あのこと……」

「ゴメン、心当たりが……」

視線を逸らしたい衝動をなんとか誤魔化し、遼太は素直に告げると、凜の方が視線を逸らした。どことなく顔が赤くなっているような気がする。

「だ、だからあの時、最後の奴を殺したときの……」

「ああ……う、うん、大丈夫……っっていうか、見てないから」

泣き顔が見られたのが嫌だったのか、と遼太は納得した。

「そ、そっちじゃなくて……」

だが、凜はもどかしそうに首を振った。

「その……行動の方……」

「……、なんかしてたっけ？」

「お、覚えてなかったら、無理に思い出さなくていいからっ！」

なんでそんなにムキになるんだろっ、と遼太は首を傾げつつも、思考をめぐらせるのを中止した。あの時は、動転していたので身悶えていたことしか記憶にない。どうもそれから記憶の幅を広げていくのは難儀しそうだった。

「そ、それじゃあ、よろしく」

「え？ あ、うん……」

とりあえず締めとして、遼太がそう言うと、凜は頷いた。

それから凜は、再び視線を逸らして、改めた調子で言った。

「それじゃあ、帰ろ……？」

「う、うん……」

凜のそんな言葉に、遼太は何の考えも無しに頷いた。大分あれから経っているから、恐らく空は寝ているだろう。いや、起きているかもしれない。起きているからどうしたとか、そういうことでもないが、なんとなく寝ていてくれるとありがたい。

「えっと、家、どっち？」

そんな儂い希望を懐きながら、遼太は凜に訊ねた。帰ろうと促されても、方向が同じでなければ意味が無い。

……しかし凜は、訊かれて初めてそこに気づいたのか、顔に動揺を浮かべた。隠そうとしている様だが、ほとんど隠せていない。口は生半可に開かれ目は泳いでいる。

「……あ、ごめん……私、電車通学だった……」

「……そっか……」

この高校は地元に住んでいる生徒が多いものの、市外から通う生徒も少なくは無く、別に身近な人がそうだったとしても、驚く要素ではない。

「じゃ、早くしないと電車出ちゃうから、じゃね」

「あ、うん……」

そうして、凜は逃げるように駆け足でその場を去っていった。

遼太は息を吐いて、校舎を見上げた。全くの新築というわけでもなく、今までと同じようなある程度老朽化した校舎。

佐慧の能力の原理はいまいち分からなかったが、万能な希望実現能力は無いといていた。すると、この校舎は佐慧が勝手に作り直したもののなか、それとも時間を逆行させて元通りにしたものなのか。

何にしろ、遼太が目の前にした物には謎が多すぎる。かといって、それら全てに究明を求めようとは思わない。

寧ろ、謎の存在を知らなかった方が良かったと、遼太は思えてきた。

今日の解散通告（後書き）

こんな場面のために一話使うほど、恐ろしくだらだらしてやってきたんですが、これから急展開させます…… ちよいと申し訳ないんですが……。

一応、節目となる完結は練ってあるので、このまま突っ込ませれば…… 終了となります。嫌な表現ですが。

完結を決定した理由はというと、色々と忙しくなるからですが、まだ二ヶ月は終わらないと思いますし、結局まただらだらと長引いて、更に気が変わったりでもしたら、いつまでも続いていくと思われず。

ということ、コメディ重視の話がほとんど無くなると思われず。とはいっても、ずっとシリアスタークな重々しい場面が続くとも思えませんが、作者の性格からして。

以上です。ありがとうございました。

今日の作戦通告

家に入る前、遼太はふと右腕を見下ろした。昨日や先ほど違って、右腕は露出している。空に見られたら、少し厄介である。

どういうことか、傷はさつき確認したが、全て消えていた。銃弾は摘出したのだが、それによって穿たれた銃創はそう簡単には消えないはずなのだが……、傷どころか弾丸によって破れた制服まで元通りになっていた。これも、佐慧の能力なのだろうか　まるで、本当に天体観測に行つて来たようだ。記憶を改ざんしてしまえば、本気でそう思い込めるだけの容姿ではあつた。

先ほど、コンビニの壁時計で確認したら、時刻は十一時四十分を廻っていた。いつもなら、この家は活動を休止している筈なのだが、今日は違う。玄関から光が漏れている。まだ起きているのだ。

別に毛嫌いしているわけではない。お互いきょうだいの居ないためか昔から過保護なところもあり、遼太が危険な活動に身を呈していると聞けば、決して黙つては居ないだろう。心配させたくないのだ。

右腕は黙つたままだ。義手にも対抗策が思い浮かばないのだろう。ハンカチでもあれば隠せるんだけどな……、と齒軋りする。いつも忘れてくるのだ。今度からはきちんとしないと……。

突つ立っていても始まらないので、ドアに近づくと、恐る恐る開いてみた。中の光がじわじわ漏れて、暗い地面に流れ込んでいく。

滑り込ませるように中に入ると、ドアをそつと閉じた。幸いにも、そこまで大きな音はならなかった。

だがそんな小さな音でも、餌の封を解かれた音を聞きつけた猫の様に見れるのが空である。今程度の音では気づいてやってくるだろう。昔、本当にそつと入ったら、気づかなかつたのか玄関先までやって来ず、不安に思つて台所を除いたところ、空はひどく驚いて指を包丁で派手に切り刻んでしまったことがある。あの頃からの癖で、

こうして音をたてることを心がけていたのが、仇となってしまったのだが。

来なかった。だが、居間の電気はついていてる。

遼太は不審に思って、靴を脱いで家の上がると、居間に向かった。ソファと机とテレビなどといった、基本的に一般的な家具が置かれている居間に立ち入り、視線を一巡させると。

「……ん……」

空はソファの上でクッションを抱いて丸くなっていた。辛うじて意識は保っているようだが、活動は億劫なのか目は虚ろに遼太を捉えている。

「……お帰り……」

「お帰りって……寝てなかったの？」

「……うん……」

一声の度にもぞもぞと身動きする。

「……ん……」

「……ただいま」

「……お帰り……」

やがて、空は大きく欠伸を漏らすと、上半身を起こした。遼太は危うく右腕を背中に隠す。

「ね、寝てても良かったのに……」

「うーん……？ いつもこれくらいに寝てるよ……」

首をがくんがくんと揺らしながら、空が答える。額を突付けば、そのまま寝入ってしまったらしいそんな柔らかな表情をしている。

「どうする……お風呂入る？」

「いや、いいよ。このまま寝る」

「そう……」

遼太がそう答えると、空は残念そうに 眠気に耐えられなくなったように目を細めた。それから、風にあてられた紙の様に、ぱたんとソファに再び倒れこむ。

それから、健やかな寝息が聞こえてきたので、遼太はホツとして

自分の部屋に戻ろうと背中を向けた。

すると、その制服の裾を何かが掴んだ。

「一緒に寝ようよう……」

見るとそんな声とともに、空の細い腕がにゅっと伸びて、遼太の制服をしっかりと握っている。その甘ったるい声を聞いて、遼太は全身総毛立った。

「いつかね……」

「うん……」

究極の逃げ台詞を言うと、眠気の絶頂に立たされていた空は思考が上手く働かなかつたらしく、そのまま頷いて夢の中へと飛び込んでいった。遼太の制服を掴んだまま。

結果的に、右腕は見られなかった。それはそれで

次の日の朝、きちんと右腕に手袋を填めて露見対策を施した後、いつもに増してテンションの高くなった空を声を背中に受けて家を出た。

冬の太平洋側の気候らしく乾いた空気に、控えめに照らす朝日。毎日変わり映えしない、ほぼ固定されているといつてもいい家の周囲の風景。遼太の身なりも、右腕を覗けばほとんど変わらない、制服の冬服。

遼太はそんな淡白な空を歩きながら見上げ、鼻で深呼吸する。

昨晚の疲れはやはり完璧には取り除けなかった。朝は珍しく起きそびれ、空に起こしてもらったし、今も眠気が僅かに瞼に残っており、重圧を加えて来ている。朝がこんなにだるいと感じたのは初めてだ。欠伸が漏れる。

ただ、そんないつもよりもローテンションな朝にも、違いが現れた。

いつも引つ掛かる信号にたどり着くと、遼太は色を確認しようと視線を上げて 息を呑んだ。

その信号で待っていた人物は、その息を嚙下した音が聞こえたの

か、それとも何気なく向いたのか、遼太の方を向いて　ぎこちなく言った。

「…………お、おはよ」

遼太は少し毒気を抜かれながらも、軽く手を挙げて返した。

「あ…………お、おはよう…………」

そこに居たのは、鞆を肩から下げて、マフラーを巻いている凧だった。信号機を支えている電柱に手をつけて、いかにもそこで待っていたような体裁を見せている。

「あれ、待ってたの？」

そのあからさまな姿勢に、遼太は当然の如く疑問をもって、訊ねると凧は顔を不機嫌そうに歪めた。

「ま、待ってるわけないじゃん、偶然だって、偶然」

「偶然…………だよね」

「うん、そ。たまには道を変えてみようかなあって…………ね」

「へえ…………」

凧の顔に安堵が浮かんだのだが、遼太は気づかなかったようだ。それには気づかなかったのは、別の事柄に気づいたからなのだが。

「信号青みただけど…………」

遼太は凧におかまい無しに、信号機を見据えてそう言った。凧が慌てて確認してみると、確かに青く点灯している。そして、そのまま点滅して　赤になった。横断歩道を横切るように、車が突き抜けていく。

「……………」

押し黙る凧。泣きたいのを懸命にこらえようとしているようにも見えなくも無い。遼太はそんな凧の様子には微塵にも気づかず、頭を掻いている。

「ここは青信号短いから、外すと長いんだよなあ…………」

その日の授業の終わりのチャイムが鳴った。係の号令と共に挨拶がなされ、教師が教室から退き、教室に安寧が訪れる。

それは日頃の常なのだが、今日は妙にそわそわして落着かなかつた。遼太ではない、周囲が、である。正確には、遼太はいつ校舎が崩れ出さないかと冷や冷やしていた。無論、そんな野蛮な事件は発生しなかったのは言うまでもない。

周囲、とは無論周りの同級生たちであるが、いつも通り友人と談笑してホームルームまでの時間を潰しているのは変わりが無い。だが、明らかに動揺というか、意識をしているようで、いつもの賑やかさとは打って変わって葬式後の食事会の様な、どことなく緊張しているような空気が感じられる。あくまで遼太の感覚での話なのだが。

その原因は、遼太のすぐ隣の席にある。

隣の席の女子生徒、葉山実璃はやまみりの行方不明、である。

今朝のホームルームでその詳細が担任から説明された。

一昨日の晩、出かけていったきり帰ってこない。心当たりのある生徒は申し出るように。また、目撃した生徒は接触をはかり、連れ戻す及び警察に連絡すること。家族からの要請だったという。

遼太は隣の生徒の消失だというのに、ほとんど関心は湧かなかつた。根本的な理由を述べるとすれば、校舎の崩壊を畏れていたからだ。空中廊下を通るときも、気が気でなかった。座りこまなかつただけ良い。

ホームルームでの担任の話が終わると、遼太は立ち上がって、部屋に向かうことにした。途中で安藤に捕まったが、丁寧に断っておく。実のところは、そんなSF的なことを知らずに悠長に（ハリボテの）馬にでも揺られていられれば楽だっただろうな、と思っているが、今更どうしようもない。入部届も哀れにも提出されてしまっているから、もはや限られたレールの上でしか走ることができなくなってしまった。

下駄箱で靴を履き返ると半ば走るように、第二校舎の後ろに悄然と佇んでいる旧校舎へと辿り付いた。旧校舎の壁も、漏れなく綺麗に修復されている。望みが具現化する云々言っていたが、具体的に

はどう作用するのか、いまいち要領を得なかった。常識で縛られているとはいえ、随分と違法な能力とも思える。

一人で旧校舎の部室を訪れるのは今回が初めてだ。三人が一度に一段に載ったら、即座に抜けて落ちそうな古い階段を上りながら、遼太は昨日の道筋を思い出し、反芻させる。

記憶に齟齬は存在しなかったらしく、やがて『中世武器研究会』と銘うたれた部室の前までやってきた。

初めて習い事の教室に来た気分で、遼太は緊張して強張る右腕でノブを掴み、開いた。

そして、目に飛び込んできたのは、がらんどうの教室。

胸を撫で下ろすべきなのか、それとも戸惑うべきなのか。とりあえず、遼太は扉を抜けて中に入り、扉を閉じて、逡巡する。

とはいっても、誰も来ないということは絶対に無いだろうか、遼太はそこで待つことにした。

暇なのでパイプ椅子に腰掛け、室内をじっくりと観察させてもらうことにする。中央に集会机、壁際にダンボールの群れ。遼太の背後にもある。隅に簡単な流しに、凜の言っていたコーヒーマーバ。もしかしたら、この教室は小学校時代の職員室なのかもしれない、と遼太は漠然と思った。それにしては、この流しやコーヒーマーバーに埃が溜まっていない。それだけ頻繁に使用しているのだろうか。

しかし、この教室、時計がない。時間の経過がわからず、遼太はそわそわとする。なんだか留守中の他人宅に侵入したようで、居心地が悪い。

そういえば、鍵が掛かってなかったな……と遼太が扉を見て、思ったその時。

「背後には常に気をつけるんだな」

ふいに背後から声が聞こえた。淡白ですり抜けるような声の割には、毒気のコモった声。

全身が気持ち悪くなるくらい粟立った。そのまま、声のした後ろ

を振り向くと 無機質な黒い銃口が遼太を覗いていた。

「わああああっ！」

昨日のトラウマがぶり返し、遼太はパイプ椅子から飛びずさって、そのまま机に後頭部をぶつけた。コーンという乾いた音に、鈍い痛みが重なり視界に火花が散る。

「小心者め。弾切れた」

その声と重厚の主 部長は苦々しく言うと、手にもったそれを床に投げ捨てた。金属が弾ける甲高い音。遼太の後頭部に突きつけられていたそれは、軽くなったバズーカだった。

ちなみに、部長はダンボールの中に身を潜めていたらしく、やがて億劫そうにその中から這いずり出てきた。

「な、な、何してたんですか、ここで……」

遼太は偏頭痛を無視して、目の前の（外見的な意味での）黒人を見た。相変わらず不遜な姿勢である。

「何、ドッキリ作戦だ。暇だったもんでな」

「ひ、暇人過ぎます……」

「暇人だ。生憎と私はここの生徒ではないのでな、午前中は暇なのだ」

「ご、午前中って……仕事してないんですか？」

「こんな格好をしていても、雇ってくれる酔狂な場所で働きたくは無いです」

「じ、自覚あったんですか……というか、それを脱ごうとは思わな

いんですか？」

「これが私のスタイルだ。これを変えたら、私は私ではなくなる。

次世代の私になるのだ」

「……いいじゃないですか、次世代で」

「新しいものが全て秀逸とは限らない。流行の変遷にも煽られずに

根を張りつづける固定の文化こそが秀逸であるときもあるのだ」

「……僕はただの意地だと思えますが……」

「意地と根性は同類項。褒めてくれてありがとう」

やはり、この人と肩を並べたいとは思わない。この虚構とも言える非常識な姿勢はどこから発生してくるのだろうか。

そんな節、扉が開く。

「こんにちはー」

凜だった。素早く室内に視線を巡回させて、やがて部長に気づくとやや慄くような表情を浮かべた。

「あ、部長……」

「やあ、凜君、遅かったではないか」

対する部長はどこまでも陽気である。更に対照的に凜はしょぼくなつていく。

「えーっと……昨日のアレは……」

「アレ？」

目を不安定に彷徨させながらの言葉に、遼太は首を傾げる。だが、部長は分かりきっているかのように声を張り上げた。

「アレか？ もういい、飽きた」

「そ、そうですか……」

きっぱりと言い切る部長に、凜は嬉しいのやら残念なのやら微妙な顔をした。遼太はそこで、アレの意味するところがわかった気がした後、その表情の意味に気づき、遼太も同じような表情になりかける。

そんな凜の後ろに、佐慧がひよいと顔を覗かせた。

「あら、こんにちは」

「あ、こ、こんにちはっ」

凜はひどく慌てたように挨拶を返した。遼太も後頭部をさすりながら頭を下げて会釈をする。部長に関しては満足げに佇んでいるだけである。

「全員揃ったか」

正確には祥吾が来ていないのだが、入院中ということ割愛されているのだろう。各々座り始める部員達を眺望しながら部長は言った。

「今晚の活動は場所を変える。別のポイントでの異常現象が報告されてきたからだ。本日はそちらの調査に向かう」

「え……そんなことして、ここは大丈夫なんですか？」

そうすると、涼属高校はノーガードということになってしまう。

遼太はそのことが気になって、訊ねてみた。すると、部長は天井を仰ぐように顎を上げた。

「大丈夫だ。昨晚連中は三体も派遣してくるという無茶を犯していた。そんな無茶を連日行えるわけがない。万が一あったとしても、優先度はこちらの方が低い。簡単に言えば、後回しになる。だが、可能性はほとんど無いだろう」

連中とは、宇宙外部生命体の『組織』とやらのことだろう。そんなに人員配備に困って切るのだろうか、その宇宙外生命体は。

「異常現象の優先度はAクラスだ。私が即興で決めた。>レッド<の潜伏が危惧されるからだ。奴らが日の目を見たという実例は無いが、これを看過すると>レッド<の徘徊が恒常化する未来もそう遠くは無い。ゆえん、すぐに調査する必要があるのだ」

遼太は肩を落とした。どうせ、説明するのであれば、もっと噛み砕いて分かりやすく説明して欲しいものだ。

「尚、出張先だが 少しばかり、暴走を自重してしまうかもしれない」

部長は一旦そこで切る。そして、宣告するかのように重重しく言った。

「名門真夏高校だ」

今日の作戦通告（後書き）

加速しました。プロットごぼり抜きです。見直してみたら、意外と伏線を張ってあったので助かりました。

……とはいうものの、自分でも展開が予測できません。作者なのに、というわけで、どんなグドグドな茶番劇が展開されるかあらゆる推測をしていますが、とりあえず完結まではもっていきたいと思いますので、どうか最後までお付き合いしていただけると、ありがたいなあ……と思う所望でございます。

漆黒の巡回

眞夏高校は、涼属高校と比肩するのには大きすぎる、超名門校である。

その敷地は下手すれば小さな村の半分にも及ぶほどのものであり、校舎は中高会わせて十五もの数があり、部活動にそれぞれに適した環境があるのは勿論のこと、文化部に関しては一つの部活に関しては大きいもので一つの校舎を丸々占領してしまうものもある。吹奏楽部は全国クラスである。

無論、共通のグラウンドも涼属高校にひけを取らないほどの広さがあり、中央に立つと複雑に入り組んで細かな装飾が目立つ校舎が小さく見える。

遼太はその校舎を遠目で眺めて、白い息を吐いた。緩やかな風に靡いた息は仄かに上昇すると、そのまま空に消えていく。

現在時刻午前二時。この時間帯になると、傍を車が通るのも稀である。

あの部長、どんな伝で知ったのか、眞夏高校の警備員のシステムを完全に把握していた。そして、警備員及び用務員の完璧な不在が確認できる時間帯が、午前二時から三時までの一時間と限定したらしい。

調査の結果、>レッド<と遭遇したとしたら、何が何でも一時間のうちに殲滅させなければいけない。それが例え多数の個体だったとしても、強大なものであったとしても。

そんな風に遼太が戦慄に浸っているその足元では、凜がナイフを砥いでいた。金属の悲鳴のような、甲高い音が直接鼓膜を突付いてくる。

「竹中君、大分良くなったみたいだから、今日来れたら来るって」

「う、うん……」

凜がつむじを遼太に向けたままそうやってきた。遼太はとりあえず頷いておく。

あの時の、この義手によるヒーリングでは、傷の大半が修復されたが、それでもまだまだ多く傷は残っていた。それが一晩で治るとは、やはり彼もなにか逸した存在なのだろうか……。

「でも、実質的な退院はまだだから、来れないかもね……その時は、やっぱり二人でやるしかないよ」

砥ぎ終わったのか、かたかたと用具を片付け立ち上がりつつ凜が言った。その言葉を聞いて、遼太は漆黒に塞がれた青空を仰いだ。暗い。

部長と佐慧は、エントランス受付である涼属高校に配置していた。佐慧の縛り効果は涼属高校でしか効果を顕さない上、有機物へ直接的に影響させることは不可能だということで、部長と共に元来どおりの役割を買って出たのだ。

というわけで、今この場に居るのは凜と遼太のみ。

凜は腕時計を確認して遼太を見た。

「それじゃあ、さっさと始めようか。異常がないなら、それはそれで良いし……」

「うん」

遼太も素直に頷く。

部長の話によれば、>レッド<が狙うのは、宇宙内部での自分たちの存在を脅かす天敵、在らぬ存在である『中世武器研究会』のメンバーだけなんだとか。遵って、遼太達が徘徊をしていれば、相手の方から飛び出してくるのは必然なのである。

自分たちの身を餌にする、嫌な狩りだな、と遼太は肩を落としてつつ、凜の背中を追う。

眞夏高校の校舎の配置は、職員室校長室等といった中枢的な役割の教室が集中した『管理棟』を中心として、すべての校舎に空中廊下が通っている。位置的に近い位置にある校舎同士も、空中廊下が通っている場合もあるので、そこを上手く通っていけば、効率よく

散策ができるわけなのだが。

凜は校舎に向かつていく遼太を見て、慌てて声を挙げて遼太の足を止めさせた。

「基本的に>レッド<は人間の近くに居るのを好まないからね。屋外に居るって前提で散策しても良い、って部長様が言ってた」

そして、あたかも言い訳するかのように、そう言った。

遼太は内容的には頷きつつも、少し不快な突起が残るのを感じ、問いかける。

「部長様って語呂悪くない？」

「……………だつて、そう呼べつて」

「そ、そう」

急にしんなりとなった凜を見て、遼太は触れてはいけない過去なんだと思い、追求を思いとどまった。なんとも、あの部長には不可解な点が多い。

空気を濁してしまったことに反省して、遼太は少し頭を垂れた。

「じゃ、じゃあいこうか…………」

「う、うん」

二人で頷きあつて、一先ず共通グラウンドを一周すると、隣のグラウンドへと移動する。

高校第一棟と管理棟を結ぶ空中廊下の下をくぐり、野球グラウンドとバスケットコートが密接した第二グラウンドへと向かう。

深夜の暗く侘しいグラウンドを、二人並んで歩く。寒い空気が足を駆け抜け、乾いた空気が口の中に潜り込み目を乾燥させる。

そんな冬の夜中に発生するそんな弊害に対し、遼太はコートの襟を立てて、のろのろと歩いている。凜はその隣を押し黙ってまた歩いている。

そんな状態に遼太はだんだんと焦燥を覚えてきた。

「あのさ…………その、『そいつ』が出てくるときってさ、どうやって出てくるの？」

それがどうしようも無く不安だったのだ。昨晚のように、地面が

ら出てくるわけでもあるまいだろうし、まさか空から滑空してくるのだろうか。もし、既に潜伏しているのであれば、最初>レッド<を目撃したように、あからさまな異空間から登場することも無いだろう。

そんな意味の無い想像の輪が循環することに、焦燥が塵のように積もっていき、落ち着かなくなる。一応、遼太はネガティブな思考に卓越しているのだ。連想が始まると、終わるまで終わらない。

「さあ……？　こういうの初めてだから……」

と、返す凜も自信が無さそうで、更に遼太の杞憂の濃度が上がったいく。

「　下手したら、不意討ちしてくるかもね……」

凜としては、折角発生した話の種を消沈させたくなかったのか、蛇足とも言える言葉を接いで来る。

「へ、へえ……」

「でも、そんな小さいのは見たこと無いから、出て来れば音で分かると思う」

存在が大きく異質であるがゆえん、移動をするとそのような轟音が発生する。確かに、それは鼓膜がはじけそうな程に大きなもので、死ぬ寸前まで気づかないということは無いだろう。

「そうかなあ……」

「大丈夫だよ、多分。これもあるし」

それでもまだ憂慮が消えないらしい遼太に、凜はポケットを叩いた。ナイフが入っている方のポケットである。

遼太はそれを見て、右腕を見下ろす。

まだ『発動』をしていないのに、あれから一言も喋っていない。今の遼太の心情はわかりきっているだろうに。心配ないと示唆しているのか、それとも無頓着なのか。

それでも、今まで何回があったように、いざとなったら守ってくれるだろう。空に対する言い訳にしろ、至近距離での拳銃による発砲を躲したことにしろ、どちらも遼太だけでは到底今に及ばないだ

けの効果を齎している。

遼太はこの右腕を信頼してやることにした。もしも、そのまま逝ってしまっただとしたら、それは運が悪かったのだ。誰を恨むでもない。

そう考えると、気が楽になってきた。多少、下方面へと向かっていた視線も真っ直ぐと前を進むようになり、足取りも僅かに速くなる。

やがてその一帯を歩き終えたが、結局それらしきものは現れなかった。

「それじゃ、次行こ」

午前二時九分。凜は腕時計を確認して、遼太を急かす。実際のところ、三時には警備員が詰め所に入っているので、五十五分あたりには退散しなければならぬのだ。

足元から弄るような風が舞い込み、遼太は竦みあがりながらも凜の後をせっせと付いていく。

サッカーグラウンドとハンドボールのコートが合併した場所まで来ると、同じくして外周を大きくぐるりと回って戻ってくる。またしても現れない。

「このままでてこないと良いんだけどな……」

と、遼太が次のソフトボールのグラウンドに向かう最中、『中枢管理棟』と『管理棟』を結ぶ空中廊下の腹を見上げながら呟いた。中枢という修飾詞がついてどうなるのか、と突っ込みたいところだが、その中枢管理棟と称された校舎の壁には、赤い三角に「！」が埋め込まれたマークが大きく描かれており、それを見るとなんとなくその重要性を理解できた。

「出てこないと思うよ」

凜は凜でそっけなく言い返した。

「なんで？」

「少佐がこっちに来なかったから。出てくる確信があるなら、少佐をこっちに置いて、縛りつけなきゃ駄目でしょ？」

「……へえ」

それならば、出現率が圧倒的に高い涼属高校に居させておいて、縛り付けて置いた方がいい、ということか。

やがて見えてきたソフトボールのグラウンドを一周すると、また空中廊下をくぐり隣の競技場へと移動する。

真空に居るのではないかと思えるほど静かで、そこに何かが隠れている気配など全くしない。宇宙云々の存在を知らなければ、今ごろは普通の夜と享受して深い眠りについていただろう。ごく当然の一夜として。

午前二時四十九分。半時間ともう半々時間を掛け、ようやく一周してきた。

異常は無し。視覚では勿論、腕による第六感を通しての反応も無かった。

結論で言ってしまったえば、部長の言ってきた「異常現象」は、人間の手が増えられたもの。端的に言えば、杞憂に過ぎなかったのである。

閉まった校門前で、遼太は凜と二人立っていた。ミーティングの様なものである。

「良かった。居なくて」

凜は管理棟を眺めながら言った。

遼太はその清々しげな横顔をまじまじと見つめて、訊いた。

「こういう任務もたまにあるの？」

「私は初めてだから……って言わなかったっけ？」

「あ、ああうん……言った」

「んー……それでも、これで任務完了で良いんだよね？ 居なかったし」

「いいと思う……」

一応、万が一の時は佐慧から凜に携帯を通じて連絡が入るのだが、それも無い。異常が無いのであれば、もう帰宅しても差し支えない

のだろう。

「今日は解散ね。竹中君は来なかったけど……大丈夫だよな？」

「さあ？」

「まあいつか。そこまで狭量じゃなだろうしね。じゃあ、帰ろっか」
凜はそう言つて遼太に背中を向けると、校門を開き始めた。車輪の摩擦音が耳障りに周囲に浸透して、空間が開いていく。

遼太も手伝おうと脚を伸ばした瞬間に、今まで寡黙だった義手が唸った。

「発生した」

脚が止まった。

その短い言葉だけで分かる。今まで探していた存在が大気に露見されたのだ。

遼太は顔を引き締め、凜にその旨を伝えようとした。だが、開いた口が途中から動かなくなってしまった。

「彼女の同伴は認可できない。相性が最悪である所以、危険が及ぶ可能性が非常に高い」

危険。

その言葉に遼太は戦慄する。

今までこの義手が言っていたことが、的外れだったことは一度も無い。憑依された期間が短いとはいえ、ここまで誠実な態度を見せられたらそう信じざるをえない。

相性が最悪、というのは、相手が遠距離にも対応する攻撃方法を持つているか、それとも結界の様なものを持つているのか。いずれにしろ、義手がこういふのだから、素直に従うのが賢明だろう。遼太はそう決心し、疑問符を浮かべつつこちらを見る凜に向かって叫んだ。

「ごめん！ 落し物してきたから、さき帰ってて！」

「え？ ……一人で大丈夫？」

「大丈夫、だから先帰ってて。結構かかるとも知れないから……」

「そう？ それじゃあ……、見つからないようにね」

「う、うん、それじゃ」

凜は思いのほかすんなりと納得して、門をすり抜けて夜道を駆け抜けていった。眞夏高校の敷地内、遼太は一人残される。

完全に姿が見えなくなつたのを確認すると、遼太は義手を見た。

「何処？」

「共通グラウンド。規模は破壊者^{レベ}」

義手の機械音声を聞き流しながら、遼太は共通グラウンドへと走る。位置の上の都合で、高校第一棟を大きく迂回していくことなるため、焦燥は徐々に積もっていく。

ようやく、共通グラウンドが見えてきて、遼太は駆け込むようにその敷地に足を踏み込ませた。そして、目を瞠って立ち尽くす。

共通グラウンドの中ほどで空間が乱れ、渦を巻いていた。その渦の中心付近には、蠢く物質がある。

いつしか見た、異空間からの登場とは少し異なる。屈折率ゼロの状態から、少しずつ可視状態に戻りつつあるような、そんなイメージ。

やがて、渦は小さくなり、凝縮し、弾けた。

遼太は舌で口腔を湿らせた。大きさはさして昨晚に戦闘を交わしたものと変わりはないようだ。

だが、貫禄はあからさまに違う。威圧感が喉が潰れそうな程噴出されていた。

「目標捕捉」

義手が淡々と告げる。

「制限時間 十分間」

『それ』の咆哮。空気を摩擦が発生するほどに振幅させるその一声に、遼太は慄然とする。

あれと、一人で。

突き出た口、異形の角、鋭い眼光を放つ赤い双眸、硬く凹凸の激しい鱗、生物のそれとは思えない翼に、凶太い肢体が生えた胴体。

それは正に神話や寓話に登場する、ドラゴンそのものであった。

「あ……あれはさ……誰が戦っても相性は最悪だと思っただけ……？」

「『発動』を推奨する」

遼太の逃げ腰発言をあつさりとは無視して、義手は玲瓏に告げる。言葉の寸前に生じた空白は、呆れを示しているのだろうか。

「う、うん……お願い」

仕方ない。やるだけやろう。

遼太はそう決心して義手にそう言った。

その刹那後、遼太の体は解放された。視界が明瞭になり、大気の動く音が聞こえ動く感覚がリアルに皮膚を介して伝わってくる。どうやら、五感の超人的な卓越化も見込めるらしい。

『それ』が遼太の方を向いた。隆々としたその顔は、一切の感情がこもっておらず、その双眸は虚空を見つめているようにも見える。だが、しっかりと遼太を視界に入れていることは確かだった。

遼太はそれを確認すると、義手を変形させた。タイムラグの後、腕が銃身へと変わる。

制限時間は十分間ということになっているが、遼太はそのことに頓着するつもりは無かった。

俗界にこの存在が示されようと、それによって一般人が畏怖を抱こうと、遼太の知ったことではない。

遼太がすべきことは、これらの存在をこの世から駆逐することだけ。使命感、宿命。そんな大儀な言葉などでは表現できない、それだけのもの。

これは、遼太の意志なのか、それとも義手の意志なのか。答えはこの世には無い。

漆黒の巡回（後書き）

前回投稿から随分と空白ができてしまいました。

一応、受験生なので、そこそこの忙しさを持っているのですがそれでも遅れすぎでしょうか。すみません。

拙作は着々と終末へと向けて躍進し始めました。

三月までには完結させたいと思っていますので、どうかそれまではお付き合いしてくれると……はい、ありがとうございます。それでは、次の回があれば。

偽りの眼球

一歩動くたびに地面が酷く揺れ、足がもつれる。別に楽観的に『それ』を見ていたわけではないが、それでもこの相性の悪さは異常だった。

一度^{ひとたび}接近すれば、水が一瞬で蒸発しそうな振幅数で大気を震撼させてくる。

無論、そんなところに突っ込んでいつてはひとたまりもないので、遼太は反射的に後退。すると、すぐにその熱波は無くなり、すぐさま得体の知れないエネルギー弾が飛来してくる。

遼太は咄嗟にそれを躲すと、今度はその巨体を行使させて急接近してきて、その禍々しく彎曲した爪で遼太の喉笛を引きちぎろうとその腕を振り上げてきた。エネルギー弾を躲すために伸ばした脚をねじると、そのまま相手の懐に潜り込むようにその身体を浮かせた。振るわれた爪は空を薙ぎ、遼太の体は四つんばいになっている。『それ』の下部に滑り込んだ。

常人ならとつくに攀っているであろう足の捌き方でそれら一連の行動をこなすと、予め変形させておいた右腕を振り上げる。

風圧だけでスイカを木っ端微塵にできそうな威力でその腹に剣を突き立てた。

そんな、空を引き裂く快感も刹那、グワァン、と岩を叩いたような、あまり直に聞きたくない音が響く。

斬った方も斬られた方も無傷だった。どちらも恐ろしい程の硬度を誇っている。

迎撃が飛び込んできそうだったので、遼太はすぐさま体の下から脱走する。その経緯で、脚を素早く切り刻んで見たが、効果は皆無、鈍い音だけを散らして消えた。

先ほどからずっとこんな感じだ。

遼太はなんとかそのプロセスをこなせているが、これは身体強化

あつてのものである。その無い、凜がこの場に立ち合わせていたら、と思うと遼太は戦慄する。

コートの手端が焦げているのは、最初無計画に突っ込んだとき、熱波をもろに受けたときのものである。インパルスの反射能力が無ければ、今ごろ校庭の砂となっていただろう。

「……接近戦は無謀、か」

そう察し、遼太は右腕の変形にかかる。

どつという経過を辿ったのは見たくないが、数秒後、その右腕は銃身へと変貌と遂げていた。

弱点は>レッド<総じて目である。部長の教訓を受けたのは十時間ほど前だ。

非常識の存在であつても、宇宙のルールに縛られている以上、エネルギー源の存在は必要不可欠であり、その重要な役割を>レッド<は全内臓に次いで最重要器官である眼球に委託したらしい。

昨晚実感した通り、その目玉の硬度は相当なものだ。これは眼球にそれだけの硬度があるわけではなく、その内部に籠ったエネルギーの奔流によつて剣刃が受け止められてしまったのだとか。

だから、剣は傷つけ弱らせるためのもの、銃は止めの浄化に使う。遼太は右腕が銃身になったことを確認すると、充填を開始しつつ『それ』を見据えた。

外見が大きいので、動きも緩慢だと思いがちだが、それは常識的な見解だ。あくまで>レッド<は『宇宙における常識的範囲外生物』。簡単にいえば、『化け物』。所詮人間の常識など、宇宙規模で考えれば創造主の爪垢にも匹敵しない。

こちらが遠距離メインに作戦変更したことを悟ったのか、チータを凌駕する速度で遼太に向かってきた。形式はドラゴンなのに、二本足で立って、ズドドドドドド……と。

どこかのギャグ漫画のような効果音がピツタリなその容姿だが、威圧感を揃えるとその禍々しさというものは桁違いになる。

充填に気を配りつつ、遼太は横に転がった。

その靴底の先一メートルをダンプカーが有機化したような個体が猪突猛進していく。

そして、校舎に派手に激突した。

派手に瓦礫をばら撒きながら、校舎にその頭をめりめりと食い込ませていく。攻撃が速いだけ、その反動もそれなりに大きかったようだ。

その校舎に及んだ被害に眩暈を覚えつつ、遼太は転がった反動でそのまま立ち上がった。

そろそろ右腕の充填も最大値まで溜まる。

問題は、何処に撃ちこむか、なのだが。

弱点は目玉、と言われてはいるものの、あの巨体にそんなものは見当たらないのだ。

確かに、頭部には赤い球体が嵌っていた。燦然と輝いていた。剣呑な光を湛えたそれは、確実に機能し、遼太を視界内に捕捉していた。

もちろん、遼太も享受したことは利用した。

そもそも、あれはここまで動きは機敏でなかった。足を怪我した乳牛を連想させるような鈍重さを、見せつけるようにしていた。

動きが常識の範疇に収まったことに安堵しつつ、遼太は訓えどおりにその眼球にその剣を突き立てたのだが、それも一時の杞憂のようで、今ではただのパフォーマンスだったのではないかと疑える。弱体化どころか桁違いに強化されている。もはや、種類が別になつたと思えない。

一応、両目は潰れているのだが、全く頓着していない様子で、反則気味にも感じられるほど遼太にピンポイントの攻撃を加えてきているのだ。

それなら、まだ目玉が残っていると考えるのが定石である。

『それ』は校舎を発泡スチロールの様に砕きながら振り向いた。そこに校舎は実在しなくて、崩れていくその光景は、巧妙に見せられた虚像だと言われても納得しかねないほど円滑な動きで。

この動きにより、高校第一棟は見た目通り半壊　機能の上では、全壊してしまった。

無論、『それ』はもとから無かったかのように、残骸である瓦礫を尻尾であしらうと、遼太に向けて追撃しようと突進してくる。

無計画にも思えるその行動だが、それは常識的に考えてのことであるのだが。

『それ』は遼太の寸前、二メートルほどの位置で全てのエネルギー法則を無視して、その巨体を支える二本足でブレーキをかけた。四十キロ弱は出ていたであろうが、その制動距離は数センチも無く、多少とも砂埃を舞い上げながら、その前足に生えた爪を振り上げてくる。

爪が醸し出す風圧を感じながら、遼太はなんとか後退してその一撃を躲した。

そのまま、その勢いに乗って『それ』との距離を一気に取る。至近での射撃も良かったが、効果が無かったときのリスクを考えると、距離があつたほうが好ましかったのだ。

常人離れた脚力で校庭の端あたりまで跳ぶと、空を切った爪を元の位置に戻し、こちらへの突進を試みようとしている『それ』に銃口を向けた。

解放。

幾千もの光線が螺旋を成して一筋の光を形成し、『それ』一直線に突っ込んでいく。

そして、『それ』を爆心に爆ぜた。

時空が歪むのではないかと思えるほどの熱量と光。それが包み込むように爆心を彷徨する。

遼太は右腕を見下ろした。右腕は依然、銃身の形でそこにある。

明らかに昨晚とは異質なものだ。あそこまで強力だなんて聞いていないし、ましてや余蘊として散乱したエネルギーまで丁寧にターゲットに注ぎ込むとは。

成長している……と受け取って良いのだろうか。

永遠とも思える時間の果て、巻き起こった煙が鎮まってきた。利きにくかった視界が明瞭になる。

それと同時にビルに電車が突撃したかのような咆哮。

『それ』はまだそこに佇んでいた。咆えているということは、多量なりともダメージは与えたのだろう。だが、外傷はほとんど無い。眼窩もそのままである。

やがて『それ』は咆えるのを止めると、首を降ろして地面と平行にし、口を開いてその口腔を遼太に向けた。いわゆる、「炎を吐く」ような体勢である。

いくら常識範囲外の生命体だったとしても、流石にその姿勢になつてしまえば、することは一つ。

期待通り、炎を吐いた。

実際は炎ではない、観測不能のエネルギーの集結体なのだろうが、その効果と様態は炎のそれに違いなかった。非常識というてんを挙げれば、燃えている物質が無いのに、燃烧を続けているという点であろうか。もともと炎ではないから、それも容易に領けるが。

なんとなく訝りながらも、遼太は横に跳んでそれを避ける。炎を模したそれは空を切って校庭周辺に繁茂している雑草達に火を齎した。瞬く間に高温に身を蝕まれ、融けて消えていく。

もちろん、それだけで攻撃は止まることは無い。

当たったら即気体として空に霧散してしまいそうな程のエネルギーを持ち合わせた塊が次々と押し寄せてくる。

それらを全て躲しながら遼太は新たに充填を始める。

なんとなく、その炎を吐き出している『それ』を見て、思い立ったことがある。よくこういったドラゴン。体が異常に硬い生物に閉して、ほとんどの物語は内部が柔いといつては、口腔を攻撃して撃退している。

彼らが宇宙の存在を享受してどれほどの時間が経ったか知らないが、ここに在るといふことはそれなりに宇宙の常識に溶け込んだのだろう。いくら非常識であるからといって、全身がガチガチの硬さ

を持っていてここまで機敏な動きを見せるのはありえない。

一昨日の>レッド<が敏捷に、昨晚の>レッド<が体力に特化しているのであれば、今日の>レッド<は『力』だろう。

効率を一切無視した、力押しはその戦闘スタイル。それに伴う必要があるのは、強固な肉体だ。これは宇宙という前提が無くとも必須なのではないか。

しかし、効率化を無視するとはいえど、体が重くては当てられる攻撃も命中させることも困難になる。

それならば、外側を恐ろしく頑丈にすればいい。単純だが、効率的だ。

先ほど腹部を斬った（刺した）時の感覚を思い出す。

グワァン、という音に、鈍い感触。

首がこちらを向いた。口は先ほどから間抜けに開かれたままだ。

おまけに、連射速度はそこまで速くはない。

右腕にはまだ満タンまで充填されていないが、それでも車を吹っ飛ばすことはできるだけのエネルギーが溜まっている。外部に当たてあれだけの影響だ、内部に撃ち込んで咆哮で済むとは到底思えない。

遼太は即決し、迫りくる高熱の飛来物を躲して、ぽかんと開いた口にエネルギーを放出させた。

先ほどと同じように、パフォーマンスの入った光線が腕から伸び、吸い込まれるように『それ』の口内に滑り込んでいく。思ったより、その光線の量は少なかったが。思った

『それ』は驚いたように口を閉じると、おもむろに後ろ足で立ち上がった。餌を欲す犬の様に、惨憺とした眼窩で虚空を見つめて。

そのまま、頭が破裂すれば　と遼太は願ったが、そんな迂闊な願いは届かず。

上を向いていた首が静かに遼太に向いた。

そして　口の端を吊り上げ、笑った。無機質に。人間らしい動作だったが、歯は持っていないようで、それが尚人間から遠くかけ

離れた存在だということを誇示している様だった。

そのおぞましきと云ったら、大地震に遭遇したそれに似ている。

遼太の背筋に厭な悪寒が走り抜けていき、皮膚が粟立った。

何がしたかったのか定かではないが、『それ』は気味の悪い一笑だけすると、浮いていた前足を地面に降ろした。震度三と誤観測されそうな揺れが起こる。

そして、間髪入れずに突進してきた。

遼太は意味不明な行動に啞然としていたものの、その行動はパターンに嵌っていたので、既に慣れきっている。

転がるまでもなく、そのまま脚を反撥させて横に跳ぶ。

遼太の後方、学校の敷地を示すフェンスに突っ込んでいくその巨体を横目で見て、ヒヤリとしたが、学校外に出る事に執着は無いのか、フェンスを破壊するでもなくその寸前で立ち止まった。すぐにくるりと遼太の方を向く。

凜によると、>レッド<の潜伏が観測されたのは、今回が初めてらしい。とはいっても、凜が創設時からここに居たという話も聞いていないし、実際のところ、初めてではないのかも知れないが、不可解だ。

何故、潜伏する必要があった？ 外界を望むのであれば、どうして今の突進の拍子に行けなかった？ そもそも、何故、数多ある場所の中で、眞夏高校を選んだ？ 気まぐれという、曖昧模範な感情が>レッド<に存在するといふのか？

笑みの理由は？ どうやって、そんな高等な技術を身に付けた？

感情が芽生えたとしても……？

もはや、体内への衝撃による効果が見込めなかったことなど問題ではなかった。不可解な点が多すぎた。

そもそも、部長の説明だけでは>レッド<に関する全ての範囲に光が当てられてないのだ。

宇宙外に生命が存在する可能性を否定することは、そのことに関して浅学の身である遼太には無理だ。そもそも、彼の行っていたこ

とを全て呑み込むには相当の労力を必要とするのだ。いまだ納得していない件もある。

その一つが、この義手である。

遼太には右腕を外されて、義手を新たに代えさせられた記憶は無かった。両親だって健全そのものだったし、佐貫家の家系だってそこまで大したものではない。平々凡々なものだ。

もしかしたら、凜と初対面の時に刈り取られた腕が、本当は義手ではなく遼太のものであって、新たに付け替えられた腕がその義手だったのではないか。痛みがなかったのも、単に神経系が切断されたからだったのかもしれない。

とすると、どうして彼女は遼太を選んだのだろうか。

適当に選んだのだとしたら、適當すぎる。相当『中世武器研究会』は義手の持ち主探しを急いでやったに違いない。

それとも、適性云々があつたのだろうか。

再び突進してきた。思考の奔流を一時止め、回避に徹する。遼太に思考のゆとりを持たせるかのような、緩慢な突進だった。

これなら、身体強化をせずつも躲すのは容易いだろう。

と、そこで、あるセリフが思い起こされた。

『……あなた、>レッド<じゃないの？』

邂逅し、開口一番に行ったのがその言葉だった。

今ならその驚愕の意図も察することが出来る。

この義手が>レッド<の存在を察知することができるのであれば、彼女のナイフも同様だろう。実際に、遼太の腕を切り取ったのはそのナイフだ。

となると、そのセリフと情報から吟味すると、この義手は>レッド<だということになる。

部長の話口調から言うと、>レッド<とは宇宙外来生命体全般のことを指すようだ。それならば、この義手に反応を示してもおかしくは無い。仮にでも、宇宙と外空間のパイプを閉鎖する役割を持っていたのだ。

となると、遼太の右腕は切り取られる以前から義手だったのだ。あんなセリフ、咄嗟に思いつけるはずもないし、予め決められていたものだったとしても、あそこまで神妙な演技はできないだろう。

再び突進してきた。動作無く躲す。

それによつて、再び意識が現実に向いた。『こいつ』の不可解な笑みによつて、思考の渦に巻き込まれてしまった。油断ならない。

しかし、さつきからこればかりしているが、何がしたいのだろうか。満タンの砲撃を喰らったら咆え、中途半端な砲撃を口に喰らったらにつこり。美味かつたのだろうか。

遼太はもう一度充填を開始した。先ほどは中途半端だったから、今もケロつとしているのかもしれない。

それで少しは怖気づくかと思われたが、全くそんな素振りも見せず、『それ』はひたすら突進を続けてきていた。

そんな節、八分目まで溜まったあたりだろうか。

『それ』が校舎に突っ込みかけたのをヒヤリとしてみていたのだが、そこでようやく思い出した。

詰め警備員の巡回が始まる。

もうとつくに十分など経っているだろう。それならば、もうとつくに警備員の巡回は始まっている筈だ。

これらの突進は全て時間稼ぎだったのか。貴様の攻撃は全て受け付けない、という教示のために、わざわざ剣を体に付き立て、エネルギー弾を呑み込んでニヤリと笑ってみせたのか。

『こいつ』は、一般人が自分の姿を目撃するのを『中世武器研究会』が恐れているのを知っている。そして、それを逆手にとるだけの知性がある。

目玉もダミーだった。攻撃は単調とはいえ、先ほどから全くキレも落ちていない。体力は無尽蔵か。

だが生憎と、遼太は『中世武器研究会』ではない。あくまで一個人に過ぎない。ただ義手を宿されたゆえん、活動に加えられている

ただだ。 まあ、正式には部員として登録されてしまったわけだが。

だから、別に部長の意思に則る必要は無い。

どうせ、全て目撃されようが、異物を排斥してその他を元通りにすれば、単なる夢だと思えるのが常人である。深夜なら尚更だ。集団幻覚という、便利な口実も存在する。

どうせあの部長だって弁えているはずだ。放逐するほうが、よっぽど危険だということを。

最大まで溜まった。血液が最大まで流れているような、激しい脈動を感じる。

部長が恐れているのは、もっと他のことだ。

偽りの眼球（後書き）

ええー……遅れてすみませんでしたorz 本当に申し訳ない……。
いろいろとごたごたしてたもんで。

なんと、明日、私立高校受験です。結構燃えています。キットカット
二本食べました。燃えています。というわけで、今日は早く寝ます。
とはいっても、明日終わってもまだまだ終わらないんですよ……。
最中は嫌なことでも、終わってしまったえば過去のものです。「懐かし
いな、あつはつは」とか高笑いしている未来の自分を嫌悪しつつ、
今日もこうして頑張ってる……のか？

さて。いつもたくさんの人が見てくれているようで、嬉しいです。
次がいつ発表になるかわかりませんが、そのときまでどうかご勘弁
を……。

無機質な満身創痕

遭遇者の死。

遼太の脳内でその文字が点滅したとき、『それ』が口を開いて何かを吐き出してきた。

岩だ。二トントラックに匹敵するそれが、本気で吐き出されたらしいそれは恐ろしい速度で遼太との間を詰めてきた。

とはいっても、炎を模したエネルギー弾でさえ躲した遼太である。実体の混じった岩を避けるのは、動作も無い。すぐに横に跳んで避ける。

そして、岩はそのまま誰も居ない地面を叩くと、粉々に砕け散った。

それを見届けてから、視線を戻すと『それ』が突進に入っていた。地球の物理法則を完全に無視したような、恐ろしい加速に速度。

身体の全てが頑丈な金属であんな機敏な動きはできまい。

そして、その状態を維持したまま頭を垂れるように突進してくる。

だが、その攻撃の矛先は遼太ではなく、粉々に割れた岩の方向だった。

いくら粉々だとはいっても、それなりの大きさがある。それらが散乱している地帯に、『それ』が突撃してきたのだ。そして、半ば自棄気味にそれらの破片を手当たり次第周囲に蹴散らす。

岩を初めて発露させたときは比肩できないほどの速度の飛礫が、幻の三百六十度発砲可能散弾銃を暴発させた様に周囲に四散する。

正に意表を衝いた頭脳プレイに、遼太は愕然としながらも、慌てて回避を試みる。が、流星に無理があった。ただでさえ、片腕に集中しなければならぬのに、至近距離で撃たれたショットガンの弾を無傷で回避などできるわけがない。運がよければ無傷だろうが、実力での回避は不可能と言ってもいいだろう。

そんなことを本能で承知しつつも、遼太は脚を曲げて一気に伸ば

した。ぼうつと突っ立って、そのまま簡単にやられるのは力カシの仕事だ。

宙に身体を預けた瞬間に、全身に強い衝撃が走った。その衝撃に同意を示すかのように、身体に熱が奔走し始める。このコートは普通の九ミリ弾なら着用者に一切被害が及ばない、と部長が自慢げに話していたが、そんな宣伝文句などあっさりと覆られてしまうほどの威力だ。

唐突に訪れ襲撃により、空中でのバランスを失って肩から地面に落ちた。そこまで高く飛んでいなかったのが幸いし、そこまで大きな衝撃は無い。

だが、それと併発して体の各所に焼けるような痛みが広がった。飛礫の威力は四十五口径の拳銃から弾き出された九ミリ弾丸の威力を遙かに凌駕したものだ。軽々とコートを貫き衣服を貫き皮膚を抉り、神経に甚大な混沌を齎す。血液のぬつとりとした感覚が服の中で広がる。顔に命中しなかったのは奇跡としかいいようがない。痛みにも苦悶しつつ、視線を上げると、『それ』がこちらに存在しない視線を遼太にぶつけてきていた。その一瞬の後、地面を蹴り奔走を開始する。

遼太はその敏さに瞠目するものの、咄嗟の判断で腕に全気力を注ぎ込み、地面に全身を密着させていた体勢から打って変わって、パチンコの要領で腕をゴム代わりに跳んだ。

上手く靴底が地面と平行になった。すぐ後ろを『それ』が突進して通過していく。

安穩に安堵するのも刹那、遼太はとあることに気づいた。

右脚が全く動かない。

片脚での着地を試みるものの、少し遅すぎた。流れていく地面に左脚を絡ませると、苦痛と重力が同時に襲ってきて、そのまま勢いで前のめりに倒れ伏す。

土の味を噛みしめ、遼太はようやく自分の置かれた状況に気づいた。

攻撃はほとんど効かない。そのくせ、相手の攻撃は反則的に強い。応援も来ない。生殺与奪がかかっているとはいえ、いくらなんでもアンフェア過ぎる。

仰向けになって半身を起こすと、遠くで『それ』が身構えていた。この行動が不自由なタイミングを衝けば、あっさり自分など死んでしまっただろう。

凜は例のナイフを義手と同種と言っていた。なんらかの意思表示もできると言っていた。

となれば、凜がこの場にいたとしても、状況はあまり変わらない。むしろ、彼女に及ぶ危険は計り知れないものになっていただろう。あれだけの知能があるのだから、遼太の陽動も効果は見込めなかつただろう。

遼太は銃身となっている右腕を見た。自分が死んだら、この義手はどうなるのだろう。

凜と邂逅したとき、この義手は切り離され、再び接合された。それでも、全く問題なく今も作動している。となると、主である遼太が死んでも、これは問題ないのだろうか。

だとしたら、さつき義手が遼太のみをここに赴かせたのは、遼太を捨て駒と見たからなのか。

だが、今までの見聞によれば、この義手は>レッド<からしてみれば、とんでもなく大きな宝物らしい。

周囲に回収要員がない今、遼太が死んで義手のみ残ったとしても、そのまま手を拱いている『あれ』に回収されてしまうのではないか。それでも構わないのであれば、最初からこの義手は協力などしなかったはずだ……。

様々な考えから疑懼が生じ、それらがぶつかり合っては更に大きな疑問を紡ぎ出していく。

そして、それらの疑問を弁えるのには、遼太にはまだこの出来事に首を突っ込んでからの日が浅すぎたのだった。

『それ』は揶揄するかのようになり、狼狽える遼太を暗い眼窩で睥睨

していたが、やがて口を開いた。

止めにかかるらしい。口を開いた。先ほどと比べて、随分と小さく。

遼太の本能はそれを見逃さなかった。数多の思考に押しつぶされながらも、自分の指名はきちんと弁えている。

真意なんて、これの二の次だ……。

纏わりついた砂を蹴散らすように右腕を振り上げると、その小さく開いた口腔に向けて、凝縮されたエネルギーを解放した。

エネルギーの流れは速かった。音速を凌駕し、光にも劣らずともの速さ。

缶ほどの太さの光線を主軸とし、その周囲に集るように細い何か螺旋を描いている。

そして、その組織が一直線に寸分の狂いも無く『それ』の口へと飛び込んでいった。

『それ』は驚いたように身体を擦った。そのまま、エネルギー光線の照準から逃れようと身体をねじらせる。口から逸れた光線は『それ』の体に直撃し、凝縮された上から更に圧縮されていたエネルギーが弾けた。

外皮を剥ぐことはできなかったものの、相当の影響を与えることができたようだ。

『それ』は口から黒煙を燻らせながら、バランスを崩して倒れた。それから、ひっくり返った亀の様にじたばたと暴れている。どうやらその体は、きちんと起立している前提で構成されているらしい。

遼太はその隙に動かない脚を庇うように立ち上がると、左脚を酷使し、瓦解した高校校舎を迂回するように隣の野球グラウンドに逃げ込んだ。

体中が針を刺すように痛い。実際のところ、針以上に厄介なものがめり込んでいるのであろうが。

中ほどまでたどり着いて、一息ついていると、身体をかき混ぜられるような違和感が全身を襲った。そして、銃身となった腕から無

数の飛礫が排出されてきた。

「……こんなに……」

その数の多さに、遼太は愕然とする。これほどの数の岩の粒が、体内を巡っていたというのか……全身が粟立つ話である。

体内の異物を排斥したからといって、損害が完治したわけではない。裂けた皮膚はいまだ開いたままだし、脚だって正常な反応を示さない。

遼太が再三、自分がかかなり劣勢だということを使ったその時、瓦礫と化していた高校第一棟を蹴散らすように、『それ』が突進してきた。その威圧に慄いた大気が容赦なく振動し、頬をビリビリと撫でる。遼太はそれを見て、目を眇めた。岩の排出が間に合っただけ僥倖である。

遼太は左脚で跳ねてその突進と瓦礫を躲す。その二、三秒のタイムラグの後、『それ』が遼太の居た位置を駆け抜けていった。相変わらずのことだが風圧がすごい。

遼太はその後姿を眺めて、唾を飲んだ。

『それ』は突進の勢いを殺さずに、バスケットコートあたりまで走っていくと、ゴールのネットが備わった板をおもむろに掴み、フェンスから剥がすと遼太に向かって投擲してきた。

力任せに投げたブーメランのように、首を易々と刎ねることができそうな回転の様態のそれを遼太は再び横に跳んで避ける。空を切ったそれは、躊躇せずに管理棟に衝突して煙を撒き散らす。

続けざまに、高熱のエネルギーの塊が連続して飛んできた。どうにも休ませる気はないらしい。こちらが右脚を傷つけていることを知っているのだろうか。

速度が増した。半ば転がるようにひたすら遼太は回避に徹する。

エネルギー弾はほとんど効果が無かったようだ。先ほどと点で変わらなく動き回っている。

口腔も駄目なら外皮も通じる筈も無い。だとすれば熱塊を躲しながら、銃身を変形させ始める。

動かたび服が擦れて傷が抉られ、刺すような痛みが全身を包んでいく。きつと、今着ている服を脱いだら、血祭りになっていることだろう。

凝縮し展開した義手は、本来の五本指の形態へと戻っていた。力押しが駄目ならば、人間らしく知性的な策を講じるに限る。鶴嘴が使えればよかつたのだが、生憎とこの義手はそこまで万能ではない。右脚が軋みをあげる。模擬炎は手加減という言葉を知らないように、経済的な雨の様に次々とその猛威を見せ付けてくる。先ほどよりも威力が増しているらしく、着弾した地面はクレーターと化していた。

遼太は悟った。本気だ。本気で仕留めにかかっている。

よろけつつも何とか炎を躲すと、遼太は『それ』の頭部を一瞥した。無感情な眼窩が遼太を睥睨している。そこから流れ出る眼漿のような液体の流れも既に止まっている。

もう一回そこを突いてみる。剣ではなく、指で。この義手の、本来在るべき姿で。

すぐ近くで着弾。次の攻撃はもう避けられないだろう。

脚で高温を感じてそう直感しつつ、左足を駆って『それ』に向けて今度はこつちから突進していった。

とはいっても、片方の脚が使えない身である。すぐにバランスを失って地面に倒れ伏す。

だが遼太はすぐに機転を利かせて腕の筋力を行使した。横に転がるようにして受身を取ると、すぐに立ち上がる。その刹那後、すぐ左手に着弾による熱波が発生した。自分のものである左手が高温にじりじりと悲鳴を上げる。

『それ』はすぐそこに居る。擲擄するような虚構の視線をこちらに向けて、周囲を飛び回る蠅に審判を下すべく最後の吐息を吐き出すそうとしている。

遼太は顔を引き締めると、疲弊しきっている左脚に命令を撃ち込んだ。

跳べ、高く。

「出ませんでしたね……」

佐慧は暗い校舎を寂しそうな瞳で見上げて言った。すぐ隣に居る部長は押し黙っている。

その言葉の通り、今夜涼属高校に>レッド<は現れなかった。

「部長は寡黙を守りつづけたまま。」

冷たい夜風が吹き込み佐慧の髪をでたらめにかき混ぜる。暴れる髪を押さえつけながら、佐慧は部長のその無骨で見えない横顔を見やった。

現場でもその破天荒な姿勢を崩さないのは、常に何かを隠しているからなのではないか、と佐慧は思ったことがある。その何かがあるのではないかと察しがつく見通しは無いのだが。

この人物との邂逅は唐突だった。

いつも通りの高校生活を終えて帰ろうとしたところに彼が現れ、その奇天烈な言葉に目を白黒させている間にあつという間にあの部屋に連れて行かれたのだ。

そこには既に全員 遼太を除いた全員が揃っていた。皆一同に戸惑いの色を隠せていなかったのはよく覚えている。

それからそろそろ半年近く経つが、この部長について分かったことは男であることと、この学校の関係者ではないということだけだ。それだけ、身の上の隠蔽に徹しているのだ。

そんな謎だらけな割には、佐慧は部長のことを信頼しきっていた。何分、彼の言葉に一切の偽りは無い。嘘をつかれた記憶がない。無茶苦茶な言動の中には、自分たちのことを慮ってくれているようなフレーズが数多も含まれていた……気がした。

それだけに、この結果は重かったのだ。>レッド<がこの敷地内に現れないという結果が。

「もしや少佐は」

不意に部長が口を開いた。

「私が誰なのか分かってるのか？」

「いえ」

佐慧は意図を模索するように答えた。それを聞いて部長は鼻を鳴らす。

「ならばいい」

「

考えたことはある。だが、数少ない情報から彼の素性を明らかにするには難しすぎた。

そもそも、何故、部外者である彼が部活を作っても生徒会があれこれ言ってこないのかが不思議でならないのだ。

涼属高校の生徒会の権力は新入教師を凌駕するほどである。それらの勢力を押し退けて、部活を設立、しかも正式の部活に仕立て上げるなんて、普通の人間にはできっこないのだ。

ふと気がつくくと、部長が隣から居なくなっていた。

少し驚いてから周囲を見渡すと、部長は校舎に向かって歩いているのが見える。

「部長……！」

佐慧は慌ててその背中に追いつくと、声をかけた。部長は止まりこそはしたが、振り向きはしない。

「応援に行くんですか？」

「何処にだね」

「……彼らの処に」

「不安ではある」

そう苦々しく呟くと、部長は吸い込まれそうな程の黒々とした空を見上げた。一等星がちらほらと輝いているだけの空。人間の懐疑を具現し、その色を反映しているかのようだ。

「一体、あの義手は何なんですか？」

佐慧はその無機質な後頭部を凝視して訊いた。すると、部長は大

仰そつに両手を広げてみせる。

「昨日一昨日と、彼奴は戦闘をした。昨日に関しては、我々にその目覚しい戦闘能力を見せ付けてくれた。そして、今日、ここに奴らは現れなかった」

見せ付けるといふよりは、彼には何度も助けられた。あの常人外れの身体能力に、自在に変形する右腕。かつて無い、反則に近い能力である。

「これらから推測できるのは、>レッド<の活動目的が明瞭になったということだ」

「……義手の、確保ですか？」

肯定という意なのか、部長が腕を降ろす。

「奴らにとつて、あの義手が何の価値に値するかはわからないが、それが昨今の目的であることは間違いない。だとしたら、奴らがこの敷地以外に存在する理由も分かる」

「……」

「確実に、例の敷地では>レッド<が発生している」

別に愕然とすることでもない。薄々察しはついていた。

毅然として構える佐慧に、部長は尚も言葉を繋ぐ。

「中途半端に実力の有る者を持ち込んで負ける、数で圧しても負け、それならば人員を割かせ強敵を送り込むのが一番効率的だと悟ったのだろう。何が>レッド<を動かしているのかは知らないが、そういった考えが動いていることは確かだ」

「……それで、応援には行かないんですか？」

その言葉で、くるりと部長は佐慧の方に向き直った。

「応援？ 私が行ったところでどうにもなるまい」

「何故ですか？」

「>レッド<は策が稚拙であろうと、学習能力は著しいものを持っている。そして、>レッド<には数多の種類がある。単純に硬いもの、大量生殖が可能なもの、強力な攻撃を持っているもの……とだ。そして、私が見た中で一番厄介だったのは、無機物での攻撃が通用

しないものだ」

無機物での攻撃が通用しない。凜のナイフも遼太の義手も無機物である。

「私なら、こういった状況を作り上げて……そうだ、不確定な存在を匂わせておき、力を分散した上で、こういった夕チの悪い特製の>レッドくを持ち込むだろう」

「……通用しない？ 効果が無い……？」

「通用しない。全くをもって効果が無いわけではない。有機物は様々な変貌を遂げる可能性をもち合わせていて、その形態の種類は神を以ってしても把握は不可能だろう。だが、無機物はあくまで無機物だ。宇宙に浮いている無機物には限りはある。自律しないからな。だから、それらの無機物の種類を網羅し、その全てへの対処法を編み出せば、そんな体を作ることとは不可能ではあるまい」

「……でも、それじゃあ……」

佐慧は狼狼の色を露わにし、何かを危惧したかのようにか細い声を漏らした。それを見て部長は、指を立てる。

「まだ全ての可能性が却下されたわけではない。まだ彼奴らにはとっておきの切り札が残っている筈だ」

無機質な満身創痕（後書き）

私立合格通知を手に、きゃーきゃー喜んでたら、前のアップよりまた一週間過ぎてしまった……orz　なんとも怠惰な一週間を過ごしたものです。申し訳ない。

一応、完結に向けて急加速をしているんですが、これでもまだ佳境に入りません。ちょっと芋虫に時間掛けすぎたっばいです。

結末は一応、決まってはいるものの、下手したら酷くグダグダになりそうです……が、最後までお付き合いいただけたら、と思います。

夢と人と星空と

酷使し尽くした左脚はほとんど機能を失い、本当に棒のようになつてしまった。だが、そのことに気がついたのは、宙を舞い始めてから。もう、ほとんどそんなことは関係ない。どんな結果になるにしろ、この戦いの片はこれづく。

重力に捕らわた体はやがて重力に捕らわれ上昇力を失う。予測通りだ。

そのまま手を伸ばし 『それ』の背中に飛び乗った。岩肌のようにごつごつとした手触りが触れた部分に浸透する。上手く載れたようだった。

首を上げて『それ』の様態を窺うと、首を目まぐるしく動かしていた。どうやら、遼太が背中に乗っていることに気付いていないようだ。……意外だったが、気付いていないのであれば、無理に気付かせる必要も無いだろう。

とはいっても、既に両脚には限界が訪れていた。気付かれるのも時間の問題。結局のところ、チャンスは一回しかないのだ。

遼太は背中の外皮をきつく握り締めると、深く息を吸い込んで、再び跳んだ。今度は脚力ではなく、腕力で跳んだ。いくら身体強化しているとはいえ、腕だけで身体を跳ばすには、相当の負担が掛かる。こちらも限界といったところか。

軌道の修正が利かない世界で、遼太は身の線に沿って伸ばされた腕を無理矢理前方に伸ばすと、新たな足がかりを求め、そして。

大きな衝撃が遼太の身体を襲った。

頭蓋が気持ち悪くなるほど振動し、内臓も容赦なく揺るがされる。その衝撃の数瞬の後、遼太は自分が目標としていた場所にたどり着いたことを悟った。

景色がドラマのカメラワークの様に、目まぐるしく客観的に回転している。そして、その激動にあわせて体に圧力が掛かる。

今、遼太が腹ばいになって乗っているのは、『それ』の頭部。
流石にここまでできた。『それ』も遼太の存在に気付いたらしく、
抵抗するように首を振り回す。脳が飛び出しそうになるほどの圧力
が、四方から襲ってくる。

それでも遼太は最後の意地を見せて、頭頂部までよじ登ると、そ
の外皮を撫でて眼窩を探し始めた。

『それ』は火が体についたかのように暴れると、やがて頭を思い
切り地面に叩きつけた。

遼太はその衝撃に頭から弾き飛ばされそうになるが、どうにか持
ちこたえ、ひたすら頭を撫で回す。

全身が油を注いだかの様に熱い。それに比例し内部からエネルギー
ーが抽出されるように、どんどん体が重くなっていく。腕も義手の
本来の重さを思い出したかの様に、動かすのもだるくなっていく。

何故、自分はここまで頑張っているんだろうか。

いきなり襲われたかと思ったら、変なところに拉致されて、妙な
怪物退治に付き合わされて、毎晩命を晒して……何も報われない。
報酬など何も無い。

そんな利害も何も存在しない中で、ひたすら存在しないものと戦
っている。

何故？

『それ』の頭が跳ね上がり、顎に思い切りぶつかった。岩で殴ら
れたのと同じ鈍い痛みが、水に溶かした塩の様にさっと顔全体に広
がる。視界が歪む。

そんな満身創痕の最中、指が何かに引っ掛かった。外皮の凸凹と
は違う、明らかに何か特殊な粘膜が張っている、重要な部分だ。

遼太は一瞬の躊躇いも見せずに左手で頭頂部を抑えると、思い切
り身体を押し上げた。そして、右手を限界まで伸ばして、その眼窩
のなかに指を押し込んだ。

『それ』が甲高い咆哮を上げる。

遼太はそれをも無視。取り憑かれるかのように、腕を振るって眼

窩に指をねじ込む。

義手の指の腹が、網膜に触れると、遼太は爪を立ててその網膜を引っかき、抉った。その奥に転がっていると思しき視神経の群れをおもむろに握り締めると、引っこ抜いた。

言葉では形容できない、地球の悲鳴の様な音が轟いた。重力に束縛された遼太が『それ』が発した鳴き声だということに気付くまでには、少し時間を要した。

背中が地面に衝突する。ほぼ平行で着地したために、その衝撃は相当なものとなって全身を駆け巡り、その苦痛に遼太は堰込む。

だが、そんな苦痛を遥かに凌駕する激痛に打ちひしがれているのは、他でもない『それ』だった。

目から石油の様に黒い液体を噴出し、その場をぐるぐるとあても無く彷徨している。この世のものとは思えぬ咆哮を上げながら。

「うわっ！」

遼太は『それ』の醜態を確認すると、手に不快感を覚え思い切り振った。

指から跳んだそれは、弧を描きペチャツと地面に不時着する。そして、そこを中心に黒い池が溜まり始めた。

精緻な神経の集まっていると思しき、細い管の集合体だった。初めて遭遇した>レッド<の胴体を彷彿させるそれは、中途半端なところから管が伸び、その管は荒々しく引きちぎられている。

その集合体の中に、掌大の目玉があった。中枢を削ぎ取られ、指令と生命を受け取れなくなったそれは、死を湛えていて開いた瞳孔を遼太に向けている。

遼太はそれを踏み潰そうと立ち上がるうとして……、自分の体が限界なのに気付き、頂垂れるように地面に足をつく。

それと同時に『それ』の咆哮が徐々に収まってきた。黒い血液の逆流も収まっていく。

そして、ゆっくりと首を傾けると、黒い涙を流しているようにも見える薄暗い眼窩で遼太を見据えた。

片方の眼窩の奥に目玉が一つ入っていた。となると、『それ』を見る限りは必然的にもう一つの眼窩にも目玉が。否、『これ』のことだから、もつとあるかもしれない。

結果的には、賭けも何も、物理的に既に遼太の負けが決まっているのだ。

こんなボロボロの状態で、そう幾つも眼球を抉り出すことが出来る筈がない。

唇を噛み締めると、口の中に鉄の味が染みてきた。手をついた地面の冷たさが、どんな誹謗よりも酷薄に思える。

俄然吹っ切れたように、『それ』が襲い掛かってきた。

もはや完全に物理的常識を逸脱した瞬発力であつという間に間を詰められたかと思つたら、丸太の様な足で腹を思い切り蹴られる。

口から蛙の鳴き声の様なひしゃげた音が漏れ、なす術もなく空を裂き、管理棟の壁に背中を叩きつけられた。地面に落ちると同時に、口から血塊が漏れる。

皮の内部から何かが飛び出してきそうなほど、全身が熱い。視界がチラつく。

そして、思考が安定しない。

蹴られた拍子に、何かが漏れてきた。檻から放たれた大量のネズミの様に、不快な感情が流れ込んできたのだ。

悔恨、嫉妬、憎悪、嫌忌　負の感情が嵐の様に脳内を吹き乱れ奔流している。

これが、『あれ』の感情なのか？　>レッド<は感情を懐くのか？　先ほどの笑みはこれへの布石だったのか……？

混沌が視界を飲み込み、混乱が脳内を牛耳り、混迷が肉体に多大な負担をかける。要らない考えが浮かんでは消え、理解できない情報の水蒸気の如く噴出し焦燥を煽ってくる。

そんな錯雑の果て、忽然と視界が明瞭になった。

そこに映るのは、生命を絶望の淵へと誘う、最期の光景。

憤怒の形相でこちらに突進してくる『それ』の姿が。

悲鳴も上げられなかった。体も全く動かなかった。
なんか死刑囚みたいだな……と、遼太は危篤にある意識の中で苦笑した。

こつも死なんてものは、簡単なものなんだ。

もし、誰かが嘘をついていたとしたら。

もし、誰かが嘘で固めた鎧を着込んで何気なく毎日を過ごしていたら。

もし、そのままその嘘が本当のことだと思いついたら。

僕の中の世界は長さと高さだけでは縛り切れなくなる。

宇宙の時間は恒久ではない。ただ、長すぎるが故に恒久と勘違いされる。

万事に限りはある。

宇宙が何だか僕には分からないが、もしそれが嘘だったとしたら。どこかで僕たちのことを俯瞰しているモノの気まぐれの嘘だったとしたら。

懷疑すればするほど、疑懼は深い溝を構築していく。

昔の僕はもつと単純だった。

目に入るもの耳にするもの触るもの舌に触れるもの全てが正しいと愚直に信じ込んで、ただ前だけを見て時間のされるがままにされてきた。一切の存在意義を疑わず、流されていけば何か意義のある場所にたどり着く、と考えて。

それを嘘だと教えてくれたのが、>それくだった。

世界とはなにか、宇宙とは何か、今ここに僕たちがいるのはどうしてなのか。

全て教えてくれた。

そして、その全てが架空のものだ、とも。

そして、>それくが僕をここに呼び込んだ。否、産み落とした。

嘘が蔓延り恒常化する世界から、正悪がはっきりとした清潔な世

界へと転生した。

そして、悟った。

嘘じゃない世界なんて存在しない、と。

嘘だったんだ。全部。

でも>それ<はそんな僕に、救いの手を差し伸べてくれた。

『嘘が嫌いなら、正しい世界を作ってしまったえはい……』

これこそ神の詔だ、と僕は思った。

『新しい、清く正しい真っ直ぐな、お前だけの世界』

そうして、僕の世界作りが始まった。

最初は順調だった。

それでも、いつの世だって、邪魔者は居る。意見の食い違いとかいう、些細な理由で、大きな計画が破綻することだって、頻繁にある。

裏切り者の存在を軽視していた僕だったが、いきなり謀反を喰らうとは思わなかった。

人間の世界に置いておいた偵察役だった>レッド<が、いきなり僕との疎通を遮断すると、姿をくらましたのだ。

それから一気に部下達が減っていった。

おかしい。人間が彼らに太刀打ちできる筈などない。

そして、気がついた。『力』を得てしまった者が居るのだ。人間の中に。そしてその人間たちはご丁寧にも、部下殺しに身を呈しているのだ。

こちらとしても、人間の鬻ぎを買うのは御免だったので、極力人間に暴力を振るうことは避けてきた。

それでも状況は変わった。あちらが牙を剥くつもりならば、こちらだって剣を構えてもいいではないか、と。

あれから大分経ったが、彼らは大したことはなかった。ちよいと力を出せば、あつというまに天に召すことができるだろう。

最終段階。新世界の融合は、近い。

暗澹とした、自我の無い視界を塗り潰す漆黒が支配する狭間。漠然とそこに意識があることを黙認している。

それが突如、震撼しだした。酷い揺れだ。

「っ！」

誰かの悲痛な声が聞こえる。全身が釜にくべられているように熱い。

そして 遼太は覚醒した。

前の様に半身を跳ね上げる気力も無く、ただゆっくりと瞼を開く。

満天の星空 と表現するのにその星の数は足りないが、汚れた

夜空が目に映りこんでくる。……夢を見ていたようだ。

それを何かが視界を遮った。

「だ、大丈夫っ？」

全くをもつて大丈夫じゃない。満身創痍だ。内臓の一つくらい潰れていてもおかしくないだろう。

とはいっても、そんなでたらめに不安を煽る言葉など言えるはずが無い。

何故かここに居る凜には。

彼女に嘘をついてこんな怪我を負ったのだ。そんな経緯を持った上で、そんなことを言うのは無粋すぎる。無責任にも程がある。

遼太は凜を押し退けるようによろよろと半身を起こすと、身体を擦って両手を地面についた。

そして、目の前にある地面に向けて溜飲を吐き出した。血が混じった胃酸やらがアスファルトの地面に叩きつけられる。全てを吐き出して、ようやく喉が開通する。

それから、凜の方に向き直すように、身体を戻した。いちいち体を動かすのがだるい。気絶したからか、腕の『発動』は解除されてしまったらしい。

「な、なんでここに……？」

気持ち悪さに涙目になりつつも、そう訊ねる。遼太としては、当

然の疑問だったのだが　それを聞いた凜の顔が強張った。

「何でって……本当にそう思うわけ？」

「え？」

抑揚が無いだけに少しばかり怒気が感じられる。

遼太が絶句していると、凜は痺れを切らしたように腕を伸ばし遼太の両肩を鷲づかみにした。

「あんな嘘で！ 私を騙せたと思ったの！」

そして、ガタガタと身体を揺らしてくる。　感じた怒気は実在したと裏付けられた瞬間だった。

「えええ……っ？」

体内で折れた骨が滅茶苦茶に揺るがされ、それでも痛覚はとつくに効果は失っているのか痛みはなく、体内で蛭が暴れまわっているような不快感が全身に蔓延る。

だが、そんなことが気にならないほど、凜の顔は悲痛なものだった。

「あんな騙す気も無さそうな嘘ついてまで……っ！　何でボロボロになってくるの！　あんたマゾなのっ!？」

全く労わりの無い言葉。しかし、その貧弱さゆえ、遼太に対する配慮の大きさが分かる。

もちろん、絶叫マシンの数千倍の危険とスリルの最中にある遼太にそんなことが気付けるはずも無く。

「ああああ……吐く……」

「ちよつと！　吐くなら私のいないところで吐いて！　もう二度とそんな汚物見せないで！」

顔面蒼白になって呻く遼太を、凜は悲鳴を上げて突き放す。

もちろん、そんな凜の痛切な要求に応えられるはずも無く（直接的な原因を作ったのは凜だが）、遼太はその場で血塊を吐き出した。更にとどまらず、肺が飛び出しそうになるまで、咳き込む。

流石にその様態を見せ付けられた凜もようやく自分のしたことを省みて、慌てて遼太に近寄った。

「ご、ごめん……つ、つい……」

遼太は死ぬ思いで肺を鎮めると、凜の顔を見上げた。下手したら、もう二度と拝めなくなっていたかもしれない、その清楚な表情。固く歪んだ口に八の字に傾いた眉に、今にも死にそうな小動物を見るような目、今の状況で言つと、その小動物は遼太なのだ。

ようやく直視できて、更にようやくそれを実感した。

「生きてる……」

言葉を発すると喉が焼けるように痛い　実際に焼けているだろうが。

それを聞いて安堵したのか、凜は口元を緩めて言った。

「……生きてるんじゃない、私達が助けたの」

「助けた……あ、ありがとう……」

建前は見事にバレていた。なら、別に助けてくれたことに不思議はないが……。

「ん」

「うん？」

気がつく、凜の顔が不機嫌になっていた。

「……他に何か言うことは？」

「あ……う、ごめん……」

「よろしい」

また表情を戻す。

「こつちだつて早く助けてあげたかつたんだからね。でも、気付いたときにはもうやり始めてたみたいだし、警備員の足止めだって大変で……」

なるほど、確かにあれほどの咆哮が轟いて、少ししか離れていない凜が気付かない筈が無い。明らかに時間が経つたのに、人がこなかったのも凜のお陰か。

「彼が居なかつたらどうなつてたことか……」

ひとしきり納得したところで、凜が呟いたのを遼太は聞き逃さな

かった。

「彼？」

「うん、間に合ったみたい」

それと同時に、どこからか爆音が響いてきた。>レッド<の咆哮の様なものも聞こえる。

「相性は抜群みたい」

夢と人と星空と（後書き）

いよいよ作者も忘れていたあの人が帰ってきます^^；
最期のシーンが内定したんで、もうラストに向かって一直線です。
二月中に完結する予定なので、最期までお付き合いできればと思います……って何か毎回同じこと言ってるな……。
ええと、それでは。

遁走の果てまで

「誰？」

その轟音の方向を見て、遼太が訊ねると、凜はとある名前を口にした。その名前を聞いて 遼太は、全て納得する。全てとはいはいつても、遼太が理解していることは少ないが。

「竹中……？」

「……もしかして忘れてた？」

瓦礫が落下し、立てる音に慄き、遼太は顔を歪めた。凜はそんな遼太に呆れるように溜息をつく。

「たった二日休んでただけなのに…… 実質あなたの命の恩人なのに……？」

「わ、忘れてないから……、そう簡単に忘れられる人じゃないし」「そう？」

慌てて言い繕う遼太に、凜は疑惑の視線を向ける。

そんな二人を岩が落ちる轟音が隔てた。

「た、助けに行かなくていいの？」

「ここぞとばかりに遼太は訴える。すると凜はついと視線を逸らした。」

「……残念だけど、私達にはどうにもならないの」「……ん」

どこことなくその瞳には、しょんぼりとした落胆の色が浮かんでいるような気がして、遼太も意気消沈する。

凜の攻撃はどうかなのか分からないが、遼太の攻撃は一切受け付けなかった。この口ぶりから、凜の攻撃のほとんども効かないのだから。

「前に部長様から聞いたんだけど、無機物の攻撃を受け付けられない奴が居るらしくって。それで、『あれ』が噂のそれらしいんだよね……」

「無機物……の攻撃？」

「そう。私の剣だって、鉄とかそういうのでできてるから、もちろん効かないし……あなたの腕の攻撃だって全部効かなかったんですよ？」

「……うん」

凜の質問に、遼太は視線を伏せて腕を見やって答える。そんな原則な存在が在るとは……。

「でも、竹中君は別。ほら、人間の体って身も蓋も無く言っちゃえば、炭素が含まれてるでしょ？ 合気道とか空手とか、そういうのが彼、主戦力だから、すごい効くわけ」

なるほど。さっきからの咆哮やら地響きやらは、効果靦面だということを示唆していたわけか。

やがて凜は、半身だけ起こした遼太を置いてきぼりにするように立ち上がると、周囲を見渡した。

「さっき警備員の人は追い返しておいたから、もう朝までならどれだけ戦っても問題ないよ。部長様も少佐も呼んである」

「え……でも、僕達何もできないんじゃない？」

地割れでも起きたかの様に、無駄な音エネルギーを受け取りつつ言うと、凜は遼太の顔を凝視してきた。夜風が冷たい。それだけにその凜の瞳は暖かく、安心感が彷彿してくる。

「……だからって、黙ってられないでしょ？ 相性は抜群って言うたって、かなり今回の相手は手ごわい、分かってる？ 昨日の芋虫なんかとは天地の差があるのに」

「……じゃあ、どうする？」

小さくなる遼太に、凜は眉根を寄せた。

「……有機物が無機物になっているとき……、つまり、燃焼中なら効果は抜群……って言った様な気がする。知らないんだって、そういうこと。地球に来て間もないから」

「……燃焼中？」

「ライターとかマッチとかのしょぼい炎じゃ、電気マッサージ程度

にしかならないかな。もつと、こう、打ち上げ花火を打ち上げるときみたいな爆発力が欲しい」

「打ち上げ花火の破裂したときの爆発力じゃないのか……」
「……いいの！ そんなことは！ とにかく、そんなような心当たりない？」

心当たりを問われて、遼太は首を傾げる。……生憎と、腕の変化の種類の中にバーナーなんてものは無いし、ダイナマイトを量産できるような便利な機能も持ち合わせていない。そんな考えが浮かぶごとに、腕が呆れるようにしおれるのが分かる。

腕が駄目なら、やっぱリアルかなあ……。

「……どうしたの？」

凜が目を瞬かせて、遼太を覗き込んだ。その顔を真っ直ぐ見据えて、遼太は言った。

「先輩来るっていつたっけ？」

「うん？ 少佐のこと？ うん、来るって言うてたけど」

どのみち、腕がダイナマイトを作れようが、花火打ち上げ機の代用になろうが、彼女の協力は必要不可欠だったのだが。

熱波はフェイク。疲弊しているのか、実質範囲内に居た水を含む物質が高温になるのは、刹那だけだ。刹那だけなら、大して温度も上がらない。

相手もそれを理解しているのか、牽制として熱波を使ってくることは無かった。あいつが、体力を削ってくれていたのは僥倖だったのかもしれない。遼太とは顔を合わせていないが、凜によれば相当頑張っていたらしい。後で奢ってやっても良いか。借りた恩が多すぎる。

祥吾は撓る『それ』の右腕を易々と躲すばかりか、そのまま引っかく右腕に乗った。空を切った腕が制止した一瞬を衝いて祥吾は腕を蹴り、すぐ目の前にある頭部に跳ぶと、力が有り余る拳をぶち当

てた。

頬が凹み、眼窩から黒い液体を散らし、首を反らす。勢いがなくならないうちに、その反った首にしがみつくと、頭突きを頸にかました。

これはかなり効いたらしく、『それ』は激しく身を擦る。煽られる前に祥吾は地面へとダイブ、受身を取って衝撃を殺した。

かなり硬かった。眩暈がする。

「竹中君！」

そこで見計らったかのように、凜の声がした。こめかみを抑えて振り向くと、本人が居た。

「お前、危ないから下がってるって」

「あいつのこと、吹っ飛ばせる？」

なんの脈略も無く、叫んでくる。焦っているのか。

「吹っ飛ばす？ もっと具体的に頼む！」

「……花火を打ち上げる大砲から撃つみたいなのに、飛んだりする！？」

「……はあ、花火？」

「とにかく！ 『あれ』を地面に平行に飛ばせる！？」

祥吾は凜の叫ぶ言葉に混乱させられつつも、苦悶している『それ』を一瞥すると、難しい顔で首を振った。

「無理だな……」

「……おっけ。そんじゃ、あいつをサッカーコートとこまで連れてつておいて！ その後は、合図するから。そしたら、逃げて！」

それと！ この校舎は絶対壊させないで！」

「はあ……！？ ちょっと待てっ！ ……行っちゃった」

凜が校舎の陰に消えると同時に、持ち直した『それ』が突進を仕掛けてきた。祥吾の背後には管理棟。凜曰く破壊を許さない建造物。早速校舎存命の危機である。

しかし、跳び蹴りをかましたところで軌道修正が精一杯だろうし、跳び蹴りが今のところ祥吾の持ち合わせている最高級の技で

ある。いわゆる、万事休す。

少し分は悪いが、直接的な停止を狙うとする。跳び蹴りも十分物理的な妨害法だが。

祥吾は思い切り踵を返すと、校舎の壁に向けて駆け、その壁の一メートルほど前で地面を蹴った。

そのまま、上手く最小限に衝撃を抑えつつ壁に手を添えると、コンマ数秒で遅れて壁に張り付いた脚を跳ね上げた。バネの要領で祥吾の体が弾け飛ぶ。

高さは作らない。やはり、足止めはその名の通り、足を狙うに限る。

『それ』の巨体を視界に捉えた瞬間、祥吾は足を突き出した。空気を擦る勢いで突き出された脚は、欠片の躊躇も無く『それ』の丸太足に叩きつけられ、『それ』の巨体を揺るがせた。

そして、転んだ。

祥吾の体数センチ上を跳び越えて、自制を失った『それ』は止めるすべなく地面を滑っていく。校舎に向かって。賭けというのは、こちらの方だ。転ばせるのは難儀ではない。その後の、制動距離が問題なのだ。

祥吾は祈る気持ちで『それ』の尻尾を見る。

派手に砂埃を舞いたてながら、『それ』の体は屈託なく滑っている。すぐさま走り出してその不精な尻尾を引っ張って止めたかったが、生憎とそこまで機転は利かない。

そんな祥吾を尻目に、『それ』は腹を転がしていく。

校舎の五メートルほど前で、『それ』の体が擦れた。そのまま、仰向けになるように転倒する。

そして、校舎の数センチ付近でその体は停まった。

祥吾は胸を撫で下ろし、飛び蹴りのまま横たわっていた身体を起こす。

>レッドくに言葉がわかるかは分からないが、凜とのやりとりは聞かれていなかった……と思いたい。もし聞いていなかったのだから。

れば、このまま愚直に祥吾へ攻撃を続けるだろう。それならば、背後にある校舎などに攻撃が及ぶはずが無い。

と、思ったのも刹那。

仰向けになった『それ』は四つんばいの生物として当然の起き方をした。即ち、肢体をばたつかせて勢いをつけて、その勢いを利用して立ち上がろうと試みるものである。

あれだけの巨大な生物が、そんな起き上がり方を実践しようものであるのならば。

思い切り振りかぶった脚が校舎の壁に激突した。丸太脚の前では、強固なコンクリートの壁もさながら焼く前の粘土である。

更に悪いことに、起き上がったと思ったら、身体を預けたのは校舎側だった。お陰で跳ね上げられた翼が校舎に衝突。瓦礫が四散する。

「くそっ……」

祥吾は悪態を吐いて、地面を蹴った。

校舎に挟り込むように佇む『それ』は祥吾を一瞥すると、熱波を放った。正確には熱波ではなく、空気を振動させた摩擦で熱を起こしているだけなのだが、それが引き金となった。一瞬で十分だった。

ガスタンクが破裂したような轟音。弾け飛ぶ校舎の壁。しかも、瓦解した壁を中心に窓ガラスが四散し、壁が飛礫となって地面に落ちていく。

そして、校舎は上段の自重で崩れていった。『それ』がその土石流に巻き込まれたのは僥倖だったが、そんなのあまり関係ない。あくまで無機物による攻撃は通用しないのだ。

砂埃が目に入らぬように、目を眇めて校舎を見上げると、どうやら崩れ落ちたのは校舎の一部だけらしい。まだ半分以上の歩行できる形を留めている屋上がある。及第点だろう。

「ん……？」

それでも危険極まり無い屋上に、人影が見えたような気がした。

見間違えかと思ったが 違う。確実に居るようだ。見間違いとも思える服装をしているのだ。

黒コートに身を包んだ、遼太と凜だ。

祥吾に背中を向けて、一心不乱にどこかを目指しているようである。

「……なるほどな……」

そこで彼らの目論見を把握した。

奴の論が正しければ、必中の一撃必殺となり得るだろう、その策を。

>レッドくは、義手を執拗に追いかける。

その説が正しいことは、徹底的に何度も説明されていた。例が少なく、全てそうなのかと問われれば、首を傾げるほか無いが、少なくともあのドラゴンタイプの>レッドくはそれに当て嵌まる。凜曰く、遼太を『あれ』の前から連れ去るのに、相当難儀したらしい。

「現状、奴の視界は狭い」

凜に支えられた右腕が唸る。

「その上、眼下に敵が居るとなると、尚更上への注意は温くなる」
そう言った直後に、背後の地面が崩れ出したのだから、油断は出来ない。遼太は背筋を凍らせて校庭を見やった。祥吾が佇んで、この校舎の一階を見やっている。

「……本当に大丈夫なの？」

ボロ雑巾さながらの遼太を運ぶ凜が問い掛けてきた。

「そこまでたどり着けば、こいつが何とかしてくれると思う」

「……そ」

遼太曰く『そいつ』が再び唸った。

『あれ』にも祥吾にも気付かれず、屋上に転移することができたのは、他でもないこの義手のお陰である。『発動』を解除した方が、作戦的なコマンドが増えるのだ。

端的に言ってしまうえば、瞬間移動というものである。

「発動後、八十時間以内の再使用は不可」

という、制限付きだが。そんな熟考する余裕もなかったので、即断で使用を要求して、此処に至った次第である。

「やっぱり、校舎を壊しちゃ駄目っていうの、無茶だったかな

……」

凜が背後の瓦解した屋上を見やって、そう呟く。

「……どうだろう。ついでの要求としては適切だったんじゃない？」

「……」

要求三分以内にこれである。確かに不安を感じるのに無理は無いだろう。

力なく垂れ下がっている遼太の体は、少なくとも全快時より重いの、凜は苦もなく運んでいるように見える。とはいっても、担いでいるというよりは、肩を貸しているような形なので、凜の力が全てではないが、それにしてもテンポが速い。

サッカーコートが見えてきたところで、先ほど瓦解した校舎の瓦礫が爆発した。埋まっていた『それ』が瓦礫を押し退けたらしい。

瓦礫は飛礫となって、八方に散っていく。

その一部が、遼太達に牙を向ける。

真横に、『それ』の頭大の瓦礫が落ちてきた。耳が割れそうな、

岩の割れる甲高い音。

「危な……っ」

凜がそれを見て、顔を強張らせる。もちろん、災害は現在進行形で続く。今、回避したからといって、今後千載命中しないとも限らない。

雨の如く、大きな岩石（元は壁だが）が屋上に降り注ぐ。先が尖ったものは床に突き刺さり、大きいものは鈍い音を撒き散らし床に罅を作ってその場に鎮座する。そんなとんでもないドラマが、周囲十メートル以内で頻発しているのだ。

「後ろ！」

「分かってる！」

遼太が叫ぶと、凜は即答して、遼太を引き摺るように横に跳んだ。そして数瞬後、遼太の頭があった位置に、巨大な岩が突っ込んでいった。

凜はそれを見て安堵する。遼太も一瞬体の痛みも忘れていた。しかし、そんな安寧の時はつかの間。

「っ！」

すぐ近くで嫌な音がした。轟音とともに。

その音の直後、左腕の感覚が無くなった。肩に掛かる激痛とともに。

添付物とともに、異常を感じて左腕を見ると、大男並の大きさを持った岩が横たわった遼太の左腕を潰していた。

「だ、大丈夫っ!？」

凜が悲鳴に近い声を上げて、駆け寄るとその岩を蹴飛ばす。

蹴飛ばされた岩は、あつけないほどに倒れて遼太の腕から退くと、屋上を転がっていった。

「……………っ」

潰された腕は、見るからにぐしゃぐしゃになっていた。

皮膚は裂かれて筋肉が露見しているのはまだよく、悪い部分だと筋肉さえもが剥がれ骨が露わになっている部分もあった。出血量など、常人が一生に見る血量を凌駕しているだろう。

凜は顔面蒼白になって、その腕を観察した。

「だ、大丈夫……………」

「駄目っばいね」

しかし、そんな凜とは打って変わって、遼太のその声は素っ気無く、まるで他人事のようにだった。

その遼太の言葉を、諦念の言葉と受け取ったのか、凜は絶句して遼太の顔を見た。

「……………そ、そんな駄目って……………」

「ち、違っ……………だ、だ、大丈夫だって！　こんくらい！　あ、あれ

を倒せれば、もう全部片がつく！」

悲痛な顔をする凜に、遼太は慌てて言い繕う。

「こ、ここは危ないから！ 早く行こ！」

「……う、うん」

こんな状況にもなれているのか、凜は頷くと立ち上がって、遼太の腕 無論、右腕を取って立ち上がりさせ、再び屋上を走り出した。

遼太は先ほど居た場所を見やりながら、胸が潰れそうになるほどの焦燥を感じていた。凜は遼太の腕に夢中で、気付かなかつたようだ。

凜が蹴飛ばした岩は、フェンスを突き破って下に落ちていたのだ。そして、その後、凄まじい咆哮も聞こえていた……。

遁走の果てまで（後書き）

本来なら、このドラゴンも今回で終わる筈だったんですが、予想以上に出来事が膨らんでしまいました。

……プロット上だと、このシーンの指定も一行なんですが。芋虫と同様の泥沼に入り込んだらしいです。

……今月中に終わるのかな、これ……。

本日公立高校前期試験二日目だった作者でした。

硝煙模様の花火

半ば連行されるように、実際のところ運ばれて、瓦礫が流星群の如く降り注ぐその場を退いた直後、遼太の危惧は的中した。

祥吾が怒鳴っているような声が聞こえる。ついでに、咆哮は収まるところを知らず、ついには遼太の視界の端にその巨体を現した。その眼窩　眼窩の奥の目玉は確実に遼太達を捉えているだろう。間違いなく、例の岩は『それ』の脳天に直撃していた。

「……………気付かれたっばい」

「え？　嘘……………」

遼太は小声で凜に教えてやると、凜はか細い声で返してきた。

それと同時に、目の前の地面が弾けた。要らない爆音とともに、目の前の屋上が崩れ落ちる。

幸いにも、遼太達が屋上にいることしか確認できなかったからなのか、遼太達が居る地面は崩壊していなかったものの、これで完全に先は塞がれて、否、消し飛んでいってしまった。

陥没し陥穽と化した穴の前で凜が立ち止まる。

「……………ど、どうしよう……………」

どっちにしろ、『あれ』を倒すには、この屋上を伝っていくのが必須なのだ。義手の瞬間移転も、もう使えない。結果的には、落ちたら負け……………『あれ』の憤った今の状態から見るに、死は確実である。

「……………」

どう考えてもこの穴は、常人が跳び越えられるものではない。ましてや、一女子高生が男を担いで跳べるようなものではない。いくら戦闘能力が常人を逸しているとはいえ、身体能力まで桁違いになるほどのものではないのだ。

穴を見つめる凜の瞳を見て、遼太は　決断を下した。

「あのさ……………」

「……………何？」

おずおずと切り出した遼太に凜が視線を向ける。

「コートのポケットから……………中に入ってるものを取り出して欲しいんだけど……………」

「今すぐ？」

校舎が揺れた。激震だ。突進でもかましたのだろうか。だとしたら、こうして立っていることは僥倖、すぐに地面に沈み始めるだろう。

「今すぐ……………かなり急ぐかも」

「分かった」

凜は即答すると、躊躇なく遼太のコートのポケットに手を伸ばす。

「どっち？」

「右かな」

「……………ちよつと、取りづらい……………」

右ポケット　右肩で担いでいるため、二人の体は密着していて、その状況で利き手ではない左手で中のものを取り出すのは相当難しい。それは遼太にも分かっているが、如何せん既に体の大半が脳の言うことをきかないので、彼女に任せるほかないのだ。

凜は身体を擦らせ、自分の左肩と遼太の右肩とのゆとりを作ると、コートのポケットに左手を突っ込んだ。そして、その中にある物品に手が触れると、あからさまに嫌な顔をした。

「な、何これ……………」

「は、早くだしてっ」

甲高く細い声で音を上げる凜に、遼太は半ば焦って迅速を促す。

凜は蛙の脚を摘み上げるかのように、それを人差し指と親指で摘むと、恐る恐る引っ張り上げて　まだ蛙の方が何百倍もマシだったと痛感する。

真っ赤な目玉だった。

凜が悲鳴を上げたが、周囲の轟音に掻き消された。足元が酷く揺れる。

「ありがとう」

遼太はそう簡潔に言つと、右手にその目玉を載せてもらう。そして、そのまま握り締めた。

「ど、どうしたの……それ……」

「わかんないけど、こいつがいつの間になんか仕舞っておいでくれたみたいで」

眼窩の奥に仕込まれていた、本命の目玉である。あの時、取り逃したと思っていたが、先ほど確かめたところ、ポケットに収まっていたのだった。凜が気付く今まで気付かなかったのは、何よりも幸いだったと思いたい。

唐突に屋上が傾き始めた。

最初はゆっくりだった傾きが、傾斜が増すごとに速さを増している。このままでは、やがて地面に対して垂直、地面に叩きつけられる。

凜が今度は引きつった悲鳴を上げた。

バランスを保持する頼みの綱である靴と屋上の床の摩擦も、その接触面積を失いつつあり、やがて遼太がずりりと滑り始めた。遼太は目を瞠つて、凜を見上げる。目玉を潰した右手は未だしめられたままだった。

凜は唇を噛んで、床を蹴る。

転がる瓦礫を躲しつつ、雪の無いスキーさながらに直滑降、右手の甲を床に押し付け踏ん張りを見せる遼太よりも下手にでると、すぐ真下に回った。

そして、ナイフを取り出すと、すぐに巨大化させ地面に突き立てる。

ギーーと金属の擦れる甲高い音が響き火花が飛び散る。

凜は目を眇めてその火花の向こうを見やると、サツと手を伸ばした。

その手に遼太の襟首が引つ掛かる。

その感触が腕に伝わったのと同時に、その剣を思い切り床に突き

刺した。

ズガツとい、氷を裂いたような音。

俄かに重力からの采配から解放されて、勢いづいていたエネルギーを慣性が最大限まで使用し、体にガクンと凄まじい衝撃が走った。凜は安堵しようと思いを開き、現実を見る。止まったのは、凜達の屋上での落下だけ。校舎自体の崩壊は止められるはずも無く。

すぐそこに地面が迫っていた。ついでに、毅然とした『それ』の姿も。

「あ……」

と、呟いた時にはもう遅く、地面と屋上はすぐに垂直に交わろうとしており。

「ありがとう」

遼太の礼が聞こえた。

それと同時に、世界が視界の淵へと落ちた。煩わしい程の、頬を書く風が耳を撫でていく。

「えっ……？」

と、思った時には既に凜の体は遼太の腕の中、その遼太の体は自由を掴んでいた。早い話が、二人は空を飛んでいた。

それを認識したと同時に、下から遅いくる轟音。校舎が完全に倒壊したらしい。

遼太は校舎の瓦解を一瞥すると、重力を感じ始めた。そのまま、抗うことなく素直に自由落下し、まだ安全な屋上へと着地する。丁度、屋上の倒壊が始まる直前に目指していた場所なのだが。

「え？」

再び同じ感動詞を、降ろしてあげた凜が呟いた。

「な、なんで……？」

そして、混乱気味に遼太を見上げる。その瞳は、典型的なまでも、動揺と困惑を醸し出していた。そんな澄んだ眼を見て、遼太は困惑顔になる。

「ご、ごめん、説明は移動しながらでお願い」

そう早口に言っつて、凜の腕を取ると屋上を蹴った。その数瞬後、その場所は支えを失ったように崩れ始める。

満身創痍だったはずの遼太は、今やすっかり傷が治ったばかりか、コート の 損傷部分までが完璧に直っている。佐慧の能力も兼ね合わせているのか、と疑いたくなるほどだ。

「でもそうじゃなくって」

遼太がそう言っつた直後、地上で重いものが蹴散らされるような音がした。祥吾が『それ』を蹴り倒したのだろうか。

「一昨日の晩、あの初めてあいつらと遭っつた日なんだけど、その、>レット<の討伐が終わっつた直後にこいつから聞いたんだけど
つとー！」

高熱のエネルギー波が飛んできた。遼太は足首を捻り、足裏を爆発させて難なく躲す。凜がか細い悲鳴を上げる。ちなみに、さつき降ろしたのはつかの間、すぐにまた腕に収められ夜の校舎の屋上を疾走中である。

「赤い目玉を代謝変換して、治癒に活用できるんだつて。そんで、さつきのはあいつのーつ貰っつてきて、こつして使っつてみたんだけど……」

要は、目玉に込められたエネルギーを使っつて、体の傷を完全に修復できるというものだ。

正確にこの目玉の使用を心の中で内定したのは、腕が潰れた時だった。どの道、こんなポロポロの体で家に帰るなんて論外だし、病院に行っつたところで何年入院生活を余儀なくされるか分かつつたものではない。今になつて試行をしたのは、只単にタイミングが見当たらなかつつただけだ。

「それじゃあ……さつさと止めを刺すか……」

一通り言い訳まがいの説明を終えると、遼太は真正面に向き直つた。

管理棟は、敷地のだ真ん中に、長さの違つつ長方形をクロスさせた

十字の校舎である。それに管のように近辺の校舎に空中廊下接続されているのである。形式上では、管理棟を中心にするように抹消の校舎が繋がっている、と説明できるのだが、実際見てみると、そこまで単純ではないのが分かる。第一に、中央にあるべき管理棟が、サッカーコートと野球グラウンドと接しているところから、十分にその複雑さがはかり知れる。

遼太は屋上を一蹴して再び跳びあがる。滑らかな弧を描き、数多ある空中廊下の上に舞い降り、爆走を再開する。

視界をずらすと、周囲の景色と違和感のある巨体が目に入った。

>レッド<だ。祥吾は上手く誘導できたらしい。

「竹中君は……、なんて言ってた？」

それを一瞥し、遼太は腕の中の凜に訊ねる。凜は口をぱくぱくさせて目を白黒させていたが、やがて我に帰ったかのように話し出した。

「平行にぶつ飛ばすのは無理だつて……」

「……そっか。そんじゃ」

遼太は納得したようにそう呟くと、空中廊下から校庭に向けて飛び降りた。

このふわりと浮かぶ感覚。体の自由が利かずに、何かに誘われるかのように、愚直に重力にしたがって落下していく、その現実離れた感覚には慣れてしまった。いまだにこの内臓が浮く不快感には慣れないが。

「ひゃっ……………」

凜が小さく叫ぶ。よくよく考えてみると、彼女を抱えたのは初めてだった。佐慧に関しては、かなり嬉々としていたが、やはり彼女は異常だったのだろうか。

やがて、軽々と地面に着地すると、遼太は彼女を腕から降ろした。「今から、もう一度僕がこの上に上る。そしたら、あいつを銃撃して注意を惹くから。そしたら……尻でも引っ叩いてやって」

「……………一人で大丈夫？」

凜にしては珍しい、弱々しい声。遼太はそんな彼女に頷いてみせる。

「大丈夫」

素足での回し蹴りが見事に頬を貫き、『それ』の体は惨めに地面に倒れ伏す。裸足なのは、靴の上から蹴りつけるより、こちらの方が遥かに効果的なのが分かったからである。

『それ』が間抜けに倒れたその時、凜が祥吾の名前を呼びながら走ってきた。

「……………大丈夫だったか」

祥吾はやや冷や汗をかきながら訊ねる。恐怖は相当なものだったのか、凜の顔は紅潮していた。壊すな、と命じられた直後にあのような様だ。叱責の一つは覚悟していたのだが。

「だ、大丈夫……………それよりも……………」

息を切らした凜は、断続的にそう呻くように言うと、視線を祥吾から外した。祥吾もその視線を追って顔を向けると、そこには単身奔走する遼太の姿が。

「思いツきり引きつけて……………私達が思いツきりぶつけるの」

「……………結局そうなるのか」

祥吾は息をついて、遼太が校舎に飛び乗るのを見届ける。それと同時に、『それ』がのろのろと立ち上がった。

「……………わ、私疲れたから、止めるのは竹中君お願い……………」

見るからに疲弊している凜が、そう言うのを聞いて祥吾は顔を顰める。

「……………マジでそれでいくのか？」

「だって、今変更なんて……………」

『それ』が咆えた。見ると、彼方から光線が飛んできて、『それ』の体に次々と突き刺さっている。

『それ』はその光線をものともせず、それが飛んできた方向に向き直ると、身構えた。突進の全長だ。

祥吾は舌打ちすると、凜の頭をパシッと叩いて地面を蹴った。身体強化が可能な祥吾が全力疾走をすれば、『それ』の突進をリードすることは容易い。祥吾が『それ』を追い抜いた数瞬後に、『それ』が突進を開始する。

今回、足払いは絶対にタブーである。先ほどの件で、既に学習済みだ。

とはいえ、あの突進を簡単に止められる訳ではない。軌道修正はできるが、そんなことをしたところで、必ず「当たらない」とは限らないのだから……。

祥吾は少し前に出て距離を作ると、間合いを見計らって靴裏を地面と擦らせ、速度を落として、地面を思い切り蹴り飛ばした。反動で体が宙に浮く。そして、思い切り脚を突き出した。

絶妙なタイミングで、『それ』の頭と足が衝突し、凄まじい衝撃が脚を襲った。尋常の一撃ではないがために、『それ』の体も突進の勢いを殺さぬまま横転し滑っていく。

だが、今回はそれだけでは終わらない。

祥吾は着地して、エネルギーを全て地面に逃がすと、再び地を蹴る。

一瞬で間を詰めると、未だ滑っている『それ』の頭頂部目掛けて踵落としを喰らわせた。

バギツとよくない音がして、『それ』の体の運動に歯止めがかかった。

「どいてーっ!!」

凜の叫びが聞こえて、祥吾がそちらを見やると、巨大な剣（昨日遼太を救ったものよりはかなり小さめだが）を担いだ凜が走っているのが見えて、慌てて飛びずさる。

それを確認した凜は、思い切り振りかぶって、その刃身を『それ』の尻に叩きつけた。

グワンツ、と高速道路での自動車事故の瞬間のような音が響き、『それ』が飛んだ。

爆発に煽られたフィギュアのように、『それ』は地面を離れ空を引き裂き「それ」に向けて加速していく。

そして 爆ぜた。

『それ』の放つ熱波よりも具体的な、きちんとした化学式が成り立つ（熱波にも成り立つのだろうが、詳細の原理を知るものは居ない）大爆発。

一瞬で生じた、映画でもめったに見ない爆発を目の前に、鼓膜は限界まで震えて耳鳴りが起き、顔などの露出している部分は焼けそうな程熱く感じる。映像で見るとでは、あまりにそのインパクトに雲泥の差があった。

そして、その爆発の中心となった『それ』は 血肉と化したのは間違いないだろう。爆発に巻き込まれたのは間違いない。部長の言っていることは正しかったようだ。

祥吾は顔を腕で隠してその熱波から顔を庇い、ついでに凜の方向に直ると、凜は横に巨大剣を置いて尻餅を付き呆然とその光景を眺めていた。

「……派手な花火だ」

祥吾が毒づくようにそう呟くと同時、隣に何かが落ちてきた。その落下速度からして、ある程度重い音がしてもいいと思ったのだが、したのは軽い音。

祥吾が視線を向けると、その何かは遼太だった。あの爆発から逃れるためにダイブし、その衝撃を前転で抹殺したらしい。

「お疲れ」

「ん……どうも……」

祥吾が声を掛けると、遼太は立ち上がってそう返してきた。

そんな二人の傍らに、プレートのようなものが落ちてくる。もと、その建物に貼ってあったものらしかった。

そこには無骨な活字で、『中枢管理棟』とだけ、書かれていた。

硝煙模様の花火（後書き）

なんと二日で上げることができました……疲れました。ごめんなさい。なんか毎回謝ってる……？

忘れがちですが、まだまだ受験が終わりません。戦いは続きます……。

感想、めっちゃ待ってます……感想もらえると、ズバズバ進むのは実証済みなので、是非ともしていただけると、ありがたいです。

時空の彎曲

「無茶をしでかしてくれたな」

部長は跡形も無くなつて、炎を轟々とあげる校舎跡を見て言った。遼太はそれを聞いて首を竦める。

肌が熱で焼けたのかヒリヒリと痛む。体の創痕は完治したものの、疲労ばかりはどうにもならない。せめてもの反応が首を竦めることだった。

……無茶、と言われても仕方の無い挑戦だったと遼太は自覚はしている。

爆発物の上に立ち、囿になつた上で寸前で爆発させる。常人であれば、試してみようとも思わないし、ましてやそんな結論に至ると思えない。わけではないか。映画ではしょっちゅうありそうな展開だ。

となると、今おかれた状態は映画さながらの状態。

「しかし、よくぞまあ、その校舎が爆発物の集まりだつてことを知つていたな」

部長がフルフェイスのヘルメットを傾けて、座り込む遼太を俯瞰して言った。

凜が遼太に視線を向けてくる。祥吾は、特に關心無さそうに炎を見つめているだけ。

両者共、遼太の言ったことを鵜呑みにしてさっきの作戦の助長をしてくれたのだろうか。遼太は漠然と今の自分の立場に愕然とする。

遼太は首を落として返す。

「……従妹がここに通つてるんです」

「ほう」

「入学したての頃、そんな校舎があることを雑談として聞かされていたんです。灯油とか、そういうのから科学部が使うような薬品を

全部一つの校舎に収納してる、と」

「なるほど。確かに、外見からそんな雰囲気はする」

部長が首を上げ、それに釣られるように顔を上げると、既に炎も消え失せ元通りに校舎がそこに屹立していた。校舎の腹に、危険を促す！マーク。

遼太は複雑な内情でそれを眺めていると、部長が鼻を鳴らした。

「今回は、コウちゃんの宿主の従妹君の頭脳に助けられたということか。貴様、後々おく拜んでおくがいい。命の恩人だ」

直情径行な人だ、と遼太は心中で苦笑する。ちなみに、毎日養ってもらっている身としては、とつくに命だけでは償いきれないほどの恩人なのであるが。

「お疲れ様」

どこからか、佐慧が姿を現した。部長は首をヘルメットごと回して、その姿を確認する。

「む、ご苦労だ、少佐」

「現物を見たことが無いから、適当に私の感覚で復元させちゃいましたけど、大丈夫ですかね？」

「なに、多少形が違ってても、奴らはこれを常識として認識するがゆえ、気にすることは無い」

二人の談話を聞き流しながら、遼太は復元された校舎とそれを繋ぐ空中廊下を眺める。いざ、その場を走っているときは、無闇に長ったらしく感じたその空中廊下も、こうしてみると短く見える。もともと複雑なルートを造っていたのを、佐慧が感覚で改竄して直線にしたのかもしれないが。そう考えると、この世界は本当に常識で縛られているんだな、と思う。

ふいに目が留まった。

その空中廊下の高架下。空中廊下を支える柱のもとに、人影らしきものが見えた。既に、証明となり得る要素が無くなり、遼太の視界も明瞭であるとはお世辞にもいえない状況ではあるが、なんとなくその情報は確信しても良いと思えた。

遼太は弾かれるように立ち上がると、地面を蹴った。同時にふらりとその人影も身を翻して陰へと消える。制止の声があがったような気がしたが、無視させてもらう。

高架下の柱に手をあて、それを軸に勢いを殺さずに直角ターン。視界が開ける。人影は校庭のご真ん中に佇んでいた。漆黒の空を背景に、髪を流した背中をこちらに向け、何かを待ちわびる様に。

その堂々とした姿に、遼太は足を止める。造られた右腕が、脈打つ。冷や汗が頬を伝い落ちる。

やがて、その人影が緩慢な動きで振り向いた。

「くんばんは」

遼太は瞠目しかけたが、逆に眇めることによって威勢を保持する。直感を言い訳にするわけではないが、いや、動体視力まで良くないっているのだろうか。

思わずその人物の名前を口にした。

「……葉山さん？」

「ふふ、ご機嫌麗しゅう」

少女 今日行方不明になっていた生徒、葉山実璃はそう言って微笑んだ。その妖艶な声に、遼太の背中が粟立つ。更に稀有なことに、右腕が緊張の色を露わにした。こいつが動揺するとは、珍しい。でも、それはそれで納得できる。彼女は 変だ。

単刀直入に言い表してしまえば、態度が違う。人が違う。

少なくとも、こんな時間にほぼ縁がないと言ってもいいこの場所に、あたかも当然といった態度で居るような人物ではなかった。もしいつもの彼女であって、こうして目撃されれば、とっくにパニックに陥っていてもおかしくない筈だ。

「なんでここに……？」

そして、遼太にしても稀有なことに、毅然とした態度で彼女に語りかける。

「ふふ……ちよっと……天体観測にでも」

実璃はそう言っつて、夜空を仰ぐ。

「でもよく考えてみれば、空っつてこんなにも汚いのよね。月が見えるので精一杯。なんて因果な世の中なんでしょう」

「……」

「しかも、こんな空で満足している人間が居るんだもの。本当に遺憾で仕方ないわ。でも、この空が綺麗になる方法がある、つて言ったら、どんな方法が在ると思う？」

実璃はおどけた笑みを遼太に見せつけながら問うた。意図の掴めない質問に、遼太は困惑する

「どうっつて……？」

「そうね……例えば、排気ガスのみを吸引できる掃除機とか？」

本気で言っつていないのは、顔を見れば明らかだ。遼太はその顔を見て、改めて戦慄する。

「……」

相手のペースに錯乱されてか、満足のいく答えが出てこない。遼太の満足が、彼女の感覚ではどうであるかは分からないが。

寡黙な遼太を嘲笑うかのように、実璃が口を開いた。

「それじゃあ、貴方たち曰く、存在しないものくでも使っつてみたらどう？」

「……どういう意味？」

「さあ？ そんなの自分で考えてよね」

存在しないものを使う？ 常識に屈せざるを得ない存在で、常識を覆すだと？

「ふふつ、分からないのも当然よね。目の前にあるものにひたすら翻弄されて、利己のためにそれを活用しないで、そのままなすがままに朽ちていく儚い運命しか選べないような子だもんねえ……」

実璃は目を細めて、喉で笑う。遼太にはその揶揄の意味を漠然と理解して、仄かな憤りを覚える。

「なすがままに……？」

「そうでしょ？ 貴方も奇々怪々な連中に拉致されちゃっつて、お気

の毒よねー。もしも出会わなかったら、あたしみたいに自分のための世界を構築できたのに　って、あら……」

実璃はようやくそこで言葉を切って、笑みを絶やした。そこに一喝。

「退けっ！」

遼太はそれが自分に向かって言われた言葉と受理して、慌てて飛び退いた。

その頭上を一発の弾頭が飛来していく。実璃に向かって。

「やあね。皆さん勝手な正義感に翻弄されちゃって。そういう人は狭量だから嫌い」

実璃は弾道に向かって悪態をつく、身を翻し　と思った一瞬後、弾道が目的地にたどり着いて爆発した。

硝煙が燻り、煙が蔓延する最中で遼太はとある言葉を聞く。

『最終段階。世界の融合は近い』

「逃げられたか」

火薬の焦げる匂いを体に纏った部長が背後から現れた。大儀そうに手に持った筒をガチャガチャいじると、横手で投げ捨てる。

「知り合いだったようだな」

半ば呆然と佇む遼太の横まで歩いてくると、そんな遼太の顔を見ようせずに言った。

「……学校での隣の席の人です」

「……ほお、運が悪かったようだな」

「……運？」

遼太が夜空の保護色であるヘルメットの横顔を盗み見ると同時に、再び後ろから足音が聞こえた。振り返ると、凜達が走ってこちらに向かっている。

凜は足を止めると、地面に穿たれたクレーターを見ると瞠目した。
「な、何……？」

「あー、すまない、少佐。仕事が増えた」

「……了解です」

啞然とする凜を尻目に、部長は佐慧に声を掛け、佐慧は事情を聞くでもなく屈託なく頷く。

「彼女は何なんですか？」

佐慧が視界から消えて、予期せぬ事態に困惑気味の凜と眉間に皺を寄せ眼光を鋭くした祥吾に見守られ（ているかどうかは知らないが、状況的にそう言っても認識に差は出ないのでこれでいいとする）、遼太は部長に視線をぶつける。部長はようやくか、といった感じで溜息をヘルメットの隙間から漏らした。くぐもったその声から、彼の疲弊が窺える。

「詳しいことは知らんが……鍵であるコウ氏が宇宙にその存在を置くことになったきっかけ、私は時空の歪みと称しているが、それを引き起こしたそもそもその存在であると私は推測する」

「……どういう意味ですか？」

「奴はなんと言っていた？」

部長の問いに、遼太は空を見上げる。

「今の空は汚いが、それを綺麗にする方法を作るとしたら……と」「なんと答えた？」

「答える前にあっちが勝手に模範を言ってきました」

「それか」

「……はい」

義手。ナイフ。脅威の身体能力。想像実現能力。それらが類するのを総括して、『それ』。

部長は息を吐いた。

「……言ってしまうば、厳密に言うとそのらも全て>レッドくだ。それは分かるか」

頷く。

「奴は、空云々といったが、それは解釈の仕方を変えれば、世界を変える方法があるとしたら、なんだろう、という反語での示唆

なのだ。即ち、これから私は世界を変えてやるう、という意だ。奴が何を求めているか知らんが、二億年という猶予はあまりにもありすぎだ。それだけ準備の時間があれば、それなりの策をぶつけてくるのが定石というものだ……」

「……世界を……変える？」

「左様だ」

世界を変える。何故？ 何故宇宙に侵入し、何故わざわざ地球を選び、こうして意図の掴めない行動に出たのだ……？

思索の渦から逸して、ふと顔を上げるとクレーターが消えていた。それと同時に進行で、ひよっこりと佐慧が姿を見せる。

「……今日は解散だ。激戦だったようだな、体は休ませておけ」

部長は一同を見渡すと、そう言っただけで踵を返し立ち去った。

「……どうしちゃったのん？」

その後、何故か重い空気が流れて沈黙に陥るその場に疑問をもつたのか、佐慧が各々の顔を見渡して言った。その言葉で、遼太はようやく我に帰る。

「……さあ……」

「？ まあ、とにかく今日はお疲れ様。ゆっくり休んでねん」

「はい」

佐慧は微笑を漏らしてそう言うと、部長に倣うようにその場を立ち去っていく。そしてまた、昨日と同じようなパターンに陥る。違うといえ、祥吾が居るくらいか。

と、思ったところで凜が口を開いた。

「そんじゃ、私たちも帰ろっか」

ふいに縛めから解放されたような感覚がしたかとおもったら、骨が鉛になったかのようなダルさが体を覆い尽くした。異変、と感じると同時に、発動が解除されたのか、と漠然と理解する。そういえば、昨日妙な契りを交わしていたような……。

「……どうやって帰るんだよ」

「タクシーかなんか拾えるんじゃない？ とにかく、手段はどうで

もいから早く帰りたい……」

祥吾と凜の会話が聞こえる。遼太はそれを聞いて、手をズボンのポケットに入れ、遠い空を眺めた。

「……財布どつかで落としたな……」

佐慧によつて改変されたこの世界に、彼の財布の居所はない。

翌日の授業中。

遼太は席についてはいるものの、そわそわと落着かなかつた。既に、校舎倒壊のイメージは払拭されているのだが、今日は隣の空いた席の底知れぬ威圧感に圧されている。

なんとなく、というか不可抗力だが、遼太は昨日見てしまった。

彼女の本来の姿……かどろかには知らないが、私生活以上に見てはいけないものを。

目が赤かつた。真つ赤だつた。闇の中でも分かるほどの赤。

その不思議な眼光を思い出すだけで、戦慄が背中を駆け巡る。その戦慄を隠すのに必死で、教師の演説なんて脳に吸収されない。

こんなところで指名されたら、一巻の終りだが、その程度の危機を恐れるのであれば、ここまで酷い震えはありえないだろう。

部室のドアを開くと、部長がドアから一番遠い席にどっしりと居座っていた。黒い衣に包まれた足を組み、遼太のことを凝視している。

そして、一言を矢の様に放つ。

「騒がしい」

「すみません」

遼太は屈託なく謝罪を述べるとドアを閉めて最寄の席についた。

と、遼太が座ると同時、再びドアが開く。

「……あ、こんにちは……」

「どつも」

凜と祥吾が、そう言って入室してくる。そして、各々が任意の席についていく。

何故かそれから、誰も言葉を発しなかった。どちらかという
と、この場の議論はほとんど部長に委託されているので、部長が寡
黙を守っていることが、この沈黙に繋がっている。だが、そののっ
ぺりとしたヘルメットに隠されている表情を窺うことはできない。

腹の奥から、厭な緊張がこみあげてくる。こういう場面は特に苦
手なのだ。

そんな杞憂も一瞬の様。部長が口を開いた。

「何ゆえ、君たちはこうして部に居座り、在らぬものとして戦闘を
する？」

視線をもちろにあてられた凜は困惑顔を作った。

「え……？」

「私はそれが不思議でならない。自分に対して全く利益にならない
ことを、こんなふざけた形でする君たちが」

……部長の声にも、かつてないはつきりとした困惑の色が混じっ
ている。遼太はそれを感じて、再び例の少女を思い出す。

「調べてみたら、はつきりとした。昨日遭遇した例の女子は、
元凶だ。今、この世に蔓延る混沌の根源だ」

混沌の根源。

俄かには信じがたい。ただの、平凡なクラスメイトだった彼女が、
気味の悪い怪物をここに送り出してきて、戦略的に自分を狙ってき
ている？ 彼女が？

「昨日になって姿を現したということは、既に世界を乗っ取る
準備は完了しているということだ。だが、ああした挑発をしてきて
いるということは、我々の存在が邪魔だということを暗に示してい
る。恐らく……近いうちに奴は襲い掛かってくるだろう。少佐には、
自宅待機と言っておいた。彼女が出てくるのに奴は危険な存在だ」

つまり、最初に言ったあの言葉が指す意味は……。

「貴君らも、自分の命が惜しかったら、逃げ出してもいい。それだ

けだ
」

時空の彎曲（後書き）

今回は短めです。最終決戦に向けての、前夜という扱いなので、作者もちよつと休ませて置かないと……。

一ヶ月前の自分とは、方針が全く違うので、急展開になってしまったことは、不甲斐なく思います。……ただ、いい感じに伏線が撒けているのは僥倖でした。もし、全く撒いていない状態であつたらと思つと……ああ、怖い怖い。

最後の混沌への幕開け（前書き）

ストーリー展開を円滑にするために、前話のラストに付けたしをしました（二月十日付）。

読んでいない方は、閲覧推奨です。

最後の混沌への幕開け

遼太はそつと柵に近づくと、手を載せて力を込めた。ふつと体が浮いて、柵を飛び越し、着地。固い靴底が固い音を鳴らす。

いつも通りの、見るものをも陰鬱な気分させる暗い校舎。いつもどおりの、足元から吹き込む風に、今日は顔を直接引っ搔いてくるおまけつき。首を窄めてコートの襟に頸部を全て隠し、校庭へと歩み出る。

次いで、後ろから音がする。振り返ると、凜がコートの裾を翻して柵を乗り越えていた。

一昨日の反省を活かして、遼太達は集合場所を学校外で決めておき、待ち合わせを図ることにしていた。昨日、眞夏高校の存在をも知らなかった凜が、易々とそこにたどり着けたのは、遼太と落ち合わせたからである。ちなみに考案者は、例によって一番の被害を被った遼太だ。

たった一日振り いや、六時間程度見ていなかったただけなのに、随分と久しぶりに感じられる。それだけ、昨日の戦闘は内容が濃かったのだ。

「なんかこうして来るのも久しぶりなような気がするな」

凜の後から続いてきた祥吾が言った。遼太が祥吾の方を向くと、彼は肩を竦めて見せる。

「……なんとかなる」

凜に関しては、忙しく瞬きを繰り返している。

一同の挙動がぎこちないのは、先刻部長が言っていた言葉が影響している。

葉山実璃は凶悪な存在。下手すれば、宇宙の因果を改変し、阿鼻叫喚が常識の世界を作り上げかねない。そして、目的以外には盲目である。特に、邪魔をするものには容赦しない。時空を歪ませて、宇宙外の真理を捻じ曲げるほどの実力を持ったものが、今、自分た

ちを仕留めに来る。止めはしない。恐いのであれば、別に金輪際この部活に顔を出さなくていい……。

部長の最初の質問には、自分を納得できる回答が見つからなかった。良く分からないが、やっている。そんな感じである。

それでも、強大な力を前にして、みすみす尻尾を巻いて布団に包まって世界平和を願うだけの、横柄な正確は持ち合わせていなかった。

きつと、この場には居ない佐慧だつてその気持ちは同じだろう。

空を見上げると、塗り潰したように綺麗な月と、小さな一等星がちらほらと見える。

汚くなければ、満面の星空。でも、彼女はそんな綺麗な星空を見たいがために、こんな大仰な事態を作り上げたのか？ たかが、とはいえないが、少し高が外れた行為であることは間違いない。常識的には。

しかし、そんなあやふやな常識が通用する筈などないということ、遼太も重々承知している。深く考えると、思考が泥沼の様な陥穽に嵌っていく。軽拳に出るのは愚策だが、深慮もまた愚策である。だから、こうして何も考えずにここに登場してやった次第なのだが。

広がるのは先ほどまで見ていた景色がそのまま黒く塗り潰されただけの校庭。昨日と違って、そのバリエーションは無いし、広さも大したことは無い。ただ、校舎を跡形が残るのであれば、そこまでの考慮は要らないという点は、昨日より気持ちの面では遥かに楽だ。金属が擦れあう音がして、振り返ると部長がこちらに向かって歩いてきていた。明日は、日本沈没だろうか。

「……待たせたな」

だが、そんな他愛の無い冗談が悪質に聞こえるほど、部長の雰囲気は真剣だった。普段の様態では感じられないほどの貫禄を感じる。部下を守る熱血刑事も、こんな感じなのだろうか。

凜が軽く頭を下げて会釈、祥吾は首を下げて挨拶を済ませます。

部長はそれに応えず、首を回して校庭を見据えた。

「……」

沈黙。遼太はその部長の体裁に底知れぬ戦慄を覚えた。

動揺している？

しかし、疑問をぶつけるまでもなく、その時が訪れてしまった。

校庭の中心辺りの光のバランスが歪み、あたかも空間が歪んでいる様を見せ付け、ぱっくりとその「場所」が裂けた。そして、その隙間から躍り出るかのように

「よっこらせつと」

場にそぐわない態度で「彼女」が現れた。トスンと地面に着地。

小さな砂埃を作り上げる。

どんな意図があるのか分からないが、容姿は昨日の制服姿とは打って変わり、真っ黒なドレス姿。そぐわないともいえるが、何故か彼女が纏うとそれが正装の様に見えるならない。

実璃は顔を上げて、遼太達を見据えると、にっこりと微笑んで見せた。

「ふふ、やっぱり来てくれたのね」

「義務だ」

部長が素っ気無く返す。なんとなく、凜達の様子を確かめたかったが、ここで振り返るのは憚られた。相手は仮にでも宇宙外の因果を捻じ曲げた存在。その内に秘める力は計り知れない。

部長の返答を聞いて、実璃は口の端を更に吊り上げる。

「……いつも思うんだけどさー。戦隊物のヒーローって本当にヒーローなの？」

そしてその口から飛び出るのは、他愛も無い不可解な疑問。

「複数でなんかチームみたいなの作ってさ、一人の相手をとっちめるの。それってどうなの？ フェアなの？」

「相手の力量とこちらの力量がつりあっているから、フェアだろう」
部長が冷然と答える。

「ふーん。ま、それはそれでいいんだけどね。でも貴方たちはさー、

どう考えてもフェアじゃないわけでしょ？ ちよつとくらい傷を負って帰ってもいいのにさ、毎回無傷で勝っちゃって。しかも、リセツトまでできるんでしょ？ いくらなんでも、私たち不利過ぎない？」

「現実の危機に対して誰も娯楽など求めない。はらはらするのは、画面の中で十分だ」

「へえー、それが正義なわけ？」

「正義を気取った覚えは無い。それに、自分に害があるものは、即座に潰すのがこの世界黙認の掟だ」

「そんじゃ、いつまで経つてもここは戦乱が普通になるじゃない」

「この世では、人間の数だけそれぞれの考えがある。それゆえ、考えを統一させて支配することなどできない。危険な思考を排斥したところで、どこか見えぬところで再び危険は生まれる。歴史は繰り返される」

「なにそれ。学習できないわけ？」

(……………?)

もはや、この場は部長と実璃の独壇場だった。あからさまに疎外されているものの、遼太は全く自分には無関係だと感じることはできない。

仮にでも、実璃は自分の隣の席の女子、良き隣人である。そんな彼女が、こんなにも醜い鬱憤を心中に収めて隠しつづけていた、と考えると。

「学習云々の問題ではない。人間的な問題だ。個人の所望する良を求めていけば、必ずどこかで利害が対立する。それらに打ち勝つて人間は発展を続けていく。それが最悪の結果に繋がるうとな」

「……………くだらない」

「それでも、私はこんな世が好きだ。無知とは時に便利なものだ。お陰さまで、今はここまで円満な生活を楽しませてもらっている」

その言葉を聞いた途端、実璃の目が吊り上がった。

「……………へえ。それは宣戦布告と受け取っていいの？」

「最初からその気で来たのは、そっちだろう。私は、私で自分なりの思考を貫かせてもらう」

……成る程。何かが一貫していないと思っていたら、ただの挑発だったのか。

実際、実璃の顔に、明確な憤怒が表れる。

「……それじゃ、私も遠慮なく、私なりの思考を貫かせてもらおうかしら」

そして、閃光。

空が縦に裂かれ、歪んでいた空間の深刻化に拍車が掛かる。

そして、その狭間から現れたのは。

「……またか」

祥吾の悪態が聞こえた。無理も無い。

昨日と全く変わらぬ巨体。トラウマになり得るその赤い眼球。人間十人が軽々収納されてしまいそうな、その顔を分断する口。

紛れも無い、昨日死闘を繰り返した、ドラゴンに違いなかった。

「どう？ これ。私が考えたんだけど？ 人間が考え出したデザインにしては、随分と有効性が高くって、ある程度技能も無理に施せるし、格好いいから、取り入れてみたんだけど？」

実璃の饒舌に応えるように『それ』が咆えた。

汗玉を背中に浮かべる遼太にとって、それだけでとんだ送りものののだが、彼女の豪胆さが窺える、第二手が打たれるとは思ってもよらなかった。

時空の変遷はまだ衰えずに、二体目を召還し始めたのだ。

二体目のそれは、のっそりと切れ目から姿を現し足踏みを始めめる。

「驚いたー？」

そんな実璃の面白がる声と同時に、三体目が躍り出てきた。却ってここまでしてやられると、清々しい。

更に四体目。

これ以上出てこられると、校庭が満杯になりそうだ。そんな密集

空間での戦闘など……無謀だ。

だが、どちらかというと、それはあちら側にとっての有利になり得るのだから、あっちだって抜かりは入れない。

捕まえてきた虫を披露するかのように、順繰りドラゴン型の『それ』が現れていき、都合六体がこの校庭に居座ることとなる。猫が趣味だという人の家に居る大量の猫を見たような気分だ。

「やるからには勝ちにこないかね。でもどっちかっていうと、これでようやくフェアになれたって感じかなー？」

実璃は得意満面の笑みを浮かべている。

「今までの貸しを含めて」

部長はそんな彼女を無視して、遼太達に向き直った。

「昨日と同じ奴か」

「……はい」

「私と竹中で奴らを引きつけておく。貴様と凜君は中核を頼む」

「え」

有無を言わず部長は早口で捲くし立てると、祥吾に向けて手を下から振り上げて、同行を促す。それと、同時進行で懐から兵器を取り出した。

「頼んだ」

そう言つと、部長は地面を一蹴して『それ』の群れに突っ込んでいく。祥吾が慌ててその後を追つていった。

半ば茫然としてそれを見送った遼太だが、右腕に喚起されてようやく現状を見据える。

「……私の存在内の記憶の蘇生を感知」

「……？」

「彼の我を宇宙空間へ誘つた存在と相違無し」

遼太はその義手の言葉にゾクリとして、改めて彼女を見据える。

暗い中、黒ドレスを纏った彼女の姿は、妖艶であった。首もとまで生地が伸び、下半身はボリュームのあるスカート、そこに幾多のレースが添えられている。どの要素をとっても彼女にピッタリで、

なんとも靈感的な容姿だ。

だが、その表情と照らし合わせると、さながらホラー映画の猟奇そのもの。

「何してんの！ 早く行こっ！」

後ろから凜に思い切り背中を押されて、遼太は我に帰る。

「あ、ごめん」

遼太はようやくいつもの感覚を思い出し、右腕にスイッチを入れた。

体が軽くなる。視界が明瞭になる。肌に空気が触れてくすぐったく、『それ』の咆哮がいやというほど鼓膜に飛び込んでくる。頭が熱い。

「僕が真正面から突っ込んでみる。君はサポートを頼む」

遼太は目まぐるしくその状況を確認すると、凜にそう言って返事も聞かずに飛び出した。右腕を剣に変形させながら。

実璃に近づくその道すがら。半分と来たところで、校舎の方から『それ』が突進を仕掛けてきた。もう二度と目にしたくなかったその攻撃に、右腕が栗立つ。

遼太は脚を捻って身体をそっちに向けた後、その脚をバネにして空を舞うと、突進してくる『それ』の頭に思い切り横から刃身を叩きつける。

頭蓋骨が鳴る嫌な音がして、『それ』が嫌がるように頭を傾ける。突進の勢いが弱まるのは同時。

遼太はそのままの勢いで頭に載ると、両腕を振りかざし『それ』の燦然と輝く赤い眼球に各々の腕を突っ込んだ。

右手はともかく、左手の不快感は異常だったが、遼太はそれを気合でねじ伏せて頭を蹴り飛ばして、再び勢いを作り、実璃に向けて跳躍する。

と、遼太がその頭から退いたと同時に、その頭が爆発した。遼太が驚いて周囲を見渡すと、筒を肩に担いだ部長の姿ある。これは貸しなのだろうか、借りなのだろうか。

地面に軽々と着地すると、背後で『それ』の巨体が倒れた巨大な音が響き渡る。成る程、部長の兵器も、一応爆発を主な威力とする攻撃なのか。

死骸を一瞥することなく、遼太は実璃に向けて猛進。

実璃を視界の中央に捉え、全力疾走の体勢に入った遼太を見つけた実璃は、少し驚いたような顔をしたが、すぐに不敵な笑みを顔に貼り付ける。

もちろん、そう安直に突っ込むつもりなどない。

足首を常人なら挫くであろう角度にひん曲げて、走行方向を変えて実璃の脇をすり抜ける。そして、すぐに身体を捻って実璃の背中を見ると、踵を浮かせるとつま先を弾き跳んだ。

そのまま、一直線に実璃の背後を獲りに向かう。

「流石、相性最悪の相手に勝利した人ね」

結果は、台詞の通り。

実璃はやはりこれも常人を逸した動きで振り向くと 真っ黒な傘で遼太の剣を受け止めた。 同時に、『それ』の咆哮。

鉄がぶつかり合う大きな音が響く。

祥吾か、部長か。

答えを模索する気も起こさず、遼太はそのまま刃を擦らせて傘から外すと、脇から斬り上げる。実璃はこれを後ろに跳んで躲す。

遼太は追撃を試みようとして、右腕をデフォルトの位置まで戻し相手を捕捉しようとして前を見る。

が、仕掛けてきたのは実璃の方だった。

傘を振り上げて、単純に地面を蹴り上げて襲ってくる。そして、遼太の目の前で振り下ろす。

対人は初めてなので、遼太はその奇襲に上等の反応ができず、その傘を右腕で弾く。

ただ、咄嗟の反応でもそれは良好な判断だった。

一撃の重みを重視した攻撃だったので、実璃の反動は大きく、その体が少し仰け反る。遼太はその一瞬を狙って、右腕を弾いた方向

とは逆に難いだ。

身を捉えるはずの一撃は空を斬る。そして、斜め方向からの打撃。身体を捻って躲す。

捻った身体を戻す勢いでそのまま斬撃。カンッ、という金属音。めげずにもう一度素早く振りかぶり、目標をずらして斬撃。手ごたえ無し。

どうやら、横に跳んで避けたいらしい。遼太と実璃の間には距離が出来上がっていた。

遼太は肩で息を吐く。そこまで息は上がっていない。実璃も同様だ。

もしかして、実力は同じなのか？

そんな愚かしい考えが浮かび、慌てて脳内から打ち消す。そういう浅慮が命取りになるのだ。

警戒を解かずに、実璃が口を開いた。

「ふふ、やるわね。流石、私の脱走を梃子ていし摺すりらせただけあるわ」
義手への言葉だろう。

そうだ、あくまで遼太がこうして戦っているのは、「偶然」この義手を宿らせてしまったからなのだ。人が代わっても、きっとこれだけのことはこなせる筈。

「……だろっ？」

だから敢えて、遼太は同じく口の端を吊り上げ、挑発的な言葉を投げかけた。案の定、実璃もそれに乗ってくる。

「あら……昨日と比べて随分とまあ態度がでかくなつたわね……」
右腕が実璃の言葉の度に疼いたく。苛々しているのだろうか。

「お陰さまで……」

剣を構えた状態で視線を地面に落とす。そこで、爆発音と咆哮が轟く。

「順調みたいね」

「うん……>こっちくもね……」

遼太がそう言って、視線を上げた。

その視線の先に恐ろしく巨大な剣が実璃の背後から、彼女に向けて倒れてきていた。

空気を引き裂く音に、地面と接触する音が混じりあい、腹がむかむかする轟音を撒き散らしながら巨大剣が倒れていき、その刃先が遼太の目の前で止まった。

周囲の喧騒はまだ収まらない。

最後の混沌への幕開け（後書き）

……なんか、悪役バツチシ決まっていますねー……。
えー、文中でも言っています、起承転結でいう、転と結の狭間で
す。……この物語に起承転結が存在するかどうか分かりませんが。
とりあえずまあ、終りに向けて突進し始めている、ということですよ。
……最後までお付き合いいただけたら、光栄ですorz

余談ですが、昨日の発表で、前期試験落ちてましたorz おかげ
さまで、一行も進まなかったぜ。一応、落胆という感情があること
を知りました。
できれば、終わらせたかったんですがしゃあないです。後期試験に
向けてまた勉強が再開されますので、更新は今までどおりです。

では、今後ともよろしくです。

赤く黒い悪魔

荒涼とした空気が頬を撫でていく。

砂埃がこれでもかというくらい蔓延り、周囲の喧騒はヒートアップ。

突きつけられた刃先に、遼太は怖じることなく周囲を見渡し、突進してくる『それ』を捉える。この程度で（と行ってしまつては、凜の立つ瀬が無いが）、彼女がくたばるとは思えない。まだまだ警戒を絶やすのに尚早なのは分かっているが、明瞭な危機には対処しなければならぬ。

遼太は地面を蹴り上げると、目の前に聳える巨大剣の切っ先に靴裏を載せて、再び思い切り蹴って、いけるところまで跳び上がる。

そして、祥吾の見様見真似で、脚を突撃してくる『それ』の頭に向けて振り上げた。

岩を蹴ったような重くて攣ったような痛みが脚に浸透していく。そして、とても筆舌では語り尽くせないゴン、という重々しい音。

それと咆哮が聞こえるのは同時。

遼太は反動で宙を一回転し、着地。酷い衝撃はあったが、脚にそこまで大きな痛みはない。

すぐさま振り返ると、その体は尚も宙を舞っていた。そのすぐ傍、同じく宙を舞っている祥吾の姿が。同じ表現とはいっても、加害者が被害者かどうかで、見栄えが大分違う。

その数瞬後、祥吾が『それ』から十分に離れた瞬間、『それ』の体が爆音と共に炎に包まれた。

なんとも恐るべきコンビネーションである。遼太は自陣の行動ながら戦慄を覚える。

しかし、そんな戦慄も刹那。背後に凄まじい殺気が出現する。

地面を抉る勢いで足首を回すと、慣性を利用して剣を突き出し、振り向きざまに振り上げる。

甲高い金属音。

それと同時に、後ろにいた人物が後方へと跳び退く。

「あら、バテてた？」

スカートを揺らし、実璃は微笑してみせる。馬鹿みたいに硬い傘である、殴られたりしたら堪らない。何ゆえ傘なのかどうかは知らないが、衣装といい、貴族を気取っているのだろうか。

巨大剣は既に回収され、その場から消えていた。それにしても、凜の一撃必殺であるこの奇襲は、遼太でも反応が俄かにできないほどであった。遼太が気付いた頃には、既に手遅れだったであろう。

それを、彼女は

「……驚いてるみたいだけど、いくら私でもあんな奇襲避けられるわけないでしょ？」

「……だよな」

そう呟く遼太の視線の先、実璃の左袖は真っ赤に染まっていた。痛々しく下手すればショック死もありえるその出血量にも関わらず、彼女は平然と笑みを浮かべている。見る方がショック死なりしそうな形である。

「そつちにも手加減する気は無いつてことね……」

実璃は傘を両手で握り締めて、警戒を露骨に表す。

「命狙われれば、必死になると思うけど……」

遼太が半ば突っ込み調で呟くと同時、傘が変形を始めた。遼太の右腕の様な、グロテスクな変貌ではなく、固体が融けて再び融合するような変形。

そして、最終的には、剣へと姿を変える。

真っ直ぐと屹立したその全貌。刃は酔狂なまでにキラキラと輝き太く長い。そんな大きな刃身を支えられるのかと思えるくらい、細い柄。その中ほどで、彼女の手は握られている。

「それじゃ、こっちも真剣に取り掛からせてもらっわねー……」

そんな凜のとはまた違った禍々しい気を醸し出す剣を恍惚として眺める実璃。下手すれば、一撃で右腕の剣を葬れるであろう、その

剣を見て、遼太は今日何度目かの戦慄を覚える。

次の瞬間、空気が荒れた。

強靱な威圧を肌を感じ、遼太はなんとか踵を浮かして飛びずさり、剣を突き出し横に薙ぐ。交わる刃。飛び散る火花。

「火花ツ!？」

遼太は驚愕、混乱して闇雲に剣を振り回し、相手の剣を引き剥がす。そんな遼太を見て、実璃は冷笑を浮かべる。

「情けないわね。剣同士でやりあえば、この程度普通よ」

挑発にしては、辛辣だ。

疑問の余地を与えぬまま、実璃は一閃。

火花に慄きつつも、その一閃を弾き斬撃を加える。体すれすれで受け止められて、軽くあしらわれる。そして、相手も同様にして隙を狙ってくる。

遼太には、同じことを繰り返しているようにしか見えない。が、彼女のことだから、狡猾な落とし穴でも用意してあるのだろう。

そんな思考が脳裏をよぎり、焦燥が生まれる。

剣を交じらせるのは何度目になったか、唐突に実璃が口を三日月に歪めた。

「ところで、あなたと私の決定的な違いって分かる？」

「……性別」

「惜しいわね……正解は……、武器の使い方の便宜性」

実璃はそう言った刹那、腕を振って遼太の右腕を引き剥がすと、間髪居れずにその剣を下から上に振り上げた。遼太は腕を横にして、防御を図る。

グワン、と衝撃。だが、それと同時に、違和感が身体を巡る。

思わず宙を見上げた。空を舞う、実璃の不恰好な剣。

剣が 武器が手からすっぽ抜けたのだ。

「ね」

腹が強く瞬間的に圧迫された。

「っ!」

口から息を漏らして確認すると、どうやら蹴られたらしい。大胆な行動をとって油断させた後、物理的攻撃に走るとは。

第二撃が来る。体が反応できず、防げない。

左脚の素早い蹴りを脇腹に喰らって、遼太は身を振り、それを感じた。そんな蹴りとは比較の対象にならない攻撃が近づいてきている。

首だけ回して横を見ると、遠くに佇む『それ』の姿。そして、その直線上には、高熱のエネルギー体が、真っ直ぐに遼太に向けて飛んできていた。

更に、その一瞬だけで、傍の実璃の気配が消える。首を戻すも、既にそこに実璃の姿は無く、否、上に居た。

盛大にその内を露見させ、剣を手にした上でそれを遼太目掛けて振り下ろしている彼女が。

遼太は直感に敢えて従い、地を蹴る。この力を宿してたった三日程度だが、それでも幾度となく空中に身を投じている。空中は得意なほうだ。

普段の何倍もの脚力で宙を舞うと、思い切って実璃の懐に入り込む。実璃が顔を歪めるのが見えた。ここまで素早い判断は予測していなかったのだらう。遼太ですら、自分の反応に愕然としている。

なんとなくその顔で勇気付けられた遼太は、下りてくる剣の柄を左手で掴むと、脚を持ち上げて背中を曲げ、思い切り足裏を突き出した。自然と、実璃の腹を蹴るような形になる。

「あつ……」

背後から近づく高エネルギー弾。

遼太は実璃を踏み台にするように、その真っ黒なドレスを蹴りつけると、二段ジャンプよろしく一段と高く宙を舞う。男という面目があるのであれば、決して出来ない偉業である。遼太はじきに罪悪感で心中を塗り潰されるであらう。

だが、そんな逡巡の猶予を与えぬほど急な状況だったのだ。

恐らくは運動エネルギーの限界の位置までたどり着き、飛翔の速

度が遅くなっていき、止まったところで眼下にエネルギー弾が通り過ぎていった。異質なる高温の物体に、肌がヒリヒリと焼ける。目が痛くて開けていられない。

そんな一瞬の地獄は通り過ぎて、遼太は自由落下の体勢に入る。

エネルギー弾の行方を知ろうと振り返ってみると、エネルギー弾は実璃に向けて真っ直ぐと飛んで行っていた。実璃に関しては、遼太に蹴り飛ばされたので体に自由が利かない。

靴裏が地面につく。それと同時に、爆発音。

『それ』の存在を忘れて、その爆心辺りに視線を飛ばすと、そこには地面に身を投げ出した実璃の姿があった。周囲から黒煙が舞い上がっている。

直撃したのか。それなのに、生きているのか……。背後から衝突音が聞こえた。祥吾が跳び蹴りでもかましたのだらう。

遼太が唾を飲み込むと、彼女はよろよろと立ち上がった。

「……流石ね……ちょっとあなた達のこと舐めてたみたい」

遼太は油断無く地面を踏みしめ、彼女を凝視する。

「全く……貴女のせいで、碌に動けなかったわ。大したサポーターさんね」

そう言って実璃が振り向いた先には、刀を携えた凜が佇んでいた。「達」とは、凜と遼太のことか、それとも『中世武器研究会』という、ふざけた部活の存在のことなのか……。

そういう実璃の体裁は酷いものだった。

黒いドレスは焼けただれ、所々破けて皮膚が露わになっていて、落ちた衝撃か左腕が妙な方向に曲がっている。髪もぐしゃぐしゃになり、品の良かった顔も酷く歪んでいた。というよりも、泣きそうな顔になっている。

「……やっぱり手加減は不要だったみたいね……。ふふ、あなた、私がかこれだけの怪物を管理していて、あつという間に灰になっていっちゃう『その子』達が私の最強の手駒だと思う？」

身体の痛々しさとは裏腹に、一切の高揚を感じさせない実璃の声と、言葉。

「今のはあなた達のウォーミングアップ。今度は……、そうね、もう一人の私に相手になってもらおうかしら……」

そう言った瞬間、実璃の眼が光った。比喻ではなく、燦然とした赤色に。

その幻想的な光に遼太の右腕が疼く。その場に居る者全員が行動を止めて、その光に視線を集めた。

「……ラスボスカ」

部長の呟きは誰の耳にも入らない。

遼太はその光を茫然として見ているだけ。フラッシュの様な、照明のような明るさではないのに、ポケットライト程度のか細い光なのに、どこにそんな見る者を惹かせる要素があるのだろうか……。

ふいに実璃は剣を正常な方の腕で担ぎ上げると、思い切り地面に向けて振り下ろした。突き刺さる剣先、抉れる地面。

だが、傷ついたものはそれらだけではなく　空間をも切裂いていた。

「私の悪魔……」

実璃がそう呟きながらその裂け目に手を伸ばす。

そして、空間が一気に凝縮されて、弾けた。

刹那、殺気が周囲に充満する。

遼太は屈むと後ろに飛び退いた。一瞬後、遼太が居た辺りの地面が派手に抉れる。

息を吐く間もなく追撃が訪れる。

咄嗟に右腕を突き出しその攻撃を防御すると、一瞬の間も持たせずに腹に鈍い衝撃が走り、あえなく吹っ飛ばされる。

左手だけで受身を取りつつ、その攻撃が加えられた方向を見やると　見知らぬ『それ』が大仰そうに佇んでいた。

真っ黒な翼、がっしりとしているがすらりとした風に見える体躯、しかしそれは外観的なバランスであって、比率は人間の三倍近くあ

りそんな人型である。全体的なイメージとしては、黒で統一されているようで、体にはこれも真っ黒で高級そうな布が巻きつけられており、頭部には細かい細工が施されて穴の二つ開いたバケツのようなものを被っていて素顔は隠蔽されている。

そして、露呈された眼は、恒例の如く赤かった。

「ふふ、かつこいいでしょ、これ」

そんな巨人の肩から、実璃が笑い声をあげた。首にしがみつくようにして、遼太を俯瞰している彼女の傷は遠目でも分かるくらい痛々しかったが、それでもそんなことを感じさせないほど、その声は爛々としている。勝ち誇ったように。

「私が崩した時空の歪みの代謝を上手く構築しなおして、その時に生じたエネルギーを宇宙外の物質を宇宙内の法則に則って化合させて、それに知性を埋め込んだのが、『この子』。容姿は気に入らないんだけど、すつごくかつこいいだから」

理解できない創造過程と矛盾した言葉。遼太の背中の悪寒はとどまるところを知らない。口の中がズキズキと痛む。先ほどの攻撃を回避した衝撃で、口内を切ったらしい。

遼太が何も言わないうちに、『それ』が槍を片手に構えた。そして、実璃が狂気に満ちた笑みを浮かべる。

「名前は、面倒だから悪魔でいいよ。はい、いつてらっしゃい、フェネクス」

実璃のおどけたその命令に、『それ』 『フェネクス』がギチギチと顎を鳴らし今まで見た中で一番気味の悪い赤い目玉で、遼太の姿を捉え 驀進する。

刹那で遼太までたどり着くと、槍を造作なく突き出した。

遼太はその一撃を横に跳んで回避すると、足を迂回するようにして素早く背後に回りこみ、跳躍。その無防備な背中に右腕の剣を突き立て難いだ。

布が裁たれて皮膚が裂かれて肉を切り刻んでいく感触が、リアルに腕に流れ込んでくる。

フェネクスの体内からそれを引き抜くと、遼太は反撃を恐れずぐに降下し、着地、前転で衝撃を殺して立ち上がる。

そんな遼太の目の前に、フェネクスの体液と思しき液体が落ちた。砂を吸収し、とろみを帯びたそれは、そのまま抗力と重力のつりあいに身を任せ動かなくなる。

見上げると、遼太が切り刻んだ辺りから、体液が噴出していた。見るからに、致命傷に見えるそれなのだが（かといって、左胸の辺りを切りつけるのはいくらなんでも安直だが）、フェネクスは全く動じていない。

その肩から実璃が顔を覗かせた。

「ふふ、どう？ 効くでしょ？」

その声にあわせて、フェネクスも首を回して遼太を見る。

「あれみたいに、攻撃が効かなかつたら、こっちが有利過ぎるでしょ？ だから、わざわざ証明してあげたの。というわけで、サービスはここまでね」

フェネクスの目が瞬く。

それ同時、その腕がありえない角度にひん曲がり、その腕に伴われるように体が反転。

目の前に槍が突き刺さって、砂が跳ねた。しかし、その砂の射程距離に遼太の姿はない。

遼太は一瞬の判断（反射とも言う）で、足裏を弾くと一直線にフェネクスに向かって駆けていく。

そして、剣による空中攻撃の必中範囲に足を踏み入れた瞬間、フェネクスの体が全面的に回転、真正面から遼太と対峙する。

その大きな両腕双方に、違った種類の武器が握られていた。槍、と、剣。剣は、実璃の持っていたものを巨大化させたようなもの。槍は、その剣をそのまま細長くしたようなものである。

遼太は唇を噛んで、姿勢を低くし、急接近を試みる。体が巨大な分、接近されると不利な筈。

なのだが。

「あら、ごめんなさい。あなたは後。どっちかというと、あなたよりもあつちの方が早く済みそうだから、あなたは後回し」

そんな遼太は完全に無視されて、フェネクスは一躍、遼太の頭上を易々と飛び越えて、真後ろへと奔走していく。

その先には、毅然と刀を持って佇む凜の姿があった。

無謀だ。無茶だ。遼太でも、一つの攻撃を避けるのが精一杯なのに、常人の身体能力しか持ち合わせていない凜が直接乗り出すのは、無謀だ。

脚を唸らせ、カ一杯その後を追うが、遼太の五倍近い脚の長さを持つフェネクスの後姿を大きくすることはできず。

剣が一閃された音を聞く。空気を分断させた、まさしく風を斬る音。

その刹那の後 派手な金属音が轟いた。剣と剣、否刀と剣を交じり合わせるような音でもするのだろうか。

「知らなくてもいいけど」

遼太は瞠目して後姿のフェネクスの脚の向こう、刀を翳してフェネクスの剣を受け止めている凜を見た。あからさまな力量の差があるのにも関わらず、魔法でも掛かったかのようにフェネクスの剣は動かない。

「刀はね」

フェネクスの腕が震える。だが、凜の姿勢は揺るがない。あくまで柄を握り締めて、ただ操られるかのように、フェネクスを捉えている。

「接近武器の中で一番強いんだからね」

そして 時間が動き出したかのように、その剣が退かされた。

「舐めないでよねっ！」

そんな怒号と共に。

赤く黒い悪魔（後書き）

改めてこの小説の世界観を見直してみると、どうしても何か既出の作品の世界観と似たり寄つたりの様な気がする。

異世界からの使者、バランス保持の為に討伐する種族……？

意識はしていなくとも、なんとなく似てしまっていると、二番煎じ感が否めません。こいつに無理にSFアクションやらせるところなるんです……orz

突発的なノリで始まった今作ですが、いよいよ大詰めです。一応、ラストは結構なものを用意しているつもりですので、期待してください！

……ちなみに私め、約束は守りますが、嘘はつきますのでご容赦ください^^^；

唯一の欠陥

遼太はフェネクスの体が仰け反ったのを見ると、すかさず地面を蹴りつけてその隙をものにするべく接近を試みる。

背中が視界一杯に広がったところで、その背中が半回転、その遠心力に乗せて太い腕が飛び込んできた。顔を凜の方に固定させ遼太を一瞥もせずに半身を捻つての、渾身の裏拳である。

遼太は咄嗟の判断で、背中から照準を外すとその槍を握り締める手の甲に右腕を突き出した。三者の持つ武器の中で一番劣るその刃が、牙を剥き、その鉄板の様な甲に、深々とめり込んでいく。

だが、フェネクスの反応は微弱なものだった。むしろ、そのことを予想していたかのような素っ気無さ。

見るからに痛々しいその攻撃をもるともせず、フェネクスは遼太が載った手の甲を振りかぶった。

そして、思い切り凜に向けて振り下ろす。裏拳ではなく、最初から遼太のことなど眼中に無かつたらしい。

凄まじい速度で振り下ろされた拳の斬る空気の流れに、遼太はいとも容易く吹き飛ばされてしまった。弧を描いて宙を舞うと、地面にしこたま身体を叩きつけ、そのまま何回か転がり、ようやく静止。慌てて顔を上げて確認すると、凜は上手いことその拳を避けたらしく、そればかりか刀を翻して脚を斬りつけている。

遼太は痛みに愚弄される肢体に鞭打ち、冷たい砂を噛み締めるようにして立ち上がると、筋力に物を言わせてそんな二人のもとへと走っていく。

と、足を翻したその瞬間、目の前で爆発が起きて、遼太はその熱に驚いて立ち止まる。

「忠告だ」

声が聞こえ、その方に顔を向けると、部長が見慣れた筒を携えて遼太に向けて叫んでいた。

「翼に気をつけることだ。……常に注意を置かないと、ただでは済まない」

「……はいっ！」

遼太はそれだけ返すと、再び足裏を弾いて黒煙の燻る一体を駆け抜けた。

煙を抜けるとすぐに、剣を交える凜とフェネクスが視界に飛び込んでくる。

凜の方は圧され気味で、ひたすら振るわれる槍と剣を弾いていた。どう考えても力量が違う。このままだと、凜が危ない。

吹き込んでくる空気が鬱陶しい。眼を眇めて思い切り姿勢を低くすると、何度目かも分からぬ跳躍をし、フェネクスの肩あたりまで身体を持っていく。

そして、フェネクスが槍を振り下ろした。腕が振り下ろされ、その上腕で隠されていた肩が露わになる。

遼太はその肩に乗っている人物に、狙いを定めた。

右腕の先を肩の上に乗っている実璃に向けると、肘を脇に引き思い切り突き出した。

遼太の体がフェネクスに接近するのは同時、そして、金属音が響くのも同時。

「あら、残念。私だつてまだやれるのよ？」

実璃が剣を翳し、遼太の右腕を受け止めていた。

遼太が睜目した隙を衝き、実璃は腕を振るい遼太の右腕を弾く。

遼太はそれに煽られ、空中でバランスを崩すものの、なんとか左手を伸ばすとフェネクスの肩に引っ掛けた。重力に体がひきつけられて、腹をフェネクスの腕に叩きつけられる。

遼太の存在に気付いたフェネクスは、凜への攻撃を一時的に中止し、腕を必死に振り回す。

再び地面に叩きつけられるのは御免だ。とはいっても、右手がこれなので、片手でしか捕まっていない状態であり、そんな状態でそう持つはずも無い。

遼太が祈る気持ちで凜の方を見やると　偶然にも、彼女と目があつた。微笑している。

凜はそのまま何も言わずに駆け出した。刀は地面をなぞるように下に向けられている。

そして、見えない空間を切裂くように、思い切り空を薙いだ。

「……ああつ！」

実璃が悲鳴を上げる。遼太は掴まっている腕の動きが鈍ったのに気付くと、サツと肩の上に這い上がり、実璃に奇襲を仕掛ける。

だが、フェネクスの体が大きく揺らぎ、両者ともその場に直立していることが困難になった。

敢え無く遼太はフェネクスの体から飛び降りる。

地面に足をつけてから、フェネクスの方を見やり　遼太は絶句した。

腹がパツクリと裂けていて、その向こう側の景色が見えていた。その傷口からは、やや固まった体液がドロドロと流れ出しており、地面にボタボタと垂れ流されていく。

ソニックブームだ。刃に生じた衝撃波のエネルギーを、音波としてではなく、空気の波として伝播させる遠距離攻撃である。

遼太はそんな光景に愕然としつつも、凜の姿を見つけると近寄って声を掛けた。

「大丈夫？」

遼太としては、気遣いの言葉だったのだが、俄然凜は不機嫌な顔になった。

「あんたさあ……もしかして、わたしのこと心配してたわけ？　それとも、頼りにならないと思ってるわけ？」

「え？」

不機嫌、というよりも、怒っている。遼太の目を真正面から睨みつけてきている。

「あいつがあたしのところに突っ込んできたとき、あんた真っ先にこっちに走ってきてたでしょ？　なんで？」

「……え……」

「なんで、といわれても　というのが本心。」

「闇雲に突っ走って反撃食らって、もしかして、あたしを助けようとかなんとか思ってたの？」

「そ、そりゃあ……」

「それじゃあ何？　あたしがあいつとタイマン張るのが無謀だ、とかなんとか思ってたわけ？」

凶星だ。

でも、どうしてここまで怒るのだろうか……、声色もいつもよりも高いし、口調も派手に乱れている。何が彼女をここまで苛立てるのだろうか。

「……全然分かってない！」

困惑する表情を見せる遼太に、凜が一喝。

「最初あんたが、一人であいつと闘ってるのを遠くから見、あなたがただぼおつとして見てたとも思ってるわけ！？　心配に決まってるでしょ！　それでも、あたしはあんたの指示に従って、信じて見守ってた……その気持ち分かる！？」

「……」

「昨日だって、下手くそな嘘ついて、死にそうになって！　なに格好つけようとしてるわけ！？　どうせ格好つけるなら、勝つてきなさいよ！　あんたんこと信じて、警備員の足止めしてあげたのに、どうしてボロボロになって帰ってくるわけ！？　あんたが一人で闘ってるわけじゃないの！　それなのに、一人で頑張ろうとして、下手なことして怪我して……あたしのこと舐めないでくれる！　あたしとあんたじゃ、これをやってる時間は全然違うんだからっ！」

それだけ言うと凜は口を噤んで、遼太を睨みつける。その目がほんのりと赤くなっていることに、遼太は気が付く。

それから、凜は視線を逸らして、しょんぼりとして呟いた。

「……それとも……、私がそんなに信頼できない……？」

信頼？　してる。してるに決まってる。

それでも、彼女を怒らせてしまった。何故か？ やっぱり信頼できてないのか。

共闘してきたのは、僅かな時間だけだ。そして、遼太は毎回誰も傷つけるまいと心がけてきた。それが裏目にでたのか？

違う、凜の願いも同じだからだ。誰にも傷ついて欲しくない。凜の求めるものが理解できた。ごく当たり前だが、失っていたもの。盲目になって突き進む余り、視界にすら入らなかったこと。それでも、凜はきちんとそれを自分に求めてきた。自分から、差し伸べてきた。

協調、を。

「分かった」

遼太はそれだけ言うと、凜の頭に手を置いた。凜が驚いたように体を震わせると、驚いたような顔を遼太に向けた。

「どうせ今日が最後なんだ……それなら、皆の悔いが無いようにやるわ」

「……お取り込み中失礼だけど」

遼太と凜が話しているその脇から、実璃が高所から声を掛けてきた。見上げると、相変わらずの形でフェネクスの肩に実璃が載っている。

「……まだ終りじゃないわよ？」

「分かってる」

怖じることなく、遼太は応える。

「それじゃ」

「うん」

凜が近くから声を掛けると遼太は頷き、小走りに校舎に向かつて走っていった。

その後姿を眺めて、刀を手に持ち据える。大丈夫だ。彼は信頼できる。元来、そういう性質なのだ。見た目でなんとなく分かる。

なんでも背負い込むタイプなのだ。いわゆる、将来女の尻に敷かれるタイプ。

先ほど、憤怒に乗せて吐露した言葉は演技でも嘘ではなかったが、ああ言えば協力してこいつを倒せる、と確信していた節はある。

自覚はある。彼に依存している。

戦闘力では、圧倒的に遼太の方が上である。単純な攻撃力では凛の方が上だが、便宜を踏まえて見ると遼太が総合的には秀逸だ。そんな彼が後ろに回る。馬鹿みたくで単純な作戦で、駄目元での突撃に過ぎない。失敗しても次がある。

柄に指を絡ませる。柄の革に自分の汗が染み込み、なんともいえない一体感を醸し出している。

どっちにせよ、これでお別れになる。部長の言っていた最後とは、そのことだろう。

「……」

フェネクスの巨体を見上げた。腹部の裂傷の流血は止まったようだ。両手にはバカでかい剣と槍。威力は大きい、回避は容易である。

ぶつけてくるエネルギーが増大するに比例して、この刀でのそのエネルギーの受け流しは容易になっていく。動きは鈍重だとはいえないが、そこそこ凛との相性が良い相手だ。

相手から動く気配は無い。こちらからいかせてもらう。

刀を肩に担ぐと、思い切り地面を蹴って懐へと向かう。武器もでかい分、ちょこまかとした動きには適応しにくいだろう。こういう分野は遼太が得意だが、凛だって負けては居ない。

「あら、貴女一人？」

上から実璃が擲揄混じりに訊ねてきた。凛は敢えて上を向き、にんまりと笑ってみせる。

「私一人で十分だからね」

「……あらそう」

あからさまに信用してない内情を隠すでもなく、実璃はそっけな

く言い返した。

すると、フェネクスが大儀そうに首を傾げる。そして脚を振り上げた。凄まじい勢いで地面が抉れて乾いた砂が舞い上がり、凜に振りかかり周囲に砂埃を作り上げる。

目潰しだ。直接目を潰すことによる効果と、視界を遮断することによることによる効果の二重の目潰し。目には入らなかったものの、視界を遮断されるだけで大分辛い。

ふいに砂煙の最中に、黒い影が躍った。

凜は咄嗟に反応しきれず、刀を翳してその影を躲そうと試みるが、刀に入ったのは鈍い衝撃。

剣ではない、それはフェネクスの脚だった。

完璧に不意を討たれて、凜の体が宙に舞った。背中から派手に地面に転げ落ちる。刀を落とさなかったのは僥倖だった。

凜は全身に走る痛みと不快感に耐えつつ、腕をつけて立ち上がる。コートがなければ、今ごろ肋骨が折れていてもおかしくない。部長には感謝をしておかなければ 実のところ、部長にあんな仰々しい態度をとらざるを得ないのは、このコートのお陰なのだが。

吹っ飛んだお陰で、砂煙の範囲外に出ることができたようだ。だが、そんなことは計算の範疇にあつたようで、フェネクスは堂々とその姿を露呈している。

同じ手段を幾度も使うほど安直ではないと思うが、迂闊に近づくのは危険だ。

コートの裾を翻し、一定の距離を保つ。

弱点はあの小さな目玉。ただ、あれを狙うのには手段が足りない。だから、少し時間を取ってもらって、遼太とすることについて話していた。

周囲のドラゴン達は、祥吾たちが相手をしているが、一体相手でもキツイのにそれが複数のこつているというだけあって、祥吾も足止めで精一杯、部長も遼太のアシストがないと弾頭を当てるのが難儀そうである。疲弊が溜まるのはこつちの方が格段に早い。

即ち端的にいうと、時間が無い。

凜は立ち止まると、フェネクススの巨体を見上げた。心変わりした天使を彷彿させるその巨体の肩に、人形のような実璃が載っている。

なんとなく、ふと考えてみる　実璃がフェネクスを操っているのだろうか。それとも、逆なのか。もし逆だとしたら、その目的は……？　否、前者でもその疑問は同じだ。

だが、それが解明できたら少し前に進めるのではないか。

「ねえ」

「　何？　命乞い？」

凜の方から話し掛けたのがそんなに意外だったのか、実璃は大袈裟に目を瞬かせながら返してきた。

「　……なんでこんなことしてるの？」

部長が言うには、この世界が気に入らないだのなんだのと言っていたが。

「何でって、この世界が気に入らないからに決まってるでしょ？」
ドンピシャの予想通り。凜は少し口調を荒めて反駁する。

「普通はそうでしょ。何が気に入らないか具体的に言いなさいよ」

「……何が気に入らない……、そうね、例えば目の前の貴女とか……？」

「私のために世界を滅ぼすの？」

「滅ぼすなんて人聞きが悪いわね。再構築するのよ」

「だから、どうして？」

「　　うっさいわね……、宇宙を見回ってきたけど、人類みたいな愚鈍な知的生命体がいたのはこの地球だけだったのよ、分かる？」

挑戦的に言葉を投げかけると、すぐにそれに便乗して饒舌になるのが実璃の性格らしい。

「もちろん他の場所にも知的生命体は居たわよ？　ひたすら同類で殺しあったり、逆に恒星からの熱エネルギーだけでのんびりと暮らしてる生命体も居た。でもその中で、建前の団結を以って、支えあって生きる生命体なんて、ここで初めてみた」

「……」

「そんな愚鈍で可哀想なあなた達を救済してあげようと、こうして私が乗り出してあげたの、分かった？」

「なんだか本心とは違うような気がするが　一度話した以上、これ以上の情報は引き出せないだろう。あの人間の姿で宇宙を旅していたのか、等の些細な疑問が残るが、やむを得ない。」

「で……、世界を再構築してどうするの？」

話の締結が悪いと思い、凜は柄を強く握り締めながら訊いた。

「皆平和でほのぼのと暮らす世界でも作るわけ？」

「……ふふ、そんなことするわけじゃない。人間から知性を吸い出すのよ。無益な自己存在を懷疑する思考なんて、生物には要らないのよ。漠然と生きて子々孫々を地球が滅びるまで繰り返していけば良いのよ、生物なんてものは」

「……じゃあ、あんたはなんなの？」

「私？　……ふふ、さあね」

実璃が面白げに言って、手をフェネクスの横顔につけたの瞬間、剣が唸りを上げて急降下を開始した。

凜は驚愕するでもなく、ただ刀を突き出すと落着いてそのエネルギーを分散させる。

「すぐさまそれを弾き返すと、横から薙がれた槍を受け流し、前へとんだ。」

「一気にフェネクスとの間合いを詰めると、刀を翳して畳み掛ける。刀が触れようとしたその瞬間、不意にフェネクスの脚が視界から消えた。」

凜は空を薙いだ刀を慌てて手元に手繰り寄せて態勢をすぐ立て直す、振り返ってその巨体を探す。

視界が移り変わると同時に、斬撃が目の前に飛び込んできた。

唯一の欠陥（後書き）

短い！ 無理矢理尺あわせした感ありすぎ！

ごめんなさいorz 自分に巧遅拙速という言葉は一切そぐいませ
ん。拙遅拙速です。

……とはいっても、苦戦したのはこの会だけで、次からは急展開し
て、終末へと直滑降していきます。

……こんな言葉いつか書いた記憶があるな……まあ、いいや。それ
では、また明後日に会えたら。

合致蘇生

舌を噛みそうになりながらも、凜は刀を振るって相手の奇襲である剣の邁進を防ぐ。

後ろに跳ね退きながら、次々と襲ってくる斬撃に、凜はいちいち対応していく。

金属の交じり合う音を聞きながら、凜は疲労を感じ始めていた。フェネクスの攻撃には突がない。凜が躲さずに、ギリギリで防御に走る力量加減をしているようだ。

あからさまに、疲弊するのを見込んで行動している。

いかんせん武器のリーチの差が激しい。お陰で近づかなければならないのだが、隙をついて近づけば、迎撃よりも回避を優先して、極端に距離をおいてくるのだ。これではいつまで経ってもこちらが傷を与えられないばかりか、疲労が堆積していくばかりである。焦りも募る。

とりあえず、槍剣どちらでもいいから、武装解除させたいところである。この場合は剣だろうが。あの槍は刺突武器なので、回避もある程度楽だからだ。

自分から逃げたくせに自分から凜のもとへ舞い戻ってきたフェネクスの猛攻が再開される。

時間を稼ごうと剣を受け止めても、そんな努力の存在も知らないように剣は弾かれて第二撃となる槍の打撃が訪れる。凜は衝撃を身体を落として殺しつつ、横に歩を踏むとその猛攻の渦から逃れようと試みた。

そのとき不意に目に入ってきたのは、フェネクスの手の甲に走る一閃の傷。腹のものと同じように、既に体液の漏洩を収まったらしく、ただ黒く滲んでいるだけだ。

が、いくら宇宙外生命体の粹を集めて形成されたフェネクスであっても、失われた細胞の瞬間的な再構築は無理らしい。その傷は痛

々しく凜の目に飛び込んできた。

そして、その手が握り締めているのは、柄と刃身の割合がおかしい剣。

このことを考えた行動なのであれば、彼は人類の常識を超えた天才だ。

凜は遼太に感謝の念を送りつつ、自分の行動方針を転換、一気に攻め立てる方法を探る。身体にダメージを与えるのではなく、体勢に欠陥を与えることを目的に変更。

そんな凜のあからさまな隙を衝いて、フェネクスが剣を唸らせた。凜はそれを睥睨すると、刀の柄を思い切り握り締め　本気で薙いだ。

甲高いというよりは、密度の高く思い物質が交じり合った、轟然とした音が響く。

フェネクスの体が仰け反った。疲労の蓄積を最小限に押し留めようと苦心していたと思ったら、いきなり本気で剣を弾いてきたのだ。常人なら、剣と共に腕も飛んでいきそうな一撃だったが、生憎と常人ではないフェネクスは身動きをするのみにとどまる。しかもそれは刹那のものに過ぎない。

だが、この世界では刹那でも空白があれば十分である。

振動に打ちひしがれる身体を行使し、一気に近づくと　反動で振りあがった腕に向けて、今度は気力の上での本気以外に、もう一つの力を込めて刀を振った。

刃が空を薙ぎ、一つのエネルギーの奔流を作ると同時、それ以外に科学的に説明のつかないエネルギーの逆流が始まる。

瞬く間にそのエネルギー達は一点に集結し、閃光を放ち、そして空気が刃に具現し、凜が見据えるその先へとその猛威を見せた。そして、音速で空へと駆け抜ける。

一瞬の出来事に、その場に残されたのは静かに流れるのみの時間と、その刃が切裂いたものが自分が裂傷されたと物理的に気が付く行動のみ。

そして、フェネクスが咆えた。

それと同時に、その傷の入った手が傷を中心に破裂した。黒い液体が雨の様に地面に降り注ぎ、その手によって抗力を得ていた剣がゆっくりと地面におちていく。着床。鉄骨が落ちたような音が轟く。「な、何してんのよ！ 卑怯じゃないの！」

それを見た実璃がヒステリックな叫び声をあげた。

凜はそんな彼女を冷然と見上げる。

「なにが卑怯なの？」

「こつちが油断してるからって、妙ちくりんな飛び道具なんて使つて……！」

「油断してたの？」

凜がそう言つて冷笑を浮かべると、実璃は憤怒の形相を表す。

「……もう！ フェネクス！ そんな小娘さつさと潰しちやつて！」
だが、フェネクスは彼なりに苦悶の境地に居るらしい。黒血がどくどくとあふれ出ている腕を抑えて、凜を凝視している。

そんなフェネクスを横目に、凜はふと視線を逸らした。視界が捉える先には、暗闇に屹立する涼属高校第一校舎。

その瞬間、彼方から光線が走った。しかし、光にしては、鈍足過ぎる、音にしては早すぎる、そんな中途半端な光線が。

音も立てずにフェネクスの、僅かに露見された目玉に寸分の狂いなく突き刺さつていった。

目玉は瞬時に蒸発、そればかりかその熱で被爆しなかったもう片方の目ですら蒸発させてしまっていた。凜の頬にも熱波がヒリヒリと影響を及ぼしている。

そして 中枢となる器官を失ったフェネクスは、しばらく身悶えしていたが、やがて活力を失ったのか、骨を抜いてしまったかのように校庭に雪崩のような轟音を撒き散らし倒れ伏した。

必然的に、その肩に載っていた実璃も投げつけられるように地面に転がっていく。

凜はうつ伏せに倒れる実璃に近寄って、刀の切っ先をそのうなじ

へと突きつける。

「……終りね」

そう凜が呟いて顔を上げると、丁度ドラゴンの最後の一匹が灰になつていたところだった。真つ黒に焼けた巨体が、地面に沈み動かなくなる。

こつちの完封勝利だ。あまりにあっけなさ過ぎて、寒気を覚えるほど。恐らく例のドラゴンと部長の相性が、恐ろしいほどに良かったため、快勝を収めたのだろう。部長が居なかったら、恐らく相当な苦戦を強いられていたに違いない。

背後から土を踏む音がした。

「……お疲れさん」

祥吾の声だった。凜は、どこかしこに期待をしまつていた自分が恥ずかしくなる。

そんな表情を見られまいと凜は顔を伏せるように実璃に視線を戻す。

実璃は腕に埋めていた顔を少し上げ、上目遣いで凜を睨んでいた。

「……そういうことで、お疲れ様」

「……、……狙撃させたの？」

「自分でやるつていうから、やらせてあげたの」

「……大した自惚れね……」

「自惚れで結構」

お前がそこまで信用されてると思つたら大間違いだ、ということだろうか。それなら、別にそれでいい、と凜は思考を放棄する。どうせここで終わるんだから。

凜は実璃の髪を掴むと、手加減せずに首を持ち上げた。それから屈み込み、視線の高さを合わせる。

苦痛に歪む目は、不気味で陰気な赤い光を纏っていた。人間味の感じられない、無機質な瞳が凜の顔を覗き込んでいる。

凜は刀を引くと、その切先をその眼に向ける。瞳孔が恐怖からか、一気に小さくなった。

そして、手に力をいれて

「っ！」

実璃の体が視界の外へと勢い良く飛び出していった。

突然の出来事に凜は目を白黒させていると、体に堅いものに衝突した衝撃が走る。

そして更に、その一瞬後に、耳を劈く凄まじい音が轟く。

「あつ……」

無意識に口から言葉が漏れた。

倒れ伏せた凜の顔のすぐ近くに、遼太の顔があつたからだ。

「だ、大丈夫？」

そう訊ねる彼に、凜はぎこちなく頷き 現状を把握した。

轟音の正体は、凜が先ほどまで立っていた場所に突き刺さった剣。あのままいけば、あの剣に押しつぶされて肉片と化していたのは自分である。そして、それを救ってくれたのが遼太であつて、その方は突き飛ばすという古典的なものであったが、一応こうして一命は取り留めている。

遼太は凜が無事なのを確認すると、立ち上がり振り返った。

そこに毅然として佇むのは、先ほど目玉を綺麗に打ち抜いたはずのフェネクスの巨体だった。

作戦はかなり単純で、凜が一人でフェネクスの気を引いておき、ある程度時間を置いたら攻撃を加えて隙を作り上げ、その隙を衝いて遼太が最大限まで溜めたエネルギー弾を撃つという段取りだった。今考えてみると、恐ろしく稚拙な作戦で、よくぞ成功したと思える。そもそも、目玉に命中したのは奇跡としかいいようがない。こんなことをいつたら、凜になんと言われるだろうか……。

だが、その撃ちぬいたはずの目玉が、何故か先ほどと同じようにその眼窩に収まり、遼太達を俯瞰しているという事実においては、瞠目せざるを得ない。

「……どうなってるんだ？」

今までずっと裏役だった祥吾だが、ここではきつちり当事者としてその姿を見上げている。

見かけほど、そこまで変わってはいないものの、その外観に秘める威圧感は先ほどの比ではなかった。まず何よりも、右腕が疼きが止まらない。

そんな一同が愕然とし、沈黙を造るなかで、一人その沈黙の元凶が口を開い。

「予備だったんだよ、この人間は」

鼓膜を貫き、蝸牛を直接弄るような、性質の悪い無機質で幼稚さが混じる声。

そんな外見に不似合いな声を繰るフェネクスは、そんな白々しいことを言っつてひょいと実璃の身体をつまみ上げる。それを見て、遼太は反射的に顔を背けてしまった。

実璃は裸身だった。その肩を掴むようにして、フェネクスが饒舌に講じる。

「まさかとは思ったけど、まさかやられるとは思わなかった。予備を用意しておいて良かった。うん、君たちのこと、見縊ってたよ。」

あ、この子は適当に選別して取り憑いただけで、もう要らない。適当に君たちでなんとかしておいて。服はエネルギー代替のときに無くなっちゃった。あー、女の振りしてるの辛かったなー」

幼い口調で語るフェネクスの指から、実璃の体が放りだされる。気を失っているらしく、暴れもしない実璃の身体は、素直に重力にしたがって地面へと

「って、お前が取るんじゃないのかよっ！」

祥吾が悪態をついて駆け出し、その実璃の身体を受け止めた。その姿を見て、ようやく遼太は我に帰る。

「取り憑いたってどういうことだ？」

遼太はフェネクスの禍々しい顔を見上げて、そう訊ねた。

「あれー、やっぱり知らなかったんだ。あのね、もともと>レッド

くつてのは精神体なんだよ。肉体的媒介が無ければ自律して生きていけない、結構厄介な奴。だから、一番最初に偶然でもなんでも何かしらの原子に取り憑けた精神体が必然的にその>レッドくを率いていく運命だったんだよ。起源はよくわからないけど、宇宙自体よく分からないものだから、どうでもいいよね、そんなの」

精神体……、いわゆる、幽霊のようなものだろうか。

「それで、その肉体をはじめて持った>レッドくは比較的穏やかな性格で、>レッドくが共存して各々がしたいことができる様に社会を構築していったんだ。それが、宇宙外……君らの言う所の異世界、僕らの視点で解釈すると、四次元。でも、その生活は全くといつてもいいほど、抑揚が無かった。平坦というか、ただ漠然と存在しているような無益な場所だったんだよ。つまらないな、と思った僕は、暇だから外に出してくれ、て頼んでみたんだけど、なんかめっちゃ突っ撥ねられて　だから、ちよつと僕も怒って暴れてみたら、思いのほかあっさりとかつちにこれなんだ」

右腕が唸りを上げた。それが、恐らくおよそ二億年前の話なのだろう。

「ふふ……それからここに来るのが大変だったけど、見つければ楽だったよ。じつくりと人間達を観察してみたら、共存して生きてるんだもの。こんなにも望んだものは無かったよ……、ここまで愚鈍で、操り甲斐のある存在をね……」

「　協調しあうことが愚かだから、侵略するののか？」

「いかにも、侵略してください、って言ってるようなものだったからね。心置きなく侵略の下準備をさせてもらったんだけど……ね。」

宇宙空間に作った仲間裏切りが出ちゃってさ……」

駄菓子屋で万引きしたら捕まっちゃってさ、というような恨めしい言い方。

「　そいつの所為で、今こうして追い詰められちゃったわけだ……参ったねこりゃ」

その真つ赤な視線が遠太に降り注ぐ。そして、フェネクスはその

頭を傾けた。

「それでもまあ、こっちはこっちで全回復したし……、やらせてもらって良いかな？」

その眼光を見た途端、遼太は弾かれるように祥吾を振り返り、叫ぶように言った。

「葉山さんを連れて逃げてっ！」

「はっ……俺が？」

「早くっ！」

裸の実璃を抱きかえる祥吾は怪訝と不安が入り混じった歪んだ表情を作ったが、焦った遼太に気圧されるように頷くと、そのまま地面を一蹴して敷地から去っていった。

空気が吸い込まれるように流れていくのを感じる。

振り向いたと同時に、凜が遼太の目の前に飛び出してきて、その手に握られた刀を翳す。

刀が折れてもおかしくない程の音を立てて、フェネクスが振りかぶった剣は弾かれる。それを見届けてから遼太は右腕を意識して地面を蹴った。

凜に向け、嵐のような攻撃が開始される。

フェネクスは左右の手に握ったそれぞれの武器で、壊れない壁を最高効率で壊そうとするかのように、器用な連続攻撃を仕掛けていく。

それを受ける凜は、動きは滑らかなものの、あからさまな疲労が見える。

一撃一撃交わされる度の音も、耳が痛くなるほど大きい。

遼太は右腕を剣に変形させ終わると、地面を滑るように停止し、そのまま蹴り上げて宙を舞った。そのまま、滑空するようにフェネクスの懐に突っ込む。

目の前にその体が迫った瞬間、フェネクスの体が反転。

金属が潰れたような音が鳴り響くと同時に、鉄鋼が歪みそうな一撃が視界の端から襲ってきた。

駄目か。

遼太は齒噛みすると、その剣に思い切り自らの右腕を叩きつけてみる。

力の差は歴然としていた。

そのまま、襟首をつままれて放り投げ出されるように、その剣の圧力に負けて再び宙を舞い 地面に叩きつけられる。二度と味わいたくない類の鈍痛が、全身を震わせていく。

その次の瞬間、追撃。原子発電所の壁すら凹ませそうな蹴りが遼太の体にめり込む。

声を上げる暇も無く、遼太の体は虚空へと飛び、無理な体勢で着地、数回転。

「やっぱり単純だったねー。ああやって彼女に危害を加えようとする、こうやって無計画に突っ込んでくるわけだ」

フェネクスが蠅の羽根をもぐ子供の様な、恍惚とした声で語りかけてくる。遼太は全身の苦痛に苛まれながらも、そんなフェネクスの顔を睨みつける。

「……そんで、こうしてもう一方に危害を加えようとする」

そう言った直後、フェネクスは剣を握りなおすと、足を軸にして真後ろに身体を向けて、剣を突き出した。

「また、こつちも釣れるんだ。共通意識を持つちゃった人間ってのは、やっぱりお粗末さんだよー」

そう言っつて剣を、蒟蒻でも切るかのように振るった。悲鳴が聞こえる。

遼太はようやくやく動ける程度になった体に鞭打ち、脚の痛みも無視して飛び上がった。

笑い半分で振り返ったフェネクスの一撃を屈んで躲すと、その筋力を生かして無理矢理接近する。

そして、第二撃が来る前に股を通り抜けがてら足首を斬りつけて、素早く振り向きながら距離を取った。

遼太が地を踏むと同時に、フェネクスが振り返る。

「……やっぱりそんなもんだね」

破裂した筈の手どころか、腹の裂傷ですら完治したその姿。その声の性格とは全く異なる、異質で悪意そのもの。

その姿がどう見ても、勝利を確信した愚者の姿としか見えないのは、遼太の直感なのだろうか。それとも、ただの樂觀論 信じた
いと思っっているのだろうか。

合致蘇生（後書き）

……すみません、遅れました。

理由はといえば、受験勉強がようやく熾烈化してきたことでしょうか。毎日八時帰宅……それでも甘いほうです。マジ現実は厳しいです……。甘いなんて思ったことはありませんが；

とりあえず、運が良ければ次話の次話で終わると思われませう。話数の尺がおかしかったりするの、グダグダ仕様orz

黒翼の上下転換

「……それでも、そんなちっぽけな存在に寄生してるのに、ここま
で粘れてるのは凄いと思うよ……？」

フェネクスは大仰な仕草で、地面を見下ろすとそう言った。

「どんな小細工を使ったのか知らないけど、昨日は抗無機物体も倒
しちゃったし。ぶっちゃけ、一匹で十分だと思ってただけだよ……
駄目だったから、今日は六匹入れてみたのに、全滅。参ったねこ
りゃ」

そう言つて、フェネクスは足元に剣を叩きつけた。切先から突っ
込んだ剣はそのまま地面に深々と突き刺さり、そのまま屹立する。
そして、次はそれに勝る素っ気無さで片方の手に握られた槍を肩の
後ろへと放り投げた。砲丸の様に飛んでいったそれは、校舎にあた
つて派手に瓦解させる。

「だからさ、結構期待してたんだけど……もとから僕が出てきてた
方が早かったね。あっさりとか付きそうだし」

そういつて、空になった両手を合わせた。

「無駄な装飾は、邪魔なだけだよ。でもそれを趣として、好んで取
り入れる人間に納得できない」

装飾とは、武器のことか。それとも、人間の要らない思考能力の
ことだろうか。

解釈に難儀する暗喩を残したまま、フェネクスは加速した。

誇張ではなく刹那で遼太に接近すると、その獰猛な拳を遼太に向
けて振り下ろす。

逡巡の余地など無い。反撃など考えず、すぐに身を翻してその一
撃を躲す。裂かれた空気の逆流が、前髪をかき回していく。

続けざまに、サイドから掌が襲ってくるのを、勢いを利用してそ
のままバックステップで避ける。

掌は虚空を掴み、地面に不時着。

だが、そのまま追いつがるように先ほど振り下ろされた拳が再来する。

横転して回避つつ遼太は内心冷や汗をかく。

剣や槍を以ってしての、恐らくは一撃必殺の技にかけた攻撃は、ほぼ全部防御してきた。また、今この身体を苛んでいる鈍痛は蹴りという物理攻撃によるものだ。

即ち、ほとんど防御の効果があがらない打撃攻撃オンリーに持ち込んできたのだ。

きつと、あのどれかに当たるだけで人間の体は吹っ飛ぶ。空中で自由に身動きが取れる生物は居ないから、まさに逆さ吊りにされた兔のような状態になる。

そこに、なんらかの追撃が入る。そして、屍となるまで、この状態はループしていく。

足首を斬ったにも関わらず、全くその動きに変化は見られない。つまり、反撃として拳を傷つけたところで、火事の現場に目薬を垂らすようなものだ。

ただでさえ、常人なら塵芥と化すであろう攻撃を何度も喰らっているのに、このコートにもそう長く期待は持てない。

この無限回廊を打開する道はなにかないだろうか。

幸いにも、こっちの体躯はフェネクスのものに比べて着せ替え人形ほどにしかないので、武道系の攻撃を躲すのには有利だ。だが、そのスタミナがいつまで持つかどうか。

視界に蹴りが飛び込んでくる。

上半身を逸らして、必要最低限の動きでそれを回避すると、そのまま勢いでバック宙で距離を取る。

そこに再び振り下ろされる拳。ワンパターンだが、続けざまにやられると厳しい。とにかく、シンプルに飛び退いて躲す。

ついでに試みとして剣でその手の甲を切り刻んでみる。

結果はその近辺の肉が飛び散り、黒い液体を撒き散らすだけ。全く動じる気が無い。

逆にチャンスだといわんばかりに、もう片方の腕が飛び込んでくる。

遼太は急いで右腕を引き寄せると、慌てて跳んだが、足が間に合わずに拳に攫われた。そのまま掬われるように体が浮く。そのまま地面に落ちるところだが、遼太は咄嗟に腕を伸ばし、最低限の受身をとって地面を転がった。

だが、立ち上がるのに間に合わなかった。

顔を振り上げると、眼を爛々とさせたフェネクスの顔と、巨大な掌が見える。

そして、それは恐ろしい速度で遼太との間合いを詰めていき

遼太の目の前でその動きが止まった。ガチガチに凍った雪を、鉄の棒で叩いたような鈍い音と同時。

フェネクスのその太い腕に、その手が握るのに相応しい巨大な剣が突き刺さっていた。

その刃を辿っていくように視線を向けると、その柄の下に凜が手を膝について佇んでいる。またこれに助けられてしまったようだ。

それだけ確認すると、遼太は脚力を爆発させて、その腕に飛び乗った。多少無理な体勢になってしまいうけたものの、その太い腕は却って走り易い。

そして、図ったかのように巨大剣が姿を消し、フェネクスの頭が視界に飛び込んでくる。同時に、フェネクスも遼太の存在に気付き、腕を慌てたように引き上げる。

掛かった。

遼太は腕が動く勢いを足裏に乗せて、思い切り跳躍した。

肌で空気が渦巻いているのを感じながら、フェネクスの顔へと急接近すると、その目に向けて剣を突きつける。

刺さった。

眼球を抉る感覚が、鮮明に右腕から中継される。遼太はそれを敢えて楽しむように、実質慄きつつ神経を抉り取るように右腕を引き

抜く。人間の子供の総量ほどありそうな血液が、目玉から噴出した。だが、悲鳴が聞こえなかった。

遼太はそのあまりの静かさに戦慄して、急いで距離を置くことを試みたが、間に合わなかった。

視界が宙に浮き、体が慣性によって酷く揺らされ、そして強烈な衝撃が全身を覆い尽くし、地面へと急降下していく。

更に加えられる打撃。もはや、蹴りなのか殴打なのか分からない。分かるのは危惧していた無限回廊に迷い込んでしまったことのみ。最終的には、校舎の壁に叩きつけられてようやく視界が安定してきた。昨日のあの状況を彷彿させる、この状況。ただ、傍らに居るのは凜では無く、悪魔。

体を擦ると背骨が軋む。脚は完全に壊れたらしい。応答が無い。

地面を割るような足音が聞こえ、顔を上げると勝ち誇ったような態度を取るフェネクスの姿があった。その大木のような指で、遼太が潰した目玉が収まっていた眼窩を撫でている。

「これはダミーだよ。部下達ですらダミーを使ってるんだか、僕もダミーを使うのは当然だよな。まあ、本物が眼窩の奥にあるわけじゃないけどな」

単純な話だけに、遼太の自己嫌悪は深く刻まれていく。

「ふふ、君の相方の相棒は、どさくさに紛れて遠くに蹴り飛ばしておいた。だから、すぐに助けは来ない。諦めた方がよいよ」

相棒とは刀のことだろう。ほぼ凜の戦闘スタイルはあの刀に依存している。だから、それを失ってしまったては手も足も出まい。

そして、かく言うフェネクスの手には剣が収まっている。完全に止めを刺す気だ。

フェネクスは哀れみを込めた半分の視線をぶつけてくる。

「……実を言うと、君の身体を殺したところで、僕の目的は達成されないんだ。あくまで僕が恐れているのは、君じゃなくてその腕……いや、そこに在る『恒久の管理者』なんだからね」

管理者？ その宇宙外とやらは恒久をつければ何でもかんでも成

り立つのだろうか？

「義手だなんて……大層な嘘を吐かれたもんだね。君には元々腕は無かったんだ。小さい頃、事故で車に轢かれてね。骨やら神経やらが滅茶苦茶になって、もう再起不能、手の施し様が無いから敢え無く切断……なんていわれてもどうせ覚えてないだろうけどね」

体の大部分が言うことを聞かず、遼太は静かに瞠目する。だが、すぐにその言葉が虚偽であると確定し、無駄な思考を省いた。

「信じないのも無理は無いよ。そこに漬り込んだが、その……なんてったつけ？ ぜろさんきゅうだっけ？ 右腕になりすまして憑依して、あたかもそんな事故が無かったかのように周囲の記憶を改竄して、完璧に事実を隠蔽　でもそのお陰で僕に見つかっちゃったんだよねー、ふふ」

その言葉を遼太の耳が捉えた瞬間、右腕に強い圧迫感を感じ、途端に寡黙を守っていた右腕が唸りをあげた。

「……否、主に憑依したのは貴様を誘き寄せる為の布石。多次元への侵入は如何なる場合でも許容されぬ行為。その罪の糾明を、侵入の目的と照らし合わせ我直々に参った次第である」

「ふふ、良い事聞いた」

フェネクスは誘導訊問に引つ掛かった者を嘲る様にご機嫌な声を出した。

「つまりね、君は利用されたってことなんだよ。腕がなくなって生きていけるさ。五体不満足だから見える世界だってある。それなのに、このちっぽけで頑迷な精神体のいたずらによつて、途方も無い嘘の迷宮に閉じ込められて、傀儡として良いように利用されてる。ふふ……もとの世界なら、もっと気概の在る生活をできたのにねえ……こういう真実つてのは時に残酷だね……知らなきゃ幸せに生きてこれたのに……」

腕が疼く。フェネクスの言う単語単語が遼太の内部にもぐりこみ、内側から抉り取られていくようだ。それだけその言葉には、おぞましい含蓄があった。

遼太は何度か思った。こんな>レッド<なんてふざけた存在を知らなければ、もつと有意義に過ごせていたのではないかと。その問いかけに自分が下した回答は覚えていないが……。

フェネクスの言っていることが嘘であることは、この右腕の動揺の仕方からしてありえない。自身までもが不安になるような動揺を、この腕がするなどは全く思っていなかった。想像すらできなかった。

つまり、今のは真実。どうやってフェネクスが知ったかどうか知らないが、事実には相違ない。

腕の無い遼太は、世界から抹消された。今居る自分は、本来の自分ではない……。

「だから、そんな精神体である039は、君が死んだら君の体から逃げ出さなければならぬ。でも、精神体になると、僕じゃ捕まえられない。自分の意志で精神体にはなれないからね。だから 実体化させるんだ」

そう言うと、フェネクスは剣を振り上げて、顔の前に構えた。

一陣の風が周辺を舞い、砂埃が舞い始める。最初はそれが剣による風圧の所為だと思っただが 違った。

翼が。飾りの様に備え付けられた翼が羽ばたかっている。羽ばたかれ空を引き裂き風を巻き起こし、周囲のものを振り回している。

そして 漆黒の翼が夜空に向けて全開に羽ばたかれたとき。

暗い世界が目前を覆った。

容赦無い認識できない攻撃。何が何に対して攻撃を加えているのかも分からず、またそれによりどんな損害が生じたのかも分からないのに、その損害が自分を不快にしていることが解る。その未知の感覚が形容しがたいのに、痛覚と同じように回避すべきものだと理解している。恐ろしい感覚。存在しない知識が脳内に蔓延するようなそんな感覚。

誰かの意識が、自分の意識の上に乗っている。そんな感覚。

「ぐあああああああああああああ!!」

声が出た。誰の声かは分からない。いや……自分の声だ。気持ち悪いくらい客観的に判断できる。意外と幼い声だ。

意識とは関係なく、体が転がる。満身創痍の体が、意識に痛烈な悲鳴を届けてきたが、遼太にはどうにもできない。

なんだ、この感覚は。一度体験したことがあるような感覚。

「……ふふ、039聞こえるー？それが、君の主が味わってきた痛覚。実際はもつと辛いだろうけど、君に擬似的に感じさせるのは、これが限界……きっちり噛み締めてから死んでね」

フェネクスが語りかけてくる。あからさまに遼太に、ではない。誰に？

「ふふー。りよーたくさん聞こえるかなー。一時的に039の意識と君の意識の存在する場所を替えたんだ。だから、今君が居座っている場所は、『佐貫遼太』っていう存在の右腕。偽りの場所なんだ。分かる？」

遼太は自分の目玉がフェネクスの顔を睨みつけていることを認識する。これも多分、本当だ。

それで思い出した。この初めてではない感覚。

初めてこの腕。039と出会ったあの夜（実際はもつと以前から出会っていたのだろうが）、039の言っていた『一体化』。その感覚と酷似している。

「ふふ……というわけで、今その『佐貫遼太』を殺せば、039の意識はお陀仏。りよーたとしての意識は永久に腕に残る。まあ、火葬もかわいそうだから、僕が持って行ってあげるよ。まあ、運が悪かったと思っただけなんだねー」

そう言っ、フェネクスは剣を持ち上げた。キラリと刃が月光に煌き、終焉を告げる。

「……くそっ……」

そこで、『遼太』の口から悪態が漏れた。初めて見る右腕の内情。遼太はそれが諦めの言葉なのかと思い、凄まじい不安に意識を覆い尽くされる。

だが、違った。

「あいつ　くそっ……」

そう『遼太』が言った瞬間　目の前が爆発した。火炎が踊り狂い岩盤を穿ち破片をばら撒き、硝煙を蔓延させる。

遼太が驚愕していると、その場に影が落ちた。

その影の主はそのまま『遼太』の襟首を掴むと、引き摺るように校舎の陰へと引き摺っていく。

襟首が解放されるや否や、『遼太』は頭をさすりながら上半身を起こした。

「……つたく、乱暴なことしてくれる」

「貴様こそどうした。契約を破る気か？」

「真実が主に漏れれば、その時点で契約など既に紙切れだ。つたく

……あいつも余計なこと吐かしてくれた……」

「……なんとなく予想はしていたがな」

「あんたが羨ましくて堪らん……っつ！」

『遼太』は全身の苦痛に顔を歪めて、背中から壁に凭れる。

その体裁を見下ろすのは、遼太のあの場から引き摺りこの場に連れて来た張本人　部長その人である。

部長は黒コートのポケットに手をつ突っ込むと、小さな目玉を取り出し『遼太』に突き出す。

「……私の力量で決るのは不可能だ。貴様の主が決り取ったタミーしか確保できなかったが我慢して欲しい」

「……こんなじゃ全快は無理だ」

「立てるようにはならないと、困るのは貴様だ」

「……」

『遼太』は沈黙して、部長を見上げる。その眼光は、いつもの遼太に宿っているものとは全く違う、勇ましいものであると同時に、決して通常なら見ることができない睥睨の眼。

「……お前、本気か？」

「意識を一点に共存させるのには、奴の力を利用するしかない。だが、奴がそれを使うのはその肉体が疲弊しきつてからだということ。は明白だ。それならば、私が覚悟を決めなければならぬ。」

「……」

『遼太』は視線を落とし、歯噛みし、目玉を受け取る。

瞬く間にそのエネルギーが体内に浸透していき、疲れと鈍痛が薄れていく。が、完治といかぬままにそのエネルギーの奔流は止まってしまう。

まだ大きな傷を残したままだが、『遼太』は立ち上がると、こめかみに人差し指をあてて呟いた。

「主、今から主の意識を脳に取り入れる。幸いにも余白が多いから、安心してこっちに来い。」

「……今の言葉はかなり失礼だったのではないか？」

「事実だ。」

目の前が爆発した後から、意識が飛んでいたようだ。誰かに呼びかけられて、意識が復活する。

先ほどの違和感だらけの意識ではなく、クリアな本来あるべく意識。

開いた視界の先には、部長が佇んでいた。相変わらずの無骨な黒ヘルメットが、何処か頼もしく見えるのは、どういう心情の変化だろうか。

「来たか。」

部長が遼太を直視して、そう言った。遼太はその言葉の真意を掴みかねて、何のことが訊き返そうと口を開いたが、出てきたのは意

志とはまた別の言葉だった。

「ああ、来た」

「……」

部長はその言葉を聞くと、頷いて遼太の両目を凝視する。そして、口を開いた。

「いいかよく聞け。今貴様の体内には二つの意識が存在している。

まず貴様、『佐貫良太』の意識、そして　　コウちゃん意識だ」

「……へ？」

「コウちゃんって言うんじゃないって何回言ったら分かるッ！」

啞然とする遼太の口が勝手に動き、雑言が飛び出した。

それだけで部長が言ったことが理解できた。自分の声が意図もしない言葉を出すのは、この上なく不快だ。

黒翼の上下転換（後書き）

ようやく中核が見えてきた……意外と量が多くなりました。下
手すると三十部まで行っちまいそうです。

最低でも後二話は続きます。戦闘シーンは激減すると思われませんが
……修行不足、不肖orz

諸悪のプロセス

「>レッド<が人間に取り憑くとき、とある契約を交わすのが常だ。その内容はまちまちだが、大概はこちらが条件を提示して、それを被契約者 即ち人間が了承すれば、その人間に即取り憑くことができるというわけだ。そして、039が貴様に交渉するにあたって提示した条件は、事故の存在を抹消させ、右腕も元通りに直す。そして己の態度を元来の>レッド<のそれに縛り付け、数年間存在を秘匿としておく、というものだった。幼い貴様に提示したのだから、もっと表現はやわらかかっただろうが、大方はそんな感じだったはずだ。そして、貴様はそれを呑んだ。そして、どういう結果でそうなるのかを話せば長くなって奴にいずれ見つかってしまうだろうから省くが、右腕と具現し存在を潜伏させ、今に至るといふわけだ。世に蔓延る知識を吸収するのに、大分掛かるからな まあ、もとはこんな気さくな性格だったのだ。あの改まった態度を見たとき、今にも噴出しそうだったぞ」

「忘れる。無意識とはいえ、かなり胸糞が悪かった」

遼太は自分の顔が勝手に顰められたのを感じた。無意識にこんな苛立った態度を見せるのは、どうも落着かない。それに、何処らへんが気さくなのだろうか。

部長は苦笑するように居座りを正すと、改めて説明を開始した。

「その目的なのだが……それは、039の過失に在る」

「……」

「時空の歪みが生じて、奴とその舎弟達が宇宙に潜伏したのは二億年前。理由は、管理者である039が脅されてパイプを繋いでしまったからだ。まあ、過失という理由付けになっていたが、実際誰があの場に直面しても、彼奴らを追い返せるはずもなかったのだがな。そんな事も取り合ってくれない高等な精神体たちは039に奴らの駆逐を命じた。制限時間は三億年。それ以内に連行、それか殺害が

できなければ、貴様も永久に宇宙内を彷徨ってもらおう……、こう言われたのだな」

「ああ」

「そうされた039は有志を募った。それがどういう因果か知らんが、まあ、凜君のモノに宿ってしまった者や、祥吾の体に宿った者に白羽の矢が立ってしまったわけだ」

部長はそう言って肩を竦めた。それを見た『遼太』が意識の中で悪態を吐く。どうやら、意識を共有しているのはそのままらしい。かなり気持ち悪い。

「二億年掛けて、ようやくこの星を発見して、降り立ったわけなんだが 潜伏場所がこの周辺であると特定できただけで足がかりが消えてしまった。そこで、人間に取り憑いてその周辺を模索してみることにしたのだ。そしたら、次々と痺れを切らしたように飛び出してきてな。そいつらが邪魔で仕方なかったのだろう…… ってどうかしたか？」

遼太は自分の目が邪険に眇められていくのを感じる。相当の悪意を持って睨みつけているらしい。その様子によろやく気付いた部長だが、特に動じた様子も無い。

それに更に苛立ちを深めたか、眉間に皺が寄っていく。

「よくもまあ、人の生い立ちをそうぺらぺらと言えるもんだな……」

「特技だ。元々そういう仕事だったからな……」

息に乗せてそうしげしげと呟くと、部長は前置きも無く腕を伸ばすと、その黒い布に包まれた指を遼太の眉間にあてた。

「……何の真似だ」

「不愉快なら、貴様が脳内で話してくれ。例の茶番劇に馬鹿らしく思ってたのも、私も同じだ」

「辛い身分だな」

部長はもう片方の肩を竦める。

『遼太』は眉間に突き立った指を左手で引き剥がすと、右手の人差し指をこめかみにあてた。

『そんで……、今の話は呑み込めたか？』

『！？』

唐突に何処からか声が漏れてきた。声の特徴が掴めないが 展
開から察するに、右腕の意思だろう。

『潜伏場所特定云々まで理解できればいい。そこで、登場するこの
目の前のドス黒オヤジだが、元々は俺達の味方じゃない。あのデカ
ブツの手下だった』

『へ……？ でもさっき……』

『何故かあいつらの身内にや、そういうややこしいいかたする奴
がいるんだよ。察しろ。俺だって詳細は知らない。とりあえず、こ
いつのスペックを 刀に取り憑いた奴から聞いたスペックを教え
る。こいつは、偵察部員だった。人間という媒体を要さずに、宇宙
内で実体化できる貴重な奴だったからな。だが、どういうわけか、
心変わりしてこつちに味方してきやがったんだ』

「……………え？」

驚きが意識の範囲に収まらず、声として口から零れた。

なんとというか、疑問に思わず聞いていた自分もどうかと思うが、
039の話聞く限りでは、そういうことになる。

つまり？

悟った遼太に気付いたのか、部長がくぐもった笑いを漏らす。

「左様」

そんな簡素な言葉の後、部長は両腕を伸ばし、ヘルメットのこめ
かみ辺りにもつていき、そのまま上方方向へとスライドさせ 素顔
を晒した。

「……………」

絶句。脳内で右腕の鼻息が聞こえたような気がした。

そこに現れたのは、ありえてなはならぬくらい的美貌を持った
若い男の顔だった。キリツとした眉に、切れ目の長い目、やや高い
鼻に薄い唇、頬は作られたかのように綺麗な線を描いている。夜に
映えぬ黒コートだというのにかなり様になっている、文句なしの美

男子。もはや漫画の世界である。

だが、例外といえ、その目は暗く真っ赤光っていた。

「謀反に走った理由が気になるようだが　そんなもの、実際に人間になつてみないと分からないものだ。彼奴にはとうとう分からなかつたようだが……」

改めて聞いてみると、声も恐ろしくその容姿にマッチしている。

「気付けば粗末なものだ。人間がどうして愚直で、己の存在を懐疑するのか……私は気付いてしまった。だから、こうして私はここに居る」

「口だけは上手いな。単に女に惚れこんだだけだろうが」

「貴様はよくもやってくれた。あんな美人と同棲している者と契約してくれたのだからなっ！」

中は外見と一致しないようだが。

『究極の女つたらしだ』

苦虫を噛み潰したような右腕の声。成る程。

「……尤も、そんなこと関係なくなるだろうがな」

「……ああ」

そう言った途端に、部長はしんみりとした表情をする。

それから、使命を思い出したかのように、表情を引き締めると、その赤い宝石の様な輝きを遼太に向けた。

「成り行きは全て話したつもりだ。最早、彼奴に説得は不可能だろう。というわけで、これから、彼奴を殺害してもらおう。……いいな？」

その真摯な視線を真正面に受け止め、遼太は頷いた。

「今彼奴がここに攻めて来ないのは、私が撃った例の兵器の効果が持続しているからだ。奴は、爆発の存在を知らない。知らないものに対策は敷けない。そこが、完璧な奴の穴だ」

『……一世一代の賭けをするのに、生半可に行く奴なんて居ないだろっつ。』

部長の相変わらずである自分主観の言葉に、039が補足を
する。実璃の口を介して聞いた言葉の裏付けが取れた。自身の体で感じた
通り、フェネクスは最強に類する強さを持っている。

「そこで……だが、普段は使わないが、凜君の力を応用させてもら
う。祥吾は居ないが……一般人の避難は必須項目だ、十分役に立っ
てる」

「……でも、こんな傷だらけじゃ、僕はたいしたことはできないで
すよ?」

「策はある……」

「かろうじて、立ち上がり腕を動かせる程度である。さつきはもつ
と酷かったが。」

「遼太の言葉に、部長はここぞとばかりに微笑んだ。きつと、フェ
ネクスの配下に置かれて、人間として彷徨していたときも、この顔
で騙してきたのか……、と遼太は漠然と考える。」

「……」
「だが、そんな遼太の考えに、右腕は突っ込んでこなかった。ただ、
項垂れるように寡黙を守るのみ。その不気味な沈黙に、遼太は底知
れぬ不安に襲われる。」

「だが、そんな不安を紛らわす刺客さながらに、背後から足音が聞
こえた。」

「先ほど連絡を入れて呼んでおいた。お陰で、彼女の裸身を拝めな
かったが……」

「部長の解説（後半は蛇足だが）を聞き流し、遼太が腹の底が冷え
る思いで振り向くと、そこには息を切らした佐慧の姿があった。」

「先輩ッ!」

「……佐貴君……どうしたのっ!?!」

「そう言っ、身体を引き摺るように遼太に駆け寄って来る。」

「……いえ、色々あって……」

「そ、そう……」

「そう相槌を打ちつつ、佐慧の視線は遼太から逸して部長に定まり

、瞠目した。

「ごういう素直な反応が一番嬉しいな」

対する部長は満更でも無さそうに、口の端を歪める。

「え……ぶ、部長!？」

対する佐慧は、震える声で言葉を紡ぎ出す。確かに常の変人ぶり
で、この秀麗な顔立ち、というのは正しくギャグの世界である。

だが、すぐに部長は口を締めると、顔を遼太に向ける。

「……もう少し遅く着てくれればよかったのだがな。まあいい。こ
れも経験だ」

経験? と遼太が訊き返す前に、勝手に別の意思が働き口が動い
た。

「……もう、か?」

「早い方が良い。余計な感情が芽生える前に、な」

何が、とは訊き返さず部長は相変わらずの悪魔的な微笑をその顔
に貼り付けたまま、言い返す。

全く事情が呑み込めていなかった遼太だが、その言葉と流れてく
る思考から、その真意を察し、背筋に悪寒を感じた。

『主』

こめかみ辺りから右腕の声が漏れる。遼太は目を部長から背ける
ことで、その言葉に応える。

そして、039は予想通りの言葉を吐露した。

『こいつの目玉が……最後の砦だ』

再び視線を向けると、今度は完璧な笑みをその顔に貼り付けてい
た。

死を目前にした人物が、ここまで毅然と笑っていられるのだろう
か。

『……任せるよ』

『……そうか。主が承諾したとしても、俺は多分やらせなかつ
ただろうな。神経を麻痺させてでもな』

安堵の混じった右腕の言葉に、遼太は固く頷く。

すると、顔が一人でに動き、逸らしていた視線が部長に定まった。
「もういいか」

「ああ、ちよつと待て」

部長は笑みを凍らせて、真面目な顔を作って佐慧と向き合った。佐慧に関しては、事情が察しきれないようで、しきりときよるきよると部長と遼太を見比べている。

そんな対した動揺を見せる佐慧の頭に部長が手を載せた。佐慧は引き彎った顔で硬直し、その濡れる視線を部長に向ける。

「人間変わるものだ」

「……………部長……………」

そう呟く佐慧の目に、艶が生まれ、それは徐々に水粒として具現し、目から溢れ出る。

「今日の今まで、この顔は見せて来なかったが……………、なかなかの男面だろう？」

「……………」

対する部長は、口説き口調で淡々と言葉を紡いでいく。

「最初は守られっぱなしの少女が、最終的には世界を救うとはな……………」

…世界も変わった。私も最初は君を選んだことを後悔した。だが、君は私の元から逃げずに、傍にいてくれた。このことを、この国のことわざでなんといいのかね？」

「……………さあ」

「……………罪を犯した>レッドくが何処に行くかは知らないが、私は此処に舞い降りたことに一切の悔いは懐いていない。けじめをつければ全てが元通りというわけではない。だが、これは私の問題だ。今まで、騙っていて済まなかった」

「……………」

佐慧はうつむき黙ったまま。部長はやがて、その頭から手を降ろした。

『あの刀から聞いた話だが、この娘の能力はこいつの力の一部らしい。つたく……………とんでもない奴を敵に回そうとしてたらしいな』

氣を利かせたつもりか、右腕が脳内でそう囁いてから、今度は口を動かす。

「……お前が敵じゃなくて良かった」

「過ちを悔いるのは簡単だ。だが、それを償い明日へ繋げていくのには、途方の無い時間とエネルギーが要る。だが、動かなければ、永遠の悔恨が延々と心を穿っていく。その穿孔に私は勝てなかった。それだけだ」

それから部長は再びニヤケ面を作る。

「その孔に気付かせてくれたのは、ほかでもない彼女なのだからな」
佐慧の涙腺が決壊した。くぐもった嗚咽を漏らしながら、その場に蹲る。討った怨敵が、自分の知己だったことを知った戦士の様に知った方が良かったが、知るタイミングを間違えた。後悔の涙。
「メモを残してある。後で読んでくれ、さて、さっさとしてくれ。風邪をひきそうだ」

部長はそんな佐慧を一瞥だけすると、遼太に顔を向けた。

その真摯な笑顔に、『遼太』も顔を綻ばせて言う。

「次に会うのはいつだろうな」

「宇宙が消滅するときだろう」

「それまで長いな。また、飲みに行きたかった」

「……いつ覚えたんだか知らんが、そんなお前を見て私は清々した……、さあ、持っていけ」
「……くそつたれ」

『遼太』はそう呟くと、腕を伸ばした。指の先まで行使するように延ばすと、その右腕の精緻な指先を部長の燦然と輝く赤い目玉に持っていく。触れて、抉った。

悲鳴は聞こえなかった。

部長の黒ずんだ亡骸と、その衣服と佐慧を残し、二つの意思を持つ遼太は疾走を開始した。

「最後に訊きたいことがあるんだけど」

「ん」

遼太は敢えて口に出して右腕に訊ね、右腕は至極素っ気無く応える。

「今までのあの口調って何だったの？」

「……けっ、あの娘のことじゃねえのかよ。全く空気読めねえ奴だな」

「……あとでいくらでも訊ける。でもお前との闘いもこれで最後だろ？」

「……そうかい。もともと>レッド<には言語なんて存在しない。

存在とそれに名前のような性格みたいなもんが漠然と存在して、共存していたんだ。そんな精神のみの存在が、細かいスペックの存在するこの世界に足を踏み入れたら、その性格に近いようにスペックが加わってくんだ。上手く説明はできないが、なんとなく俺の口調から察しろ」

「……うん、で？」

「あの堅ッ苦しい口調は、俺達の長　　つまるところの、最初に誕生した>レッド<のことだが、そいつのもんだ。そいつが、この世界に足を踏み入れると、そんな感じになるっていう感じだ。俺は性格が悪いから、強制的に憑依にあたっての契約にそういう条件が列なっただらうよ」

「……へえ。まあ、僕はこっちの方が好きだけどね」

「……俺もそう思う」

憎悪に心を染められて、自分の欲する世界を力で手に入れようと策略し、実行に移そうとしている諸悪の根源である悪魔は、その憎しみを尚その内部に堆積させて、周囲の情景に牙を振るう。

ヒーローを気取ったつもりは無いが　　これこそヒーローの立つ位置。そして、その対向には、そんな寧猛な悪の存在。

結局、自分は何のためにこうしているのか。フェネクスの言った隠蔽された過去のため？

存在しない、記録にない過去なんて、存在して良いのだろうか？
今が今で、こうして人生として歩んでいるのに、別の人生が存在
すると懷疑して良いのだろうか？

口に入る冷たい空気は喉を潤し、目は痺れて涙を漏らす。

諸悪のプロセス（後書き）

いよいよ最終決戦。 二月中に終わらないっ！

二月の終り＝受験の終了。……もつとどっちかに専念したかったですが、もうし方ありません。どちらにも追い込みをかけますよー！

全ての破片

地面に足をつけ、遼太は毅然として立つ。憎むべき敵はそこに姿を見せておらず、ただ殺風景な夜の校庭だけが、寂寥を誘う風と共にそこにある。

「……奴の言っていたことの大半は正解だが、そのほとんどはあからさまな誇張だ。主が存在する理由はゴマンとあるし、俺は利用しているわけじゃねえ。全てお前の意志で決めたことだ。その危険性もきちんと了承した上での了解だ。それほどまでに、五体満足に憧れていたってことだ。後悔は無いだろう。どっちにしろ、奴の配下に収まった時点で俺達は終りだ。ついてくるなら、利害が一致するほうを選ぶのが人間だが……奴を葬る気はあるか？」

何かと思えばそんなこと。

遼太は筋肉を鳴らすように頷く。

先ほどの肉を抉った感覚が克明にこの手に残っている。命令を下した意思是違えど、感覚は共有されている。相当な痛みだった筈なのに、あの憎たらしい笑顔。

最後まであの人のままだった。

「……最初から考えてたんだろうな。裏切った時から、こうなるであらうことを」

「……それで、僕はどうすればいい？」

痒い鼻頭を擦りながら、遼太は訊ねる。それに応えるように『遼太』が鼻に爪を立てる。

「最初脚と頭は俺が担う。頭以外の上半身は任せる。あいつを出来る限り煽っていく」

「……解った」

頭というのは、脳という意味ではなく、神経系のことだろう。必然的に、喉も牛耳られることになるので、会話等は右腕に委ねるところになる。

それを承知の上で応えたのは、目の前が暗いから。

まだ信じきれていない自分がいるのかも知れないが、この世界を救う狭間、自分の意志が尊重されるかといえば、確実に世界を守るのが定石。土壇場で逃げ出す人間など見たこと無い。

そんなプライドの上に、この信頼があつて、初めてこの態度は実現される。

「裏切り者は死んだらしいね」

不意にそんな声が前方から響いてきた。

『遼太』は肩を竦めて意識に語りかけてくる。

『あいつのことだから、恐らくのところ俺と主の意識がごっちゃになる術……つばいもんを使って来る前提で策を練っていたんだろう。つまり、俺と主が共立していることが奴を倒す上では最も尾重要だ。俺は力を提供させていただけで、こういう身体を動かすのは得意じゃないんだ。右腕の変形機能は一応使えるが、最後の最後、あいつが消滅する前に戻しておかないと、もう右腕が元の形に戻らないからな。その辺、注意しろ』

最後の警告よろしく、直後右腕との意識が遮断されて、視線が自分のものではなくなった。

気付けば目の前にいる。首と肩をだらりと下げ、ライトの様に光った片目をぎよろりと回し、何かに取り憑かれたフェネクスの姿が。

「ざまあ見ろ……」

そう短く呟くと、右手を一閃。

舌が勝手に動き音を鳴らす。脚は驚くほど俊敏に動き、その右手の射程範囲外へと身を翻す。

空を切った右腕は、派手な音を立てて地面を穿ち、尚もフェネクスは遼太に追いつがろうと引き抜きつつ走行に身を呈す。

悪魔の腕が伸ばされる。

遼太はその高速で飛来する鈍器を一瞥すると、素早く屈み反撥力で空に舞う。

『頼んだ』

短い言葉が通り過ぎる。

同時に右腕を唸らせ変形をさせる。

幼き日、自分が望んだこの子供じみた演出　今はそれが生命線

となっている。

重さに乗じるようにして、変形させた剣を振り翳す。そして、追
い立てるようにそれを真下へと向けた。

鉄を切ったような感覚が右腕を駆け巡る。伸ばされた腕は尚も勢
いを余らせて、空間を掴んだまま邁進している。

刺さった右腕を支えにするようにして脚をつくと、今度は腕を腕
から引き抜きつつ、極太の腕の上を走り始める。

『回る』

その言葉とおり、フェネクスはヘッドスライディング直後のような
体勢から、寝返りを打つように腕で弧を描き反対側の地面へとたた
きつけようと試みている。

その突如な行動に遼太は危ういところで遠心力で腕に噛り付き、
思い切り腕で引っ張り上げ腕の裏側へと移動。

その数瞬後、遼太達が居た面が地面の隙間を構成する砂と同化し
た。

間一髪の危機回避の成功に安堵するも、休む暇など無い。

すぐに腕が空を切れく勢いで振りかぶられた。

遼太が反応する間もなく、脚が勝手に動き宙へと跳ね上がる。

『ポケットとすんな！　コイツ相当切れてやがる！』

なるほど、真下にあるその顔を覗き込めば、その程を窺うことが
できた。

あの眼光は憎悪の光なのか。

『二つばかり事象にあいつは切れてる。一つは、奴が最後の最後まで
で裏切って俺達を再生させたこと、もう一つは主が全面的に俺に協
力を認めたからだ。　ぶっちゃけ、拒まれてちゃ俺達はどうにも
ならなかったからな』

『そんな選択肢いつ出されたっけ？』

『 質問なんてしなくても、嫌なら逃げ出すだろうが。とにかく、あいつは本来の目的 とうか、冷静さを失ってる。元々あるとは思ってなかったが、ここまで来ると最早餓鬼が切れたみたいだ。だから、怖くはない。だが、処理に色々面倒が生じる』

いまいちつかみ所の無い回答だったが、重力の支配はやがて訪れる。

再びフェネクスを俯瞰すると その馬鹿みたいに広い掌が目の前に迫っていた。

『これから更に怒りのボルテージを上げていく。主は黙って休憩しておけ。じきにその存在のエネルギーを必要とする』

右腕はそれだけ意識で語りかけると、その掌の上に足裏を叩きつけた後、重力なんてないのではないかと疑いたくなるような軽やかな動きで掌から飛翔する。

上手い具合に肩に着地すると、わざとらしくその側頭部を蹴りつけた。

「よう、どうした、そんなカリカリしやがって。不景気だからって落ち込んでんじゃねえよ」

「……」

フェネクスは拗ねているように首を振ると、もう片方の腕で遼太の体を目掛けて拳を振り下ろしてきた。

遼太は素直にそれを躲すと、地面へと落下していき、受身をとって衝撃を押し殺す。

「不条理な世の中だって、なんかしら我慢しなきゃ始まんねえんだよ！ それが気に入らないからって何ムキになってやがる、餓鬼がお前は！」

「死ね」

再び落ちてきた拳が地面を砕く。遼太は鼻で笑ってそれを避けて、尚も言葉を紡いでいく。

「自分で世界を作る、だ？ 何言ってやがる！ 世界なんてそう簡

単に作れて堪るか！ お前が言ってるのは、幼稚園で玩具パクられて愚図ってる餓鬼の言うことと背中が粟立つ位酷似してるんだよっ

！ 馬鹿だろう、お前！」

「……ふーん」

フェネクスはただ無感情に呟く。だが、その短い意味のない言葉の中にも、あからさまな怒気が感じられる。

「そんじゃあ、039は永遠に何かに縛られてても、我慢できるわけ？」

「モノによるがな、相当理不尽なもんなら、無理だ」

「……ほら」

「そう愚直に思つな。だがな、それでも自分の世界観を人に押し付け様とは思わない。ぶっちゃけ、俺はお前に謀反したあいつは恐ろしい奴だと思つた。だが、あいつは気付いたんだ、多少愚欲が交じつていたようだが、お前との考え方の決定的な齟齬にな。それが、お前が無理に連れ出した部下たちを道具としか見て無かつた証拠だ」

「……」

「ほーんツと、お前馬鹿だよなー、偵察なんて置いたら、少なからず共生の考えを享受する奴が現れてもおかしくないってわかるだろうが」

「……」

「裏切り者の登場、俺の復活、全てが気に食わないわけか。子供がさつきまでの勢いはどうした、あの傷ついて動けなくなった小動物を甦る様な目つきはどこ行つた？ つつーわけで、俺は本気でお前が憎い。主も同感らしいな。少なからず、今の生活は気に入ってるらしいからな。残念ながら、もう内から攻めるのは無駄だ。というわけだ、お前には灰になつてもらおう」

「……」

『遼太』がそう言い放つと、フェネクスの眼が嘲笑するように歪んだ。

凜は刃をアスファルトに突き立て、直立した刀の柄を両手で握り締めて身体を支え、疲弊した目を周囲に巡らす。

遼太がフェネクスによって、吹き飛ばされたのを目撃し、その追撃を試みようとしたところ、強靱な蹴りで刀が敷地外に飛んでいつてしまったのを回収してきたのだった。刀がなければ凜はただの一般人。そのまま追いかけたとしてもすぐに肉片と化していただろう。相当遠くまで飛ばされていたために、全力疾走で結構な距離を走る羽目になった。このまま相対するのは危険だが　遼太を放っておくわけにも行かない。

刀を一キロ以上蹴り飛ばすほどの力量を持った相手に、満身創痍の遼太が敵うとは常識的には考えられないが……、ここは常識をプラス思考として解釈させてもらおうとする。きっと、大丈夫だ。刃を地面から引き抜き、再び蹠踵しつつ校庭へと向かう。

と、背後から物音が聞こえる。

凜は疲労により四散した気力を瞬時にかき集めると、柄を片手で握りなおして敏速に振り向いた。

そして、そこに居る人物を見て瞠目する。

「……先輩」

佐慧が漆黒の蔓延る周囲の色に同化する服装で、何かを抱きかかえてそこに立ちすくんでいた。

何故　、と疑問が脳裏を掠めていくが、理由を考えるのは後回し。

凜は小走りに佐慧に駆け寄った。

「ど、どうしたんですか……?」

そのこじんまりとした姿に、凜は不安が胸中に芽生えていることを悟りつつ、そう訊ねる。

すると、佐慧はすっと顔を上げた。

その目は赤く充血しており　その頬には赤い液体の様なものがついている。

「……………これ……………」

佐慧は消え入りそうな声でそう言うと、一枚の紙を差し出してきた。

凜はそれを受け取ると、生唾を飲んでその紙の内容を読んでいく。文章が進むにつれ、段々と長々と積み上げてきた疑問が解消されていき、それに比例して寂寥が喉にせり上げてくる。

部長からの手紙　遺書とでも言うのだろうか。

自分は人間ではない、という書き出しから始まり、宇宙外という概念の真実、今まで討伐してきたクリーチャーの本質、自分たちの目的、あの悪魔の正体、この今は刀の形を持っている物質、そして
遼太の事。

右腕は義手ではない、だが、>レッド<の憑依により変異した細胞が合体して出来上がった、フェネクスにも引けを取らない存在である、と。

『恐らくこの手紙の内容が理解されているであろう頃には、私はとつくに餌となつて最期へと向かつているだろう。　と、こうして書いてみると当たり前前のようにしょうがないのだが、一応筋通りなのだろうから、書いておく。最後に、だ。今の佐貫は、恐らく精神体の意識とその肉体を共有している。この状態は所謂、每晚使用していた『発動』の状態と同じようなものだ。全ての片がついたら、そのことを教えてやり、宇宙内から>レッド<の存在を抹消させてくれ。……………残りには少佐の指示に従つてくれ』

名前は無い。ずっと、部長だった。

馬鹿だった。狂気の狭間という面目が適確な、それでいて校内での信用を得ている、在る意味恐ろしい人物だった。

馬鹿だとしか、言い様が無い、人間だったらその命ですら投げ出す聖人のような尊敬に匹敵する人物。

人……………。

凜は手紙から顔を上げて、歪む佐慧の顔を見た。

「……………どうしますか？」

「……契約がね……、解除が必要なんだって……」
貰泣きしそうな程、不安定なその声色に、漠然と凜はこの様子の直接的な原因を悟った。

彼女には、>レッド<が憑依していないのだ。願望の実現は、厳しい制限が掛けられているとはいえ、唯一存在する異能の持ち主。それを選んだのは。

「解除……？」

「……うん」

凜が訊き返すと、変わらずの返事が返ってくる。

気分が沈むことなんて、人間一生に何度も有る。感情がここまで豊かなのは人間だけだし、学習を深い感情の抑揚の辛さからするのも人間だけ。深い悲しみを乗り越えて、自分を見つけていくのも人間。

「……先輩」

「……？」

「どうしてそこまでしょげてるのか知りませんが……今は前を見てください。部長は先輩に残りを託したんです。それを達成できないなんて言ったら、部長がどんな顔をするかどうか。顔は結局見せてもらえませんでした……、とにかく！今は部長の意志を引き継いでください！悲しみの余韻に浸るのはその後にしてくださいッ！部長は先輩のこと……信頼して、この手紙を残したんじゃないんですか……ッ！？」

「……」

凜はほとんど怒鳴るようにして、言葉を全て吐き尽くす。佐慧は、怒鳴り声に驚いたのか、その言葉に衝き動かされたのか、はたや両方か 目を瞞って目の前の凜の顔を凝視していた。

それから、指を目尻に当てて擦ると、頷いた。

「……ご、ごめんね……ちょっと……待ってて……」

そう言って、佐慧は小さく見える背中を凜に向けて、校舎の後ろへと消えていった。

佐慧はそれから数分で戻ってきた。

その顔は、少しばかり青白いものの、いつもの彼女のそれに戻っていて、凜を安心させる。

「……どういうわけか知らないけど……あのデカイのに、直接的な攻撃をするのが私、その起因をつくるのが凜、皆を守るのが、遼太」

どこか畏まった、後輩を名前呼び捨てで言うその口調に、凜は目新しさを感じつつ、その作戦に耳を傾かせる。

「……だけど、その前に、契約を解除させるのが最初。あの手紙にもかかれてたと思うけど、凜のその剣には、精神体が閉じ込められてるんだけど、色々面倒な契約に縛られてるのん。詳細を話す時間はないから省くけど、その契約の一部を解除して、持ち主とその精神体の力を最大限まで発揮できるコードがあるのん」

「……コード？」

コードといえば、遼太の肉体強化状態を解除するコードが凜の声だとかなんとか言っていたが、結局使った覚えが無い。いや、昨日の晩に一回言ったか。

「……契約はそのまま最終段階に向かうから、普段はそのコードは使えないんだけど、今日は最後だし、最初からこの前提での契約だから、ここで解放させてあげて。……コードは口の中で呟いてねん」

「……了解しました」
凜が頷くと、佐慧はうつすらと笑ってみせる。

「肉声コードは、『世界の融合』」
世界の融合。

全ては 何処から始まったのだろうか。誰の目論見から、このような事態が発生し出したのだろうか。

どんな存在が、この様な事件を 二億という気が遠くなるほどの時間を股にかけて……？

それが神の仕業であるのなら、凜は金輪際神は拝まない。

口の中で呟いた言葉が、妙に透き通って聞こえた。

全ての破片（後書き）

三月三日までには、絶対に完結します。意外と近いことです。色々自粛していますが……ここまできついのは受験勉強以上かも知れません……。

もう一つの融合

夜間の寒さが疲労が募るのを助長し、段々と動きが鈍って来ているのが分かる。

だが、それにわざわざ乗じるように、『遼太』のテンションは上がっていく。

「どうした墮天使ッ！ 鈍くなってきたぞッ！」

フェネクスはその挑発に乗るような素振りを見せて、その獰猛な手脚を振り回す。

落ちてきた手を易々と躲すと思ったら、いきなり脚が折り曲げられて、頭から倒れ込むように体が浮いた。遼太が完全な反射で手を翳すと、上手く体が移動して前転をするような形になる。

そのまま砂を巻き上げるように一転し膝をつくと、すぐさま立ち上がりフェネクスに切迫、遼太はそのタイミングを見計らい腕を薙ぐ。

深くはないが、脚の肉が抉れたらしい。

だが、こんな動作今に至るまで何回も繰り返してきたのだ。フェネクスも全く学習しないわけではない。怒りで本来よりもその能力が向上しているのだから、尚更。

その怒りの拳が適確に遼太の体の脇腹を捉えて意識に鈍痛が走り、そのまま一時的に重力に背徳し空に打ち上げられる。

だが、この嘔吐必須の鈍痛も今になつては大打撃ではない。

紙切れのように舞う体に、フェネクスの追撃が襲い掛かる。

大気を屠るように迫るその一撃に、あまり融通の利かない体勢の遼太はそれを一瞥すると、脚に力を込めた。

そのまま回転する勢いで剣を突き出す。

第二関節より下付近に、その切先がのめり込んだ。だが、それは人間で例えれば、蚊が刺した程度の痛み。拳本来の打撃エネルギーは生きている。

そこで先ほどまで溜めておいた脚の力を生かし、思い切り指に足裏を踏んだ。

そのまま慣性の法則に則り指に乗るようにして上昇。

そんな情景も一瞬、怒鳴るような咆哮がしたと思っただら、拳が凄まじい勢いで横に振られる。

敢え無く落とされる遼太だが、体重移動を上手く利かせて地面に安全に脚を折って衝撃を逃がしつつ着地する。

そのままゆっくりと立ち上がりながら、フェネクスの巨体を見上げた。

「なあ、あんたのあの部下、有り得ないくらい優秀だったな」

その時が訪れるまで、煽動。

「それなのに、どうして裏切ったのか、俺には分からんが、あんたはどうなんだ？」

「……………分かる」

そこでフェネクスは初めて「遼太」の言葉に返事をした。

「それは……………分かる。っていうか、自分から言ってきたんだもん。

堂々と、反逆するってね。こちらとあいつが人間になったら、あっちから連絡がくるまで絶対に場所が特定できなかったんだけど、見事に逆手に取られたよ」

「あいつの情報吸収能力もありえないもんがあったが、変身能力は味方をも欺くってか。あのツラに騙された奴はご愁傷様だな」

「……………スパイになったりでもしたら、恐ろしい能力だぜ、情報吸収なんてな。説明し忘れたが、俺は一切あいつに俺の身の上話を聞かせたことは無い。ツ、くそっ、察せ」

意識の言葉が終わる前に、目の前から高速のパンチが飛んできた。冷えて弛緩した空気を頬に浴びながら、その攻撃を躲し、穿たれたことにより生じた土に体を呈す。

その土の雨により、悪くなった視界の先に、細長い影が躍る。

咄嗟に脚を捻って横に跳ぶと、遼太が立っていた位置に剣が降ってきた。どうやら、剣を瞬間的にその手に握らせることが出来るら

しい。

追撃することもなく剣がゆっくりと持ち上げられる。 どう見ても隙だらけの行為にしか見えないが、どこか油断のできない雰囲気。 気が気圧され、遼太はただそれを息を整えつつ眺める。

やがて、その片目が一点を凝視していると気づき、背後に視線を向けると。

初めて見たそれを細くしたような剣を片に担いだ凜が現れた。

「早かったな……」

『遼太』が口の中でそう呟く。

その顔色から察するに、相当疲弊している。 遠くに飛ばしたとか何とか言っていたから、本当に遠くまで飛ばされたのだろう。

だが どこかその目の色が違った。

『新規契約だ……俺達の出る幕はもうない、これから裏役に回るぞ』
『え？』

突然の右腕の言葉に、遼太は驚いたものの、なんとか意識内での反応に留まる。

それと同時に、凜が剣を携えて弾かれたように走り出した。

『ま、マズイ……さっさと逃げるぞ』

凜のその姿を見た右腕は怖気づいたように、身を翻し一目散にその場から逃げる。 脚の行使権を持ち合わせていない遼太は、流されるように同意し、前を見る。

校庭の見えないどころか、相当の距離をがある第二校舎の裏側までたどり着くと、『遼太』は壁に凭れた。

『あー、だるいな……あの時喰らったのが想像以上に効いてたな……』

自嘲するように口の端を歪めると、舌なめずりをして意識内で語り始める。

『こっからは時間との戦いだ。 じきにこの辺りの温度が急激に低下する。 原理を語ると収まらんから云わないが、とにかく、下がる。 バナナで釘が打てるレベルじゃない。 恐らくは人間の捉える物理学

の限界を　　・マイナス273　の世界を越える、想像も出来ない世界だ。それがあくまでほんの小さな物質の温度だったとしても、順繰り周囲に伝わっていくだろう。　　それが外に出ないように境界のような膜をここの周囲に張ってるのが、例の娘だ。恐らく既に始動しているだろう。ただ、それは持続式だし、法と違うものだから、娘の活力が途切れればそれまでだ。それがまず急ぐ理由その一。次に、その冷却から恐らくは数分後、今度は高熱波が起こる。それも、水が一瞬で蒸発、というレベルじゃねえ。下手すれば地球が恒星になれるレベルだ。軽く四桁は行っちゃう。いわゆる、原子炉の中みたいになる。そこで俺達の出番だ。この体、例の剣、そして娘だな、三人全てをその高熱からの庇護におく。それにや、これとはかくとして、残り二人の居場所を確保しなけりゃならん。というわけで、だ。　　これからその作業に入る。娘の方は指示が通るが、もう一人はそうもいかん。色々面倒だが……手っ取り早い方法はこれしかない、が規模の大きいシールドは作れるが、ここら敷地の十分の一も作れないだろうが……。　　やるしかない』

「……………」
遼太は無言で意識の中だけで頷く。

『…………』というわけで、さつさと娘を探し出すぞ』

そう言ったと同時に駆け出してから、数分後。佐慧はテニスコート付近の花壇に縁に座り込んでいた。

「おい！」

遼太は、長い間共にしていた人物の死を目の前にした彼女にどう声をかけるか、色々模索していたが、結論を下す前に『遼太』がそんな乱暴な言葉を投げかける。

遼太は心中ヒヤリとしたが　　佐慧の反応は予想を反していつも通りのものだった。

少しばかり驚いたように瞠目しているが、その声は本来の彼女のもの。

「…………佐貫君、ちょっと遅かったわねん」

「悪かったな」

未だ神経回路の支配権がそのままなので、声を操る権利を遼太は有しておらず、必然的に応答は全て右腕に委託することになるのだが、なんとというか信頼という壁を越えて、緊張して成り行きを見届けざるを得ない。

「作戦は分かっているな？」

「……うん、概要なら……」

「……なら良い、お前の待機場所を決める」

そう言って、首を回して校舎を見る。

「……一番校舎から近くて、最も安全な場所だな。何処にする？」

「……」

その遼太の言葉を聞いて、佐慧は不思議そうな面持で遼太の顔を見上げた。

その視線に疑問を抱いた『遼太』は即座に訊き返す。

「ん？ どうかしたか？」

「……うん、なんでもない。ごめんなさい」

ふるふると首を横に振って言及を逃れると、質問に答えるべく口を開く。

「中庭でいいんじゃないかしらん？ 校舎が崩れると少し危ないけど、結構広いし反対側の校舎に寄ってれば瓦礫に飲まれることも無いだろうし……？」

「……やっぱそうか……了解。そんじゃ、準備が整ったら、ここに戻ってくるからちゃんと居ろよ」

「うん」

佐慧が頷くのを見るとすぐさま、遼太は踵を返し、校庭に向けて疾走を開始する。

それにしても展開が急すぎた。

遼太が全貌を理解し終える前に、事が終焉へと向けて動き出している。

『どっぴいっことっ』

というわけで、一片でも事を理解をしようと、遼太は意識内で右腕に話し掛ける。

『……外膜をあの娘が構成し、その中の自分たちを護る壁を俺達で作るって話だ、簡単に言う。まあ分かるだろうが、あの剣を持ったのが、熱波を起こして奴を駆逐する。とかいう話なんだが、どう考えても熱波発生してが到達するまでにシールドを張るなんて無理だろう？ だから、……あんましこういう言い方もしたくないんだが、俺の能力を使って時間の流れを遅くする。とはいっても、俺達が凄まじく早くなるだけだな。そうしておいて、さっさとシールド作って、はい一件落着、だ』

『……ごめん、分かりやすい』

『悪かったな……、でも、そんな反則技、そう頻発できないのが現実だ。莫大なエネルギーが必要だ。だから、そのエネルギーの塊を狩りに行く』

エネルギーの塊　といわれれば、あれしか思い浮かばない。

『分かってるじゃねえか、あのダミーの目玉だよ。あれ、偽物の癖に、結構詰め込まれてるからな』

そう言いきったところで、校舎を通り過ぎ、修羅場と化している校庭が目に入った。

剣を手に毅然と構える凜と、憤然と身構えるフェネクスが対峙していた。

基本的に凜は専ら受けのようだ。フェネクスの振るった剣を、淡々と受け止めて弾き、後退し距離を稼ぎ追撃を再び防ぐ。

その姿を確認すると、剣の交わる甲高い音に隠れるようにして遼太は駆け出した。

迂回し、フェネクスの背後を取ると、思い切り脚を踏み切り飛翔。両者ともに気付かれる前に、片をつけてしまう積りらしい。

遼太はその逼迫した039の行動から、そう察し右腕を意識する。肩を足をつくと、一秒も間を持たせずすぐに跳躍、大気に身を投じるようにしてフェネクスの目前へと躍り出る。

そして、遼太は海に潜む魚に銛を打ち込むように、右腕を突き出し、手ごたえがあつたところで素早く目玉を引き抜いた。

水に浸したバターが潰れた様な音と共に、目玉が眼窩から眼漿の糸を引いて右腕の先についてきた。

フェネクスが驚いたように身を振らせる。

その隙を衝いて凜が一気に接近、脚を切り刻んだ。

遼太のそれとは比にならない一撃に、フェネクスの硬い皮膚が引き裂かれ、黒い液体が撒き散らされる。

更に恐ろしいことに、凜は尚も脚を圧迫しつづけ その剣で足をすくい上げた。

遼太が着地すると同時、フェネクスの巨体が揺らぎ、倒れる。

巻き上がった砂埃を背景に、態勢を立て直す遼太に、凜が駆け寄ってきて声を掛ける。

「 それを使う必要は無い」

その酷薄な響きが混じる声に、遼太は背筋を泡立てるが、『遼太』は平然とそれに応える。

「 …… なんてだよ」

「 貴方が理解している今回の作戦内容と、私達が認識している作戦内容には、齟齬が存在する。そのエネルギー塊はとっておいて。後始末に必要なだから」

「 …… 言ってる意味がわからんが……」

『遼太』が苦しそうに呻く。遼太にもよく分からないが 作戦自体よく分かっているのではないので、分かるはずも無い。

対する凜は全く態度を崩さない。

「 シールド発動のタイミングには、核融合直後の余裕より、かなり余裕がある。貴方の反射神経だけでも十分適応できる」

「 …… よく分からんが……、とにかく、ここはお前を信用させてもらおう」

『遼太』は苦々しくそう言うと、さっさと靴裏を弾いてその場から立ち退く。

「ちょ、意味が分かんないんだけど」

「そろそろ腕を戻しておいてくれ。それと、俺が合図したら、思い切り右腕に力を込める。俺はシールド発生のセッティングはできるが、直接的な発動は契約主であるあんたしかできないんだ……頼むぞ」

アスファルトを蹴るように、中庭に到着する。遼太の後を追うように佐慧が移動していたのであれば、とつくにそこに居る　　筈なのだが。

そこには、建物一つ隔てた場所に修羅場などないのではないかと錯覚させられるほど、平穏な無人の中庭があるだけだった。

「……………あれ？」

右腕が首を回して周囲を見渡すものの、それらしき人影は無い。「なるほどな……全部あいつがやると思ってたが……」

何かを悟ったかの様に、嫌みつたらしく「遼太」が呟く。何が、と遼太が訊ねようとしたり、その時、空気が凍った。

比喩ではない。空気が劇的な変化を遂げ、背筋の鳥肌が総立ちになる。コートを着ていなければ、心臓麻痺で逝ってしまいかねないほどの変化だった。

「始まった！ 移動するぞ！」

「遼太」が切羽詰った風に叫び、脚の向きを変えて足裏を爆発させて、校庭へと向かい始めた。その無理な脚の使い方から、相当焦っていることが窺える。

コートがパリパリと音を上げ始めた。凍り始めているのだ。

「くそっ！ フードを頼む！」

凍るズボンの氷を蹴散らすように脚を動かし、一心に校庭を目指す。遼太は同じく凍る袖を砕きながら、フードを抑え、抵抗力を堪えて頭にそれを載せる。千切れそうな程痛かった耳が、少しばかり楽になった。本来のそれより、断熱効果にも優れているらしい。

「……………露出してる目玉やら粘膜やらが凍らねえな……あの娘の仕業か……………」

眩きと共に、校庭へと到着する。

その中央辺りに、冷気の中心があった。白い空気の動きが、その中心を護るように渦巻いているのが分かる。

冷気による影響など無いのか、常温とさして変わらない動きのフエネクスが、そこに剣を両手で構え突進していく。

そして、凍った空気を切裂くように剣を振り下ろす。

すると、そこから凜が飛び出した。冷気の膜が剣によって寸断される。

だが、その凜が握っていた剣は直視できなかつた。視界的都合からである。

露店どころか再結晶の域まで達した氷が醸し出す白い霧が噴水の如くその剣からあふれ出て、ドームの様になっていたそれが吸い込まれるように凜に追隨していく。

はつきりと解る。この寒波の根源はあの剣だ。

「……なるほどな。本来なら、とくに水滴で視界が真つ白だが、これもまた例の娘……良いように利用されすぎだが……良いのか」

「そ、それでどうすんの!？」

この空気中から発生した猛吹雪の中、未だあの二人は交戦中。立ち止まっていれば服は凍りつき行動が困難どころか不可能になるかもしれない。

「……とりあえず、先を見据えてシールドを張る区域を確定したい。だが、あの娘が居ない……が心当たりはないか……? 訳あって近づくわけには行かない上、この体は常にシールドと外気の境付近に居る必要があるんだ」

「……先輩が居そうな場所?」

旧校舎か? いや、違う。この体が凍りつかないことから、冷気の発生を知っていたのだ。わざわざ約束を破ってまで、自分のことを優先させるとは思えない。

であるとしたら……? 他。

それ以外で、部長の印象が強い場所。

部長の主力武器は、兵器。ロケットランチャー類の武器。対走行車輻の武器。遠距離。

核融合？

不意にそんな単語が脳内に弾き出された。一般人に縁も所縁も無い。

だが、誰かがこの言葉を言っていなかったか？ 思い出せないが、絶対に近いうちに聞いている。

すると、あの冷気は？ 核融合を前提とすると、あれほどまでの急激な温度の低下。物質の限界を超えて、バランスを崩しかねないこの気温は？

あの剣は。

もう一つの融合（後書き）

わぁ……終わらない……。

え、と、とりあえず、執筆速度を加速させたいので、後書きはこれだけで勘弁を><

秒刻みの一撃

「第一校舎……」

「……間違いないか……」

遼太の呟きを零すことなく、右腕が訊き返してくる。

その確認に遼太は固く頷いた。根拠など何も無いが……もし全員の目論見がそれであるならば、そこを選ばない筈が無い。

「それじゃ行くぞ……主！」

意識内で039が咆えた。

遼太が同意を示す前に、ぐいと脚が動き校舎に向かう。

氷を掻き分けるように突進していき、氷以上に固い窓に体当たりをかまし、粉碎し校内へと侵入する。

校内は、急に訪れた寒波により、ほとんどのものが凍っている。

普段でもよく滑る床が更に滑るようになっていくが、遼太の脚はどろろ加工がなされているのか、全く滑る感覚が無い。

階段を見つけると、すぐさま廊下を蹴り飛翔、段など無視して踊り場まで躍り出ると、そのまま壁を蹴って二階へと到着する。

すぐ目の前の廊下に飛び出し、左右を確認すると　一つの人影があった。

慣れない手つきで筒を肩に載せて、構えを取っている。

遼太がそんな彼女に近寄ろうとした　が、脚が動かない。『遼

太』に近づく意思が無いのだ。

『なっ……』

『馬鹿、危ねえんだよっ！』

そう右腕が体内で叫ぶと同時に、その廊下内で爆発が起った。

鼓膜を千切れそうな程叩く轟音、視界一杯を覆い尽くす煙硝と同時に、何かが足に激突する。

遼太はそれが岩か何かだと思ったが、見下ろして　愕然とした。

「いたた……って、あらん？」

頭を脚に凭れるようにして倒れていたのは、佐慧その人だった。脚が屈められたので遼太は腕を伸ばし、佐慧の肩を抱くようにして立ち上がらせる。

「急げ、さっさとしないとお前の意識が持たない」

「辛いなどするはずも無く、遼太の口からは荒っぽい催促の言葉が飛び出る。」

佐慧は焦点を落ち着かせると、こくりと頷いて蹠踵けつつも立ち上がると、階段付近の落ちている筒を拾った。それも注意してみないとよく分からないが、恐らくそれも兵器の一つだろう。先に弾頭の様なものがついている。

彼女が駆け出すその後ろを付いていき、先ほど起きた爆発の中心へと向かう。

爆心付近では、床が酷い煤が円状に広がっており、壁が見事に崩壊しており、校庭の様子をありありと映し出していた。そこには、交戦を繰り広げるフェネクスと凜の姿がある。

「位置についた！ 行動に移せッ！」

それを認識するや否や、『遼太』が声帯が切裂けんばかりの大声をそちらに向けて放つ。

聞こえたのか、凜がこちらをちらりとみたような気がした。

だが、それが気のせいだったのではないかと思える程だったので、遼太は本当に気のせいだと思いかけたが。

「大丈夫だ 時間を測定する」

『遼太』は傍らの佐慧にそう言つて、外を見た。それから、

自分の脳で高度な演算が始まったことに気付く。

「……ざつと五十メートル。それは、RPG-7の特殊弾頭か。最初の百メートル秒速百十五メートル。だが、この氷の嵐じゃあ半分以下……最速秒速二十メートルだな。シールドの範囲とか、特殊弾頭発動時間の誤差を含めると 二秒だ」

「……っ」

佐慧が生唾を飲んだ。なんとなく遼太も理解した。

きつと、このロケットランチャーの弾頭には、核融合に必要な物質が詰め込まれているのだろう。それを、この位置から発射する。それが、シールドの範囲内から外に出て、フェネクスに命中し核融合、熱波が広がりきるまでの猶予が……二秒しかないということだ。それまでに、この校舎を覆うシールドを作らなければならないのだ。

「安心しろ、主が念じればゼロコンマゼロ秒以内にシールドは完成する。そこまでは良いが 問題は、あいつか」

そう言っただけで睨まれた目が捉えるのは、孤軍奮闘を講じている凜。「例の剣は重水素の塊だ。普段はつかえなかったが、新規契約によって原子の改竄が効くようになったのを、そのまま流用したんだ。

本来の奴の能力だ。だが、固形を保つために、融点以下の温度にしておく必要があつて、その影響でこれほどまでに気温が下がってわけだ。重水素の融点はマイナス二百五十四コンマ五度 軽く今の気温はマイナス三百度近くに達してるだろうな」

それから、遼太はちらりと隣の佐慧を盗み見る。

「……大丈夫なのか？ 俺達に免役をつけたりして。一応、有機物だぞ？」

「……十五分いくと危ないって……それまでは、大丈夫」

佐慧はそう言いつつ笑顔を浮かべてくる。どこか違和感のある笑顔だ。悲痛、とはこのことを言うのかも知れない。

『遼太』は逃げるように視線を校庭に移した。そこには、最後の幕降ろしに向けて奮闘する凜が居る。

いや、奮闘というよりは、鼓舞している、という方が良いかもしれない。

絶対零度を凌駕する物質を握り締めているというのに、全くその動きにそつが無く、むしろ押揃するようにフェネクスの剣や拳を受け流している。

やがて、行動に出た。

白い氷が空気中に漂い、視界を阻み行動を遮るその状況。

フェネクスの剣が柔らかい氷を貫き壊すように振るわれたその攻撃を受け流すと同時に、白い霧に紛れるように切迫。

悟られる前に一步で懐までもぐりこむと、軽業を逸脱した動きでその肩に飛び乗り、再び飛翔。

頭部に乗る込むと、すぐに飛び降りフェネクスの顔の前に躍り出て　その剣を思いきり眼窩に向けて投げ飛ばした。

寸分たがわず切先は眼窩の奥にのめり込み、フェネクスが硬直して動かなくなる。

それと同時に、凜はフェネクスの腕に着地すると、足裏を爆発させて第一校舎に向けて走ってきた。

カチャ、という音がすぐ近くでして、そちらを見ると佐慧がロケットランチャーを構えていた。狙いを定めるためのスコープがちょこんと筒に備わっており、そこを覗き込んで狙いを定めている。

「……ギリギリで行くぞ」

凜の脚は、極限を超えた速さで行使され、第一校舎に向けて疾走して来ている。このまま行けば、三秒で到達するはずだ。

このまま発射して、シールドが張る範囲外から出た後、凜がこちらに到達し、シールドを作り　消滅。

「いけるぞ……」

右腕が熱くなった。気温が急速にあがってきている。固体だった剣がみるみるとけて一瞬で蒸発する。

「撃てッ！」

撃たれた。

筒から射出された弾道は、バックドラフトの炎を上げて、空気中を邁進し始めて　みるみる上昇する気温の最中、

「……ッしまった！」

本来のスピードで猛進し出した。

冷静に物事見ている右腕も、今回はかりは焦っていたらしく、決定的な見落としてをしていた　体内の意識から、直接垂れ流れてくる。

重水素の塊が、その主の体から離れた瞬間、それを取り巻いていた空気の温度も一気に低下し、周囲の空気は正常に近づいていく。

即ち、弾頭の動きも、正常に 秒速百十五メートルに近づく。事態を呑み込んだときには既に、校舎から飛び出していた。

受身も碌に取らず地面に着地すると、悲鳴をあげるのにも関わらず脚を酷使し凜に左手を伸ばす。

それを見た凜は瞠目したが、真上に弾頭が通り過ぎていくのを見て、同じくその手を伸ばした。

高いところから飛び下りたような虚脱感が胸を通り過ぎていく。もうゼロコンマ何秒かすれば、ここは爆発する。跡形も残らないほどの高熱が、全てを覆い尽くし何もかもを屠っていく。

死、と直面しているのだ。

弾頭が眼窩に近づく。

凜の体が浮いた。跳んだのだ。

いつのまにか、目の前に迫っていた手を握り締める。

冷たく、細い手の感触が、鮮明に掌を駆け抜ける。

その時、目の前で見た。恐怖に塗り潰されてもなお、生き延びようと賢明に努力する、凜の、意思を。

負けて 堪るかッ！

遼太の中で時が動き出した。

「！？」

右腕の意識が揺らぐ。

自分の意思どおりに脚が動いた。

強引に凜の手を引っ張ると、その体を手繰り寄せて抱きしめ、地面を蹴って踵を返し、校舎へと駆け込む。

そして、適当にみつけた窓ガラスに飛び込み、衝撃を感じた瞬間、腕を振りかざした。

第一校舎が、硬質の膜に包まれた瞬間、空間が歪みそうな、爆発

が起きた。

爆発、と呼ぶにはその事象は苛烈過ぎる。なにかが誕生してもおかしくない、高熱波がばら撒かれ、結界のうちに残っていた全ての微生物は存在を示す原子を破壊され植物も影と化し、空気も酷く熱くなり、　　どうしようもなくなっていく。

そこに佇む一つの生命体、フェネクスは。

業火以上の罰の権化に、悲鳴をあげることなく焼き尽くされていった。

「…………危っねえ…………」

シールドを通して訪れた、耳朵を千切りかねない轟音が消滅するまでの永遠とも思える時間の果て、『遼太』がそう呻きながら這い上がった。

シールドの端は、足から一メートルにも満たない位置にある。本当にギリギリだったようだ。

体内で、右腕の意識に小突かれたような感覚に、遼太は手をつき起き上がるうとした　、その時、何かが胸の辺りにあたった。それを避けるように身を起こすと、すぐさま脚が奮い立たされて立ち上がり、周囲を見渡す。

シールドは遮光がしてあるようで、外の様子は窺えないが、恐らく地獄絵図となっているのだろう。

地面を見下ろすと、瞼を閉じてぐったりとした凜が居た。遼太は慌てて傍らに寄りうとしたが、唯一の移動手段である脚の行使権が無いのでそれは実現されず、ただ茫然と突っ立ってる形となる。

『例の生命体の破壊までが契約期限だったんだろう。契約が達成されて、>レッド<が宇宙外に帰るとき、契約者の意識も一緒に一時的に持ってかれるからな。暫くそっとしてやれ』

遼太のその心配を和らげるためにか、右腕が意識内でそう解説をする。　それならば、と遼太はそれを聞いて安堵した。

静かになった廊下では、凜の規則正しい息使だけが聞こえるだ

けで、その他一切の雑音が無い。

その静寂を切裂くように『遼太』が足を踏み出し足音をたて、壁まで寄っていく。辿り付いたところで、遼太はその目的を察して腕を上げると体が倒れ、丁度腕から壁に凭れるような体勢になった。

『そんで主……さっきのあれは何だったんだ？』

『え？』

不意に右腕が意識内で語りかけてきて、遼太はその意図が掴めずに訊き返す。

『さっきあいつを引つ張った時だ。いきなり脚をかつぱらっていきやがって。俺の神経の支配をぶち壊すなんて……一体何をしたんだ？ そういや、度々声ももっていきやがって……くっそ、とんでもねえ野郎だな……』

なるほど、思い出した。事の寸前、凜を救うべく飛び降りた、あの時、枷が外れたように脚が軽くなった覚えがある。039も驚いたように意識を揺らしていたので、彼にも予想外の出来事だったのだろう。声に関しては完全に無意識だったので、自然に右腕もそれを解釈してしまったのだろう。

とはいっても、唐突だったので記憶も曖昧な上、何をしたといわれても何をしたわけでもない。

『……さあ？』

必然的にそういわざるを得ないのだが、それを聞いた途端、自分の口の端が吊りあがっていった。

『……自覚無しか。良い事を聞いたぜ……』

その表情の真意を裏付けるように、右腕がぼやく。

『何が？』

『……いいや、何でもない。そんなことより……』

遼太はそのぎこちない対応を怪訝に思っただけで訊ねてみるもの、またも曖昧に返された上、話題を逸らされようとした、そのとき、廊下の奥から足音が聞こえてきた。

顔を上げて廊下を見渡すと、佐慧がこちらに走って来ているのが

見える。

「無事か？」

「うん、うん……」

到着するや否や、『遼太』がその声を掛け、佐慧は肩で息をしつつもそれに応える。

それを聞いて、『遼太』は今度は明白に顔に笑みを張り付かせた。

「……ようやく片がついたみたいだな」

「……そうねん……」

息が整ったのか、佐慧は短くそう応えると顔を背けて割れた窓から覗くシールドの内壁を見やる。

「融合が終わったみたいだったから、破滅した有無機物共に、再生させておいたから、もう解除しても大丈夫よん」

「そうか……」

『頼む』

口が動くのと、意思が伝えられるのはほぼ同時。

遼太が右腕を振るうと、シールドに罅が生じて瞬く間に瓦解していった。破片は光の様に地面に吸い込まれて消えていく。

窓外の景色が、閉鎖された無骨な色から、黒真珠の様な黒色を瞬かせる空に移り変わった。

その情景のうち 黒い塵の山が、校庭の中央辺りに寂然と在った。一度風が吹けば、ごっそりと飛んでいきそうな、悪魔の死骸が。

『遼太』はそれを見て、深く溜息をついた。

「……あれを処分してくる」

「うん、気をつけてねん」

佐慧も微笑を浮かべて、重荷が下りたような明るい声で応える。窓の棧を乗り越えて、校庭を歩いてその死骸のもとへと向かう。

放射線等の弊害も懸念されるところだが、佐慧のことだから、とっくに無害化しているだろう。それか、特別な免役がまだついているか。どの道、さっさと処分してしまうに越したことは無い。

「もう大丈夫だろう。神経を全共通にさせてもらっ」

その途中に、『遼太』がそう言うと、麻酔を打たれていたような感覚の頭と脚の神経が一気に通ったらしく、違和感が全て払拭された。

やがて、その黒ずんだ塵芥の山までたどり着くと、『遼太』が呟く。

「こんなもん、大したエネルギーにやらねえが……吸収するぞ」
そう言うと、右腕を変形させて、銃身にした。それから、空気を取り込みを開始して、掃除機のようにその屑を回収していく。

だが、塵が大胆に吸収されていく最中、遼太は底知れぬ不安に襲われた。

「ねえ……あれの本体はどこに行くの？」

「依り代を無くせば、奴は自然に宇宙外に追放される筈だ。異空間に存在するのだって、労働力が必要だしな。そういや、あいつらが出現した空間の割れ目は、>レッド<だけが認識できる四次元空間だ。異次元に飛んじまえば、地球上では絶対に見つからないからな」
「……………」

「安心しろ。奴も新しい依り代を見つけるのに相当時間が掛かるんだ。位置を知らせたから、新たな依り代を見つける前にお陀仏だろう。人間に罪人は取り憑くことはできないしな」

そう『遼太』が言い終えて、塵の回収が済んだその時だった。

『の割にはかなり楽にもぐりこめたねー』

脳内から頭が割れそうな程のノイズ音が流れ出した。

『あの子に僕が取り憑いてたの忘れたの？ 馬鹿だねー』

幼い口調が頭痛を催し、身体の制御が利かなくなっていく。体内を得体の知れないものが駆け巡っていき、全身が熱くなっていく。まるで、内部から侵食されていくように。

最終的に、腕が勝手に変形し始めて、剣を形成した。

その剣を見下ろして、遼太 否、悪魔は舌なめずりをする。

赤い眼光その目に宿り、悪魔は空を仰いだ。

汚い空は、どこまでも綺麗に澄んで見える。これが、勝利を確信

した時の高揚感。
背後から校庭を踏む足音が聞こえる。

秒刻みの一撃（後書き）

ええー、三月三日に完結する！ といいましたが、ちよいと言葉不足でした……。

はい、完結はしています。

ですが、UPが今日というわけではないのです。ハハ^^；

スミマセン>> 本当に……。

とりあえず、落胆してくれた方が居ることを願って……。

信頼の駆け引き

遼太が校庭に出て行ってからすぐに目を覚ました凜は、佐慧からそのことを聞くとすぐに玄関まで向かうと、冷風の吹きつける校庭へと身を呈した。

身体が重く感じるのは、先ほどもまでの、身体強化に慣れてしまっただからだろう。

遼太は丁度校舎に背を向けるようにして、校庭の真中付近に佇んでいる。全く身動きをしていないので、亡骸があつた場所で義手との日々を色々と回想をしているのだろうか、と凜は思いその背中に向かつて走っていく。

例の物質に憑いていた精神体は、契約目的が達成されたため、宇宙外へと旅立っていた。物質は重水素となつて、核融合し霧消している。

ただ、決着がついた今、武器は既に実用価値を失っており、長い間共に闘ってきた相棒との別れも意識を失っている間に済んだ。夢だったのかもしれないが。

凜は遠慮がちに遼太の背中へと近づいていく。ざくざくと、靴裏が地面を踏む音が大きく聞こえる。

ふと、凜はその後姿に違和を感じた。

戦闘は済み、敵も蒸散した筈なのに、遼太の右腕が剣になっている。凜の刀よりも劣るものの、それが日本刀並の威力を誇ることも知っている。

遼太は、そこまで好戦的な性格ではないから、戦いが済んだらすぐにでも武器は鞘に収めるだろう。

凜は足を止めた。何か嫌な予感がする。

ただ、何も無いことを祈って遼太の背中を凝視するのみ。

これは信頼しているからの行動なのか、それとも、彼に対して卑屈な疑懼を抱いてからの行動なのか。互いを信頼しろ、と言い

出したのは自分からだ。ここで、妙な疑惑によって、彼を貶めるのは、人間として最低だ。

だが、決断できずに、その場に立ち尽くしていると、ふいに遼太が行動にでた。

不気味な音をたてて、右腕の剣が延び、そのまま切先が地面に刺さる。軽快な音と共に、砂がいくらか舞った。

そして、左肩から横顔を覗かせると、右腕の剣を地面から引き抜く様に身体を回転させて、真正面から凜に向き直った。

凜は、そのあまりに緩慢で不思議な光景に見とれていたが、その遼太の顔を見て、愕然とする。

まず、目が塗り潰したかの様に赤かった。今までの瞳が赤いのはまた違う、目全体が禍々しい赤い眼光を放っている、そして、酔狂に満ちた悪魔の表情。

人間も此処まで醜いまでの表情を出来るのだろうか。

凜は慄然とし、足を一步退かせた。

その変貌の様は、直視できないほどのものであった。普段の温厚な彼の顔と照らし合わせると、。

遼太は剣の刃を空に向けて立てた。その何気ない動作でも、空気が裂かれてヒュツと音が鳴る。

そして、その口の端に酷薄な笑みを浮かべ、口を開いた。

「……良いものを見つけちゃった」

悪寒が背筋を粟立たせて駆け抜けていく。

それと同時に、遼太が右腕を構えたままこちらに向かった走り出してきた。

咄嗟に身動きが取れない凜に、遼太は容赦なくその右腕の細身の剣を叩きつけるように振り下ろす。

それでも凜は危機感を踏み台にして脚を奮い立たせると、地面を弾いて後退し、その一閃を躲した。凜の目の前を通過したそれは、前髪一本縦に裂いて空を斬る。風圧が頬を撫でる。

それを予期していたように、遼太は剣を振り上げて再び斬りつけ

てくる。

凜は片脚を軸にして回転しながら、その一撃を回避し、遼太の横に回る。だが、すぐに剣は目標を模索するように横に薙がれて凜にその猛威を見せつけてくる。

凜はしゃがんでそれを躲し、剣が頭上を通過する寸前に足裏を突っ撥ねて遼太に接近、反応を取られる前に脚払いをかます。

見事に決まって遼太の片脚が浮き、一気にノーマークになった。

その隙を衝いて、凜は一気の後退し距離を取る。武器を持っていない上、相手の武器は絶対に手から零れないのだから、近づくのは不利が累積することではない。

靴裏を踏みしめてブレーキをかけると、よろよろと立ち上がる遼太の姿を見据える。

ここまで反応できるのも、日々の活動の賜物である。近距離攻撃を主体とする役割なのだから、回避ができなくてはどうにもならない。数々の修羅場を乗り越えてきただけ、本能に叩き込まれているらしい。

そして、遼太だが 襲い掛かってくる寸前の一言から察するに、何かに取り憑かれている。その何か、とは言うまでも無いだろうが、その身体能力は常人……遼太のそれと同じようだ。即ち、素人の攻撃と反応だ。

だが、あくまで身体は身体だ。例え武器があっても、遼太を傷つけることなど出来ないだろう。いかにして、中の精神を取り除くのだろうか。

どう思考を巡らせても、一つの結論にしかたどり着かない。

肉体の破壊。

歯を噛み締めた。軋んだ振動が脳に伝わってくる。

凜が自分の不甲斐なさに、苛立ちを覚えたその時、背後で金属が落ちる甲高い音がした。振り向くと、校舎の近くに木製の筒がそこに落ちて転がっている。

遼太を警戒しつつその筒の方に移動し、校舎を見上げると、穿た

れて穴の空いた二階の壁から佐慧が顔を覗かせていた。

遠くからだから、ハッキリこそしなかったものの、その顔には何かの決意が張り付いていた。

もしかして、彼女はこのことを知っていたのか……？

そんな野暮つたい考えを思考の淵まで追いやり、凜は素早く側転するようにその筒を取ると、手に取った。

そして、握り締めて解った。これが何なのか。

佐慧が撃って空になったロケットランチャーの発射器だ。緩やかな凹凸があつて握りづらいが、普通の鈍器として通用しそうな重みがある。一見木製に見えるが、それは一部だけ、しかも覆っているだけで、中身は相当の重みのある金属だ。

片方の先がラップ状になつているので、そちらを遼太の方に向けて、発射口の付近を握り締めた。

棒状の武器を扱うのは初めてだが、やるしかあるまい。佐慧が、部長がくれた最後のチャンスだ。

すぐに駆け出して遼太に接近する。

ある程度近づくと、遼太は右腕を振るつて牽制してきた。凜は軽く上体を反らして躲すと、すぐさま棒を突き出し、更に牽制し返す。そして、そのまま勢いに乗るように一歩踏み出すと、棒を握りなおす。

その直後、剣が薙がれた。予想通りに。

筒を翳してそれを防ぐと思ひ切り弾いて、横にステップを踏み、棒を振る。

金属音が鳴り響く。だが、凜は躊躇せずはこちらから剣を弾き飛ばすと、間髪入れずにもう一発、思ひ切り叩きつける。

腕でいう、上腕に鈍器が炸裂した。

遼太が大きく身動きする。

凜はその隙をついて、一気に近寄ると脚を振り上げて遼太の頭を蹴りつけた。

鈍い衝撃が脚に降りかかる。凜はそのまま遼太を蹴り上げると、

その回転力に乗じてもう一回転。棒を遠心力に乗せるようにして薙ぐと、そのまま遼太の横っ腹に叩きつけた。

あまり聞きたくない類の音がして、遼太の体が宙に舞った。そのまま、弧を描くようにして校庭に叩きつけられる。

凜はすぐさま追いつくと、倒れて咳き込む遼太の身体を蹴って転がし、仰向けにして、左足で剣を踏みつけるようにして行動を取れないようにすると、馬乗りになるようにして、その胸倉を思い切り握り締めた。

そして、その一気に形成を逆転された典型的な者の顔を見て、凜は初めて清々とした。

「あんた……コロコロ態度が変わるのね」

悪魔の取り憑いた遼太の顔は、弱者を俯瞰する禍々しい表情とは打って変わり、恐怖に打ちひしがれ救済を必死に請う哀れな敗者の表情となっていた。

だが、未だその威勢の良さは払底されていないようで、無理に口元を吊り上げて見せている。

「わ、分かっているの？ 僕をこのまま殺せば、この身体の主もそのまま逝っちゃうんだよ？」

「んなの分かってる。だから、こうして追い詰めただけにしてあげたんじゃない」

左足ががくがくと暴れる。未だ抵抗を続けるか。

凜はそのままの体勢で振り向くと、手に持った発射器を遼太の腰へと叩きつける。

グシャッ、と音を立てて骨がひしゃげた。遼太が悲鳴を漏らす。

その様子を見て、凜はふと思いたって呟く。

「……やっぱり、少佐辺りの力が影響してたのかな。コートが全く役に立ってない」

そうになると、一撃でも喰らえばそのまま致命傷だったのか、と凜は今更ながら戦慄するものの、今の状況の重要さで被せて考えないようにする。

凜は、抑える左足の所為で、少しばかり体勢が無茶になってしま
うが、遼太の胸倉を手繰り寄せると、顔を思い切り近づけて、諭す
ように訊ねた。

「どうやったら、あんたは出て行くわけ？」

「……そんなの僕が言うわけ無いじゃない」

それもそうだが、どこか屁理屈じみっていて、気に入らない。

とはいっても、このまま同じ質問を繰り返していても、埒があか
ない。何か、打開策は無いか。

とりあえず、棒を近くに転がしておいて、遼太の右頬を一回殴り
つける。そうしておかないと、何故か気がすまない。

そして、よくこういう類の物語でありがちな、それを試してみよ
うという、結論に思い当たる。

苦痛に目を白黒させる遼太の胸倉を再び掴んで引き寄せると、思
い切り、鼓膜が破れても構わないという心意気と共に叫んだ。

「遼太ああああッ！ 気づけえええッ！」

体内に石油をばら撒かれたような不快感が蔓延したかと思ったら、
その不快感が神経系を動かし始めた。そこまでは理解できたし、記
憶にも残っている。

だがそこから完全に身体を乗っ取られたらしく、意識がなくなっ
ていた。

だが、とある拍子にその意識が目覚めたのだ。橋か崖かの端を歩
いている夢を見ていて、唐突に足元が崩れて落ちた瞬間、夢から覚
めると似たような感覚で。

そして、目覚めた一瞬後、その拍子がとある人物の声だというこ
とも理解した。

凜が、叫んでいる。すぐ目の前で。

それと同時に、体内で一つの意識が暴れていることにも気付く。
いつのまに取り憑いた、悪魔の精神だ。

「ぐああああああああ！ 莫迦なああああああああ！ 嘘だ
ああああああああ！」

脳が張り裂けそうになるほど、うるさくやかましい悲鳴。

遼太はその壇上から地の底まで落とされたのを、悔やみ恨んで、他に責任を押し付けている子供の様な意識をさっさと消し去りたかったが、生憎と身体が全くをもつて動かない。

悪態をつきたくなるものの、そこを抑えてどうにか処置できないか模索してみるものの、縛られた意識ではほとんどのことがままならない。精々、今起きている事象を認識する程度である。

その事象というのも、凜がひたすら外から怒号を散らしているのだ。

そのほとんどが、遼太自身を励ますような言葉。

負けるな、挫けるな、気付け、ぶっ飛ばせ、打ち勝て、起きろ、飛び出せ。

そんな貧弱な語彙から引つ張り出したような言葉を、漠然と聞いていると、ふいにこの身体に封じられたもう一つの精神体が話し掛けてきた。

『主 あいつのお陰で、大分奴の精神が揺らいで来ている。そこで、チャンスだ。この狼藉者の否定する、人間の信頼を見せ付けてやるんだ。俺が、この身体から退くときに、こいつも一緒に連れ出してやる。だから敢えて遠まわしに教えてやるんだ。信頼を見せつけるために……』

『……………ああ』

039の言葉に、遼太は言葉で頷く。

なんとなく、この口調からでも分かる。

恐らく機会は一回だけ。039の精神がこの身体から離脱するとき。その時に、この騒いでいる精神と一緒に連れ出す。

その時には、精神的に叩きのめしていた方が、遙かにやりやすい。ぼろぼろになった精神ならば、容易く宇宙外に連れ出せる。

右腕の利己的な言葉にも思えるが、利害は一致している。失敗す

れば、意識は悪魔に占有されて、どうなるか分かったものではないのだ。そうなると、一番困るのは遼太。

これは、遼太のための助言。

『……………俺は奴の意識に直接話し掛ける。そこを衝いて、声帯部を乗っ取るんだ。そうしたら、さっさと言いたいことを叫べ。ストリートは避ける、できるだけ遠まわしに言うんだ。この娘が分かる程度にな』

たった四日で培って来た信頼など、たかが知れている。

だが、命の危機を互いに乗り越えなければ、得られえない信頼も存在する。

『分かった、やってくれ』

遼太の決意は固かった。

凜は揺さぶる手を止め、叫ぶ口を噤んだ。

遼太の様子がおかしくなってきたのだ。

「……………ああ……………ぐあ……………」

真っ赤な目の眩さが失われ、カラーコンタクトをはめただけの様になってしまった眼を剥いて、口を半開きにして痙攣を始めたのだ。凜はそのおぞましさに慄くものの、気力だけで胸倉を離さない。力強く握り締めて、発作を起こす　闘っている戦友の様子を見守る。

「あああああ……………！！」

首を揺らして、涎や鼻水を撒き散らしながら、遼太の中枢を牛耳っている存在が暴れている。

左足が痺れて、胸倉を掴んでいる腕の感覚も危うくなってくる。

だが、離さない。全てが終わるまで、離して堪えるものか。

その光景が暫く続き、　その発作が途絶えた。

それと同時に、赤かった目に普段の輝きが戻り、胸倉を掴む凜の手に片手が添えられる。

見間違いではない、遼太が身体を取り戻した。
その冷たい手の温かさに、凜は感涙して遼太の名を叫ぼうとした
が。

「お、終わるときは……いつも、一緒……だ……」

その口から漏れたか細い声に、凜は動けなくなる。

やがて、そのまま左手は地面に吸い込まれるように落ち、目は瞼の裏に隠れて動かなくなった。空気が凍ったような気がした。

凜は、その言葉の真意を探りつつ、その眠る遼太の顔を凝視していた。

が、その瞼が開いたとき、その目は再び真っ赤に染められていた。「ざ、ざまあ見ろ……もう、僕をどうすることも……できない……」

もうその声にも、身体にも生気が感じられない。もう分かりきっているのだ。凜が何も出来ないことを。手を出せず、このまま馬乗りになっているしかない、と。

だが、凜は足掻き続ける。

意味の無い遺言の様な言葉など、遼太が残す筈など無い。ここまで来て、そんな言葉を吐くような少年ではない。

それなら、何が言いたかったのだ？

凜は必死に考える。

終わるとき……一体何が？ 人が？ 時間が？ 世界が？

分からない、でも遼太は自分に託した。何かを察してくれると、その言葉を託した。

察しないといけない。期待に……信頼に応えてあげなければなら
ない。

自分は彼にとって何なんだ？ ただの、部活仲間？

いや、昨日は多難な修羅場を乗り越えた。本当に危ないところを
乗り越えた。

一緒に 乗り越えた。

……………そして？

「……………そして」

先ほどの部長からの手紙の内容が反芻された。特に、自分には関係ないと思っていたその内容だったが。

凜は……………遼太にとって、重要な、いつも一緒に居るべき……………。

「分かったよ」

凜は胸倉を握っていた手を解いて、そう言った。遼太はその言葉に、ポカンとした表情を凜に向けているだけで、抵抗こそしてこない。

「分かった……………解ったよ……………」

何度も呟き、その真摯な視線を遼太の赤い目にぶつける。

その視線の根元からは、熱い液体が零れ落ちていく。

彼は信じてくれていた。自分が、あの言葉からこの結論にたどり着く、と。自分なら 私なら 。

それは感激の涙、それと、彼の身体の事情を軽視していたことへの懺悔の涙。

「……………ごめんね……………ごめん……………」

その涙に乗せて、自分の言いたいことを、静かに言った。

「二人で……………うっん、皆で帰ろ……………」

その言葉が、遼太の耳に入った瞬間、遼太の目が限界まで開かれた。

「……………そ、そんな……………」

そう呟くと同時に、その目が閉じられた。

再びゆっくりと開かれた時、その目は純粹な瞳を携えた、本来の遼太のそれに戻っていた。

そして、力なく笑ってみせる。

「……………流石、主が信頼していただけであつたぜ。その涙、大切にとつておけよ」

そう言って、左手の親指を突きつけてみせた。

そのあまりに遼太に不似合いな仕草に、凜は噴出しそうになるが、なんとか堪えて頬を伝う液体を拭う。どうしてだか、涙が止まらない。大したことじゃないのに。

その言葉を最後に、遼太の表情は徐々に綺麗になっていき、意識が途絶えた。

信頼の駆け引き (後書き)

エピソードに続く。

エピソード

「ここに一つ、エネルギーを秘めた目玉がある。こいつをどうするか、選択肢は二つある。」

一つは、歴史を改竄し隠蔽された事実を露呈させて、お前は隻腕の人間として生きていくか。もう一つは、今のままを継続させて、五体満足で生きていくか。だが、記憶はいつまでも残っていく、さあ、どっちだ？」

どこだかわからない、五里霧中の空間の中、心地よい声が響いてくる。どうやら、問い掛けて来ているようだ。

その質問内容を把握して、それが贖すメリットとデメリットを吟味し 迷わずに質問の答えを述べた。

「記憶が失われるのはやだよ。大事なものも忘れちゃうし。覚えていなくてもそんな辛い出来事を二回も経験するのは嫌だ。だから、辛い過去があったとしても、それを過去として僕は踏みしめていくよ」

「…………カッコつけやがって」

それは苦々しげに言い返してきた。

こうして、全ての幕が完全に下りる。

旧校舎の角から顔を覗かせて見ると、そこには背中を丸めて屈み込む佐慧の姿があった。

気付かれないようにそっとその後ろに立つと、肩から手元を覗いてみる。土を弄くって、何かを埋めているらしい。

「…………お墓、ですか？」

遼太がその声を掛けると、佐慧はゆっくりと振り向いて、驚いたような顔を作った。

「あら、佐貫君ご機嫌よう。そうねん、お墓…………かな？」

それから、恥ずかしそうに目を逸らす。

遼太はそんな佐慧の横に立つと、座り込んでその墓とらしきものを観察してみた。

恐らくは遺留品を埋めただけであろう地面の上に、細長く小さな石の板が刺さっている。酷く陳腐な墓だが、その飾り気の無さが、いかにも部長らしいというか。

「……今までのこと……忘れたいですか？」

遼太はその墓を見据えたまま、訊ねてみる。

思考時間であろう間は一瞬。

「……忘れるつてのは、とつても残酷なことよん。大事な思い出なら、尚更。悲痛な出来事で失われたものを、憐れんで忘れたいと思うのは、そのことを大事にしている証拠。その悲しみで、人はまた一つ強くなっていく……つて、ちょっと詩っぽくなっちゃったわねん」

「……………」

遼太は右腕に視線を落とした。

義手ではない。遼太の細胞で構成された、正真正銘生粋の、遼太の右腕。

確かに、右腕が無くて見えてくる世界もあつたかもしれない。どれだけの苦行が待ちわびていようと、それは必ず後に良い思い出として記憶に残る。

だが、それはあくまで現在ではただの虚構に過ぎない。

人間は今ある記憶に頼るしかない。だが、それを望んで捨てるなど、もつてのほか。

「じゃあ、私は帰るけど」

「はい……………」

「じゃあねん」

「さよなら……………」

佐慧の足音が遠ざかっていく。

もう一度遼太はその墓に目を落とし、そこに刺さっている石の表

面を凝視してみた。だが、何も文字らしきものは書かれていない。そこらへんにあった、石でも使ったのだろうか。

それならそれで、また部長らしい。

ふいに、背後で物音がした。

「あ……」

いつも通りの癖で、パツと振り返ると、そこには旧校舎の陰から半身だけを見せている凧がいた。

何故か遼太と視線がぶつかり、凧は旧校舎の陰に隠れようとしたが、すぐに、いそいそと遼太のもとへと寄ってきた。

そんな不自然な行動を見せる凧に、下から見上げるようにして訊ねてみる。

「……何しに来たの？」

「え……な、何しに……」

途端に、しどろもどろになって、視線を泳がせる。そんな凧を見て、遼太は思わず鼻で少し笑ってしまった。

「ちょ……な、なんで笑うのっ！」

「だって、素直に言えばいいのにさ」

「なっ……、べ、別にあんたに会いにきたってわけじゃないんだからねっ！」

何故かムキになって言い返してくる凧を、遼太は不思議に思い、真正面から視線をぶつける。

「え？ 部長の墓参りに来たんでしょ？」

「あ……そ、そうに決まってるでしょ……」

そう遼太が言うと、凧は一気に声を小さくさせて、同意を示した。冬の頼りない日差しも一ヶ月経てば、温暖で快適を齎す日差しへと変わる。それと同じように、人だって強くなっていける。

それが、過去を踏み台にして成り立っているのであれば、尚更思い出を大事にし、また今を楽しく過ごすべきだ。将来に希望をもつのも良い事だが、希望を持ちすぎず、今を見据えるのもまた大事。

そして、それらの根幹となるのが、周囲の人との関係 信頼関

係だ。

遼太は隣に同じようにして膝を折り曲げて屈み込む凜の横顔を盗み見て、その髪から漏れるシャンプーの匂いに目を細める。

宇宙から届く光は、今日も白く逞しい。

エピローグ（後書き）

去年の十二月初頭から始めたこの物語は、今日三月初頭まで四ヶ月かけて長い連載にピリオドを打つことが出来ました！

どう考えても、この根性無しが達成できることではないのに……皆さん、サポート本当にありがとうございました！

ただ、まあ、この物語の長さは異常ですね。

推定十七万字。文庫本400ページくらいでしょうか？ このF C 2小説でも二百ページを余裕で越しました； といわけで、このあとかきを読んでくれる方は本当に神様みたいな人です。なんか、時間を使わせてしまって、申し訳ないです>>

途中からの急激な方針の変更により、姿勢の変化が酷かったんですが、大丈夫でしたでしょうか……。その辺りは反省しております。

そもそも、この物語は戦闘描写能力の上昇を目指して書き始めたものだったのです。

でも、途中からその設定の深さに自分で驚いてしまいました、どうせなら終わらせちまおう！というわけで、一気に加速！加速！とりあえず、過去を振り返ることに悪いことは無いが、現実を見据えて、頑張っていけば、きっと素晴らしいものに出会える……という主張がどっかにあります。はい、スミマセン。人間同士の信頼、という面目に載せて謳ってるのでしょうか。

とりあえず、届いていればオッケーということ；
ちなみにエピローグは彼女にあのセリフを言わせたかったために存在します。

色々、回収しきれなかった伏線もありますが、それは想像でお任せします。グダグダですみません>>

ええ……最後に、この物語を読んで、このあとがきを読んでくれる方、否、活動する作家さんに応援と感謝を込めて

ありがとうございましたっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5852f/>

アサルトアームズ！

2010年10月8日13時21分発行